
仮面ライダー火影

爛瑠かげまる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー火影

【Nコード】

N8618L

【作者名】

爛琥かげまる

【あらすじ】

ちよつと根暗な高校生中村玲二が手に入れたのは、古来より伝承されし、邪気を浄化する力——火影。戦いを通して仲間と触れあい、自分の過去を見つめながら、今日も彼は必殺技名を叫ぶ。「バーニングブレイク!」「ウン、ソウダネ、カッコイイヨ」仮面ライダー+妖怪-仮面ライダー、そんな感じ。***最新話投稿の度に活動報告にて補足説明や裏話等を書いていきます。よろしければどうぞ。

登場人物（第二十五話までネタバレ）

なかむらいじ

中村玲二

身長 / 178 cm

体重 / 62 kg

好き / 家族、友達

苦手 / 人付き合い、孤独、トマト、ナス
トマトとナスは加熱されていけば大丈夫

趣味 / バイク

誕生日 / 1994年4月26日

本作品の主人公。16歳の高校1年生。

人間の父親と妖怪の母親の間に生まれた半妖怪。

8歳の頃に妖怪に両親を襲われ、家も全焼。ほんの小さな誤解から友人が離れていき、それ以来人間不信に陥ってしまう。その後偶然街でテング、そしてそれを追う佐藤と香苗に出会い、火影に変身するきっかけとなる。

少し長めの黒髪に覆われているが、顔立ちは端正。見た目は痩せているが筋肉質。頭脳は難関校と呼ばれる高校の特別待遇試験をトップクラスでパスするほど。運動能力に至っては常人を凌駕する力を持つ、など、人からの憧れや好意の対象となる素質は備えているが、それらは全て人と関わる事を避け、1人で過ごすようになって手に入れた力である。

物事を客観的に見て適した判断を下すなど、よほどの事が起きない限りは冷静。そのため淡白で冷めていると思われがちだが、家族など自分の支えとなっている存在が脅かされた時は、周りの事が見えなくなるほど激情してしまう。また、火影に変身すると若干ではあるが、性格が変化する。必殺技などに名前を付けたがる傾向がある。

手先はかなり器用で、左右両方使える。常識人を自称しているが、たまに世間知らずな発言が飛び出す事も。

孤独に慣れているが故に、孤独を人一倍恐れている。が、周りにはそついった面を見せないようにしている。

木霊

身長 / 110 cm 体重 / 17 kg

玲二と行動を共にする妖怪の一体。見た目は人間の子供と変わらないが、身の丈ほどもある剣を軽々と降り回せるほどの怪力を持つ。あまり描写されないがかなりのしつかり者。

イメージは特にありません。緑色な感じのシヨタを想像してください。されば。

レナ / 九尾の妖狐

身長 / 240 cm 尻尾含む 重量 / 120 kg

玲二と行動を共にする妖怪の一体。黄金色に輝く体毛と九本の尻尾が特徴的。

非常に落ち着いており格式ばった話し方をする。雄と間違われやすいが雌である。

木霊のことが心配で仕方が無い。クウコには自分より上位ということもあって中々頭が上がらない。

イメージはデジモンのキュウビモン。紅白の縄を外せばそのまんまです。

青龍

【龍型】 身長 / 53 m 重量不明

【人型】 身長 / 152 cm 体重 / 44 kg

玲二と行動を共にする妖怪の一体。神獣と呼ばれる、強力な妖気を持つ妖怪。

その雄たけびは嵐を呼び、尻尾の一振りで地形を変える。天変地異

の象徴ともいえる。

人型に変化した際には女性の姿になったことから、雌であると思われる。玲二のファーストキスを奪った、色んな意味で破天荒な女の子（笑）

イメージはそのまんま東洋の龍。ベイブレードの聖獣ドラゲーンの体をもつと長くすばいいいんですかね？人型は少し背の高いウエンディ・マーベル（FAIRY TAIL）です。性格は「くじゃ」とかいそつな女性神様のそれ。口調はレナちゃんに似ています。似すぎて作者も区別つかない。

おかやまいすみ

岡山泉

身長 / 171 cm

体重 / ## この項目は表示できません ##

好き / 母親

苦手 / 父親、料理

誕生日 / 1994年8月17日

本作品のヒロイン。16歳高校1年生。人間の父親と妖怪の母親の間に生まれた半妖怪。

171cmと女性にしては長身で、コンプレックスの1つ。誰もが美少女と認める美貌の持ち主。聡明で面倒見の良いイメージがあるが、親しい人に依存しやすく、大切な人を失う事を極度に恐れている。

着やせするタイプらしく、一見するとモデル体型だが出る所くびれる所ははつきりしている。玲二には劣るものの体力もかなりある。そのわりにはガツシリとした体ではなく、色白で柔らかな女性らしい体をしている。

妖気の扱いに関しては玲二よりも上手く、暴走した火影の炎を止める唯一の存在だとも言われている。

父親はPWの総司令であり、玲二の事も最初は興味本位で近づいた。実は玲二とは幼稚園時代に出会っていて、ファーストキスもその時に玲二とやっている（行為自体は覚えていないものの、相手は覚えていないためノーカウントとして扱っている）

にいづかれん
新塚廉

15歳高校1年生。高校で出会った玲二に強い興味を持つ。

噂や都市伝説が好きな軟派な少年。当初、玲二にとっては迷惑だけでも嫌いじゃない存在だったのだが、だんだんと接していくうちに親友と呼べるまでの強い絆で結ばれる。

妖怪の存在を、偶然戦いに巻き込まれる形で知る事になったが、樂觀的な考えをする性質なのか、そこまで深く考えてはいない様子。学校の成績は中の下といった所。運動神経は平均以上レベル。

やうつひなき
佐藤秀樹

31歳。非公開組織PW邪気妖怪対策室室長。

表向きは株式会社ジオセントバードの社員である。

経緯は不明だが、大学卒業と同時に組織に所属していたようである。「呪詛火影式」の管理及び適合者搜索を命じられており、偶然玲二と出会い、新たな火影の誕生を目にすることになる。

ちなみに靈感は強い方だが、妖怪は靈感の有無に関わらず視認できるものである。

ひいらぎかなえ
柊香苗

24歳。非公開組織PW邪気妖怪対策室員及び現場主任。

若いながらも現場主任を務め、火影が使用できない状況等ではPWの戦闘員の指揮をとる。

ツリ目とビシツと着こなしたスーツのせいできつめの印象を与えがちだが、仕事中でもアイスを食べて目を輝かせるなど少女のような一面もある。

玲二が対策室に加わってから彼の体調管理や「呪詛火影式」の調整も任される。

以前は本部の存在する近畿にいたが、邪気の活動が顕著にみられた関東に異動することになった。以前いた部署では悪霊の類の存在も目にした事があるらしい。

クウコ

見た目年齢16歳。実年齢3000歳超。

高い妖気のコントロール能力を持つ妖狐の一種であり、その中でも最上位の空狐と呼ばれる妖怪。

人間の女性と変わらない容姿をしているが、嬉しくなったりすると薄い金色の髪の毛の中から耳がピヨコンと飛び出す。

PWの協力者であり、普段は「喫茶店ウィル・オ・ザ・ウィスプ」で働いている。

江角沙夜

えすみさや

14歳中学3年生。かがやきの家の中では年長組で、面倒見のいいお姉さんタイプだが、玲二に対しては甘えることもある。

子供たちの中では玲二とは一番長い付き合いであり、現在は好意を寄せている。

山田徹

やまだとおる

40歳。ファミリーグループホーム「かがやきの家」を営む男性。

玲二の父親である誠一とは古い友人であり、孤児となった玲二を引き取った。温厚で面倒見がよく、子供たちからも本当の父親のように好かれている。

妖怪の存在も知っており、玲二の戦いを影ながら応援している。

やまだはな
山田華

38歳。夫の徹とともに「かがやきの家」を経営する。
落ち込んでいた幼少の玲二を母親のように慰め、なんとか立ち直らせた。

たちはなゆり
立花百合

玲二が一年生の時のクラスメイトで隣の席の女子生徒。サバサバした性格で、夏休み明けからは玲二に気さくに話しかけ始める。

母親を麒麟に殺されており、温厚だった父親が暴力を振るうようになったこともあり妖怪を憎んでいる。

父親の虐待がエスカレートし始めた頃に玲二の正体を知って絶望してしまう。玲二に過去や自分の想いを吐露し、その後彼の目の前で自殺。最期に廉のことが好きだったことを玲二に告白する。

登場ライダーズブック（第二十八話までネタバレ）（前書き）

ライダーって書いてあるけどライダーじゃありません

登場ライダースペック（第二十八話までネタバレ）

ほかけ
火影

身長：192cm 体重：102kg

パンチ力：20t キック力：30t

ジャンプ力：一跳び60m 走力：100mを4秒

専用武器：「火刃ノ太刀」「影鋭ノ太刀」

必殺技

「幻影・バーニングブレイク」右足に炎をまとった必殺キック。破壊力50t

「幻影・バーニングクロス」2本の太刀で十字に切り裂く。破壊力45t

威力は玲二の妖気・感情・テンション等で変化する。上に挙げた物は平均値である。

備考

「呪詛火影式」と呼ばれる札の中の「影」の札を燃やすことによって肉体を強化した姿。

札から発せられる力が資格者の妖気に反応し変身を促すため、基本的には妖怪または半妖怪しか変身できない。

また変身中に装着している鎖型装備帯「幻鎖」は力の暴走を抑える拘束具の一つであり、火影の体を覆っている拘束具の中でも最も抑制力が高い。

基本的には強化された身体能力を活かした格闘戦を主体とする戦闘スタイルをとる。

他にも炎属性の攻撃が可能であるが、火炎攻撃の使用には別の札が必要である。玲二は自身の能力である発火能力を戦闘に使用しているため、タイムロスなく戦うことが可能。

必殺技は「炎」の札を燃やすことによって右足に炎を集中、黒い影

が相手をとらえ、中心の邪気の塊めがけてキックを放つ「幻影・バーニングブレイク」

また、他の妖怪を取り込む事でその妖怪を鎧として身にまとい、力を使う事ができる。本来の戦い方はそれであり、この姿は素体である。

いわゆるフォームチェンジ。イメージとしてはぬらりひよんの孫の「鬼纏い」になるんじゃないか。基本的に鎧となった妖怪は札に封印されますが、普通に表世界へ出てくることも可能です。

元になっているライダーは、キバ（キバフォーム）と響鬼かな。イメージ的には響鬼の方が近いですが、鎧とかそういう面で見るとキバが近いです。

マスクは私としても中々イメージできていません。

火影・霊^{れい}

身長：192cm 体重：110kg

パンチ力：25t キック力：20t

ジャンプ力：一飛び35m 走力：100mを8秒

専用武器：「精霊の剣」 複数作りだすことが可能

必殺技

「精霊一体・フォレストスラッシュ」木の根などで動きを封じた相手を切り裂く。破壊力50t

作りだした剣の数によってたまに技名が変わるのは、玲二君が厨二病だからです。

「精霊一体・フレグランブレイク」設定上ではキックも。破壊力多分50tくらい

備考

精霊木霊を吸収し、緑の鎧を身にまとった姿。全身をツタのように

鎖が巻き付き、炎の発現を抑制している。この形態では炎を使つて戦うことは出来ない。

特殊な幻影空間「木霊の森」を現出させる事ができ、木々から力を得る霊にとつては格好の戦闘フィールドとなる。仮面ライダー響鬼に登場したコダマが作りだす木霊の森そのまんまだと思つてくささい。大きな木を破壊すると解除とかそういう設定は無いです。

防御力が数十倍にも上昇し、巨大な妖怪の攻撃にもヒビひとつ入らない。また、木霊の森の木から専用の武器、精霊の剣を作り出すことができる。

必殺技は蔓やツタで相手の動きを封じ、精霊の剣で邪気を一閃する「精霊一体・フォレストスラッシュ」

キバのバツシャーみたいな、いわゆる不遇フォーム。そもそも炎が出せないっていう制限をかけてしまったが故の活躍の無さなんですけど。あと木霊の森が出てくるせいであまり人前で戦わせられない。

火影・妖^{よう}

身長：192cm 体重：95kg

パンチ力：10t キック力：15t

ジャンプ力：一跳び60m 走力：100mを3・5秒

専用武器：「妖狐の杖」

必殺技

「妖狐一体・アブゾーブダークネス」杖の先端から相手の邪気だけを吸収する。破壊力不明。

「妖狐一体・アストラブレイク」設定上ではキックも。だけど格闘戦をあまりしない。破壊力多分40tくらい

備考

妖狐九尾を吸収し、金色の鎧を身にまとった姿。

デジモン的一种「サクヤモン」のプロポーションを男性化した感じ? いや、レナちゃん的にはサクヤモンそのまんまでもいいんですが、玲二君的にはいくくないです。

専用武器は妖気のコントロールを助長する妖狐の杖。常に妖気の結界を張り巡らしており、妖気を使用した攻撃に対しては鉄壁の防御を誇る。

反面、格闘戦は不得意で、力も他の形態に遠く及ばないが、素早い身のこなしで敵に近づき杖で攻撃、または遠距離からの鬼火の発射等、戦法は多岐にわたる。

必殺技は杖から生み出した九つの鬼火で相手を囲んで動きを封じ、相手の体に杖を付きたてて邪気を吸収する「妖狐一体・アブゾーブダークネス」

もしかしたらこれも不遇フォーム。だいたい格闘戦が得意な玲二君に扱えるわけがないっていう(え
レナちゃんのサポートがあって初めて真価を発揮します。問題は相手の妖怪も格闘戦ばかりっていう

火影・龍うめじ

身長：198cm 体重：110kg

パンチ力：25t キック力：40t

ジャンプ力：一跳び150m 走力：100mを4秒

専用武器：「神獣の槍」

必殺技

「神獣一体・スピニングトルネード」自身と槍に竜巻を発生させ邪気を貫く。破壊力50t

「神獣一体・テンペストドロップ」右足に炎、左足に竜巻を纏わせ放つ必殺キック。破壊力60t

備考

神獣青龍を吸収し、青の鎧を身にまとった姿。全身から常に青い炎が噴き出している。

力を抑えるための鎧を纏っているのだが、力が強力すぎる故にその機能を果たす事ができず、変身者のコントロール能力のみでしかこの形態を維持できない。

幻鎖の抑制能力もほぼ使い物になりません。それだけ龍の力が大きいってことです。

コントロールによつては空を飛んだり水中を泳いだりすることもできる。また原理は不明だが、水中においても炎を放つことが可能。専用武器は大気を操り突風を巻き起こす神獣の槍。必殺技は槍をもった自分を中心に竜巻を発生させ、そのまま相手に向かって突っ込み邪気を貫く「神獣一体・スピニングトルネード」

現時点での最強フォーム。Wというフアングジョーカー、オーズというタジャドルコンボ的な位置です。必殺技にも表れてますが、間違いなく霊や妖よりも活躍するでしょう（

火影・四炎^{しえん}

身長：192cm 体重：110kg

パンチ力：30t キック力：50t

ジャンプ力：一飛び80m 走力：100mを4秒

専用武器：特になし

必殺技

「四炎一体・クアトロバーニングブレイク」炎をまとった両足でキックを放つ。破壊力100t

備考

三体の妖怪を吸収して変身した姿。妖気のコントロールを玲二だけ

でなく三体も同時に行うため、スペックの割には扱いやすいという特徴がある。

しかし四種それぞれ特性の異なる妖気を混在させているため、それだけで玲二の消耗は激しく、この形態でいられる時間は最大で三分程度。

「火影ノ太刀」「精霊の剣」「妖狐の杖」「神獣の槍」全ての武器を使うことができ、またそれぞれの武器を使用する必殺技を放つことができる。

またこの形態のみの必殺技として、四種の妖気を両足にこめてキックを放つ「四炎一体・クアトロバーニングブレイク」がある。

なんか突然出てきて突然消え去った形態のわりには、よくわかんないスペックになりました。

実はこれがタジャドル的ポジションなんじゃねーの、とか思ったり思わなかったり。

火影・怪^{かい}

身長：192cm 体重：92kg

パンチ力：5t キック力：15t

ジャンプ力：一跳び∞ 走力：100mを4秒

専用武器：不明

必殺技

「黒翼・ラピッドストライク」上空から急降下して敵を貫く、そんな設定。破壊力50t

備考

霊獣八咫鳥を吸収し、黒と銀の鎧を身にまとった姿。

戦闘能力は低いが、背中から黒い翼を出現させ、大空を自在に飛び回る事が可能。

この形態への変身後、玲二の妖気コントロールが不安定になり、強制変身解除。その後八咫鳥は火影の炎に貫かれ……

一話限りの限定フォーム。劇場版じゃあるまいし。

しかも扱いは酷い。不遇なんてもんじゃねえ。またこの形態を出せるような設定を頑張って作ります。

冷姫^{れいき}

身長：185cm 体重：88kg

パンチ力：8t キック力：15t

ジャンプ力：一跳び60m 走力：100mを4秒

専用武器：「冷凍槍」

必殺技

「氷結・アイスパイラル」妖気をまとった冷凍槍で敵を貫く。破壊力45t

「氷結・ブリザードブレイク」バーニングブレイクの冷姫ver.

破壊力50t

備考

「呪詛冷姫式」と呼ばれる札の中の「冷」の札を凍らせ砕くことによつて白銀の鎧に身を包み、肉体を強化した姿。

札から発せられる力が資格者の妖気に反応し変身を促すため、基本的には妖怪または半妖怪しか変身できない。

泉の母親である雪女、雪月の力から作り出されたものであり、ほぼ泉専用となっている。泉の妖気のコントロールが上手いため、火影ほどの拘束具を必要としない。

「槍」の札を凍らせる事で専用の武器「冷凍槍」に変化する。また、自身の力で吹雪等の氷を使用した攻撃が可能である。

必殺技は吹雪で敵の動きを止め、冷凍槍で邪気を貫く「氷結・アイ

ススパイラル」ちなみに技名は玲二が名付けたと思われ。

全体的なスペックは火影に劣りますが、それ以上に妖気の扱いが上手いので、戦力的にはどっこいどっこいと言ったところ。

不遇ライダーにするつもりはありませんが、もしかしたらドレイクみたいな扱いになるかも…？

フォーダ

身長：199cm 体重：100kg

パンチ力：35t キック力：60t

ジャンプ力：80m 走力：100mを3.5秒

専用武器：剣？

必殺技

「名称不明」邪気のこもったバーニングブレイクのようなキック技。

謎の男・宮野恵太が変身した姿。妖気ではなく邪気をまとって変身しているため、存在するだけで周囲に恐怖を与える。

変身に使用したのは、幻鎖に似た鎖型装備帯「血塗れの牙」。ブラッディファング彼曰く「墮落した都の力」らしく、月の都と何らかの関係があると思われる。

その力は火影・冷姫を上回り、通常のキック力だけでも火影のバーニングブレイクを凌駕する。

というわけで、敵サイドのライダーが出てきました。まあ、現時点では明確な敵の首謀者というのが登場していないんですが。

それにしてもどんどん強くなるな。パワーインフレ起きてるんじゃないだろうか。

第一話 天狗 Long-Nosed Goblin(前書き)

第一部 火影之章

悪しき力に囚われし妖を天壤の劫火にて焼き尽くし、
其の者、畏怖の存在とならん。

第一話 天狗 Long-Nosed Goblin

「わっ!？」

「えっ、な、何!？」

驚く子どもを見て、俺は満足げに笑っていた。

小学校2年、8歳の頃。

まだその時は俺の「力」について何とも思わず、ただ「すごい力」としか感じていなかった頃のことだ。

「へへ、すごいだろ」

「玲二、お前って妖怪？」

「バカ、妖怪なんて本当にいるわけ無いだろ」

流石は純粹無垢な小学校低学年。「手品か何か」という理由だけでこの現象を片づけられてしまう。

だが普通に考えて、人間の手から炎が出るはずがないのだ。

幼い俺は手をブンブンと振って、炎を消した。

場面が変わった。

顔が焼けるように熱い。

俺の家が燃えていた。

消防士が懸命に消火活動にあたっている。が、炎の勢いは衰えることを知らない。

炎は4時間燃え続け、家だけでなく周囲の林なども焼き払った。家の中にいるはずの父親と母親の姿は無かった。

生存しているのか、すでに死んでいるのか、遺体が無ければそれすらわからない。

俺はただ茫然とするしかなかった。

「……!?」

突然。まさにこの言葉があてはまるだろう。

当時の俺は突然、何かを感じ取ったのだ。

肉眼ではとらえられなくとも、何者かの存在を感じ取っていた。

俺は何かの気配がする方向へ全力で走った。

真つ暗の森の中を駆け抜け、そこで再び何かを感じた。

しかも、さつきより強く。

刹那、俺の周囲を炎が取り囲んだ。

慌てふためく俺の前に、木の上から何かが飛び降りてくる。

赤い顔、2本の角、黄金色のたてがみ、ボロボロの翼。

手足は人間のものとは思えないほど不気味で細く、長く汚らしい爪が伸びていた。

「貴様、中村誠一の子どもだな」

化け物は臭いを嗅ぐように鼻をならした後、ニタニタと不気味に笑った。

「家を燃やしたの、お前？」

「ああ、そうだ」

右手が熱くなるのを感じた。

「父さんと母さんはどこだ!？」

「父親は死んださ。ただの人間だ、俺様の攻撃を耐えられるはずがねえ」

右手から炎がこぼれた。

火の粉が足元の落ち葉に降りかかり、新たな炎を生む。

「母さんは!？」

「知らねえよ。動けないように痛めつけたはずだが、どっかに消えちまいやがった。死んだかもな。ざまあねえ」

今までで一番の大きさの炎が噴き出していた。

炎は俺の服を焼き焦がし、右腕全体を覆っていた。

不思議と、熱いという感情は全くなかった。

「殺してやる…」

「あ？」

「殺してやる!！」

俺が化け物に向かって駆け出した。

今まで傍観していた俺は、思わず「やめろ!」と叫んだ。

が、幼い俺には聞こえるはずもなく、そのまま右手で化け物の腹を殴った。

「殺す？お前が俺を？笑わせるな！」

化け物が嘴のような口を開き、炎を吐きだした。
全身火傷が確実だと思われるほど、全身に炎を浴びた。

奇跡的に目立った外傷も無く、俺は事件の1週間後から学校に通う事ができた。
だが、そこで俺を待っていたのは、俺を非難するような蔑みの視線だった。

俺は何もしていないんだ…
そんな目で俺を見るな…俺は悪くない…
やったのはアイツなんだよ、俺じゃない…俺じゃない
やめろ、やめてくれ…

「やめてくれ！」

「ひゃあつ、ご、ごめん…」

ガバツと体を起こした。

直後、ドサツと何かが落ちる音。

そこはいつもの俺の部屋、俺のベッド。

視線を床にやると、そこには中学3年生に進級したばかりの江角沙夜が尻もちをついていた。

「パンツ見えてる」

「え?...きゃっ」

沙夜は慌てて起き上がって、正座になった。

「玲二のエッチ」

黒だった。

ずっと子供だと思っていたが、だんだん大人になっていくのだろうか。

「ハイハイ... いけね、もうこんな時間か！飯作らなきゃ」

「朝ごはんなら華さんが作ってくれたよ」

8年前、家も両親も失い孤児となった俺を気にかけてくれたのが、父の友人でもある山田徹さんだ。

「かがやきの家」というファミリーグループホームを経営する山田夫妻は、俺を快く迎え入れてくれた。

壮絶な差別行為を受けて以来、自分の力を人に見せる事をかたくなに拒んでいた俺だが、どういうわけか炎は俺の制御を超えて出現した。

怒りや悲しみなど、負の感情で満たされると、手から勝手に炎が出るようになったのだ。

いつまでもこの炎に縛られながら生きていくのだろうか。まるで呪いだ。忌々しい。

「早く行こ」

沙夜は顔を赤くしたまま、俺の右手をつかむと部屋の外まで引っ張

って行こうとする。

その何気ない仕草がとてもうれしく、俺は右手で沙夜の左手を握り返した。

校門の前で時計をチェック。

8時27分、始業3分前である。

慌てて走る多くの生徒の中を、俺はゆっくりと歩いた。

差別行為は思ったよりも長く続き、高校に入った今でも噂は広まっていた。

教師ですら俺と深く関わろうとする人は少ない。と言っても、そんな状況にはとくに慣れていた。

もちろん好きになんかなりっこないが。

教室のドアを開けると、クラス中の視線が俺に集まった。

しかし直後に入ってきた担任教師が始業を伝え、俺は誰とも顔を合わせることなく自分の席に着く。

窓際一番後ろ。狙ったかのような座席である。

「おい玲二」

いつの間にかホームルームは終わっていたらしい。

隅っこの俺の席にやってきた男子生徒は、新塚廉。

俺に対しても普通に接してくれる数少ない人間だが、彼とは高校で会ったばかり。

まだ3週間ほどである。

「何だ、新塚」

入学当初から話しかけられ続け、最初こそは煩わしいと感じたが、今では彼がひつついてくるのにも慣れてきた。

「なんだよ、その“近づいてくん”みたいなオーラ。俺とお前の仲だろう？」

どんな仲だと言った。

「放っておいてくれ。俺は独りでいる事に慣れたんだ。それに……」

俺は机の上に腕を組み、顔を乗せた。

それに、親しくなった人間に裏切られるのはもう嫌だ。そんな言葉が出したくても出なかった。そんな弱い感情を、他人に見せたくなかった。

「それに？」

「…俺なんかにかまっていれば、お前だって面倒なことになるぞ」

「気にしねえよ」

これだから、こいつは拒みづらい。

正直、こうやって話しかけてくれる事がとてもうれしい。

他人が噂している事を全く気にせずに、俺と関わっていてくれる事が。

放課後になって、俺は長い溜息をついた。

雁字搦めに縛っていた鎖がほどけ、自由になったような気分だ。

「さーって、玲二！行くぜー！」

「どこにだ」

俺の席にやってきて突然大声を上げる新塚に、俺は当たり前疑問を吐く。

そもそも俺は約束とかしていないはずなのだが。

「んー、とりあえず…」

突然、廉の言っている言葉が理解できなくなった。

俺の耳は聴く能力でも放棄したのだろうか。

それだけではない、五感が役割を忘れてしまったかのように、俺は何も感じられなくなった。

いや、ただ1つだけ、芯から冷えるような強烈な恐怖感が俺の体を貫いた。

「玲二？」

気がつけば、俺は寒さに震え、自分の腕で体を抱きしめていた。脳裏には全身が炎に包まれ、叫び声をあげる幼いころの記憶が鮮明に映し出されていた。

「大丈夫か？」

「…あ、ああ」

一体何なんだ、この感じは。

しばらくすれば悪寒もおさまり、俺は新塚に引つ張られるようにして街へ繰り出した。

しかし再び俺を悪寒が襲った。

「あああ…ああ…」

口から言葉にならないうめき声が漏れる。

新塚が不審そうに俺を見つめるが、俺は自分を抑えられない。どうしようもなく怖い。

体は寒いのに、右手はどんどん熱くなってきた。

何かが来る！

「このにおい…貴様、あの時のガキか」

その声は俺の耳から入り、脳髄を一瞬にして凍てつかせた。

声のする方へ、俺はゆっくりと後ろを振り向いた。

新塚もそれに合わせ、同じ方向を向いた。

「死んでいなかったか。ま、流石は妖怪のガキと言ったところか」

その姿を目がとらえた途端、右手から勢いよく炎が噴き出した。

赤ら顔で鼻が高く、翼で飛翔し、人を魔道に導く魔物と伝承させる妖怪。

ライオンのような鬣は所々燃えていて、手足の鋭い爪は肉食獣のそ

れとは比べ物にならないほど凶悪なものだった。

テングは俺の姿をじーっと見つめ、にやにやと笑っている。

「くっ！」

俺は思わず右手を突き出していた。

死ぬかもしれないという恐怖感、しかしそれよりも強い、父親と母親の仇を殺したいという憎しみの念が俺の右手を動かした。

「だが、半分は半分だ。完全な妖怪ではないお前に、俺は殺せない」

「黙れええええ!!」

無我夢中でテングに近づき、炎を噴き出したままの右手で拳を作り、思い切り殴った。

これだけ思い切り出したのは何年振りかわからない。

体が追いついていけないのか、俺は反動で後ろに倒れた。

テングはボロボロの汚らしい翼を翻し、鬣にうつつた俺の炎をかき消した。

俺は瞬時に立ち上がり、テングとの距離を取る。

「新塚、逃げろ！」

テングの口が開くよりも先に、本能で攻撃が来る事を悟った。

呆氣に取られている新塚を突き飛ばし、テングの口から噴き出る炎を受け止めた。

熱い。感覚が麻痺し、冷たさすら感じる。

「おおおおお！！」

何者かがテングを蹴飛ばし、俺はテングの炎から解放された。
俺に女性が近づいてきて、そっと体に触れる。

「君、大丈夫？」

「はい…なんとか」

俺の返事にその女性は驚いたようだが、炎が右手に吸い込まれるようにして消えるのを見て、さらに驚いたようだった。
テングを蹴飛ばした男性も俺のところへ駆け寄ってくる。

「香苗、ここは何とかするから君は2人を連れて早く！」

「ええ！」

「ま、待つて下さい！人間に妖怪の相手なんか無理です！」

テングに恐れることなく蹴りを入れたり、炎に包まれた人間を抱えたり、この2人は妖怪の事について多少知っている事はわかった。
だが、2人からは何も感じない。そう、妖怪の持つ妖気が、俺が戦うしかない。

「君は一体…」

「半分人間の血で、半分妖怪の血…カッコよく言うなら、混血種です」

もう一度、右手から炎を出した。
テングはその炎を受けながらも、俺に近づいてくる。

接近戦か、そう思った瞬間には鋭い爪が飛んできた。
咄嗟に腕で受けながす。鋭い切り傷ができたが、すぐにふさがるのが感じた。

やはりそうだ。

人間も絶体絶命のピンチに追い詰められれば、無意識に限界以上の力を発揮できる。

今のこの状況で、俺の脳は「生き延びる事」を優先し、体には筋肉限界を無視して命令を出している。

そして俺の妖気は再生能力を高め、さらに筋力を倍増させている。これだけの力を使えば、3日はまともに動けないのではないだろうか。

「うぐっ…」

胃液が逆流してくるような、嘔吐感に似た気持ち悪さを感じた。妖気が体中に満ち溢れ、少しの刺激でも体中から炎が噴き出そうだ。例えるなら、限界まで空気をいれた風船か。
今の俺はほぼ妖怪だ。

「君、これをつけるんだ!」

男性の声が響いた。だが振り向いて何かいられない。

何かを投擲する音が聞こえ、とにかく音のする方へ手を伸ばした。テングの攻撃をギリギリでかわし、手につかんだ何かを確認する。

「鎖!？」

長さ的には、鎖で出来た装飾帯のようなものだろうか。

何が何だかわからないが、不思議とその鎖からは心が安らぐような暖かさを感じた。

鎖のベルトを腰にまわし、後ろで留め具をパチンと止める。
不思議と気持ち悪さが消えた。それでも体は燃えるように熱い。

「札を！」

男性の声を聞き、俺はベルトの横に何枚かさがっている札を見つける。

その瞬間、俺は理解した。

何を理解したか、と聞かれれば正直わからないが、理解したのだ。

俺は札の束の内、1枚を引きちぎって目の前に持ってきた。

札の表面に文字が浮かぶ。

見事に達筆な文字。「影」と書いてあるような気がするが、草書体を読む事に自身は無い。

影・退魔鎧装呪詛火影

「変身！」

右手から噴き出た炎に札が包まれた。

それと同時に俺の体は自分の炎に包まれる。

体を何かに包みこまれていくような、奇妙な感覚を覚える。

次の瞬間、俺は鎖に巻きつけられ…

「これが火影…？」

「ああ」

俺は異形の戦士に変身していた。

第二話 浄化 Purification

紅蓮の炎を突き破って現れたのは、異形の戦士。

「これが火影…？」

「ああ」

2人の会話が聞こえ、俺は振り返った。

自分の体を見まわすと、手も体もゴツゴツしていて、鎖のような装飾品があちらこちらに巻かれている。

何が何だかわからない。困惑するばかりだ。

「火影…こいつの名前ですか？」

「ああ」

「これって、一体何な…ぐあっ！？」

腹部に強い衝撃。テングが俺の腹を蹴ったらしい。

痛いことは痛いだが、それほどではない。人間よりもかなり頑丈なようだ。

鎧が体を覆っているというより、俺の皮膚が変化したような感じだ。とても動きやすい。

「はっ！」

息を短く強く吐き出し、力を込める。

一気に視界がクリアになり、テングの動きがゆっくりに見えた。

「貴様、何をした！」

テングは翼を広げ、炎を吐きながら向かってくる。

俺は恐れることなく、その炎の中を突き進む。

テングは一瞬怯んだ。その隙を逃さず、俺はテングの顔面に拳を叩き込む。

苦悶のうめき声を上げ、テングは数十メートル後ろへ吹っ飛んだ。

炎と砂煙が晴れる頃には、テングの姿はどこにも無かった。

「…逃げられた？」

あたりを警戒する俺の所へ、先ほどの男女2人が近づいてきた。

俺以外の妖気は感じられない。どうやらテングは姿をくらまし、遠くへ移動したようだった。

「人間の变身限界時間を超えたわ、間違いない」

女性は腕時計を確認しながら男に伝える。

「君、体の調子はどうだい？」

「問題ないです」

しかしどうやって变身を解除するのだろうか。

このベルトを外せばいいのか。

何やら手間取っていると、女性が俺の後に回ってベルトの留め具を外してくれた。

鎖のベルトが外れ、鎧が熔けるように消えてなくなった。

一気に力が抜け、俺は膝に手を突いて大きく息を吐く。

戦っている間は気にならなかったが、かなり体力を消耗した。つまり、疲れた。

「火影って…一体何なんですか…」

「これから説明しようか。とりあえず場所を変えよう。それと…」

男は新塚に視線を写した。

驚きやら興奮やらが入り混じって、目をキラキラと輝かせて、まるで子供みtainな表情をしてやがる。

「君も来てくれ」

「はい！」

場所は変わってここは市内の喫茶店。

入った事は無いが、何度か行列ができていたのを見た事があり、結構な人気店のはずだ。

そんな店に顔パスで裏口から入るとか、一体この人達は何者なんだろうか。

「ここは妖怪が働いてる喫茶店なんだ。だからちよつと顔が利くだよ」

「え!？」

男が手を上げると、1人のウエイトレスがやってきた。
髪の毛は薄い金髪で、柔和な笑顔を浮かべているとても優しそうな人だ。

年齢は見た目で判断するが16〜17歳だろうか。

「こちら、クウコちゃん」

「へえ、クウコ…」

ちょっと待て。なんか思いだしそうだ。

クウコちゃんは俺を見て笑っている。

一瞬、彼女の髪の毛の中から、ピヨコンと犬のそれに似た耳が飛び出した。

すぐに消えたが、彼女はイラズラが成功した子供のように無邪気に笑っている。

「空狐…？」

狐タイプの妖怪、妖狐の中でも最上位の大神狐。

3000年生きた妖狐が成る存在だとも。

妖怪と関わったことは無いが、知識としては母親から教えられたものだけでも十分ある。

知識といっても、寝る前にちょっとした話を聞いたくらいだが。

「はい、空狐です」

妖狐の中でもハイランク、例えるなら仙人レベルの妖怪なのだが、やけに物腰が低い。

「こちらの方が慣れてますので。それでもすごい妖怪なんですよ」

えっへん、とばかりに両腕でガッツポーズをとるクウコちゃん。

こ、この可愛らしさで3000歳かぁ。

新塚にいたってはデレデレしてるし。

多分空狐とか話の意味わかってないだろうな。まあいいか。

「で、話を戻そうか。とりあえず自己紹介だな。俺たちは邪気妖怪
浄化組織PW、“Purifier Wickedness”の一
員だ。俺は佐藤秀樹」

「私は柊香苗」

「「ども」」

俺と新塚は小さくお辞儀をする。

Purifier Wickedness…悪の浄化者か。そのま
んますぎる。

それにしても柊さんは一見クールでキツメな印象を受けるが、さっ
きからアイスクリームをパクパクと食べて、子供のような笑顔を浮
かべてらっしゃる。

ここ美人率高いな。

「ねえねえ、君って半妖怪なんだよね！お父さんが妖怪？それとも
お母さん？」

中々ズバズバ聞いてくる人だ。

佐藤さんは思わずコーヒーを吹きだしている。

「お前、いきなり失礼だろ」

「気になるのよ、いいじゃない」

「構いませんよ。母が妖怪です」

新塚も興味津々で聞いてくる。

俺にずっとくつついてきたからな、やっぱり興味とかあるんだろう。

「へえ、どんな妖怪？」

「いや、ただ妖怪だとしか聞いてないんで…すでに両親はいませんしね」

「あ、そう…ごめんなさい」

「いえいえ」

しまった。ちよつと空気が冷めてしまった。

とりあえず紅茶を一口飲むが、味が感じられない。

「それにしても玲二君と、廉君か。廉君って玲二君の力のこと、知ってたの？」

「はい。聞いていただけで、見たのは今日が初めてですけどね」

実際、俺もここ数ヶ月炎は出していない。

久々に出したもんだから右手が熱くてしょうがない。

こういう事態に備えてカバンにコールドスプレーは忍ばせているけど、一時しのぎにしかなくてない気がする。

「ところで、妖怪ってそこまで悪い奴らじゃないですよ。何で倒さなきゃいけないんですか？」

一番疑問に思っている事を聞いてみた。

そりゃ悪戯すりゃ犬だって噛みつく。それと同じで妖怪も基本的に人間には干渉しないはずなのだが。まあ、俺の聞いた話では、だがな。

「8年前、テングに家を燃やされて、両親は襲われました。でも両親がテングに何かしたとは考えられないんです」

俺は生まれてこのかた、妖怪と関わった事は無い。両親がそうさせていたからなのか、詳しくは知らないが、とにかく妖怪と出会ったのも今日が初めてだ。

「ああ、だからあんなに必死だったのね。…そうね、あのテングもだけど、邪気を持った妖怪っていうのが現れたのよ。最近——玲二君の話では少なくとも8年前からだけど、そういう妖怪が現れ始めたの」

「だからって、倒すんですか？」

「んん、違う違う。その邪気を浄化して、元の状態に戻してあげるの。火影ならそれができるからね」

火影。そうだ、他にも聞きたい事は山ほどある。

聞いたそんな俺の表情を見て察したのか、佐藤さんが話し始めた。

「邪気を浄化する事ができる、俺達の組織の奥の手だよ。一つ欠点

があつて、妖気を纏っていないと使いこなせないんだ。俺も何度かやってみたが、最長でも30秒ほどしか変身を維持できない」

ということは、今のところ適合者は俺だけ、か。

正直怖いし疲れるし面倒だし、断りたいのも山々だが、

自分の力を認めてもらえたような気がして、嬉しいのも事実。

この力が人の役に立つならやってもいいかも。なんて単純に考えられるのは妖怪だからなのか。

「そういうことなら。よろしくお願いします」

まだよくわかってないけど、やらなきゃいけない事はわかった。俺に出来る事を。

とりあえず佐藤さんと柊さんと連絡先を交換し合い、俺はかがやきの家に帰ろうとしていた。

色々な事があつて頭の中もごちゃごちゃしているし、体も疲れているし、早く風呂に入って眠りたかった。

しかし、かがやきの家の前にテングはいた。

思わず歩みを止め、俺は腰に巻いた鎖——幻鎖というらしい——を強く握りしめた。

「中村の息子が、火影だったとはな」

「貴様…何をするつもりだ」

「この建物から貴様のおいがするのでな」

テングはそれ以上何も言わなかったが、何を言おうとしていたのかは分かった。

こいつはこの家を、佐藤さん夫妻を、沙夜達を燃やすつもりだったはずだ。

再び“俺の支え”を消そうとしていたのだ。

「もう…消させない」

「あ？」

「俺の家族は消させない」

俺は影の札を取り、そのまま右手に炎をともした。

炎は札を消し墨へと変え、その消し墨は光の粒子となって俺の体をまとう。

「変身！」

倒す。

何があってもコイツだけは倒す。

「おおおおおおお！！」

火影へと変わった俺の体は驚くほど軽い。

先刻変身した時よりもずつと軽い。

そのくせ大地を踏みしめる時の力強さは、アスファルトにひびを入

れるほどだ。

テングが炎を吐きだした。

俺は右手を突き出す。炎は右手の中に吸い込まれていき、俺の体全体から炎が噴き出す。

成るほど、炎ならば自分のエネルギーにしてしまえるのだな。

「くっ！喰らえ！」

テングもそれに気付いたのだろうか、鉄扇を構え、俺に向かってきた。

武器を使つての格闘戦か。

ならば今頭に浮かんだ技を試してみよう。

俺は全身に炎を纏い、走り出した。

テングが鉄扇を振りかぶると同時に、俺は地面を思い切り強く蹴る。俺の体は火の槍となり、テングの体を貫いた。

防ぐ目的で前方に構えられた鉄扇も一瞬で熔け、蒸発してしまっている。

「こしやくなあああ！！！」

テングは苦しそうな声を上げ、力を込めた。

突然テングの背中から赤い液体が吹きだし、そこから巨大な翼が出てきた。

自らの血に穢れた赤黒い翼をはためかせ、テングは大空へと舞い上がる。

血がポタポタとたれ、アスファルトに血痕を残す。

「逃がすか！」

届くかどうかはわからない。

俺は足に炎を集中させ、跳び上がった。

気付いた時には俺は上空からテングを見降ろしていた。

右手からは常に炎が噴き出している。が、どこか俺の炎とは違う炎。

「なるほど」

テングの炎を媒体に、テングの能力をも吸収したようだ。

今の火影にはテングの飛翔能力を元にした凄まじい跳躍力がある。

よし、好機だ。奴は俺の位置がまだわかっていない。

俺は幻鎖から1枚の札を取り出した。

炎 - 破邪滅魔呪詛火影

その札を燃やした瞬間、炎が俺の右足に集中した。

それと同時に黒い影のような物がテングを縛り、宙に固定する。

そこで初めてテングは俺の存在に気付く。

「幻影・バーニングブレイク！はあああああああ！！」

俺はそのままテングに向かって“必殺キック”を放った。

直撃する寸前、テングの姿はかすみ、幻のような物になる。

その幻のようなテングの輪郭を通り抜けると、中心で不気味にうめいている黒い塊を貫いた。

変な感じだが、手ごたえはあった。

おそらく不気味な黒い塊は邪気そのものだろう。

爆発が起こり、俺は地面に着地、一呼吸おいてテングが地面に落ちてくる。

「倒したのか？」

近寄ろうとすると、急にテングが起き上がった。

俺の姿を見つめているが、先ほどまで痛いほど感じていた邪気は全く無くなっている。

元のテングに戻ったのだ。

「早く戻れよ。あんた達はバンバン人前に出ていい存在じゃない。あんた達も騒がれるのは嫌いだろ」

その言葉に応えるように、少なくとも俺にはそう思えたが、テングの姿はぼんやりとした不確かな物になり、消えていった。どこかの山奥でひっそりと身を隠して生き続けるのだろう。

「いい風だな」

テングが去った後の風を顔に感じ、俺は小さく呟いていた。

第三話 鎌鼬 Air scythe

体が焼けるように熱い。

俺の体は俺ではない、火影の体となっている。

だが鎧のあちこちがひび割れ、血液が噴き出しているかのように炎が噴き出す。

目の前には何体ものテングがいて、沙夜や佐藤さん夫妻、新塚達にとらえられていた。

「みんなを放せ！」

「黙ってこいつらが殺されるのを見ている」

テングの持つ鉄扇がさつと開かれた。

そしてゆっくりと沙夜の首元に近づいていく。

「やめろっ…やめろおお!!」

「いやっ…玲二い…助けて」

鉄扇が首筋に触れた。ツーッと赤い液体が垂れる。

沙夜は涙を流し、俺の助けを乞う。

だが体が動かない。痛みだけではない、沙夜達を失うという恐怖感が動きを止めていた。

「死ね」

テングが口から炎を吐きだした。

沙夜の体は炎に包まれ、鉄扇で体中を切りつけられていく。

沙夜は絶叫を上げながら、手を伸ばして俺の方へ近づいてくる。

「沙夜…やめろおおおおおおおおおおお！！」

「沙夜！！！」

「はいつ！？」

目を覚ますとそこはいつもの俺の部屋。
顔からも体からも嫌な汗が吹き出し、パジャマはおろかベッドもぐっしょりだった。

「沙夜、生きてる…？」

「うん、生きてるけど…」

不思議そうに俺を見つめる沙夜を見て、ほっと一安心した。
何だ、ただの夢だったのか。
目覚まし時計に目をやると、6時丁度。

「朝食作る前にシャワー浴びるわ」

俺はタンズから着替えを引っ張りだすと、沙夜の頭を撫でて部屋を出た。

体中がだるい。

なんか熱っぽいんだけど、頭は妙に冴えていてキーンとしている感じだ。

考える分には何も支障は無いが、体を動かすとなると結構きつい。味噌汁に角切りにした豆腐を入れている所に徹さんがやってきた。

「徹さん、おはようございます」

「おはよう玲二君。顔色が悪いみたいだけど、大丈夫かい？」

む、伊達に何人もの孤児の面倒を見ているわけではないというか、徹さんの観察力は相変わらずすごい。

これでも外に出さないようにしていたのだが。

「ちょっと疲れが溜まってて」

「珍しいね。まあ疲れてる時はゆっくり休むんだよ」

確かにそうかもしれない。

妖怪の血が半分混ざっているためなのか、運動神経はかなり高い。

ここ数年筋肉痛なんか起きた事が無いし。とにかく、そういう特異な体質も全て知っているから、「疲れている」という言葉を変に感じたのだろうか。

「ありがとうございます」

ふう。頭は働くけれども体が動かない。

だるいし学校はサボろうか。
そんな事を考えていると

「あ、学校にはちゃんと行くんだよ」

釘を刺された。

「いただきます」

家族全員揃つての朝食。

実の家族では無いけれど、俺にとってかけがえのない一瞬。

ファミリীগ룹ホーム「かがやきの家」を経営している徹さんと華さんの他に、この施設には俺を含めて4人が暮らしている。

中学3年生の江角沙夜。兄弟姉妹の中のお姉さんといった感じで、小さい連中の面倒をよく見ている。

小学6年生の大沼裕太。平均よりもやや低い身長がコンプレックスで、性格も内向的で控えめ。

小学4年の碓氷千恵。沙夜にべったりでかなり仲がいい。たまにませた一面を見せるが、まだまだ純粹無垢な年頃。

全員が俺の正体を知っている。もちろん驚かないはず無いし、沙夜なんて一晩中大泣きしていたけど、ちゃんと理解してくれているし、無駄な詮索もしない。とてもありがたかった。

「おいしいー」

「どうよ、ダシ変えてみたんだけど」

「おいしいよ」

にっこりと笑顔を向ける沙夜。
自分の作った料理で喜んでもらえるのは本当にうれしい。
生き甲斐というのも大袈裟かもしれないが、あまり物事に熱中した
事のない俺にとってはこれ以上の物はない生き甲斐である。

「なあ玲二、これ見た？」

学校について早々俺を出迎えていたのは新聞を持った新塚だった。
それにしてもこいつも新聞を読むのか。キャラ的に何となく読まな
そうなタイプだと思っていたのだが。

「失礼だな、俺だって新聞くらい読むぞ」

心を読まれた！？
と思ったら口に出していたみたいだ。

「で、何だって？」

俺は席についてカバンを置いた。
時間は始業開始2分前。ちよいと時間配分を間違えたようだ。

「これだよ」

新塚は俺の机に新聞を広げ、何枚かめくった後に小さな記事を指し示した。
そこに書かれていたのは通り魔事件が頻発しているといった類の報道だった。

「で？」

「で？って…よく見てみるよ」

呆れたように俺を見るので、渋々もう一度記事に目を通す。

深夜に出歩いている人を殺害する事件が16件目。

いずれも被害者の体は綺麗に切り裂かれ、体の一部が消えている。

「イカれた殺人犯もいるもんだな」

「いやいや、こんなやばい事件なのに大事にならないっておかしいじゃん！」

確かに猟奇殺人、それも16件目となれば結構なニュースとなつていいはずだ。

今回の件なんて下半身が丸々消失していたらしいし、かなり奇妙だ。それこそ政府とか警察みたいなかい組織が隠蔽しているとしか…

「…組織？」

チャイムが鳴り、担任の先生が教室に入ってくる。

新塚は何やらぶつくさ言いながら自分の席に戻って行った。

俺はケータイを取り出すと、出欠を取る先生に見つからないようにキーを打ち始めた。

ビンゴだ！

やはりあの事件はPWが隠蔽していた。殺人犯の正体は邪気に侵された妖怪。

「敵の正体は！？佐藤さん！」

「ああ、本部の予想だとカマイタチなんだけど…玲二君学校は！？」

「そんなのサボって来ましたよ！」

俺は昼休みに学校を飛び出し、人の溢れる通りを走っていた。

カマイタチは夜行性の妖怪。それは邪気に侵されていても変わらなかった。

だが稀に昼間に活動することがあるらしい。例えば今日のように風の強い日などに。

「警戒網を張ってただけど、偶然カマイタチの活動拠点にあたったみたいでさ。1人やられたよ…」

偶然テリトリーに入った人間を襲ったカマイタチは、血の匂いに飢えて街へ繰り出した、ってところか。

だがはたして追いつけるか。カマイタチの移動速度はそれこそ風並に速い。

つむじ風に乗じて人を襲う、まさにカマイタチなのだ。

「玲二君！」

俺の前にバイクに乗った女性が現れ、急停車した。バイクを上げると柊さんの目が俺を見ていた。

「柊さん！？」

「乗って！追っわよ！」

投げ渡されたヘルメットをかぶり、バイクのタンデムシートにまたがる。バイクは急発進し、俺は危うく振り落とされそうになるのを踏ん張った。

「腰に捕まって！飛ばすから！」

「あ、はい」

恐る恐るではあったが、俺は柊さんの腰に腕をまわした。細い。折れてしまうのではないかと思うくらい。

こんな華奢な体格で大きなバイクを操ってるんだ。なんかすごいな。

「香苗！来るぞっ！」

佐藤さんの声が聞こえた。

それと一緒にノイズが聞こえてきたから、おそらく無線か何かだろう。

しかしその声が佐藤さんの物だと認識するよりも早く、俺は背中に激痛を感じた。

「ぐっ!?!」

凄まじい突風が過ぎ去り、かぶっていたヘルメットのベルトが切れて吹っ飛んだ。

「玲二君!?!」

「大丈夫です!」

来やがったか。

いきなり背中を切りつけてくるとは、いい度胸じゃねえか。カマイタチの姿は見えないが、前方に風が黙認できるほど渦巻いている。

「ここからあそこに突っ込みます。バイクを踏み台にするんで揺れるかもしれません」

「そのくらい大丈夫よ!」

俺はカバンから幻鎖を引っ張りだすと、腰に巻いてさらに札を1枚引きちぎった。

シートの上に立ちあがった瞬間に柊さんが急ブレーキをかける。

「変身!」

その反動を利用し、俺は炎を纏いながら飛び上がった。体に鎖が巻き付き、次の瞬間には火影の鎧に変化していた。

「はあああああああ!」

右手に炎を纏わせ、前方を阻む風の壁に拳を撃ちつけた。
突き抜けるかと思っただが、風の勢いは強く、逆に俺の体が吹き飛ばされてしまった。

だがすぐに体勢を立て直し、建物の外壁を蹴って再び風の壁に向かって行っただ。

火力が足りなきゃ、増すだけだ！

体に炎を纏わせると、その炎は渦巻いた。

突風と激突。炎と風は互いに削り合い、中和していった。
もうすぐ突き破れる。その瞬間

「何！？…ぐあああ！！」

風の中から長い爪が4本伸びてきて、俺の腕を切りつけた。
腕を覆う鎧に4本の深い切り傷が入った。思わず力が抜け、地面に激突する。

風の壁が消え、中から現れたのは痩せた人型の妖怪だった。
髪の毛のような体毛が顔を覆い、両の手の甲からは先ほど俺を切りつけた物と思われる長い爪が4本ずつ伸びている。

「つてーな…」

鎧に刻まれた切り傷からは俺の血が流れていた。
こうしてみると「肌が硬化したもの」というのがよくわかる。

——ッ！！

カマイタチが雄叫びをあげた。
文字で形容しづらい、不気味な声。犬の遠吠えにも似ているような、どこか寂しい声。

叫びとともに臭ってくる強烈な血液の臭い。

とにかく、浄化する前にこいつの動きをどうにかしないとな。

比較的小柄な体格とはいえ、こつも素早く動かれては攻撃を当てる事ができない。

「そおい！」

踏み込みに力を入れ、一気に距離を詰める。瞬発的な速さなら火影も負けてはいないと踏んだ。

相手が構えていないこともあり、カマイタチが動揺した一瞬の隙を突く。

左手首に巻かれている鎖を伸ばし、すぐに札を手にとると燃やした。

鎖・帯炎滅魔呪詛火影

「つぜええええい！！」

鎖が炎を帯び、カマイタチの体に巻きついていった。

すぐに逃げようとするが鎖はすでにカマイタチを包囲している。カマイタチは自慢の爪で鎖を引きちぎろうとする。

ギヤアアアア！！

ジュツという音とともに獣の焼ける臭いがする。

炎を纏う鎖がカマイタチの行動を抑制し、さらにダメージを与えていた。

「よし！」

一気に浄化に移ろうと体勢を整える。

しかし次の瞬間、鎖が弾かれたように引きちぎれ、カマイタチの体
が大きく変化し始めた。

人型だったそれは獣のようにどっしりとした四足歩行型に。大気を
震わせる大音声の雄叫びが、腐敗臭とともに口から放たれた。

第四話 鉄馬 Motorcycle

「……マジかよ」

カマイタチは巨大なイタチみたいな姿に変化していた。

胴長の体に、凶暴そうな牙を覗かせた獰猛な頭部、四肢は肉食動物のようなガツシリとした物。

全長は目検討だが…ざっと7、8メートルつてどこか。

そして一番目を引くのは、両前足の甲にあたる部分から生えた、鋭利な爪。いや、爪と言っていいものなのかわからない。それは1本の巨大な刃で、こするだけでアスファルトの地面に溝を作った。

「はっ！」

俺は地面に炎をぶち込み、両手を広げた。

アスファルトを突き破って4本の炎の鎖が飛び出してくると、カマイタチの四肢を縛っていく。

「面倒くさそうだから、一気に決めさせてもらっぜ！」

札を燃やすと同時に巨大な炎が俺の体を包み込んだ。

「幻影・バーニングブレイク！！」

炎を纏った状態で上空からの急降下蹴り。

カマイタチ自身の影が独りでに伸び、主を縛ろうと動き始めた。

ギアアアアアアアアアアアアアアアア！！

凄まじい叫び声。それとともに襲いかかる突風。

俺は炎をかき消されて後ろへと吹っ飛んだ。

カマイタチの姿はすでに無く、取り残された影は風にかき消されるように消えていった。

走行速度に影が追いついていないとか…どれだけだよ。

「逃がした…」

変身を解いていると、柊さんが近づいてきた。

「大丈夫？」

「大丈夫です、柊さん」

力を込めると、左腕に入った切り傷は跡形も無く消えていった。

「香苗でいいわよ。それにしても、随分戦いなれた感じね」

「そんなこと無いですよ。今日は今朝からだくて、上手く体が動かないんですよ」

「それ、バイクから飛び降りたりビルの壁を蹴って空を飛んだりする人間が言う事じゃないわよ」

で、ですよねえ。

軽く苦笑いしながらため息。柊…香苗さんは倒れたバイクを立て、ヘルメットをハンドルにひっつけた。

「そつえば玲二君」

「はい？」

「バイク乗った事ある？」

この「乗った事ある？」というのは、今さっきみたいなタンデムシートに跨る意味じゃなくて、運転した事ある？という意味だろう。それにしても全く話の流れがつかめていないのだが。

「一応、免許はありますけど」

「そつか。あ、でもまだ16歳なんだっけ？ 免許とりたて？」

PWって秘匿だけで一応国家組織だよな？これ言っちゃってもいいのか…？

「あの、免許自体はつい最近ですけど…15の時に何度か…」

「無免許で？」

「あ、はい…すみません」

中学校時代は不良ってわけじゃなかったんだが、確かに学校とかよくサボってたし、問題児ではあったな。

でも別に好きでバイクを乗り回してたわけじゃない。徹さんにそのかされて愛車に跨らせられたりとか、大勢の不良に因縁つけられて、逃げる時に不良をボコボコにしてバイクを奪ったりとか…。まさに「盗んだバイクで走りだす」をやってたわけですが…。

「玲二君もそういうトコあるのねえ。雰囲気すごい真面目っぽいから、ちよつと意外かも」

乾いた声でハハハと笑って、頭をかく。
ちなみに自分のバイクは、免許とってすぐに俺の炎で燃えてお釈迦
になってしまった。

「もしもし佐藤？旋風なんだけど…うん、玲二君も大丈夫そうだから。うん、よろしく」

当の香苗さんは佐藤さんに電話をかけている。
旋風？それに俺が大丈夫って何のことだ？

「旋風って何ですか？」

電話を切った香苗さんに聞いてみる。一般的に使われる「旋風」と
いう言葉ではないのは確かだ。

「バイクよ、バイク」

「バイク？」

とりあえず着いてきて、と言われるがままに再びバイクに跨り、俺
と香苗さんはPW関東支部なる高層ビルにやってきていた。

株式会社GEOS^{ジオセントバード}ENTBIRD

バイクや自動車などのほか、スポーツ用品や工具などの製品開発を

引き受ける一大企業。このビルはジオセントバードの本社ビルであるはずなのだが…。

「ここって…」

「ここはジオセントバード本社ビルで、PWの関東支部よ」

なるほどねえ。

聞けばこの社員の約半数がPWの協力者だという。

それにしても大きなビルである。ここで働く人の半分って、どれくらい多いんだ。

そんな事を考えながらビルの中に入ると、香苗さんがカードのような物を渡してきた。

俺の顔写真が貼られた社員証である。

「いつの間にこんな作ったんですか？」

ていうか俺、証明写真なんていつ撮ったっけ？

よく見れば高校の制服。学校にある個人写真でもとってきたのか。ていうか社員証ってスーツとかの方がいいんじゃないだろうか。

「玲二君は特別だからね」

香苗さんはそう言うつと受付までつかつかと歩いて行った。慌ててそのあとを追う俺。

受付には2人の若い女性が座っていて、香苗さんの姿を見ると笑顔になって声をかけてきた。

「柊さん！お帰りなさい」

「ただいま。それより柊さんっていうの、止めて頂戴」

「あなたは中村玲二君ね？私は御坂文子」

「白井恵です」

「どうも」

黒髪でショートヘアの御坂さん、ロングヘアで眼鏡をかけている白井さん。

PWは美人率高すぎだろ…。

軽く会釈をし、香苗さんに引つ張られるように着いていくと、廊下を曲がった突き当たりをやってきた。

壁には空調の温度調整の機械のような物に取り付けられているが、ボタンらしきものはどこにもない。ただ、1本のスリットがあるだけだった。

何だか読めてきたぞ。

香苗さんは自分のIDカードをスリットに通す。ピッという認識音がなると、突き当たりのはずだった壁がせり上がり、さらに通路が出現した。

「このビルの北側はPW専用なのよ」

どこかの秘密結社の基地みたいだ。

通路には、駅にある改札のような物があって、そこにカードを通してやっと入れるらしい。

俺は香苗さんに続いてIDカードを通し、PW専用区画へ入った。すぐ後ろで壁が降り、何事も無かったかのように沈黙した。

「結構、普通ですね」

「まあこのシステムも後付けだしね。内装はただのビルよ。ただ、北側の出入り口とか非常通路は全部取っ払って、地下にやったけどね」

何かあったら簡単に逃げられないな。この区画から出るにはさっきのルートを通るか、地下にある出口から出るしかないのか。一般社員もいるから仕方ないのかもしれないけど。

「監視カメラとかに映らないんですか？さっきの所」

「警備とか管理室はこっち側の管轄だからね。他に社員に見られなきゃ大丈夫。秘匿組織って言っても、政府とか警察とは連携してるから、そこまで堅くなる必要はないわよ」

結構大変みたいだな。

そんなことなら個人経営のこじんまりとした商店の地下に作るとかした方がいい気がする。あ、ダメか。たくさんの人が入れない。

「本当はゆっくり見学して欲しい所だけど、今はちょっと急いでるからね。地下のガレージにいくわよ」

「は、はい」

早足の香苗さんに着いて、エレベーターで地下へ行く。

地下はいくつかに区分けされた大きなガレージになっていて、何台ものバイクが並んでいた。

とはいってもどれも完成品ではなく、開発途中だったり修理中だったりするみたいだ。

しばらく歩いた先のガレージで、佐藤さんが俺たちを待っていた。

そこにはレーザーレプリカタイプのメタリックレッドのバイクが鎮座していた。

「おおっ」

思わず声が出てしまった。見た感じ、ジオセントボードが最近開発したというオンロード仕様の新機種に似ているが、エンジンが一回りほど大きく、タイヤはオンオフ兼用、さらにキーを入れる穴が無い。

「これがウチで開発した、火影専用のバイク。TW-h2010“旋風”」

『TW-』から始まるナンバリングは通称「ツイスターシリーズ」と呼ばれ、ジオセントボードのバイクでも人気の高いバイクだ。まさに旋風ツイスターを名に冠するこのバイクは、月刊GEOSENTBIRDを購読している俺にとっては垂涎モノの代物だ。とてもカッコいい。

「えっと...?」

「君のバイクだよ、玲二君」

「マジっすか!?!」

やべえ。うれしいっていうか、何かすごい興奮してきた。まさかツイスターが自分の物になるなんて。

「君の妖気で走る、まさに火影専用のバイクだ。旋風には黒駒の霊が宿っているから、君が命令しさえすれば、自走も可能だよ」

黒駒っていうと黒い馬か。そいつも妖怪なのだろうか。
佐藤さんに促されるままに跨り、ハンドルを握ってみると、認識音が鳴ってエンジンが轟音を響かせた。
ドッドドッドとエンジンが震える振動が俺の鼓動と共鳴する。
かすかに馬の嘶きが聞こえたような気がした。
よろしくな、旋風。

「こいつならカマイタチも追えますね」

「推定最高時速は1030kmだ」

「ぶふおっ」

いきなり桁違いの数値が出てきて思わず吹き出してしまった。
それは流石に人間の体が耐えきれないと思うのだが…。本当に火影専用なんだなあ。

「じゃ、早速行ってみます」

カバンから幻鎖を取り出すと、腰に巻いた。
札を一枚ちぎって右手に構え、炎を出して札を燃やした。

「変身！」

札を中心に、炎が俺とバイクを包み込んだ。
俺の体が火影に変わるのと同時に、バイクのメタリックレッドのボディに炎のようなモールドが刻み込まれた。かなりイカしてる。
ガレージの奥のシャッターが開いた。外から光が差し込み、ガレージ内が一気に明るくなる。

マフラーから一瞬炎が噴き出し、旋風は風のように走り出した。ハンドルで操縦している感覚がない。旋風は俺の体の一部であるかのように動いていると錯覚する。それほど軽やかに操縦できる。

「カマイタチは…あっちだな」

ヒイイインッ！！

モニターに映るレーダーにカマイタチの邪気が反応する。

行く手には巨大なビル群。車も通行人も多く、とてもじゃないが最大速度を出せるような場所ではない。

そんな俺の意識を読み取ったかのように旋風の中に宿る霊が嘶くと、突然車体が宙に飛びあがった。

「うおっ！？」

タイヤから黒い霧のような物が吹きだし、旋風はビルの壁を登り始めた。

「す、すげっ…」

あっという間にビルの屋上にたどり着くと、一旦停車させ、すぐにアクセルをひねった。

「行くぜ！」

メーターが吹っ切れる。

馬が飛びあがるようにバイクが跳ねあがり、いくつものビルを飛び越えていった。

やがて下降し始めるバイクの着地点には、風のように走り続けるカマイタチの姿があった。相変わらずの巨体をほこるくせに、小さい時より速いというのはどういうことだ。

俺はシートの上に立つと空中に飛び上がり、旋風が後押しするように俺を押した。

意思を持ったバイク、悪くない！

「幻影・バーニングソニックッ！！」

炎の札を燃やし、体中に炎を纏った俺は、こちらに気付き天を仰ぐカマイタチに向かって急降下。

カマイタチは爪を構えて咆えるも、炎と旋風と急降下の力が合わさった重い一撃には歯が立たない。

黒い影がカマイタチの中に入り込み、邪気を縛りつける。

カマイタチの姿がゆらぐと、俺はそれをすり抜けて確実に邪気を貫いた。

テングの邪気を消した時と同じ感覚。次いで背後から爆発音が轟いた。

「はぁ……」

地面にはカマイタチがぐったりと倒れている。邪気から解放されたようだ。

旋風が着地し、俺の背後で音も無く急停車した。

「お疲れさん」

ヒイヒイヒン！

俺が車体を撫でてやると、旋風の影が馬のような姿に変わり、そこから嘶く声が聞こえた。

「そうかそうか、よしよし」

何だか面白くなって、笑いながら旋風を撫で続けた。

第五話 太刀 B l a z e b l a d e

休日は気分がいい。

空は雲一つない快晴。俺の心もわりと晴れやかだ。

朝から庭に出て旋風を洗車している。

「玲二、また？」

沙夜が少し呆れたように笑い掛けてくる。

何を呆れる事がある。と思ってみるが、確かに二日に一回の洗車はやりすぎだろうか。

それでも旋風には意識があるし、どうもただの機械じゃなくて動物と同じように思ってしまう。

汚れるとすぐに綺麗にしてあげたくなるのだ。

「玲二は好きな事になると熱中しちゃうタイプなんだねえ」

何気なく呟いただろう、沙夜の言葉に俺は引っかけりを覚えた。

昔、俺がこの家に来るよりもずっと前に同じような事を言われた気がする。

——れいじくんは、好きなことにねっちゅうしちゃうんだね。

大した事でもないのに何故か引つかかる。

ま、いいか。

「沙夜、どこかに出掛けるのか？」

「うん、悠たちと買い物」

腕時計を見るとすでに十一時過ぎ。十時くらいに旋風を洗い始めたから、一時間も外にいた計算になる。時が経つのは早いな。

「気をつけてな」

「はい。いつてきます」

元気に返事をして駆け出していく沙夜を見送る。

さて、と。俺もそろそろ行こうかな。今朝香苗さんから電話があつて、新しい札が出来たから受け取りに来てほしいと言われたのだ。ハンドルに触れた途端にエンジンがかかり、旋風はいつでもスタート出来るかのように吹かし始める。

もう片方のハンドルにひっかけていたヘルメットを被ってシートに跨ると、バイク全体がぼーっと熱くなったように感じた。

「おいおい、ちょっとは加減してくれよ。この家を燃やすわけにはいかないからな」

初めて乗った時にマフラーから炎が噴き出した事を思い出し、旋風に話しかけた。

了解、とでも言うように響く嘶き。よし、オーケー。

「一匹、逃げたな」

木々が鬱蒼と生い茂る森の中。

「そうだね」

少年ほどの背丈をした、白い肌を持つ妖怪は、持っていた剣を地面に突き刺した。

途端に剣は魔法が解けたかのように沢山の枯れ葉に変わると、風に吹かれて舞い散った。

「相当な成長をしていたな。街に行かれると厄介だ」

忌々しげに言葉を紡ぐのは、九本の尻尾を持つ大きな狐の妖怪。

つやつやとした金毛が木漏れ日に反射して幻想的な雰囲気漂わせている。

「どうする？ 追うの？」

「お前ならともかく、私の姿は現代人にとって奇怪以外の何物でもないだろう」

「また火影が出てきたらしいし、大丈夫かな。火を出せるらしいしね」

「フン」

九尾の狐は気に食わなさそうに鼻を鳴らすと、空を見やった。木々の間から見える空は雲一つない快晴だ。

「行くぞ。ツチグモはまだ残っている」

ジオセントバード本社ビルの指定された部屋のドアを開けると、ここはどうやら佐藤さんの所属する研究チームの部屋らしい。というよりは俺も所属しているのだが。

邪気妖怪対策室。俺が加わってからは邪気妖怪との戦闘が仕事の主流になり、いわゆる戦闘の最前線になった。俺達三人しかないという、名前と業務内容からは考えられないほどの少数精鋭だ。

そもそもPW関東支部は対邪気用の兵器を開発するのがメインで、火影は元々京都にある本部に所属するはずだったのだ。だが本部の地域では適合者が見つからなかったらしく、結局関東に俺がいたというわけだ。

中央のデスクの上に堂々と座ってコーヒを飲んでいた香苗さんは、こちらに気付くとぴょんと飛び降りて笑顔で手を振った。

「来たね来たね。早速見せるからこっちに来て」

機材の溢れかえる床を恐る恐る歩き、奥の物置となっている部屋に入った。

本来は物置ではなく、ソファやテーブルがあってくつろげる部屋なのだが、妖怪に関する資料やそれらを調査する巨大なコンピュータ等で研究室が埋まってしまうため、本部から送られてくる荷物がこの部屋に詰め込まれてしまうのだ。

部屋の広さは十分なのだが…もう少し広い部屋が欲しい。

幾重にも施されたロックを解除し、香苗さんが開けたケースの中には何枚かの札が入っていた。

一枚は赤い札で、書かれている文字自体は、俺が変身や止めを刺す時に使う札と似ている。他の数枚は真っ白で何も書かれていない。

「につしつし、本部から札についての資料も貰ったから、もし札のストックが切れちゃったら言ってね。ここで作れるから」

それはありがたい。札は全て消耗品で無くなったら本部に注文するしかない、最初聞かされた時はどうなるかと思ったのだが。

「で、その札は？」

「えーとね。この赤いのが武器。んー…よく読めないけど、確か太刀が出てくるはずよ。それでこっちの白いのは、妖怪の封印用」

「封印？」

妖怪を封印できるってことは、別に倒さなくてもこれを使えばいいのでは？

「ただし邪気妖怪の封印じゃなくて、普通の妖怪の封印よ。火影は妖怪の力を取り込んでパワーアップできるの」

「その取り込まれた妖怪って…」

「大丈夫、消えるわけではないわ。ただ、ずっとあなたと一緒に戦い続けることになるのだけれど」

要は取りこんだ妖怪を武器にして戦って行くような物か。それは中

々使いづらいな。

でも以前、「火影は別の妖怪の力を借りて戦うもの」と聞いた事がある。炎の力を持つ俺が変身したから気軽に炎で戦えるが、本来はただの身体強化として使っらしい。よく考えれば、あの形態は他の妖怪の力と自分の体を合わせるための姿なのかもしれない。

「白い方は無理だけど、こっちの方は試せそうね。やってみる？」

そう言って香苗さんは赤い札を渡してきた。

俺がそれを受け取ると、香苗さんは数枚の白い札を、他の札と同じように鎖につなぎとめていく。

怒りや憎しみなどで無意識に発現する俺の炎だが、意識的に出す分にはいつでも可能だ。

「うわっ」

札を燃やした途端、真っ赤な炎となって俺の両腕を包み込んだ。炎がけし飛ぶと、そこには腕の長さほどの太刀が、鞘におさめられた状態で両腕にそれぞれ一本ずつ付いていた。もちろん地肌にはなく、鎧のような物も一緒に出現したが。

「二本…しかも腰じゃなくて腕にくつつくんですね」

「場所は私も初耳だけど」

「でもこれだと同時に抜くのが難しいような…」

試しに右手で左の太刀の、左手で右の太刀の柄をつかんで引き抜こうとするも、腕が干渉して抜けなかった。

「二本同時に抜く事ってあるの？」

「さあどうでしょう。何が起こるかわからないのが戦いですから」

諦めて右手で左の太刀を引き抜こうとして、止めた。引き抜かれた刃が炎を纏っているのを見たからだ。

「確かにそうだけでも」

「ま、二本抜刀って格好いいじゃないですか」

「本音はそれか！」

つつこまれながらも妖気が腕から抜けるイメージを込め、太刀を消す。

香苗さんは札をあらかた幻鎖に付け終えると、俺に渡してきた。それを受け取る俺。心なしか、いつもより重く感じた。

「それじゃあ失礼します」

「うん、お疲れ。あ、そうそう」

香苗さんは何かを思い出したように人差し指を立てて付けくわえた。

「最近ツチグモが成長しているらしいのよ。無いとは思っただけど、もし街なんかに来られたら大変だから、用心してね」

故事によれば鬼の顔、虎の胴体に蜘蛛の長い足という巨大ないでたち。美女や法師の姿に化ける事ができるという。平安時代、酒天童子討伐で有名な源頼光が病に伏していた所へ法師の姿で訪れて殺そ

うとするが、頼光はこれを切りつけ、四天王とともに追いかけたところ、山奥の洞窟に巨大な蜘蛛がいたという話だ。

この伝承が本当かどうかは知らないが、妖怪ツチグモは深い森や山奥に巣を作り、巨大な体躯にまで育つ。テリトリーに近づいた動物を捕食するらしい。人間も例外ではない。街中に出る事はおろか、そもそも目撃例があまりないため、変な騒ぎになる事はないと思うのだが、邪気にあてられているとすれば何が起こるかわからない。地下ガレージで旋風に触れると、起動音が鳴るとともに、搭載された小型モニターに邪気の反応を示すポイントが表示された。

「まさか」

場所は最近オープンした大型ショッピングモール。不幸にも沙夜が友達とともに向かった場所である。妙なフラグばかり回収しやがって、俺のバカ野郎。

急いで旋風を走らせる。俺の焦燥が伝わっているかのように、旋風のマフラーからは微弱な炎が噴き出た。

「ご機嫌よう、華麗なお嬢さん」

新手的ナンパにしては随分センスがない。沙夜はそう思った。友人の悠と一緒に買い物に来たはいいが、早々に変な男に絡まれてしまった。長身痩躯で切れ長の目。センスのない怪しげな服装を除

けばカッコいい部類に入るのだが、いかんせんその話し方と雰囲気
が男の妖しさを際立たせている。

大体こんな男よりも玲二の方が何倍もカッコいい。

「何か御用ですか？」

悠は沙夜の腕をつかんで後ろへ下がってしまっている。この男をあ
しらうのは沙夜しかない。

しょうがないので適当にあしらってさっさと買い物しようと思っ
た沙夜だが、次の男の発言に言葉が出なくなってしまう。

「あなたを食いたい」

男はニヤリと笑うと、歯の間から蛇のようにチロチロと動く舌を見
せた。

次の瞬間、男の腹を破るように巨大な長い槍が八本飛び出した。い
や、槍ではない。節足動物特有の節目のある長い足が飛び出したの
だ。

突然の事に動けない二人をよそに、男は巨大な蜘蛛の姿へと変貌し
ていく。周囲の柱等から察するに、身の丈は優に十メートルを超え
ている。タイガーパターンの巨大な胴体を支えるには細すぎる脚。
その細い脚で器用に体を持ち上げ、鬼のような頭部にある八つの目
全てが沙夜と悠を見ていた。

ツチグモが口を開くと、大地を揺るがすような咆哮が響いた。虎や
ライオンのような、肉食動物の鳴き声に似ている。

「いやあああああああ！！」

周囲に遅れて悲鳴を上げて逃げようとする二人だが、すでにツチグ
モは二人を獲物と決めたようだ。

唾液のような液体とは別に白くて太い糸を吐きだした。

「沙夜！」

地面にしゃがみこんで目をつぶった沙夜の前に、一台のバイクが滑り込んできた。バイクのマフラーから炎が噴き出し、べとべとした糸を焼き切っていく。

間一髪セーフ。俺はスタンドを立てて旋風から降りると、へたり込んでいる沙夜に駆け寄った。

「間に合ったな。大丈夫か？」

「う、うん。でも悠が…」

沙夜が見る方に視線を送ると、そこには気絶してしまったのか、ピクリとも動かない少女の姿が。

ツチグモの動きに注意しながら少女に駆け寄り、手首をつかむ。脈は正常だ。本当に気絶しているだけのようだ。ツチグモは先ほどの炎に戸惑っているのだろうか、いまだに動いてこない。

「沙夜、下がっている」

俺は旋風に取りつけたバッグから幻鎖を取り出すと、腰に巻いた。

「え、でも玲二は」

「俺は大丈夫だ」

そう言えば人前で変身するのは、佐藤さん達を除けば新塚に続く二回目なのか。

「変身！」

でもそんな事を気にしてはいられない。巨大なツチグモをモール外に誘い出す自信は無い。ここでケリを付けるしかないのだ。

札を燃やし、それと同時に俺の体が炎に包まれる。次の瞬間には火影の姿となり、ツチグモの前へ躍り出た。

続いてすぐに先ほどもらった赤い札を外し、燃やす。

刃 - 破邪滅魔呪詛火影

「火刃之太刀！」
かじんのたち

現れた二振りの太刀の内、左腕に装備された物を右手で引き抜く。

俺の叫びと同時に刃に炎がともり、まるでRPGによくありそうな「炎の剣」となった。

「はあ！」

ツチグモが糸を吐きだしてきた。俺は瞬時に飛び上がってかわすと、太刀を振りかざしてツチグモの頭部に切りかかった。

丁度左側の二つの目に直撃し、切りつけたところが燃えて紫色の気味の悪い液体が噴き出してきた。

ギヤアアアアアア！！

激痛に悶えてめちやくちやに動き回るツチグモ。八本の脚が次々と襲いかかり、よけるだけで精一杯だ。

「邪魔だ！」

太刀を左手に持ち替え、右手を突き出して炎を噴き出した。しかしツチグモはそれにひるまず、炎を突き破ってきた。脚の先端にある鍵爪が俺の脇腹をえぐった。

「ぐうっ！」

切り傷だけではない激痛。どうやら鍵爪には毒があるようだ。俺は右手を当てて傷口を焼いて応急処置を施す。熔けた鎧が傷口をふさいだ。とても熱いが毒が回るのは防げた、と思う。

「影鋭之太刀！」
えいえいのたち

火刃ノ太刀を右手に持ち直すと、左手で右腕の鞘から太刀を引き抜いた。こちらの太刀には黒い影のようなオーラが漂っていた。

「ぜええええい！」

影鋭ノ太刀を振りかぶると、刃から黒いオーラが放たれ、ツチグモの右側の四本の脚を切り裂いた。

直接攻撃の破壊力が高い火刃ノ太刀と、中距離攻撃が可能な影鋭ノ太刀。中々使い勝手のいい武器のようだ。

身動きが取れなくなつたツチグモに向かい、止めを刺すべく炎の札

を燃やす。

二本の太刀からそれぞれ炎と影が噴き出した。

「幻影・バーニングクロス！」

そのままツチグモに向かって「×」の字を描くように太刀を振う。刃から放たれた炎と影がツチグモを切り裂き、その体に「×」の傷跡を付けた。

俺が太刀をおさめると同時に、傷跡を中心としてツチグモは爆発を起こし、邪気がはじけ飛んだ。

ツチグモは本来の一、ニメートルほどの姿になると姿をくらませてどこかへ去って行った。

「玲二……？」

変身を解いた俺が振り返ると、そこには恐怖の眼差しを向ける沙夜がいた。

第六話 蜘蛛 Spider assault

「そんなに驚くなよ。俺が半分化け物だってこと、知ってるだろ」

しゃがみこんで沙夜と目線を合わせ、安心させるように左手で頭を撫でた。

確かに沙夜は俺の正体を知っている。だがその事を話した日、沙夜はあの家の中で一番泣いて一番怖がった。今の俺を怖がっても仕方がない。

ただ、沙夜が俺から離れていくのが怖い。俺の声は誰が聞いてもわかるほど震えていた。

「や……あ……」

パシッと軽い音がして、手に衝撃を感じた。思わず、の行動だと信じたい。

沙夜は俺の手を振り払うと、ハッとして俺の顔を見た。

「…悪いな」

俺はゆっくり立ち上がると、旋風のハンドルに触れた。

「ん…」

小さなうめき声があった。沙夜の友達が気付いたようだ。まだ何が起きているのかわからないといった表情で、俺と沙夜を見ている。

「怖い思いをさせたな。帰ってゆっくり休んでくれ」

旋風に跨り、二人を後にした。

ハンドルから俺を心配する思念が伝わってきた。こいつには俺の気持ちが悪くしてしまっているようだ。

「…うん、怖いさ。家族は二度と失いたくない…」

「何でお前がいるんだ」

「よっ」

報告も兼ねて一度対策室に戻ると、そこには香苗さんと会議から戻った佐藤さんの他に、何と新塚がいた。

新塚はコーヒーに砂糖を入れながら、手を挙げて俺を迎える。何が何だかわからない。

「いやあ、ミスド行ったら偶然柊さんと会ってさ」

はあ。だからって一般人をここに入れてもいいのか。

「玲二君の友達でしょ？だったら事情を知っている者だし、問題ないわ」

あっけらかんと言つてのける香苗さんに、思わず額に手を当てた。

佐藤さんを見ると、同じように額に手を当てて溜息をついている。まあ、いいか。後で絶対に誰にも言わないように言っておかないとな。

「友達というか、何というか」

そう言いながら机に荷物を置いて、コップに水をついだ。新塚との事ははっきり言ってどうすればいいのかよくわからない。独りは嫌だけど、あまり深く関わるのも怖い。それに友達ってどう作るのかも、忘れてしまった。

「確かに友達っていうのかはわからないっすね。俺も玲二も、まだよくお互いの事知りませんし」

「でもたまに一緒に出かけたりしてるんでしょ？そういうのを友達って言うんじゃない。そういうのはあまり深く考えないの」

「こら香苗。人間関係は人それぞれだから」

友達、か。

「そうだ。さっき近くのショッピングモールでツチグモと戦ったんですけど」

「え、ってことはここまで下りてきたってこと？」

「そうだと思います。遠目でよくわからなかったんですけど、人の姿に化けていたようでした。大きさも十二メートルくらいでしたし、結構成長していたと思います」

「それは一大事だな。成体のツチグモが人里に現れる時は、大体子蜘蛛の餌を取りに来た時だ。もしかしたらもつと出てくるかも」

言うが早いのか、佐藤さんは部屋を飛び出していった。

香苗さんは何やら真剣な表情でパソコンに向かう。

俺は椅子に座ると、思わず溜息をついた。沙夜は大丈夫だろうか。

「どうしたんだ？」

「え？」

「何か、元気無さそうだし。戦うのってやっぱり疲れるの？」

疲れが顔に出ているのだろうか。とはいっても肉体的な疲労では無いのだが。

「いや、体は大丈夫なんだが」

そこまで言ったところで脇腹を思い切り刺されたことを思い出す。まあ、多分大丈夫だろ。痛みは大分消えているし。

「だが？」

「…沙夜…いや、身内の目の前で戦ってさ。怖い思いさせちゃったみたいだ」

他人に話す気は無かったが、気付いたら口から出ていた。

話してみれば、誰かに聞いてもらった方が楽になるかもしれないと思えた。

「身内？ 玲二って家族……」

「施設の子ども。まあ、妹みたいなものだから」

「ああ」

「俺が半分妖怪だってことを施設の皆に言った時、一番泣いてたのが沙夜でさ。その日はずっと俺と話そうとしてくれなかった。それから一週間くらいよそよそしくて……やっぱり化け物とか怖いよなあ」

また沙夜と話せない日が続くのかな。沙夜とは家でも長い付き合いだし、一番仲もいい。話せないのはとても辛い。でもあんな姿を見せちゃ、やっぱり今まで通りに接するのは難しいと思う。

「話してみればいいじゃん。沙夜ちゃん、だっけ？」

新塚のそんな言葉が、俺の心にしばらく残った。

夕方になって、俺はかがやきの家に帰った。

夕食の支度をしていた華さんに聞くと、沙夜は帰ってからずっと部屋にいららしい。

階段を上って二階の沙夜の部屋のドアの前に立つと深呼吸をした。

「沙夜？」

控えめにノックを二回。返事は無かった。
もう一度、今度は少し強めに叩いた。

「沙夜、いるか？」

「…うん」

小さな声が聞こえた。布団でも被っているのだろうか、聞き取りにくい。

「…このまま話す。聞いてくれるか」

「…うん」

「昼間の事は、ごめん。すごく怖い思いをさせたな」

「……………」

ドアに背中を預け、俺は話し始めた。

部屋からは沙夜の息遣いがかすかに聞こえた。

「あれも…俺なんだ。怖いかもしれないけど、俺なんだ」

「…うん」

「一応さ、悪い妖怪を倒して、元の良い妖怪に戻してるんだけど…
いや、沙夜からすれば、あの蜘蛛も俺も、同じ化け物かもな」

自分でも何を言っているのかわからない。とにかく沙夜に避けられたくない一心でしゃべっていた。

「…そんなこと、ないよ」

「え？」

「…玲二は化け物じゃない。そんな事、思ってない」

「そ、そうか」

「でもね…ちょっと、怖かった」

そういう沙夜の声は、昼の俺みたいに震えていた。

「蜘蛛と戦ってる玲二が、私の知らない玲二みたいで。一瞬蜘蛛と同じ妖怪に見えて。なんだか玲二が離れて行ってしまふような気がして…怖かった」

「…ごめん」

いつの間にか声が近くなっていた。気付けば沙夜もドアに寄り掛かっているみたいだ。

「俺は俺だよ。沙夜の知ってる中村玲二だ。離れてなんかいかない。絶対に沙夜を守るよ」

「……うん……」

ドアから気配が遠ざかった。

今日は顔を見れそうにないかな。そう思っていると、ポケットに入れた携帯電話が震えた。

「もしもし」

『玲二君か。ツチグモの事なんだが、どうやら最近森の中で行方不明者が相次いでいるらしい』

「森って言うと…あの神社の森ですか」

『そうだ。まさかとは思うが子のツチグモが巣をつくっている可能性がある。明日調べてきてくれないか？』

「明日ですね、わかりました」

携帯電話をパタンと折りたたんで、重い足を無理矢理動かす。華さんを手伝って気を紛らわそう。

近所には標高の低い山があり、全体が高い木々に覆われた森になっている。

その中に古びた神社があり、今は神主もおらず雑草は伸び放題、建物も所々腐っている。気味が悪くて誰も近寄らないような神社だ。そんな薄気味悪い森の中で、最近行方不明者が続出している。大体は遊びに入っただ子どもらしい。

旋風を走らせ森の中へ来てみると、確かにこれは気味が悪い。今日も快晴と言ってもいいほど雲一つない天気だと言うのに、木々が日光を遮って全体が薄暗い。それに旋風のモニターにも邪気の反応がいくつか出ていた。

「結構いそうだな。これは面倒だ」

開けたところに出ると、石畳が伸びていて、半分朽ち果てたような鳥居と、ボロボロの神社が見えた。

旋風を停めて、幻鎖を出して腰に巻く。戦闘態勢はばっちりだ。

「!?!」

周囲に注意を払っていると、後ろの藪から物音が聞こえた。

そちらへ札を向けて睨みつけると、藪の中から出てきたのは少年だった。いや、少年ほどの大きさの妖怪だ。

攻撃する意思は無さそうなので、とりあえず話しかけてみる。

「あんたは？」

「僕は木霊。この森に棲んでる妖怪だよ」

木霊。精霊の一種だな。よく澄んだ森には現れると言っが、こんな鬱蒼した森の中にいるとは思わなかった。

木霊からは邪気を感じない。こいつは安全だ。

「とりあえず逃げた方がいいぞ。ここいらは邪気妖怪がうようよし
てる」

「わかってる」

そういうと木霊は落ちている木の枝を手にとった。瞬間、木の枝は大ぶりの剣に変化する。

木霊はその背丈には大きすぎるほどの剣を軽々と持ち上げて見せた。

「来るよ！」

木霊の叫びと同時に俺は神社を振り返った。

老朽した壁を突き破り、中から八本の巨大な足が伸びてきた。どうやらツチグモの一体は神社の中に身をひそめていたらしい。

ゴオオオオオオオオオオ！！

大きな咆哮をあげ、神社を吹き飛ばしたツチグモ。

そのツチグモに誘われるかのように、周りから次々と成長したツチグモが姿を現した。

一、二、三、四……全部で八体。これは骨の折れる仕事だ。

「火影は右側の四体を。僕は左側を」

「すまない」

俺は札を燃やそうと構えた。

「玲二！」

しかし突然後ろから聞こえてきた声に意識が向く。沙夜だ。その隙をツチグモは見逃さなかった。糸を吐き、俺と沙夜をまとめて攻撃しようとする。

「くっ！」

俺は後ろにいた沙夜を抱きかかえ、石畳の上を転がった。なんとか起き上がって沙夜の肩をつかむ。

「どうしてここに来た!？」

「神社の森って電話で言ってたから…」

沙夜は涙目になりながらもはつきりと答えた。

「玲二が心配で…」

「俺の心配より自分の心配をしろよ!」

「で、でも…」

「火影!」

木霊の澄んだ声が響いた。

綺麗な声だ、と思う間もなく、ツチグモの毒爪が沙夜を狙っているのに気付く。

避けようにも、しゃがんだ足はすぐには動かない。

俺は沙夜をかばった。右肩を巨大な爪が貫く。

「ぐっ!」

激痛とともに激しい頭痛と眩暈。

「玲二!玲二!」

「だ、大丈…夫だ…」

服を破り、露出した右肩に右手を近づけ、炎を放った。

火傷させれば傷はふさがる。あとは炎の妖気が毒素を中和するのを期待するしかない。

俺は札を掲げ、燃やす。

「どうして…？」

ぼーっとする意識の中、沙夜の声が聞こえた。

「どうしてそこまでして守ってくれるの？」

火影の鎧が俺の体を包み込む。
幾分か右肩の傷も軽くなった。

「どうして、か…」

さらに札を燃やし、左右の腕に太刀を出現させると、左手で影鋭ノ太刀を引き抜いた。
ドサツと左肩に太刀の峰をかけ、右腕をだらりと下げる。

「だって、俺たちは家族だろ。守るのは当たり前だ」

木霊に、俺は平気だとアイコンタクトで伝え、戦闘に集中させる。

「家族…？」

「ああ、そうだ。…俺の家族だ！ もう二度と…絶対に失ってたま

るか！

第七話 木霊 Fairy of forest

左手で握り締めた太刀に妖気を込める。
刃にまとう影が一層濃くなった。

「ぜええええいっ！」

横一線に思い切り振り抜く。

影が衝撃波となって太刀から放たれ、一体のツチグモを切り裂いた。
胴体は真つ二つに割れ、中から飛び出した邪気の球体が弾け、爆発を起こした。

「ぐっ……」

いつもより妖気の消耗が激しい。やはりこの状態で「バーニングブレイク」級の大技を出すのは少々きついか。

「火影！ やっぱりその体じゃ無理だよ！」

ツチグモに剣を突き刺し、木霊がこちらへ向かって走ってきた。

剣を刺した所から木の枝が縦横無尽に伸び、ツチグモの体を包み込むと中から黒い爆炎が噴き出した。炭と化した枝の中から、元に戻ったツチグモが現れて森の中へ逃げていく。

木霊が俺をかばうように前に出て、新しく作りだした剣を構えた。

「チッ」

火影に変身すれば体中どこからでも炎が出せるから何とかなると踏んだが、主力となる炎は右手の炎。毒が回るのは防げたようだが、

右腕全体が痺れていて感覚が全くない。邪魔だからぶった切ってしまった方が戦いやすいのだが、そうなると決定打に欠けてしまう。そもそも腕の修復なんてできる気がしない。

「その程度か」

上から声が聞こえてきたかと思うと、枝から獣が飛び降りて木霊の隣に立った。

白い毛並みは所々黄金色に輝き、九本の尻尾それぞれの先端には紫色の炎がともっている。

「九尾の妖狐か」

大きな狐の妖怪はこちらを見やると、気に入らなさそうに鼻を鳴らした。あまり好かれていないようだな。

「今度の火影は人間嫌いだと聞いていたが。人間をかばって怪我をするとは」

そういうと九尾は口から尻尾にともっている物と同じ、紫色の炎を吐きだした。

「お前らだつて、家族は大事だろ」

それに、別に俺は人間を嫌っているわけじゃない。

木霊が俺の右肩に大きな葉を当てた。葉は傷口と同化すると溶けるようになくなった。

かすかだが、右腕の感覚が戻り始める。薬草のようなものか。

「ありがとう」

何回か右手を握ったり開いたりして、痺れを振り払うようにツチグモに向けて炎を放った。

九尾と俺の炎をまともに食らい、一体のツチグモが浄化されて元の姿へ戻った。

残りは五体。しんどいな。

「火影、僕の力を使って」

木霊がツチグモから目を離さずに俺に話しかけた。

九尾はピクリと眉を動かす。

「木霊の力を取り込んだ火影なら森の木々を操る力を持つてる。ここで戦うにはそれがベストだよ」

「でも…」

「駄目だ」

それだとお前はずっと戦う事になる。そう続けようとするのを遮ったのは九尾だ。

「火影の鎧になんてなってみろ。一生逃げられない呪縛にとらわれるのだぞ」

九尾はそう言うのとツチグモに向かって尻尾の炎を放った。ツチグモが怯んだ隙に九尾は飛び上がり、森の奥へと走り去ってしまった。

「九尾の言う通りだ」

右手で火刃ノ太刀を引き抜く。同時に刃に炎がとまり、妖気を込めるとさらに勢いを増していく。

「でも父さんもお爺さんも、みんな火影と一緒に戦った。僕だって、火影と一緒に戦う義務があるんだ」

「それはお前の勝手な見解だろうがよ」

九尾の炎を振り払い、ツチグモが雄叫びをあげながら突進してくる。それを迎え撃つように十字に太刀を構え、切り裂く。バーニングクロスの直撃を受けたツチグモは邪気から解放され、地面に倒れた。うん、やっぱり必殺技は叫ばないと気合いが入らない。

「代々火影と戦ったからって、お前がそれに倣う必要はねえ。親父は親父、お前はお前だろうが」

「でも僕は！」

「でもじゃねえ！」

柄にも無く激昂してしまった。

心を落ち着けるように長く息を吐いて太刀を鞘におさめる。

「勝手な義務感と一緒に戦われても、俺はお前らの将来なんか、背負い切れねえよ」

妖怪を取り込む事。すなわちそれはその妖怪の将来を奪ってしまう事。

一生捕えられる呪縛ってどれほど恐ろしいものなのだろうか。俺には皆目見当がつかない。

「父さんは父さん…僕は僕…」

「お前はもうしたいんだ？」

幻鎖から炎の札をちぎり取ると、右手の炎で燃やした。

全身が炎に包まれ、残り四体のツチグモの周囲を、不気味な影が覆い始めた。二体のツチグモは異変に気づいてその場から離れるが、残りの二体は影に拘束され、身動きが取れなくなった。

「幻影・バーニングブレイク」

ツチグモの輪郭がおぼろげになったタイミングで、俺は炎を纏って飛びあがり、キックを放つ。

二体のツチグモを貫くようにして着地した俺の背後で爆発が起き、浄化に成功したことを確認する。

「何だか君からは気持ちいい妖気が感じられるよ」

「え？」

今までの流れをぶった切ってきた木霊の言葉に、思わず間抜けな声を出す俺。

「それに、君の言葉はどうか僕の上に響いてきた。僕は君と一緒に戦いたい。何だかすごく、そんな気分だ」

木霊の目は本気だった。

言っても聞かない頑固なトコがあるみたいだ。それに俺の腕もまだ本調子じゃないし、仕方がないな。

軽く溜息をつき、真っ白の札を手取る。

「後悔するぞ」

「いいよ」

「死んでもしらねえからな」

「うん」

白い札に炎を灯す。

やがて札は光の粒子となり、俺の手から離れて木霊に吸収されていた。

「じゃ、フォームチェンジだ。精霊鎧装！」

木霊の姿が光の粒子となって消え、俺の手に再び集まると、緑色の札を形成した。

俺はそれを燃やし、変身する時と同じように鎖に体を包まれる。中世の騎士のような鎧をまとったかと思うと、木の枝が巻きついて緑色に変色。さらに右手に鎖が何重にも巻き付き、炎が出ないようになった。

目は緑色に輝き、鎧を軋ませて俺は鎖を断ち切るように手を払った。

火影・霊

自ら炎を出せないように枷をはめた、森の戦士。

『霊の周囲は“木霊の森”と呼ばれる幻影空間が作り出され、君はそれを自在に操れる』

「なるほどな」

身近な枝を伸ばし、それを一本もぎ取ると、瞬時に巨大な剣となった。

二振りの火影ノ太刀と比べると随分重く取り回しが億劫だが、破壊力は大きそうだ。

「精霊の剣、ってどこか」

『ところでさっきの精霊凱装…？　って、何？』

「姿が変わる掛け声」

『…ふーん』

なんか、幻滅したような声だ。

それはさておき、この「森を操る力」ってのを試してみるか。

「はっ！」

剣を地面に突き刺して右手を柄にのせる。

俺の妖気が剣を伝い、木霊の森全体に流れ込むイメージが浮かんだ。枝に向けて、ツチグモを捕えるように強く念じると、物凄いスピードで枝が伸び始め、まるで鞭のようにツチグモを打ち付け、ぐるぐるに巻き取った。

「なるほど、こいつはいいな」

『問題は、この姿に変身した瞬間、どんな場所でも木霊の森が形成されてしまうこと。街中で使つとパニックになるからお勧めできな

いよ
『よ』

「そいつは厄介だな」

改めてツチグモに向きなおる。

自由に動けるツチグモが、縛られているツチグモに近寄ると、なんとそのツチグモの腹に噛みついた。

「なっ!？」

白い体液が吹きだし、それと同時に黒い邪気があふれだす。噛みついているツチグモはそれらを啜るように吸収し始めた。

「食ってやがる…」

やがて体中の体液を絞り取られたのか、捕えられているツチグモの体は腐葉土のような状態に朽ち果て、消滅してしまった。

一方仲間の邪気と妖気を吸収したツチグモは、その表面が硬化し始め、まるで鎧を纏っているような姿へ変化し始める。

ゴオオオオアアアアアア!!

ツチグモの咆哮とともに、口から気味の悪い液体が飛び出した。

慌てて木々を寄せ付けてその液体を防ぐが、液体に触れた途端に木々は溶けて消えてしまう。

「嫌なおいだ」

『爪に含まれてる毒液を吐きだしたみたいだね』

「一気にケリを付けるぞ」

地面から剣を引き抜き、両手で構えて刃の先にまで妖気を込める。剣全体が緑色の輝きを放つ。足に力を込め、踏み込んだ。

「精霊一体！」

飛び上がる。

ツチグモの毒を受けた鎧が熔ける。が、ほとんどの毒は剣の放つ輝きによって蒸発するように消えていく。

「フォレストスラッシュ！」

無数の枝がツチグモを取り囲み、体を縛りつけていく。緑色の光に包まれ、輪郭がぼやけ始める。

その中にどす黒い邪気の塊を見つけ、それに向かって剣を振り下ろした。

邪気は真つ二つになった後に爆発四散。力尽きたツチグモも元のサイズに戻って地面に倒れた。

「片付いたか…」

変身を解くと、怪しげな雰囲気が消え、元の神社の森に戻った。

俺は地面に腰を下ろし、長く息を吐いた。木霊は緑色の札に戻ると、俺の右手に収まった。

「ありがとう」

「玲二！」

後ろからの声に振り返ると、沙夜が突っ込んできて俺の上体を力強く抱きしめた。

「よがった…よがったあ…無事でよがったあ…」

涙で顔をぐちゃぐちゃにしながら抱きつく沙夜に、思わず笑いがこぼれた。

背中をポンポンと叩き、袖で涙を拭ってやる。

「帰るか、沙夜」

「うん…」

そのまま俵のように沙夜を担ぐと、俺は旋風の元へ歩き出した。

沙夜が肩をぽかぽかと叩いてくるが、気にしない。

「やつ、ちょ、玲二！　こんな運び方…デリカシーってもんが無いの！？　ちよっと！」

「勝手についてきた罰だよ」

翌日、対策室に向かった俺は、佐藤さんと香苗さんに木霊を紹介した。

香苗さんはとても気に入ったらしく、普段よりも数倍高い声で木霊

を抱きしめ、頬ずりなんかしている。

「やーん、可愛い!!」

「あの、ちよつと…」

木霊は助けを求めるように俺に視線を向ける。が、無視した。この香苗さんはちよつとやさつとじゃ止まらなさそうだ。

「でも、すごいんですね、火影つて」

クウコちゃんが俺にコーヒーを渡しながら言った。
たまに対策室に来るらしい。やはり妖怪の知識が必要になってくるのか。

「今度私と変身してみませんか？」

「え!？」

思わずクウコちゃんの体を見る。

頭に生えたキツネの耳以外は全く人間の女の子と変わらない。戦つてゐる所を見たわけではないが、まさかこの子が妖狐の中でも最強の力を持っているとは到底思えない姿だ。

「なーんて、冗談ですよ」

「いや、わかつてるけど…あ、そうだ。九尾の妖狐にあつただけ
ど、クウコちゃん知ってる？」

「九尾? …確か今九尾の位にいるのは…レナちゃんかな?」

「レナちゃん…?」

昨日出会った九尾を思い浮かべる。あれが、レナちゃんなのだろうか?

確かに女性のきつい感じの声をしていたが。

「えーと、『くだが』とか、『くだとはな』みたいにいつも上から視線で、ツンツンしてる子です」

確かにそれに当てはまっているのだが…。

「あいつ雌なの?」

「雌ですよ。でもレナちゃんって可愛いじゃないですか。そう呼んであげると『そんな呼び方で私を呼ばないでいただけませんか!』ってムキになるのが可愛くって」

ツンツンしてるのはこの子のせいじゃなからうか。

しかしまあ、九尾か。

何となしに白い札を取り出して、眺めた。一瞬、あいつと一緒に戦う俺の姿を思い浮かべたが…うん、無いな。あいつの性格的に。

第八話 鎧骨 Giant skull

「ああ、そうだ」

しばらくクウコちゃんと話していると、思い出したかのように佐藤さんが声を上げた。

そのあとしばらく机の引き出しを漁り、書類の束を引っ張り出すと、その内の一部を俺に渡した。

「ガシヤドクロ？」

描かれているのは昔の絵巻物だろうか。おどろおどろしい骸骨が暴れまわっている様子だ。

「ああ。最近見たっていう情報が送られてきてね。玲二君の方が一段落したら一緒に探しに行こうと思ってたんだ」

資料に目を通すと、目撃場所は群馬県の山中。

妖気の探知が出来るから搜索する時間はそれほどかからないとは思うけど、戦闘と移動の時間を考えれば多く見積もって二、三日は必要か。

「そいじゃ今から行きましょうか？」

「「え？」」

俺の提案に佐藤さんと香苗さんは声をそろえて返した。

「丁度大型連休ですし、3日もあれば終わるかなと」

「それはいいんだけど…玲二君は大丈夫なの？」

「肩は木霊に治してもらいましたし、疲れも特に溜まってません。大丈夫です」

2時間後、俺達は新幹線に乗っていた。

ベースキャンプ用のテントや旋風等の大きな荷物はヘリで先に現地へ運んでいらしい。どうせなら一緒にヘリで行ってもよかったんだが、クウコちゃんが一度新幹線に乗ってみたかったというのでこうして移動している。

ちなみに、移動は公共交通機関を使うのに何故旋風が必要なのか聞いてみると、戦闘で使うかもしれないから、らしい。まあ考えてみればそうだな。

「玲二君、どうですか？」

「うん、美味しいよ」

二人掛けのシートを回して四人で相向かい。

今はクウコちゃんが用意した昼食を食べている。簡単なサンドウィッチだけど、とても美味しい。俺も料理は得意な方だと思っているけど、華さんとクウコちゃんには負ける。

「二人は仲がいいな。出会ってそんなに経ってないだろうに」

「そうですね。店に行ったのもあれから一回くらいですし…」

「やっぱり同じ妖怪っていうと安心感があるんですよ」

そう言つてクウコちゃんは俺の腕に抱きついてきた。照れるし、こ
ういうのに慣れてないからどう返せばいいのかわからない。

「玲二君、顔赤くなってるわよ」

「そ、それは…」

「ごめんなさい」

悪びれた様子も無く、舌を少し出して俺から離れるクウコちゃん。
ちよつと安堵。

それにしても大型連休だというのに俺たちは何なのだろう。今日は
三日だし、ゴールデンウィークもそろそろ終盤。近くの座席には帰
省中と思われる家族の姿もチラホラ。

超有名な某遊園地のお土産の紙袋を下けている人もいれば、動物園
にでも行つたのだろうか、そんな会話が子どもから聞こえてくる。
俺はそういう所に行った事がないけど、楽しいんだろうな。

火影として戦う事に不満を持っているわけではないけど。

「玲二君？」

「ああ、いえ、大丈夫です」

夏休みあたりにでも、かがやきの家の皆で旅行に行けたらなと、ふ

と思った。

新幹線を駅で降り、そこからさらにバスに揺られること数時間。同じ市内とはいえ、駅周辺とは随分違う景色が広がっていた。数年前に近くの大きな市と合併したらしく、旧町村の方はまだまだ田舎だ。

「しかしこの年でサバイバルを経験する事になるとは…」

「サバイバルって…確かにそんな環境だけど」

森と川しか見当たらない。

どうやら隣県と接しているらしい。周囲を山々に囲まれているとは聞いていたが、確かに山だ。

「降水確率はゼロパーセントだし、川の増水は無いと思うけど、一応テントは離れた場所に張ってよね」

「わかってるよ。玲二君、そっち手伝って」

佐藤さんと協力してテントを二つ組み立てる。

大きめのテントだが、女性二人はいいとして、俺と佐藤さんはちゃんと入るのだろうか。俺も佐藤さんも結構長身だ。そんな不安もあったけど、中を覗くと思ったよりも広い。大丈夫そうだ。

「よし、じゃあ早速探そうか」

佐藤さんと香苗さんはノートパソコンを出して、本部のサーバーにアクセス。クウコちゃんはその間にお湯を沸かし、お茶の準備を始める。

うーん…俺としてはとりあえず動きながら探したいのだが。

「俺、旋風でその辺探してみますよ。近くにいれば邪気も感じますし」

テントの中からヘルメットを持ちだす。

旋風は一応オフロード走行も可能だが、車体が大きいため森の中で走らせるには不向きなバイクなんだよな。

…って、よく考えたら妖怪が宿っているから問題ないんじゃないか。初使用の時にビルを駆け上った旋風を思い出す。

踏み固められた獣道を、旋風を押して進み、舗装された道路に出ると、息を吐いて旋風に跨った。

「木霊」

緑の札を燃やすと、粒子の中から木霊が現れて、ハンドルの上に器用に飛び乗った。

「ガシャドクロの邪気を探してくれ。見つけたら…俺に知らせる事はできるか？」

「うん、ほか——玲二とは札を通して妖気を共有しているから、札を持っていれば離れていても話せる」

「そうか」

俺は再構成された緑色の札を再び幻鎖のホルダーに取りつけた。どうやら妖怪の妖気を取り込んだ封印の札は、燃やしてもすぐに再構築されるらしい。とりあえず札の先端に穴をあけて金具で補強し、ホルダーに簡単に取り外しが出来るようにしたのだ。

木霊を送り出すと、俺は彼とは逆の方向へ旋風を走らせた。

それにしても、木霊ともようやく打ち解けてきた気がする。

昨日は思わず札に封印してしまったが、部屋に戻って早速木霊を現出させて、平謝りした。まあ向こうも望んでたことらしいし、大丈夫だったのだけど。

それよりも木霊がずっと俺の事を「火影」と呼ぶのがどうにも慣れなく、夜通し話しこんで「玲二」と呼ぶように説得したのだが…まだ「火影」と呼びそうになっている。

「ま、いいけどな」

森の奥へ消えた木霊を見送ると、俺は旋風を走らせた。

コーヒーを淹れながら見守るクウコの前で、佐藤と香苗はノートパソコンに向かって難しい表情をしている。

邪魔をしたらいけないと、クウコはそっとコーヒーの入ったカップを置いた。

「佐藤、候補は上がった？」

「ああ、それっぽい反応があるのが5か所。とりあえず旋風の方にも送った」

「…あ、クウコちゃんありがとう。…それにしても難しいわね、デ―タの上じゃ邪気と妖気は似すぎ。玲二君みたいな感覚が無いと区別しにくいわ」

香苗がため息をついて、コーヒ―を一口飲んだ。
そのあとにクウコを見て、はっとしたようにお礼を言う。

「どういうことなんですか？」

「妖気を感じ取れる人にとっては、妖気と邪気なんてすぐにわかるでしょ？」

「はい」

「でも妖気と邪気って性質が違うだけで、コンピュータが示す反応はほとんど同じなのよ。こういう森には他にも妖怪がいるみたいだし…」

他の妖怪と聞いて、クウコは静かに目を閉じた。
それを香苗がしばらく見ていると、目を開けて「あっ」と声を漏らした。

「どうしたの？」

「いえ、その…」

クウコがモニターを指差す。
移動している赤い反応は玲二。そこから一番違い反応だ。

「^{レナちゃん}九尾が、いるみたいです」

何かを感じた。

旋風を路傍に停めて、意識を集中させる。
森の中からの気配だが、おそらく邪気ではない。しかし結構な殺気を感じる。

旋風から降りて森に入って探すことにした。他の妖怪ならこの周辺から逃がさなきゃいけないし、それに何か知っているかもしれない。

「おっ？」

見覚えのある小さな紫の炎が飛んできた。
炎は俺をかすめ、地面を焦がす。

「九尾か」

茂みから現れたのは九尾だった。

「どうしてここにいるんだ？」

「空狐がこんな長距離を移動することは滅多にないからな、勝手に護衛をしているだけだ」

確かに、忘れがちだがクウコちゃんも妖狐の中でもハイランクの妖怪だ。まさか喫茶店「ウィル・オ・ザ・ウィスプ」にいる時も近くに妖狐が監視していたりするのだろうか。

「…本当は俺が気に食わないだけじゃないのか？」

「確かに気に食わないな」

九本の尻尾がふわりと広がり、先端に紫の炎が灯った。臨戦態勢だ。

「貴様は今までの火影とは違い、単体で戦えるはずだ」

「そうだな」

「何故木霊を吸収した」

かなりイラついているようだ。

木霊と話した時も九尾の話題が結構出たし、こいつらは仲が良いと見て間違いないか。

木霊が勝手に、なんて言っても話が通じるわけではなさそうだし…

「あんな、」

「何故だ！」

炎を飛ばしてきた。話を聞けよ。

相当な「友達思い」って奴か。つんけんしてる態度とは大違いだな。札を炎にかすめ、燃やす。

「言っとくがこれは、正当防衛だからな」

「どうとでも言え！」

九尾が飛びかかってくる。

変身した俺はそれを受け止めると、横に払った。邪気を発していない妖怪を殴るのは、どうも気が引ける。

「ガシヤドクロを浄化しに来たのか？」

「そうだが」

「止めておけ。近接戦で敵う相手ではない」

「…根拠は？」

九尾が尻尾の先の炎を一つにし、大きな火球に変えた瞬間、鈍い地響きが起こった。

俺達二人が大きな影に覆われた。

「見ればわかる」

『玲二！ガシヤドクロが！』

腰に下げた緑色の札から木霊の声が聞こえてきた。

俺は札を手にとると、影を作り出した張本人を見上げる。木霊はガシヤドクロを追っていたのか、俺達の頭上の木にいた。

「目の前だ」

巨大な骸骨だ。二足歩行をしている所為かもしれないが、十分大きかったツチグモよりもはるかに大きな存在に思える。

全身の骨には所々筋肉や皮膚がついていた名残のような物が付着しており、その上をこれまた骨が強化された鎧が覆っていた。

なるほどな、これなら打撃はおるか太刀の一撃も通らないだろう。

鎧が無いのは関節部分くらいだろうが、当然そこも骨。

「ま、やるしかないだろ」

ダメージは見込めずとも、同じ個所に何度も攻撃を当てれば崩れる。とりあえず脚を破壊して動きを封じれば活路も見えてこよう。

「影鋭ノ太刀」

リーチの長い相手に接近戦はきつい。中距離から妖気をぶっ放すしかないな。

刃の先まで妖気を込め、左腕で右から左、下にずらして左下から右上、最後に上から下へ。三回連続で妖気の刃を放った。

三つの刃は違うことなくガシャドクロの右膝の関節に直撃。流石のガシャドクロもバランスを崩した。

「よし、一気に…」

「甘い」

止めの札を出した所で九尾が言った。

ガシャドクロを見ると、何事も無かったかのように立ち上がってい

る。関節には何の損傷も無い。
バカな、いくら防御力が高いとはいえ、あの攻撃を三発も喰らって傷一つついていないなんて…

「ガシヤドクロは防御力が高いたけではない。異常なまでの再生能力。全身をバラバラにされたとしても十五分で全ての骨が元通りに合わさるぞ」

性質だけなら、俺の妖気に似ているかもな。身体強化に回復能力。

「だったら…木霊！」

「うん！」

上の枝から木霊が飛び降りて、俺の前に着地した。

俺は緑色の札を構え、燃やす。札と同時に木霊の体が粒子と化し、俺の体の中へ吸い込まれていく。

「精霊鎧装！」

周囲の木々の枝が俺の鎧にまとわりつき、鎖となって新たな鎧を形成していく。

鎖の巻き付いた右手で一本の枝をつかみ、精霊の剣を作り出す。

「縛れ！」

俺の命令と同時に枝やツタが伸び、ガシヤドクロの両腕両足を縛りつけていく。

強度自体はそこまでないから、これが持つのも十秒程度。だがそれだけあれば問題ない。

「精霊一体・フォレストスラッシュ・ツインソード！」

さらに左手でもう一本、剣を作り出す。

そちらにも妖気を込め、ガシャドクロに向かって駆け出した。ガシャドクロは腕を動かしてツタを引きちぎろうとしている。すかさず他のツタが絡まり、さらに動きを封じる。

「はあああああああああ！」

切り裂くのではなく叩き割るように、思い切り振りあげた剣をガシャドクロのあばらに向かって振り下ろした。

剣と骨がぶつかり合う音が響き、両腕を嫌な痺れが襲った。棒か何かで硬い物を思い切りたたいた時に反動で来る、あの痺れだ。

「コイツの体が…透けない？」

透けないどころか剣が鎧とまともにぶつかり、ひびが入ってしまった。

ガシャドクロが右腕に絡まったツタを引きちぎる。

「どうなつてやがる…」

火影の必殺技を繰り出す時は、どの妖怪も輪郭がおぼろげになり、体内の邪気が透けて見えたはず。

コイツの場合は元々肋骨の隙間から黒い邪気が覗いているのだが、どういうわけか剣が相手の体をすり抜けない。

「倒せねえとか…そういうの、ナシだろ…」

グオオオオオオオオオオ！！

巨大な拳が目の前に迫る。

俺の意識は闇に沈んだ。

第九話 九尾 Nine-tail fox

声が聞こえる。

俺の目の前には背中を向けた男が立っていて、どうやらその男の聲が聞こえてくるらしかった。

「もうくたばったのか？」

まだやれるさ

「とは言っても、体はダメなようだぜ」

… ちょっと油断しただけだ

「やはり妖気があっても器が人間じゃあな、俺の力もロクに引き出せやしない」

… ああ、やっぱりあんたは

声の主はゆっくりと振り向いた。

俺とそっくりの顔、体、声質。唯一違うのは、真っ赤に染まった鋭い眼光。

「火影」

最初に目に飛び込んできたのは、心配そうに見つめるクウコちゃん
の大きな瞳だった。

その瞳に映る俺の姿を見て、先ほど見た俺とそっくりの火影を思い
出した。あれは夢なのだろうか。

「玲二君、大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫だ」

ああ、やられたやられた。

肉体的なダメージはあまり無いように感じる。しかし左腕に感じる
違和感からして、これは折れたかな。

よく覚えていないが、意識を失う寸前に炎を出して受け止めた気が
する。

骨折はしたが、あのまま押しつぶされるよりはいくらかマシだろう。
それよりも今は何時だろうか。そう聞けば4日の午前9時過ぎ。ま
さか翌日になってしまふとは思わなかった。いや、翌日というのは
変か。今日がその翌日なのだから。…俺は何を言っているんだ。頭
がこんがらがってきた。

「どうやって帰ってきたんだっけ」

「えーと、私が玲二君の妖気を感じて駆け付けた時には、レナちゃ
んが気絶した玲二君の服を啜えて引きずっていましたよ」

九尾に助けられたのか、俺。

必殺技が全く通じず、大きなショックを受けて気絶した。そんな格
好悪い戦いを見られていたし、少し恥ずかしいというか、合わせる

顔が無いというか。

「一緒に戦ってくれるかもしれないチャンスだったのに…呆れられたかな」

何だかんだ言っても、俺は九尾と一緒に戦いたい。

九尾を取り込みたいとか、鎧にしたいとか、そういう事を考えているわけじゃないけど。

「レナちゃんも驚いていましたよ。…未熟とは言え、火影の力が全く通用しないとは、私が思っていた以上に邪気は厄介な存在だって」

眉間にしわを寄せ、声を低くして九尾の声真似をするクウコちゃんに、思わず吹きだす。ちよっと変な顔になっているのが可愛い。

慌てて口をふさぐ俺を見ると、クウコちゃんはむっと膨れて「笑わないでください」

「空狐、その事は火影には…」

「おっ」

慌てたように九尾が飛び込んできた。

さつきクウコちゃんが言っていた事が、火影の力を認めているようなニュアンスを含んでいたし、それを俺に聞かれたくないのだろう。こいつ、もしかしてツンデレって奴かな。

「レナちゃん、意地なんか張ってないで、玲二君の力を認めてあげよう?」

「いえ、ですが…」

「木霊を玲二君にとられてちょっと妬いてるんでしょ？　いつも独りだったあなたが最近よく一緒にいるものね、大切な友達なんですよ」

九尾と話すクウコちゃんは、子どもを諭す大人のような話し方をする。

それにしても嫉妬か。九尾も可愛い所あるんだな。心なしか、頼が少し赤くなっている。

「…力を、貸してくれないか」

ダメで元々、頼んでみる。

九尾はしばらく空を眺めていたかと思うと、ポツリと呟いた。

「力を見せてみる」

俺は火影に変身すると、九尾と少し間を開けて対峙する。

太刀や木霊の力は使わない。俺の力を九尾に認めてもらうんだ。使わない札を幻鎖から外すと、クウコちゃんに投げて渡す。

「行くぞ、九尾」

「いつでも来い」

飛び上がってかく乱させるか、炎を出して様子見か。
色々なパターンを思いつくけど、俺がやる事はただ一つ。

「正面突破か、玲二君」

常人には捕えられない速度で、九尾に向かって駆け出した。
だが九尾はそれを軽やかに跳んでかわすと、俺の後ろに着地する。
黄金の毛色が紡ぐ放物線を追う。が、それでは間に合わない。

「はあっ!!」

地面を削りながら急ブレーキ。

九尾の姿を見る時間は無い。気配だけを頼りに右手を上げ、炎を出す。

「炎は私には効かん!」

「隙が出来ればそれで十分!」

九尾の動きが一瞬だが止まる。

俺は瞬時に切り返し、跳びあがって左脚でボレーキックを放つ。

「ぐっ!」

キックが首に直撃し、砂埃を上げながら地面を転がる九尾。

しかし九尾は怯まない。すぐに尻尾を立てて紫色の炎、鬼火を連続で放つ。

だが…

「俺にも効かねえ！」

右手から出した炎を薄く広げ、前方に炎の膜を作り出す。壁というには頼り無い、薄っぺらい膜だ。

だが炎の幕は九尾の鬼火を全て吸収した上で、俺の体を包み込んだ。俺の体から炎が噴き出し、さらに紫色に変色する。それと同時に強い思いが伝わってきた。

“ 木霊を守りたい ”

“ 邪気を消したい ”

これは九尾の思いだろうか。炎と一緒に流れ込んできたみたいだな。このひたむきな思いが、九尾の強さか。

「お前の炎、気に行つたぜ！ レナアツ！！」

「来い、中村玲二ツ！！」

九尾の体が紫色の炎に包まれ、そのまま突っ込んできた。相手が全力なら、俺も全力で迎え撃つ！

「バーニングブレイク！」

「「おおおおおおおおおおお！！！！」」

炎と炎がぶつかり合う。

爆発と同時に妖気の波が周囲に広がる。

「すげえよ、お前」

「貴様こそ、な」

煙が晴れ、お互いの姿を確認すると、九尾は後ろ脚をたたんで地面に座った。

いわゆる犬の「おすわり」のポーズだな。

九本の尻尾がゆらゆら動いていて、中々可愛い。

グオオオオオオオオオ！！

叫び声とともに強大な邪気が漂ってきた。

まるで体が猛吹雪にあてられているように震える。

「ガシヤドクロか」

背の高い木々の間をかきわけ、巨大な骸骨が歩いてきた。
体勢を整え、戦闘に備える。

「クウコちゃん、札を！」

「でも、玲二君、左腕がまだ…」

「私がサポートします」

九尾がそう言い、渋々ながらクウコちゃんは俺に札を渡した。

俺は白い札を取り出すと、いよいよ全貌を露わにしたガシヤドクロ
に向き直る。

「行くぞ、レナ！」

「ああ！」

「妖狐鎧装！」

白い札は金色に輝き、炎に包まる。

レナの体が紫色の炎に変化すると、俺の体を覆って行く。

黄金の鎧が俺の体に纏われる。細長い帯のような物が首の後ろあたりから何本か伸びた。

目が紫色に輝く。

火影・妖^{よう}

体の奥からあふれんばかりに妖気が漲ってくる。

体は霊よりも軽いが、どうも違和感を感じる。多分、この姿は格闘主体の戦闘には向いていないのだろう。体はよく動くが、軽くてパンチやキックの威力が期待できない。

だがこの力の使い方は、なんとなく理解できた。

「はああああああああ…」

精神を集中させ、長く息を吐く。

俺の周りの地面に梵字が刻まれ、まるで魔法陣を描くように俺を囲んだ。

そこから妖気があふれ出し、俺を包み込むような球体の結界が出現した。

グオオオオオオオオオオ！！

ガシャドクロが右の拳を振り下ろした。

しかし結界に触れた瞬間、腕の部分だけ邪気が消え去り威圧感もな

くなる。

『相手の妖気や邪気の類いは、この結界が全て無効化する』

「ただのパンチなら怖かねえな！」

首の後ろに生えた帯を外し、右手から出した炎で包む。

帯は瞬時に黄金の錫杖に変化した。

「妖狐の杖！」

杖でガシャドクロの拳を受け止める。

さらに拳に飛び乗ると、そのまま腕を駆け上がった。

『何をするつもりだ？ この姿は格闘戦には適していないぞ』

「ああ、わかってる！」

俺は杖をガシャドクロの腕に付きたてる。

「妖気開放！」

俺の体から炎とともに妖気があふれ出した。

それをまともに浴びた右腕は一瞬で消滅し、腕の付け根からは黒い邪気がこぼれだす。

「レナのお陰で妖気のコントロールがしやすい」

『それはよかった』

「さあ、一気に決めるぜ！」

杖で地面を強く叩く。

澄んだ音が周囲に響き、紫色の鬼火がいくつも出現する。

さらに杖をガシャドクロに向けると、鬼火は倒れているガシャドクロの周りを取り囲む。

目には見えないが妖気の結界のような物が出現しており、ガシャドクロの動きを封じている。

輪郭がぼやけ、体内の邪気が露わになった。

「妖狐一体！ アブゾーブダークネス！！」

杖を思い切り投擲する。

炎を纏った先端が邪気を貫いた瞬間、邪気は杖の中に吸い込まれていった。

邪気を吸収した杖は独りでに戻って来て、俺はそれを捕まえる。

「終わったか」

力を失ったガシャドクロは小さくなり、やがて地面に倒れ込んだ。

俺も変身を解除し、大きく息を吐いた。

レナも元の姿に戻り、俺の隣に立つ。

「こいつも気がつけば身を隠すだろう」

「ああ、そうだな……」

佐藤さんと香苗さん、クウコちゃんがやってきて、俺の肩を叩いた。

「お疲れ様」

「ありがとうございます」

そうだ。

俺は緑色の札を燃やして、木霊を呼び出した。

「九尾…」

「木霊、すまなかったな」

レナは木霊に近づくと、鼻先を木霊の顔に押し当てた。
木霊はそっとレナの頭を撫でる。

「玲二はただの火影じゃないよ」

「そうみたいだな」

レナは木霊から離れると、俺の所へ来た。
そして俺のシャツに噛みつき、ぐいぐい引っ張ってくる。なんだなんだ、しゃがめってことなのか？

「なんだよ」

そう言ってしゃがむと、レナは俺の頬に鼻先をくつつけた。

「今までは悪かった」

頬にキスしただけで顔を赤くするなよ。こっちが妙に照れてくる。
相手は妖怪といえども、狐だというのに。

「ああ、よろしくな、レナ」

そう言っただけでレナの頭を撫でた。

「レナちゃん、私が呼ぶとすごい嫌そうな顔をするのに、玲二君は別にいいんだ？」

「そ、そういうわけでは……」

お、ちょっと困り始めた。

もしかしたら、コイツっていじられキャラなのかも？

「ああ、そうか。お前、この呼び方は嫌なんだよな。悪かった」

「いや、別にそういうわけでは無いぞ。ただ……」

「九尾ならいいか？」

急に顔を俯いて、小声で何か話し始めた。

「……………」

何となく言っている事はわかるが、今はちょっと意地悪がしたい気分なんだ。

悪いな、レナ。

「なんだって？」

「……レナと呼んでもいいと言っているんだ！」

「うわっ」

恥ずかしいのを隠すためか、俺に体当たりをしてくるレナ。
腹に思い切り当たったので、わりと痛い。

… 木霊も名前とかあるのかな。

第十話 出逢 Boy meets girls

「起立、礼」

日直の号令の後、おはようございますの挨拶。普段と変わらない退屈な毎日だ。

窓際の一番後ろの席で、俺は窓の外を見てボーっとしている。

そう言えば何故俺が窓際の席か。俺の名前は「な」から始まる中村であり、出席番号は後ろの方とはいえ、窓際の席になることは無いが、担任の「番号順の座席じゃつまらないだろう」という意向のもと、入学後一週間ほどで席替えが敢行された。他の先生からすれば、番号順に並んでないから生徒を指名する時も大変になり、ぶっちゃけ迷惑な気がするのだが、俺としては目立たない席になったのでありがたい。

「夏休みに入ってから学習合宿があるぞ。基本的に全員参加だからな」。今週末のLHRで部屋決めするから、その時まで各自相談しておけ。それから文化祭も近づいてきた。調査も終わった事だし、実行委員を中心に協力して準備にかかるように」

学習合宿の言葉に「うわー」だとか「ぎゃー」の叫び声。

ちなみに俺の通う城西高等学校は文化祭が七月にある。なんでも秋にやると三年生は受験が近いために大変だとか何だとか。確かにその通りかもしれないが、準備は五、六月くらいから始まる。入学したばかりの一年は何をどうすればいいのか、右も左もわからない。

「連絡は以上。一限の準備をしてくれ」

レナと一緒に戦うようになって一ヶ月半が過ぎた。

梅雨真っ只中の六月下旬には珍しい快晴。にも関わらず、俺の心は憂鬱だった。

「玲二、一緒に部屋にしようぜ」

「俺はサボる」

やはり来たか。

新塚がこう声をかけてくるのは予想が付いていたため、さっさと断った。

コイツはいいかもしれんが、他の人間は俺と一緒になんて絶対に嫌だろっし。

「よく無いぜそっいうの！ 学習合宿とはいえ、楽しまないと損！ 大損だぜ！」

たまに、というかいつもだが、コイツがとてもうるさい。正直俺自身も面倒くさいし、出たくないんだよな。

「いいよ別に。学校はつまらないし」

火影の力を手にしてからそろそろ二ヶ月。

霊や妖の戦い方にも慣れてきた。不謹慎だが、邪気妖怪と戦っている時の方が充実している。

「ま、その話は追々。一限は体育だぜ」

「後で着替える」

更衣室で着替えるのも一苦勞だ。他の連中が着替え終わるのを待つ

て入らなければならない。

まあ、そうしなきゃいけないわけじゃないけど、俺が入ると一気に変な空気になるから、あまり行きたくないんだよな。

「もう五分前だぜ！ 大丈夫だつて」

「おい、押すな」

新塚に押されるがまま、俺は更衣室へ連行された。とりあえず着替えを持っていきたいんだが…。

ピッ

体育教師がホイッスルを吹き、それを合図に手に持ったボールを思い切り投げる。

四月から続いている体力テストだが、連日の雨で中々行えず、ようやく最後の種目ハンドボール投げを行う事ができる。

ボールは綺麗な弧を描いて地面に落下。近くの生徒が記録を叫ぶ。

「中村、53メートル」

「よし、次は新塚」

「はい」

力を抜いてもこれだけ飛ぶのか。思ったより力のセーブって難しい。それにしても50メートル以上も飛ばしたのに歓声も何も無しか。求めてはいないけど寂しい物だ。

「新塚、35メートル」

「くそー、9点かぁ。玲二、どうやったらそんなに飛ばせるんだよ」
知らん。

俺は少し離れた場所で記録用紙に点数を書き込む。

「全部10点とか…お前化け物かよ」

「そうだな」

俺がそう返すと、新塚は「しまった」という表情をした。
大した意味で言ったわけじゃないだろうし、俺もそれくらいじゃ何も感じない。

「悪い、そういう意味で言ったんじゃないんだ…」

「わかってるよ」

まだ落ち込んでいるようだが、この時間が終わる頃には元に戻っているだろう。新塚廉はそういう人間だ。

でもまあ、落ち込んでるこいつを見てるのも何かアレだな。

「顔洗ってくるけど、お前はどつする」

さりげなく人を誘う言葉が出てくるとは、俺も色々と変わったみたいだ。

ちよつと嬉しそうな顔をしている新塚を見ながら、ぼんやりとそんなことを思った。

「それにしても、玲二が誘うとはねえ。やつと仲良くなれたような気がするわ」

「大した意味は無いけど」

新塚は蛇口から出る水に顔をつけたかと思うと、そのまま髪の毛にも水をかけて「ぷはっ」と顔を上げた。
そして犬のように頭を振って水を飛ばす。なかなかワイルドだなあ。

「そうだとしても、俺としては嬉しいもんよ」

お前といると退屈ではないからな。

そんな言葉が中々言えない。自分では素直な方だと思っているのだが、妙な所で意地を張る性質らしい。

まあ、いつか言える時が来たら言えればいいか。
顔をあげてはたと思いつく。そういえばタオルを忘れた。

「タオル、使う？」

女の声だ。

「え？」

目にかかる水だけ払い、声のする方を振り向く。

女子生徒が白いタオルを俺にむかつて差し出している。えっと、誰だっけ。

「中島じゃん」

新塚の声。ああ、中島美沙。最初の席順では俺のすぐ前だったし、名前も覚えていた。

俺に集まる視線を彼女も感じていたはず。あれは悪い事をした。いや、俺は何もしてないけど。でも結構きつかっただろうな。席替えが早めに行われて良かったかもしれない。

「使う？」

動きの止まった俺を見て聞こえていないと思ったのか、もう一度聞いてきた。

聞こえてはいるが、タオルを貸すだと？ 普段のクラスの雰囲気からすれば、そんな事をする奴は絶対にいない。それに彼女はクラスでも大人しい方だし、そんな人間が俺に話しかけてくる理由がわからない。

まあ、貸してくれるなら借りようか。

「どうも」

偶然水滴が目に入り、思わず目をつぶる。タオルの位置は把握しているつもりなので、そのまま手を伸ばす。

「ひゃっ……」

ふわりとしたタオルの他に、暖かくてしっとりとした物に触れた。中島の手だと思う間もなく、すぐに手が引っ込められ、タオルが地

面に落ちた。

「…あ、う…う、ごめんなさい！」

一瞬の沈黙。中島は泣きそうな声でそれだけ言って、走り去ってしまった。

俺はというと、落ちたタオルを拾って、砂を払う。

「なんだよあいつ…ちょっと手がぶつかったくらいで…」

「怖いんだろ」

改めて、俺は他の人とは違うんだなと思い知らされる。動じないといえは嘘になる。逃げられてしまって、少し寂しかったのも事実。さて、タオルは洗濯して返すとして…新塚にでも返してもらうか。俺が返すと多分また気まずくなるだろうし。

気付けばあつという間に時間が立っていた。

今日は土曜日だからと、朝食を作ってからもう一眠りしようと思っていた時だ。つい昨日も妖怪との戦闘があつたばかりで疲れていたし、今すぐにでも寝られる感じだったのだが、新塚からのメールがそれを妨害した。

「…今日って文化祭なのか」

知らなかった。というより聞いてなかった。

あまり頼りにならないHRの記憶をたどってみると、確かうちのクラスは焼きそばとかたこ焼きとかを作って売るはずだ。

俺の担当は午後からの厨房になっている。俺はサボるつもりでいたのだが、新塚が勝手に厨房係に入れたらしい。お陰で午後の担当は午前の担当のおよそ半分という少数精鋭になってしまった。そうだったクラスもクラスだが、それに対して何も言及しない担任も担任だろう。腐ってやがる。

とか考えていると、新塚から電話がかかってきた。

『玲二、起きたか?』

「いや、とつくに起きてるけど、文化祭忘れてた」

『まあ話を聞いていたか微妙だったしな。HRは無かったから、午後間に合えば問題ないぜ』

そういう新塚も午後の担当だ。

俺と一緒にの担当になっても何とも思わないのはコイツくらいだろうしな。

ともかくにも、人数が少ないうえに唯一の厨房係が行かないのでは全く機能しない。さすがにそれはまずいし、渋々ながら行くことにする。

「っていうか、メニューは何だっけ?」

「えーっと…焼きそば、たこ焼き、お好み焼き、あとはドリンクだな」

その三品を俺一人で作れと、そう言う事か。はあ、くそつたれが。

十二時過ぎに俺は学校に到着した。

一般客がかなり来ていて、いつもよりも混雑している。俺をチラチラみる視線とかコソコソしゃべっている声が聞こえないのはありがたいが、こつも混んでいると暑くてしょうがない。

クラスがやっている屋台に入ると午前の担当の連中が一斉に俺を見る。そして何も言わずに切り上げる準備を始めた。

「新塚は？」

「もう来てる」

とりあえず近くにいた男子に聞くと、大勢の客に対応している新塚を顎で指した。屋台の傍には折りたたみの出来るテーブルと椅子がいくつか置いてあり、そこで食べられるようになっていた。

新塚は俺に気付いたようで、軽く手を挙げて、再び対応に戻った。

「はあ」

厨房に入るともう誰もいなかった。

商品はいくつかストックがあるが、この時間帯だし、すぐに無くなるだろう。

ホットプレートが二つに、たこ焼き機が一つ。正直このホットプレートではこれからの時間、大勢の客を裁き切る自信がない。

「玲二、焼きそば二つ」

「…とつていけ」

出てくる溜息を抑えることもせず、俺は焼きそばを作り始めた。
同時進行でタコ焼きとお好み焼きを…いやいやいや無理だろこれ。

ああ疲れた疲れた。午後四時になってとりあえず屋台は閉店。
また明日の朝から開くらしい。まあ俺の担当はもう無いがな。
それにしても疲れた。そして無性にイライラする。来年も似たような事をやるのかと思うと、憂鬱を通り越して腹が立つてくる。

「チツ…くそつたれが」

「おい」

舌打ちをして小さく呟いた。別に誰に言っているわけではないが、
前を歩いていた男子生徒がそれを聞いたのか、振り返った。

「何か気に入らねえことでもあんのかよ、俺に」

ネクタイの色からして三年か。
不良に絡まれるとはまあ最悪な文化祭だ。面倒くさい。面倒くさすぎる。

「黙ってねえで何か言えよ」

男が拳を振りかざす。

たかが人間の殴りだと油断していたら、顎に直撃した。顎も痛い。舌も痛い。思い切り噛んだみたいだ。

だが男も指の第二関節を抑えている。コイツ喧嘩が下手だな。関節突き出して殴ればそりゃ痛いだろうに。

気持ち悪い。口に溜まった血液を吐きだす。

「チクショウが！」

今度は左手だ。

それをかわして男に接近する。思い切り殴ってやってもいいが、今はイライラしていて下手をすれば殴り殺しかねない。

そう躊躇っていると肩をガツシリとつかまれ、男の右膝が鳩尾に直撃。一瞬意識が吹っ飛んだ。

「げほっ、げほっ」

呼吸が苦しい。また血を吐いた。

倒れた所に襟を引き寄せられ、頬を殴られる。

男はそれで満足したようで、右手の指を擦りながら立ち去って行った。

あの野郎、やっぱり蹴飛ばしてやりたい。

（大丈夫？）

「げほっ、ああ…大丈夫だ」

木霊が心配してくれているのか、不安そうな声が聞こえた。

結局あれから木霊には名前を付けていないが、本人がいらないと言うのなら無理に付ける必要は無いしな。

「大丈夫？」

「大丈夫だと言って…」

そこまで言うてはたと気が付く。

女の声が聞こえてきたが、レナの声はもうちょっとハスキーだ。俺に話しかけるような女子は誰だ、また中島かと思って振り向くと、そこには見知らぬ女子生徒がハンカチを差し出して立っていた。

「…誰だ？」

「その前に血を拭いた方がいいんじゃない？ あなたの顔、結構ひどいわよ」

中島よりも身長が十センチほど高い。というより女子の中でもかなり高い方だ。

中々ハンカチを受け取ろうとしない俺に業を煮やしたのか「ちょっとじっとしてて」と言うと、その女子はハンカチで俺の顔についた血を拭って行く。

突然の事にちょっとパニックになる。慌てて女子を突き飛ばした。

「きゃっ」

「あっ…い、いめん」

「私は何もしないわ、安心して」

俺が怖がっていると思ったのか？ 女は優しそうな声で俺に言った。正しくは見知らぬ女子生徒が俺に話しかけてくるどころか、俺の体に触れてきたというあり得ない自体に驚いただけなのだが。

「ほら、こつちにいらっしやい。じつとして」

「君、誰？」

「あら？ 人に物を尋ねる時は、まずは自分からでしょ？」

必要以上の言葉を発しないクラスの連中とは違い、普通に話してくれる。

こんな人間と学校で会ったのは、新塚を除けば実に八年ぶりだ。

「…中村玲二」

「中村玲二君か。二組よね、確か。私は一年一組の岡山泉よ」

隣のクラスか。一組ってことは、体育では合同クラスなはず。

…本当俺って人の顔とか覚ええないな。

ってか俺の事知ってるんじゃないかねえか。

「何で俺に話しかけたんだ？」

「は？」

「いや、だから…俺の噂は知ってるだろ」

俺の言葉を聞くと、少し考えるような仕草をして岡山はフッフとほほ笑んだ。

「ああ、アレ」

岡山は笑うだけで他は何も言わなかった。何を考えているのかさっぱりわからない。

ハンカチで大方の血を拭き終わると、俺の手をつかんで立ち上がった。俺の手が熱かったからかもしれないが、岡山の手が妙に冷たく感じた。

「温かいのね、あなたの手」

「え？ ああ、まあ」

「私は手が冷たいの」

手が冷たい人は心が温かいとか、よく言うな。

…その話通りなら、俺は心の冷たい人間だけだ。

「私はそうは思わないよ。手が温かければ、心も温かいに決まっているわ」

そう言っつて岡山は俺の手を両手で包み込んだ。

炎を出した後の熱が引いていくのを感じた。…この際、心を思い切り読まれた事には突っ込まない。

「ハンカチはあげるわね。特にお礼とかはいいいから」

「え、でも」

よくはわからないが、俺を毛嫌いしているようではなさそうだし、

お礼くらいはしたいのだが。

それにこのハンカチ、妙に可愛らしくて俺には似合わない気がする。

「してくれるなら、そうね。また今度ゆっくりお話ししましょう。じゃあね」

岡山は手を振って走り去った。

右手には彼女の手のひんやりとした感触がまだ残っている。それにしても…

（玲二、気付いているか？）

「ああ、わかるよ」

実際に接触した事でわかった。

何故彼女が俺に恐れず話しかけてきたのか。

「妖気…」

（お前が実際に触れるまで気付かなかったとなると、あの娘、かなりの妖気コントロール能力を持っているな）

無意識に彼女のハンカチとギュツと握りしめた。

いたんだ。…俺と同じ力を持った存在が。

第十一話 憂鬱 Melanchory

眠い。今日は早く起きすぎたかな。

（一時に寝て四時半に起きれば、そりゃ眠いよ）

妖怪の中では寝ずに一週間くらい活動できる者もいるらしいが（レナとかクウコちゃんはそのらしい）、体は人間とあまり変わらない俺は、ちゃんと寝ないと翌日の活動に支障をきたす。

（それにしても、どうして今日はこんなに早いんだ？）

現在午前七時。用務員によって開けられたばかりの校門前で立っていた。

今日は七月十一日日曜日。文化祭二日目である。

本当は学校に来るつもりは全くなかったのだが、昨日の岡山泉との出会いが気になってしょうがなかった。俺よりも何倍も妖気のコントロールが上手い、おそらく半妖の彼女。

「岡山と話がしたくて」

（ああ、最近玲二つてば、女の子に話しかけられるよね。珍しい）

まだ二人だけだな。

むしろ人に話しかけられること自体が珍しいんだけど。昨日の不良は除いて。

受付のテントに置きっぱなしになっているパンフレットを一部掠め、中を確認する。

一年一組は…喫茶店だあ？

「めんどくさ…あの容姿からして、どうせウエイトレスとか任されているだろうし…早めに来ることを願うしか…」

（美人だったよね、あの子）

実際に話すにあたって、どうやって彼女に会うかが問題だ。

営業時間中は論外。となると朝の準備時間くらいだが、多分他の女子と一緒に準備したり着替えたりするだろう。はてさてどうしたものか。

そんな事を色々と考えながら校舎内に入って歩いていると、後ろから声をかけられた。

「早いね」

…これは好都合。岡山泉だ。

昨日は驚いていたからあまり顔とか覚えていなかったけど、改めて見ると、どえらい美人だ。女子にしては高身長で、どっちかというとモデル体型だ。

「あなたもクラスの準備？」

「ああいや、別にそういうんじゃない。君と話したかっただけだ」

「あら」

岡山はクスクスと笑った。

その一挙一動が絵になる。そう言えばクラスの男子が何度か「この学校の美少女ランキング」とやらで岡山の名前を出していたが、な

るほど、他クラスにまで名前が広がるのが頷ける。

「それならうちの喫茶店に来てくれればいいのに。…まあ、あなたは嫌でしょうね」

「なるべく二人きりがいい」

「デートのお誘い？ 嬉しいわ。そうね、お昼にシフトが空くから、その時でいい？」

「なんか勘違いされたか？」

「いや、この口調はからかっているな。」

「…今じゃダメか」

「これから準備があるの。もうすぐ皆来るわよ」

「わかった。じゃあ昼にどこにいればいい？」

「どこにいてもわかるわよ。三人の妖気が混ざっていれば」

「え…？」

岡山は教室に向かおうとするが、俺の発した言葉に疑問を感じたのか、振り返った。

「…違うの？ あなたが話したい事って、それでしょ？」

「……いや、わかった。それじゃ」

それだけ言つと俺は岡山とは反対の方向へ歩き出した。
驚いた。まさか木霊とレナの妖気まで感じ取っていたなんて。普段は札が二人の気配をシャットアウトしているから、漂う妖気は微々たるもの。傍にいる俺ですら、感じ取れない時があるというのに。

「待った？」

「待ったも何も、俺はずっとここにいたからな」

岡山と別れてから、ずっと屋上で寝転がっていた。

賑やかになり始めた時に開場したことはわかったが、時計などは見えていないため時間感覚が一切なく、かなり暇だった。

そう言えば今日はかがやきの家の皆が来るとか言っていたような。まあいいが、どうせ俺は今日の担当じゃないし。

「お昼食べる？　うちのクラスのサンドイッチだけど」

岡山に差し出されたのは、バケットに入ったサンドイッチ。トーストされた食パンに焦げ目のついたベーコン、ちぎったレタス、スライスされたトマトが挟まっている。見事なBLTサンド。

とても美味しそうではあるのだが…

「…ごめん、トマト無理なんだ」

トマトと茄子が昔から苦手なのだ。加熱してあれば食べられない事は無いが、生はどうしても無理だった。

それを聞くと岡山は一瞬呆けた顔をして、次の瞬間クスクスと笑いだした。

「ふふっ…意外と、可愛い所もあるのね。…そっかぁー、トマトがダメかぁ…ふふふ」

岡山はBLTサンドを一つ取ると、トマトを抜いてそれを口に入れ、トマトの無くなったサンドイッチを俺に差し出した。

どうも、と軽く頭を下げて受け取る俺。何かとても恥ずかしい。岡山はまだ笑っているし。

「話を始めたいんだが」

「あ、そっか、そうだよな。ごめんごめん」

サンドイッチを一口かじる。普通に美味しかった。

「君の正体は…俺が思っている通りでいいんだよな」

「あなたがどう思っているかはわからないけど、多分その通りよ。私はあなたと同じ半妖」

わかっていたことだが、これで確証がとれた。

「君はさ」

「泉」

「え？」

いきなり名前を言って話を遮った。

岡山は口をとがらせて言った。

「私は『君』じゃないわ。岡山泉よ」

名前で呼べってことか？

今まで色々あったから、親しくない人の名前を呼ぶのが気が引けるんだが…。

「岡山は」

「泉」

「岡や」

「い・ず・み」

「…い…泉」

「よろしい。なあに、玲二君」

何だこいつは。俺をからかって言っているのか？

女子を下の名前で呼ぶなんていつ以来だよ、恥ずかしい。あ、沙夜達は除いてだけど。

「君は」

「んんっ」

咳払いされた。

「…泉はどんな力を持っているんだ？」

くそっ、にやにやするのをやめやがれ。

ああもう顔が赤くなってきた。なんかむかつく。

「ふふふ、私は雪女の混血^{ハーフ}だから、氷とかかな」

岡山…泉はサンドイッチからトマトを抜き取り、一瞬で凍らせた。アニメでよく描写される、氷におおわれているような感じではない。トマトがああ形の形を保ったまま凍ったのだ。まるで冷凍庫に入れておいたような感じだ。

「はい、凍ったトマトなら食べられる？」

「いや、俺はあの青臭さがダメなんだ。火が通してあれば大丈夫」

それにしてもなるほど、氷の力か。体温が低いのもそのせいだろうか。

俺は受け取ったトマトを熱した。いや、この表現は語弊があるかもしれない。正確に言えば熱したというよりは消炭にしたと言えはいか。

俺はこれを熱して融かそうとしたただけなのだが、いつの間にやら炎が出てトマトは跡かたも無く蒸発してしまった。ああ、炭すらも残っていないな。トマトって炭になったっけ？

「…コントロールは下手くそだけど」

「いつかは上手くなるわよ」

炎を出した右手を握られる。ひんやりしていて気持ちいいが、泉は熱くないのだろうか。

「そうだ。どうして俺以外の…二人の妖気もわかったんだ？」

俺がそう質問すると、泉は俺の手から手を離し、何を思ったのか俺のワイシャツをスラックスから引っ張り出した。そのままシャツをまくり、最近は常につけっぱなしにしている幻鎖を露出させると、横のホルダーに下がった緑の札と黄色の札に触れる。

札が凍りつき、砕かれた。かと思ったら木霊とレナが現出した。驚いて何も言えない俺に向かって、泉はけらけらと笑って見せた。

「襲われるかと思った？」

「…何て言うか、冷たかった」

「あー…それは予想の斜め上に行く反応だわ」

氷の力の場合は札を凍らせて砕くことで力が使えるのか。

何度か炎以外の力を持った妖怪が、火影のような鎧を使う事を想像したが、電気みたいな炎を起こせそうな力とはかく、水や氷のよくな力でどうやって札の力を開放するのか気になっていたのだ。

「火影の噂は、妖怪の中じゃ結構有名よ」

「正体まで知られているのか」

「今度見せてね」

「…火影を？ …嫌だ」

いくら半妖怪とは言え、女子を危険な目に合わせるわけにはいい。

それに火影に変身している間は感情が高ぶりやすくなっているらしく、たまに戦いを楽しむような発言をしてしまうのを見られるのは嫌だな。

「…そういえば、中島も半妖怪だったり…するの？」

「へ？」

いきなり俺に話しかけてきた女子の名をあげてみると、泉は驚いたような顔をしている。

「中島って…あなたのクラスの中島美沙さん？」

「ああ」

「よく話すような仲じゃないからわからないけど、妖気は感じないわよ」

似たようなタイミングで話しかけてきたからな、もしかしたらとは思ったのだが…

妖怪ではないとしたら、どうして中島は俺なんかと話しかけてきたのだろうか。

その事を話してみると、泉は呆れたように溜息をついた。

「……まあ、あなたはそういう所では鈍感そうね」

というか、どうして木霊とレナの妖気を感じ取れたのか、答えをもらっていないぞ。

七月二十日火曜日。夏季休業に入るが、今日から二十三日金曜日まで学習合宿だ。

「一日十時間学習」が目標らしいが、各自与えられた課題を終わらせれば自由時間となる。要はさっさと終わらせた者勝ちというわけだ。

で、何故わざわざサボる行事の説明をしているかということ

「玲二、俺達は308号室だからな」

「眠い」

合宿地へ向かうバスに乗っているからである。

朝五時に新塚に叩き起こされ、あれよあれよという間に勝手に荷造りされて学校へ連れてこられた。沙夜なんてポカーンとしながら「いつてらっしゃい」って言うていたぞ。多分理解してなかった。

「勉強なんか授業で全部理解できるんじゃないの？」

「玲二は頭が良いからそんな事が言えるんだろ」

「いや、授業は大体聞いてない」

「何だそれ、嫌味かよ」

新塚が話してくるのを欠伸交じりに受け流している間に、いつの間にか合宿場所である旅館に着いていた。

初日である今日はテストをして、その結果によって明日からの課題が決まるそうだ。

荷物を部屋に置き、学習場所となる大広間の一番後ろの席に座った。その隣に新塚が座る。

「じゃあテスト配るぞ。一教科一時間で三教科だ」

結果を言えば、テストは簡単だった。

定期考査のレベルを少し落とした程度の問題で、授業を聞いていれば答えられる問題。最後の問題にいくつか難しい問題もあったが、少し考えれば答えが出た。

「中村は…295点だな。今日は上がっていいぞ」

自己採点した答案を提出し、さっさと大広間を出る。

後ろの方で「三割いってない奴は残っていけよ」という声。そのあとに聞きなれた叫び声があがった。新塚は補講か。

さて、夕食まで一時間ほど時間がある。大浴場はまだ開いていない。部屋に戻ってもやる事は無い。

外でもブラブラしてくるか自己完結し、俺は外に出た。

山奥にある旅館のため、少し歩けば絶景を見渡せる展望台があると誰かが言っていたか。暇つぶしにでもそこに行く事にしよう。

「面倒くさい」

（玲二、岡山泉と話さなくていいのか？）

「んー、別に話す事も無いし」

展望台には何人か人がいた。

俺が来ると一度振り返るが、すぐに何もなかったように談笑に戻ったり、景色を見たりする。

展望台から離れたベンチに座ろうと移動するが、そこには中島ともう一人女子生徒が話していた。

ああくそっ、色々面倒くさい。

「中村君も終わり？」

中島は俺に話しかけてきた。隣の女子が怪訝そうな顔を向けているが、中島はそれを無視している。

何も返さないのも悪いと思い、一回頷いた。

「そうなんだ。やっぱり……」

（玲二、邪気だ！）

「え！？」

レナが突然叫ぶ。札の中にいるから当然周りの人間には聞こえないが、俺が叫んだせいで全員振り向いた。

あたりをキョロキョロ見渡す。次第に俺にも邪気が感じ取れるようになった。それにしてもかなり弱い邪気だ。

（相手は邪気を抑えて近づいてきている。おそらく…サトリだ）

「きゃあああああああああ！！」

悲鳴に振り返ると、二足歩行の黒い狐のような妖怪が、中島に掴みかかった。

すぐにサトリを引き離そうと近づくが、サトリは俺を一度も見ずに走り出した。

いや、走り出したというよりは、俺の動きをかわしたと言った方が正しいかもしれない。

（気をつける、サトリは相手の動きを読むことができる）

「厄介な相手だな」

サトリの後を追って走る。サトリは中島を抱えている所為で動きが鈍い。

一気に距離を詰めると、炎を纏った右手でサトリの頭を殴った。

「貴様…火影か！」

「だつたら…どうした！」

すぐに左腕で中島を抱きかかえ、右足で蹴っ飛ばす。くそっ、状況が状況だけに、感情の昂りが制御できない。どうにでもなれ、だ。右手を掲げてサトリを睨む。黒い剣を構え、俺の様子を窺うサトリ。一瞬の動きはサトリの方が早かった。一気に首元をつかまれ、そのまま展望台の柵の方まで引きずられた。俺にしがみついていた中島も一緒に。

「…か…はっ…」

早く離れて逃げろ！と叫びたいが、喉が締め付けられている。
中島は気が動転していて、俺にしがみついて声も出ない。ワイシャツを千切れんばかりに握りしめ、顔には恐怖の色を浮かべている。
サトリはそんな中島に手を伸ばし、俺と同じように喉をつかんで持ち上げた。

「……やあ…っ」

関係ない人まで巻き込むな！
右手から炎を出してサトリに攻撃する。炎は顔に直撃し、サトリはあろうことか中島を放り投げた。

俺も自由になったが、中島は柵の向こう。咄嗟に左手を伸ばして中島の腕をつかむ。

が、バランスを崩して俺もそのまま柵の向こうへ倒れてしまった。

「しまっ…！」

右手で柵をつかむ。

足をバタバタとさせるが、触れる物は何もない。ここは切り立った崖のようだ。遥か下を流れる川が細く見える。中島はパニックになってじたばたと体を動かした。

「落ち着け！ 落ち着いて俺の腕に掴まれ！」

必死で中島の手首を握り締め、叫んだ。だが、中島の耳に俺の言葉は入っていないようだ。

「いや！ 死にたくない！ いやああああ！」

「中島！ 早く両手で…ぐっ！？」

柵をつかむ右手を踏みつけられた。そのままグリグリと押さえつけられる。

「死ね」

サトリはそう言って剣を振りかざした。このままでは死ぬ。よくて、腕を切り落とされる。

サトリの足を振り払っても、中島を抱えた状態で再び上がることは不可能。腕を切られても落ちる。サトリを払っても落ちる。

……どうせ落ちるなら、助かる見込みのある方を選ぶだけだ。

「断るよ」

右手から炎を噴き出させ、サトリの足を振り切った。

それと同時に俺の手は柵から離れ、崖の下目掛けまっさかさまに落ちて行く。

「きゃあああああああ！！」

彼女だけは必ず守る。

悲鳴をあげる中島を、左腕でしっかりと抱きしめた。

第十二話 氷解 “Thank you.”

「つてえ…」

気が付けば俺は川岸に横たわっていた。背中に痛みが走るものの、傷自体はそこまで甚大ではない。

いや、大きな怪我を負ったが、もう回復したのか？ どっちかわからないからどうでもいいか。

見上げれば綺麗な星空が広がっている。夏とはいえ、山奥の夜は冷える。水に浸かった下半身が冷えてきた。

「大丈夫か？ 中島」

無意識にずっと抱きしめていたらしい。俺の上で気絶している中島の肩をゆすって起こす。

所々擦り切れているが大きな怪我は無さそうだ。このくらいの傷なら俺でも治せる。

「…ん…」

中島が目を開ける。焦点のあっていないぼんやりとした視線を俺に向けた。

「中村君？」

「大丈夫か？ 怪我は無さそうだが」

「う、うん…痛いけど大丈夫」

中島が何とか立ちあがって、岸に這い上がる。
続いて俺も上がるうとして、右腕に激痛が走った。よく見れば右腕は血塗れだ。

（お前は無意識だろうが、地面に激突する寸前で大きな炎を出して速度を殺したんだ。それから炎の熱から逃げるように川へ落ちて…流された）

炎の噴射だけであのスピードを殺したつてのか？ 自分でやった事らしいが、そんな芸当が俺にできたとは。まあ、右腕がこの状態じゃあ、しばらく使い物にならないだろうけど。
それはそうと、旅館からどのくらいかわかるか？

（二キロくらいか）

「くそ…」

なんとか川から這い上がり、幻鎖についた札の中から黄色の札を手取る。

多分に水を吸っているが、燃やしても再構築される妖怪封印の札ならば、まだ使えるだろうか？

札を握り締め、妖気を込める。小さな炎が灯り、間もなく札全体に燃え広がると、レナが姿を現した。

…今の俺に出せる炎はこれだけか。

「泉に連絡してくれるか。戻った後のサポートを頼みたい」

「戻った後？」

「まだサトリがいるだろ。今日はもう動けないから休むが、明日に

は戻れる。妖気のコントロールは泉の方が上手いし、右腕の治癒だって出来るだろ」

「…無理だけはするなよ」

それだけ言うと、レナは闇夜の中へ消えて行つた。

レナを見送り、続いて中島に向き直る。妖気だのサトリだの中島が知らない単語を話していたが、レナの出現に驚いてそれどころではなかったようだ。

「巻き込んですまなかった。すぐにでも戻りたいが、俺はしばらく動けそうにない」

「えっ、大丈夫なの？」

「体は大丈夫だが、右腕がちょっとな。悪いが今日はこの辺で休むことになる」

「ちょっとって…」

「とりあえずどこか休める所に行こう。詳しい事はそれから話す」

川から少し離れると、河原でバーベキューが何かでもしたのだろうか、まだ使えそうな炭と、椅子代わりになりそうな岩が転がっていた。

後始末せずに帰るのは褒められたことではないが、今のこの状況では逆にありがたい。

乾いた草等をかき集めて炭と一緒に火を付けた。

わぁ、と中島が歓声を上げた。使い方次第では、この力も喜ばれるんだけどなぁ。

時間を調べようとして、携帯電話はカバンの中だと言う事に気付いた。ちなみに腕時計はしていない。

溜息をついて、それから木霊の札に火をつけた。

「木霊、今何時かわかるか？」

「ちょうど日付が変わったくらいかな」

妖怪は星とか月の位置で時間がわかるらしい。現代の便利な機器に慣れ親しんだ俺には無理だが。

「中村君、それ何？」

中島は木霊を興味津々といった表情で覗き込む。木霊は照れたのか、すぐに姿を消してしまった。

「木霊。木に宿る精霊だ」

「木霊……」

「言ってしまえば妖怪だな。レナ…九尾の狐も、さっきの黒い狐もな」

「何か、黒い狐の方は、変な感じがしたけど」

「わかりやすく言うなら、悪い妖怪って奴かな。邪気っていう邪悪なエネルギーに支配されて正気じゃない状態だ」

大きな欠伸をして、ごろんと寝転がる。

河原の石が背中に痛い。眠るには快適とは言えない。

流石に女子はきついだろうなあ。

「気休めにしかならんが…これでも敷いてくれ」

ブレザーでもあればまだマシなんだが、あいにく夏という季節にわざわざ正装をする者はいない。まして俺は通常よりも体温が高いのだ。

そこで俺はワイシャツを脱ぐと、中島に渡した。ちなみにすでに乾いている。

「え、でも中島君は…痛いし、寒いでしょ？」

ワイシャツの下に着ていたＴシャツ一枚になった俺を申し訳なさそうに見る中島。

「俺の事は気にするな。体温高いしな」

「ダメ、こっちに来なさい」

「え？」

母が子をたしなめるような口調。

思わず振り返ると、中島は俺の右腕をつかんで引き寄せた。くつつき始めた骨が軋み、激痛が走る。

「いだだだだ」

「こんな血塗れじゃない」

「いや、見かけの傷はすぐ治るから大丈夫だ。骨折も一晩寝ればく

つつく」

掴む手を振り払って腕を引っ込めようとするが、中島は離そうとしない。

強く抵抗するとそれはそれで痛いので大人しく引き下がる。

「すぐ治るんだとしても、ちゃんと手当しないとダメだよ」

そう言つて中島は俺が渡したワイシャツで手際よく俺の腕を固定し始める。

鼻歌を歌いながら手を動かす中島を見て、今なら聞けるだろうかと思ひ、口を開いた。

「なあ、俺が怖くないのか？」

「え？」

その質問に驚いたのか、顔をあげてこちらを見る。
しかし中島はすぐに視線を俺の腕に戻した。

「あの時はごめんなさい。いろんな噂があつたから、手がぶつかった時に驚いちゃって…中村君が怖いわけではなくて…ううん、怖くなかつたつて言えば嘘になるけど…本当、ごめんなさい」

「いや、いいんだ。噂は半分くらい正しいしな。現に、君も見てるだろ」

そう言つて左手で火を指差す。中島は少し笑つた。

何だか例えようなない感覚。胸のあたりがぎゅっと縮んだみたいだ。笑顔を向けられるって、こんなに嬉しい物だったっけ。沙夜達から

向けられるのとはまた違った感動を覚えた。

「中村君って優しいね」

「へあ？」

いきなりだったため、変な声が出てしまった。

俺が優しい？ 無愛想とか、根暗とかじゃなくて？

「優しいよ。大して話した事もないただのクラスメートのために命を張るなんて、普通の人はしないもん。ありがとう」

コツン、と窓を軽く叩く音がした。

消灯時間はとうに過ぎているが、女子高生が素直に寝るわけでもない。

もつとも、今日は夕食前にとんでもない事件が起こっていて、先生方もバタバタしていて各部屋の巡回に来ることは無さそう。

どうやら窓を叩く音に気付いたのは私だけのようだ。チラリと見ると、そこには九尾の狐が窓枠に前足を掛けて立っていた。

「ごめん、ちょっとトイレ」

「今から？ 気をつけてね」

「うん」

音をたてないようにドアを開き、廊下に出る。

下からは先生のガヤガヤとした声が聞こえてきた。一応警察にも連絡したみたいだけど、こんな山奥だし、搜索も大変なのかも。

見つからないようにそつと外に出る。九尾は玄関のすぐ外で待つてくれていた。

「こんばんは」

私がそう言つと、九尾はコクンと頭を垂れた。

伝わってくるのは妖狐独特の妖気。そしてうつすらと温かい玲二君の妖気。

玲二君の九尾で間違いないわね。

「玲二君と中島さんは？」

「大丈夫だ。玲二の右腕がひどいが、何とかなるだろう。おそらく一時的に莫大な量の妖気を放出したことによる反動だと思うが…」

「ああ、うん…確かに一瞬、すごい妖気を感じたかも」

テストが終わって伸びをしている時に、全身を熱風に焼かれるような気配を感じたのだ。

微々たる邪気も感じたけれど、玲二君の妖気はそれっきり。

「何か出たみたいね。ちょっとした騒ぎになっていたし」

「サトリが一体だ」

「サトリかあ…特に怪我をしてる生徒もないし、こっちの被害者は玲二君と中島さんだけか…」

生徒達が騒いでる会話を聞けば、怪物に襲われた玲二君と中島さんが崖から転落。怪物はそれを見るとどこかへ消えてしまった、と。邪気妖怪が人を襲わないなんて珍しい。元々サトリは滅多に異種族の前に姿を現さないけど。

「玲二からの言伝だ。戻った後のサポートを頼む、と」

「…わかったわ。札に戻る？」

そう尋ねると、九尾は炎に包まれ、黄色の札に戻った。

「玲二君が戻ったら教えてね」

九尾の札を手に取り、私はそつと中へ戻った。

ありがとう。

「…ありがとう、か」

頭の中で中島の言葉が反芻する。
いつの間にかあたりは明るくなっており、夜が明けたことがわかる。

結局眠れないまま夜を過ごしてしまった。
バカか俺は、恋する中学生かっての。

「ふぁ…」

中島は横で眠っている。時々苦しそうに寝返りをうつが、炎は絶やしていないし、寒いと言う事はないだろう。

「中島」

「……ん…中村君？ おはよう」

軽く肩を揺らして起こすと、中島はすぐに目を開けた。
それから大きく伸びをして、痛そうに背中をひねった。
さて、火の始末をして、と。

「戻ろうか」

「うん。でも場所とかわかるの？」

「バスの中から周りの景色は見てたからな。ずっと川は見えてたし、
崖を登れば道に出ると思う」

「え…」

崖を見上げる俺と中島。

俺は登れない事も無いが、中島は無理だろう。

「登れないよぉ…」

「俺も君を担いで登れるほどバッチリじゃないからな」

昨日中島が巻いてくれたワイシャツの、手の部分を破った。一晩安静にしていたお陰で大分楽になった。

俺は右手を空に掲げ、妖気を集中させた。大きな炎を小さく凝縮させ、うち上げる。

そして炎が弾ける様子を強くイメージする。上手い具合に炎は爆発音とともに弾けた。

「花火みたい…」

「学校もバカじゃないからな。警察くらい呼んでるだろ。そうじゃなくてもこれだけの音だし、誰かは来るさ」

その読みはあたった。外れたらどうしようかと思ったが、だんだん近づいてくるサイレンの音にほっと安堵した。

パトカーのサイレンがここまで安心するものだとは思わなかった。

はあ、疲れた。

大きなため息をついていると、隣に泉がやってきた。

ちなみに今は三日目の勉強時間だが、部屋で安静にしていると言われ、勉強は免除されている。安静にしているとわかれても暇なので、気分転換で外に出ている。となると泉はサボりか。

「お疲れのようね」

「まあ、流石にな。それに帰って来てからも…事情聴取だの病院に行けだの」

教師相手なら何とかなるが、流石に警察相手だとうごまかせばいいのかわからない。

人間二人が崖から転落して、軽傷で済んでいるのだ。

あまり使いたくない手だが、自分が妖怪であることを話して説得するしかなかった。手から火を出して無理矢理納得させたのだが、警官達が上にどう報告するのが気になる。

とは言っても妖怪の事件なんて最近は多いし、PWも警察の上層部と繋がっているらしい事は以前佐藤さんからも聞いたし、何とかするのではないかなあと思う。

「病院には行った方がいいんじゃないかしら」

「まあでも、ここから離れるわけにはいかないし」

サトリの事もあり、俺はここを離れるわけにはいかなかった。

妖怪だから回復も早いことを熱弁し、なんとか病院送りは免れたわけだが、事情聴取を聞いていた生徒数人がいたらしく、今では合宿所はその噂でもちきりだ。噂ではなく事実だけだな。

「ほら、右腕出して」

泉の妖気が俺の右腕に入ってくる。ひんやりとしていて気持ちいいのだが、たまに手がビクツと反応し、炎がこぼれる。

「炎と氷だものね、あなたと私。相性は悪いのかな」

「そいつは残念だな」

「あら、どついう意味？」

「深い意味は無いよ」

フツツと笑い、泉は俺の腕を慈しむように撫でる。

その度に震える手。泉の愛撫に反応しているのか、泉の妖気に反応しているのか、どっちにしろ気恥ずかしくて俺は横を向いた。

「手つきがエロい」

「お言葉ね。せっかく手当してあげているのに、ビクビク反応しているのはそっちでしょ」

うぐ。泉には口で勝てる気がしないな。

その時、頭の中にレナの声が響いた。

（玲二、サトリを見つけたぞ！）

「ありがとう。場所はどこだ？」

レナにはサトリの搜索を頼んでいた。

思ったよりも早く見つかったので、俺は場所を尋ねる。が、だんだんとレナの妖気が近づいてくるのを感じた。

「…まさか」

（ああ、そのまさかだ）

慌てて右手で札を構え、左手を広げて泉を後ろにかばう。

「来るぞ！」

レナの声が響く。

突然目の前にサトリが現れた。

「変身！」

火影に変身すると、突っ込んできたサトリの腕をガツシリとつかみ、横へ放り投げる。

だがサトリはそれすらも予測していたように、地面をけって宙返りすると体勢を立て直す。

「木霊！」

「うん！」

レナが木霊を呼んだ。

木霊はそれに頷くと、手を高くかざした。

コンクリートを突き破って木の枝が伸びてくる。木の枝は逃げ回るサトリを追いまわすが、中々捕える事が出来ない。

おそらく木霊の意識を読み取り、枝の動きを予知しているのだろうが…

「影鋭ノ太刀！」

両腕に太刀を装備し、右腕の太刀を引き抜いて黒い衝撃波を飛ばす。

サトリの意識は木霊に集中している。俺の攻撃は難なく直撃し、動きの止まったサトリは木の枝に捕まった。

グルルルルル…

サトリがうなり声を上げる。

その口に大きな剣が咥えられたかと思うと、サトリは首を振って自身を縛る枝を切り裂いた。

そして木霊を突き飛ばし、俺に向かって剣を振り下ろしてくる。

咄嗟の事に反応しきれず、影鋭ノ太刀が碎かれる。慌てて火刃ノ太刀を引き抜いてサトリの刃を受け止めた。

「はぁ！」

サトリの剣撃を押し戻し、そのまま胴体を一閃する。が、サトリは鎧を纏っていて太刀が届かない。この鎧の形状、日本の武士みたいだな。刀じゃなくて剣なのが残念か。

とにかくこのまま太刀から炎を噴き出し、必殺技を。そう思った瞬間、サトリは俺の腹を蹴飛ばし、距離を取った。意識を読み取られるのはかなり厄介だ。

「どうする、玲二」

レナが木霊を背中に乗せ、俺の隣に降り立った。

「かなり面倒な相手だが、二人以上の意識は同時に読み取れないみたいだ。あとあの鎧、刃は通してくれなさそうだな」

俺は木霊とレナに頷く。

「行くぞ！」

木霊とレナが二手に分かれた。
サトリが二体に気を取られている隙に、俺は札を燃やして妖気を集中させる。

「木霊！」

俺の声に、木霊がいくつもの木の枝を伸ばす。
サトリはそれをかわすが、顔を上げた瞬間、その目には炎を纏って突っ込んでくる火影の姿が映った。

「火影えええ！！！」

犬のような雄叫びとともに、サトリは自身の体から狐の形をした邪気の塊を放った。
邪気は炎とぶつかり合い、爆発を起こす。

「ははっ…どうだ！」

「どうだ、とは…余裕だな」

油断しているサトリを蹴って地面に倒すと、胸に妖狐の杖を突き立てる。

「なっ…」

「木霊の枝に気を取られ過ぎだな。突っ込んでくる炎の塊が俺だと勘違いしたまま攻撃するとは」

俺は火影の形をした炎の塊を作り出し、さらに炎を纏わせてサトリへ放った。炎自体は大きいが密度は低いため、サトリの邪気と簡単に相殺した。

だが狙いはそれでは無い。油断したサトリに一気に近づき、レナを鎧に変換して火影・妖に変身すると杖を突きたてた。

これで逃げ場は無い。

「妖狐一体・アブゾーブダークネス!!」

杖を中心に鬼火が作り出す陣が広がり、動けぬサトリから邪気を吸い取る。

杖は一瞬黒くなるも、すぐに元の黄金色に戻った。

正気を取り戻したサトリは、俺の姿を見るとすぐに姿をくらました。

「終わったか…」

ふらつと体が傾いた。意識が遠のく。

泉が、木霊が、レナが、俺の名前を叫んでいるのが遠くで聞こえた。

第十三話 友人 Friends with you

「玲二君、もういいのかい？」

「はい、一晚寝たので大丈夫です」

心配そうに見つめる佐藤さんに、俺は笑って返した。

物心ついてからこれまで一度も病院に来た事が無かった俺にとっては、病院とは果たしてどういう場所なのか、興味のある場所だった。しかし一晩入院してみればやる事もなく、体を動かす事もできず、退屈極まりない数時間だったと言えよう。

「何て言うか…眠くも無いのにベッドに横になってる感じがあまり好きじゃないですよね」

「元気ならいいけど」

サトリを浄化した俺は、そのまま気絶してしまった。

そのまま救急車で運ばれたわけだが、その夜には体調も万全。怪我也完治していた。

もつとも、気絶した要因は体力や妖気の消耗もあるけれど、一番の要因は中島の「ありがとう」が頭に残り続けていて、なんというか動揺？ してしまった。

思えば小学校一年生の時も、女の子に告白された日は何故か気分が悪くなって早退してしまっただけ。これといって異性が苦手というわけでもないのだが…。まあ、人付き合いは苦手だけでも。

…俺だって小さい頃はそれなりに好かれていたのだ。「玲二君がっこいい」ってな。ああ、むなしい。

とにかくそういうわけで、実際の倒れた理由というのが恥ずかしくて、一晩中悶々として過ごした。当然河原のような劣悪な環境じゃないので、きちんと寝られた。

うん、これ、心配してくれた佐藤さんには内緒な。

「あれ。玲二、もう大丈夫なのか？」

ガラッと遠慮無さげにドアを開ける音がする。

そこにいたのは制服姿の新塚だった。待てよ、記憶が正しければ今は合宿四日目の正午前。四日目の昼に解散だから、ここにいるのはおかしいのでは。

そんな表情を読み取ったのか、新塚が口を開く。

「お前と中島の事があつたし、今日の朝に解散だったぜ。さっき学校に着いて、そのまま来たところ」

「そうか」

「でもなんだ、せつかく来たのにもう退院？」

佐藤さんの持つてきた俺の私服に着替えているのを見て、新塚はつまらなそうに言う。

お見舞いがどれだけ楽しい物かは判断しかねるが、仮にも怪我人に対してその態度はどうなのだろう。

「まあいいや。今日は皆も来てるんだ。おい」

「へ？」

変な声が出てしまった。

新塚がドアの外に声をかけると、そろそろと数人が中に入ってきた。ちよ、ちよっと待て、女子もいるじゃん。俺は着替え中なんだけど。

「…佐藤さん。カーテン、いい？」

「あ、ああ」

別に俺は構わないが、流石に女子の前で着替えるのはまずいだろう。佐藤さんがカーテンを閉めて、その間に俺は猛スピードで着替える。ズボンとシャツ、最低限の衣服を身に付けた後でカーテンを開けた。

「いいぞ…」

「おう、悪いな」

新塚は軽く返事をするが、後ろの連中はチラチラと俺を見ている。何で連れてきたんだ？ いや、むしろこいつらは何で来たんだ？

「何しに来たんだ？」

「見舞いだけど」

「いや、お前じゃなくて」

そう言つて新塚の後ろに立っている連中を見る。するとその中の中島が前に出てきた。

「私達も中村君のお見舞いだよ」

「あー…え？ 俺の？ …ていうか、君は大丈夫なの？」

「うん、大丈夫」

心配になつて聞いてみたが、本当に元気そうだった。

中島が俺と普通に話しているのを見て、次々にクラスメートが俺に話しかけてくる。

よく見れば男子は俺と同じ部屋だった奴ら、女子は中島と仲の良いグループだ。

「な、中村君！ 美沙を助けてくれたんだよね？ ありがとう！」

「中村君つてすごいね！ 岡山さんも言つてたよ！」

「中村、何て言うか、今まで悪かった！ お前カッコいいよ」

何でもいいけど、お前らもう少し静かにしろ。

ここが個室じゃなかったら迷惑以外の何物でもないぞ。

「えーと…何がどうなって…どういう、アレだ？」

「だからさ」

新塚が俺に近づく。

顔が妙に近い。その女子、「キヤー」とか言ってるんじゃない。

「こいつら全員、玲二と友達になりに来たんだよ！」

はあ？

「…いや、はあ？」

うお、思わず言ってしまった。

いやしかし、コイツの言っている事がよくわからない。

否定の言葉を聞こうと後ろの連中に視線を向けるが、皆何故か俺から目をそらして何も言わない。ただ、今までの無視というよりは、気恥ずかしそうな目の逸らし方だった。

「友、達…？」

ちなみに言うと、通っていた小学校・中学校から遠い高校を選んだ事もあり、中学時代の同級生というのはあまりいない。そのため、この高校で俺についての噂を色濃く信じている生徒は、実はほとんどいないのだ。

大体が、「他中学の友人から聞いた話」という形で広まっている。だからこいつらが俺に対して変な先入観を持っていて、それで俺が孤立してしまったようなものなのだ。

それでも孤立しようとしたのは俺なので別に何とも思っていないのだが、彼らは俺に対して何度も頭を下げて謝罪し、よければ友達になつてくれと握手を求められたりもした。

「握手？」

すつと伸びた右手。恐る恐る右手を合わせると、がっちり握られる。

「…怖くないの？」

「噂は本当みただけど、中村は優しいって、中島が言っていたから」

男子生徒の発言に、中島がにっこり笑う。

これも彼女のお陰なのか。先日の発言もあるが、中島は良い意味で俺をひっかきまわしてくれる。

「それに、あまり熱くない」

「フツ、ありがとう。こちらこそよろしく」

「ありがとうはこっちのセリフだよ」

男子生徒と握手をしていると、突然新塚が割り込んできて俺の手をブンブンと握る。

「玲二！俺も改めてよろしく！」

「あ、ああ、新づ」

「廉！俺の名前は新塚廉だ！」

「ああ、知ってるよ、新塚」

「廉だつてば！」

このやり取り、いつだったか経験したな。

あの時も相手が何度も粘り、結局は俺が折れたんだっけ。

…名前呼びか。友達っぽくて、ずっと憧れてた節もある。でも改めて新塚を名前呼びするのは、少し恥ずかしい。

「よろしく、…廉」

「おお、よろしく玲二！」

うわーなんか恥ずかしい。

それを聞いた女子は「私は綾だよ」だの「玲二君可愛い」だの騒ぎ始めた。もしかして今がモテ期ってヤツ？ とどうでもいい事を考えていた。

ふと佐藤さんを見上げると、佐藤さんはにっこりと俺を見て笑った。

そっか。友達が出来たんだ、俺。

「へえ、そうですね。玲二君にお友達が出来たんですね！」

喫茶店「ウィル・オ・ザ・ウィスプ」

見かけは普通の喫茶店だが、何故か一年中ジャック・オ・ランタンが飾られている。ジャック・オ・ランタンってのはハロウィンの時に飾ったりするかぼちゃのランタンで、髑髏のような顔が彫ってあるのが特徴的だな。

それがデフォルメされた置物だったりランプだったり飾られていて、中々可愛かったりする。

ちなみに店のインテリア等は全て店長の趣味だとか。

「それは良かったです。えへへ」

で、今は昼過ぎだが平日だと言う事もあって人はあまりいない。そんな店内でひととき嬉しそうなクウコちゃんが、俺の向かいに座っている。

「何か、不思議な感覚ではあるけどね。友達なんて本当に久しぶりだし……」

「…あの、私は友達じゃなかったんですか？」

うおっ！？

何かクウコちゃんが泣きそうな目になっている！？

「い、いやいや、そんなこと！ クウコちゃんさえ良ければ俺はもうずっと友達だと思ってたから！」

何かよくわからない感じになっちゃったが、それでもクウコちゃんは嬉しそうだ。

ありがとうございます〜と語尾を伸ばしてえへへ、と笑う。癒される。心の奥がほんわかとしてくるような。

「クウコちゃん、悪いが買い物任されてくれねーか？」

「あ、はい」

店長に呼ばれ、クウコちゃんは笑顔でカウンターまで駆けて行く。何やらメモを渡されているので、ひょいと後ろから覗いてみると、かなりの量だ。

「俺も行くのか？ 荷物持ちくらいにはなるよ」

「本当ですか？」

「悪いな坊主、今度コーヒーおごってやるよ」

「どうも」

豪快だがどこか飄々としているこの店の店長。名前は知らない。クウコちゃんもこの店の常連も大体「店長」とか「マスター」とかしか呼ばないし。
ていうか未だにこの人の趣味があんな可愛いものだとは信じられない。

「ありがとうございます、玲二君。それじゃあ行きましょう」

「あいよ」

あの量の荷物はバイクじゃ運びきれないな。
歩きで行くでしょうか。

「中村君、デート？」

九条綾、だったか。

俺の見舞いに来たクラスメートの一人。最近知ったけど、うちのクラスの学級委員長らしい。

「いや、友達。この子のバイト先の買い出しに付き合ってるだけだよ」

「ふうん。あ、そうだ。今度皆でカラオケに行くんだけど、中村君もどう？」

「カラオケ？」

知識として知ってはいるが、行った事は無い。
それを言つと「えーっ、嘘お!？」と驚かれた。

「てか、俺も行つていいの？ 後で呼びじゃないとか言われても嫌だよ」

慣れてるとはいえ、ショックだからな。
せつかく打ち解けられた友達なわけだし。

「ううん、是非来てよ。よかつたらそちらの…」

「クウコです。申し訳ありませんが、私あまり歌は得意じゃないので…」

最近のJ・POPの歌詞を中々覚えられないらしい。
齡の問題だろうかと突っ込んでみたら、珍しく怒られた。少し前の話だが。

「女の子…女性に年齢の話をするのはマナー違反です！ 失礼ですよ、玲二君！」正直、怒っている姿も可愛かったので、あまり怖くなかったが。

「そつか。じゃあ玲二君、詳しい日時は後でメールするから」

「え？ 俺、君のアドレス知らないけど」

見舞いに来た時は携帯電話をいじった記憶が無い。
そもそもアドレスなんてあまり人に教えないし。

「新塚君から勝手に聞いたの。ごめんね。あと、私は『君』じゃなく『綾』だから」

「ああ、うん、わかった」

じゃあね、と手を振って委員長、九条綾は去っていった。
俺の周りの人間は名前と呼ばれないと気が済まないのか。首をかしながら、隣でクウコちゃんがクスクスと笑っていた。

「玲二君、モテるんですね」

「…そうなの？」

モテ期って、案外マジなのかも。

と、そんな時、頭の中を鋭い痛みのような物が走った。

針で貫かれるようなこの感じ…邪気だ。

それにしても…

「…すごい邪気を感じます」

邪気の嫌な感じが、いつもよりも強い。

邪気とはかなり距離があるが、邪気に包まれているような錯覚すら

覚え、吐き気までもが襲ってくる。

「玲二君、私は大丈夫ですから、早く行って下さい」

「ああ、行ってくる！」

俺は旋風をとりて元来た道を走った。

炎を突き破り変身した俺は、すでに邪気の反応が近い場所を走っていた。

ひどい頭痛と吐き気がする。邪気に触れてすらいらないのに、汚染されそうな勢いである。

右手に見える海も、いつもより波が荒れているような、不気味な感じだ。

（気味の悪い邪気だね…）

どこか苦しそうな木霊の声。

「レナ、力を借りるぞ」

（まだ相手は姿を見せておらぬぞ？）

「この辺一帯の邪気を浄化すれば、相手も何事かと出て来てくれる

だろ」

言うが早いか、黄色の札を取り出して燃やす。あつという間に火影の鎧は黄色へと変化し、俺は右手に妖狐の杖を構えた。

旋風を停車させ、杖に妖気を集中させる。

「アブゾーブダークネス！」

杖を地面に強く叩きつけ、次いで天に掲げる。

大気中の邪気が杖に吸収されていき、見る見るうちに場の気が浄化されていくのを感じる。

ギヤアアアアアアアアアアアア！！

鼓膜を破らん限りの咆哮が轟いた。

次の瞬間、海面を突き破って巨大な体軀がその姿を現した。真っ黒な鱗に凶暴な牙。

血走った眼をこちらへ向け、獰猛なうなり声をあげている。

「…龍…だと…」

龍は長い体をくねらせ、再び俺に向かって吠えた。

第十四話 元凶 OROCHI

グアアアアアアアアアア！

「うわああああああ！！」

龍の突撃をすんでの所で避けた。つもりだった。脇腹に走る鋭い痛み。

龍の牙は赤く染まっていた。

「レナ、木霊と交代だ！」

「ああ！」

防御力の低い『妖』の姿では厳しい戦いになる。

俺からレナが離れ、木霊が憑依するように鎧に溶け込んでいく。変身と同時に地面から木の根が伸びてきて、龍に向かって行く。

奴の巨大な一撃をよけられる自信が無いなら、動きを封じてしまえばいい。

ゴオオオオオオオオオオオ！！

だが奴の口から放たれた青白い炎によって木の根は一瞬で蒸発。炎の勢いは衰えることなく、俺に襲いかかった。

「アアアアアッ！」

鎧が燃える。

炎を使用しない霊の鎧は、炎に弱かった。

「うわああああ！」

鎧から木霊が飛び出し、そのまま地面に落ちた。体中が焼け焦げ、呼吸も荒い。

俺の体も通常の火影の鎧に戻り、膝について大きく息を吐く。

「くっ…」

グルルルルル…

目の前に立ちはだかる、強大な姿。その眼は俺だけを睨みつけていた。

恐ろしいほどの邪気が、俺にプレッシャーを与える。膝は勝手に震え出し、立つ気力すらも無くなっていく。

殺される。

「…たまるか…」

まだだ。

まだ死ぬ時じゃない。

まだ死にたくない。

「死んでたまるか…！」

体中から炎が噴き出す。強い想いに呼応するように、炎が猛々しく天に昇った。

このまま小さい攻撃を与え続けていても有効打にはならない。ならば一か八か、大技をぶつけるしかない。狙うはほとんどの動物の弱点である頭部。これがダメなら逃げるしかない。

「幻影・バーニングブレイク！」

ヴァアアアアアアアアア！！

大きな咆哮をあげる龍の、その鼻っ柱に、炎を纏った右足を叩きこむ。

手ごたえはあまり無いが、諦めずに妖気を流し込む。

いつだってやってきた。傷つきながらも戦って妖怪を解放してきたんだ。やってやる、これから、何度だって！

グオオオオオオオオオオ！！

「！？」

だが龍は頭をブンブンと大きく振り、俺を地面にたたきつけた。

背中を強打し激痛に顔をしかめるが、俺の目には振り落とされる直前の光景が焼き付いていた。

黒い鱗が、一瞬だけ青い鱗に変化した。

「少しだが、今のは効いたみたいだぜ」

体勢を整えて、再び龍に向き直る。

バーニングブレイクが有効だと言う事はわかったが、それにしても効果が小さい。あと何発ぶち込めば龍を浄化できるのか。考えただ

けで気が遠くなる。

グオオオオオオオオオオオオ！！

……ほ………ほか………げ……！！

何だ！？　今、ぼんやりとだが、咆哮にまじって俺を呼ぶ声が聞こえた。

木霊の声でもレナの声でもない、別の妖気を纏った声が。

「龍か……？」

龍のちゃんとした声を聞いたような気がして、俺の動きが止まる。

グオオオオオオアアアアアアアアア！！

その瞬間、巨大な炎の塊が俺を包み込んだ。

「大丈夫か？　火影」

んん？

「……大丈夫そうだな。肉体の方もすでに治りかけている」

目を覚ますと、目の前には青い龍がいた。

広い湖のような、どことなく神秘さを感じさせる空間。俺と龍は湖面の上に立っていた。

「何なんだ…」

「まずはすまなかった。私は青龍だ」

その姿はドラゴンというよりも龍。細長いしなやかな体の表面には堅そうな青い鱗でびっしりと覆われている。

背中というか、上部には緑色の毛が生え、尻尾にはまるでクジャクの羽根のように煌びやかな装飾品が揺れている。

前足はあるにはあるが、一見すると歩行や物をつかんだり、人間の使うようには使えないような貧弱なものだ。だがその後足は巨体を支えて湖面にどっしりと立っている。

ところでこの世界は何なんだ？

「ここは私の心象風景が描かれる世界。言ってみれば、意識の中だ」

湖面をゆっくりと撫でてみると、手は確かに水に触れた。だが体は沈むことなく湖面の上に立っている。

「俺をここに呼んだのもお前か」

「そうだ」

そもそも俺は他人の精神世界に侵入するすべを知らない。

「…それにしても、気分のいい場所だな。とてもじゃないが、邪気に侵された妖怪の精神だとは思えない」

「貴様の妖気が流れ込んで、目覚める事ができたのだ。とはいっても、邪気に侵された体の動きを止めることで精一杯だな」

「じゃあ、今のお前は…」

「まだ黒龍の状態だが、すでに私の妖気も戻りつつある。直に元の姿へ戻るはずだ。感謝するぞ」

いえいえどうも。

思い切りボコボコにされてあまり記憶がすっかりしていないが、妖怪を救えたならそれで問題無い。

それにしても微量の妖気を（俺にとっては大量の、だが）流し込んだだけで自我を取り戻せるとは、龍は他の妖怪とは違った存在なのかもしれない。

こうやって精神体だけで対峙していても、感じる雰囲気がただの妖怪ではない。

そんな事をぼんやりと考えていると、龍の姿が白くかすみ始め、輪郭が変化し始めた。

やがてそれは俺と同年代くらいの少女の格好に変化した。ほっそりとした少女の一系まとわぬ姿が目の前に表れる。

「…へ？ お前、雌な…」

「ありがとうっ！」

むぎゅっ

そんな感じで、俺は龍（？）に抱きしめられた。

背丈は俺より頭一つ分低い。体型も本来の姿を象徴するかのようにすらっとしている。そのくせ柔らかくていい匂いがする。木霊やレナとはまた違った、落ち着く匂いだ。

セミロングの青い髪の毛が手に触れた。あまりにもサラサラしていて感動する。

「何だ、その不服そうな顔は。自画自賛するわけではないが、私の容姿は悪くは無いはずだぞ。やはり胸や尻が出ていないと物足りんか？」

「いや、そんな事ねえよ。大体不服そうな顔なんてしてない」

少しぶすつとした表情を、可愛いと思ってしまった。

これが…あの龍か？ さっきまで感じていた威圧感ような物が全然感じられない。

「すごいな…姿を変えられるのか」

「私ほどの存在になれば造作も無い事だ。外見も体内の構造も人間の雌とほぼ変わらないぞ。望むなら生殖行為だってできる」

「ぶっ」

龍はにやりと笑い、からかうように下半身を密着させる。

純真無垢そうな顔してやる事は…何て言うか…まあいい。とにかく見た目と中身が全然釣りあわない。

「妖怪相手じゃ勃たんか？」

「あーあーもういいやめろやめろ」

「ふふふ」

くそお、そのにやにやした笑みを止めやがれ。

「で、俺を呼び出したのは、何か用があるからなんだよな？」

「その通りだ」

龍はすぐに表情を引き締め、するどい眼光を俺に向ける。
心なしか、背後に龍のオーラと威圧感が見える。

「貴様は“オロチ”を知っているか？」

「オロチ？」

「日本神話では、ヤマタノオロチ八岐大蛇と言った方が有名かもな」

八岐大蛇——スサノオが対峙したという八頭八尾の大蛇。

龍が存在するという事実から、やはり八岐大蛇という妖怪も存在するのだろうか。

「奴は妖怪という言葉ではとても言い表せない。全ての元凶だ」

「…全ての…元凶？」

「オロチこそ、邪気の源だ」

黒幕、ラスボス。この邪気騒動の首謀者。そう言えいいのだろうか。

オロチを倒せば、この騒動は収まる…ということか。

「そもそもオロチもスサノオも、“都”と深い関係があると聞いた

の다가…貴様は母君から何も聞いていないのか？」

どうしてここで母さんが出てくるんだ？

確かに母さんは妖怪だが、人間の父さんを愛し、俺を普通の人間のように育ててくれた。

大体、都って何だ？

「御神樂迦具夜^{みかくら かくや}。貴様の母君は月の都の王女だぞ」

みかぐら…かぐ、や…？

うん、確かに母さんの名前はかぐや。中村迦具夜だ。珍しい名前だと思っていたし、きつとすごい家の子もだったんだろうなあと子どもながらに思っていた。

それがまあ確かにたいそうな旧姓をお持ちで…ん、王女？

「…はい？」

「まさか、何も話していないのか。母君はお前に…何も？」

「ああ、母さんが妖怪だということ、俺もその血を引いていて、不思議な力があること、そのくらいしか聞いていない。後はいくつか妖怪の話をしてもらった事はあるけどな」

…で、母さんがオロチと何の関係があるんだよ？

「…私も詳しい事はわからないから話せない。だが十数年前に邪気が初めて発現した時、最初に貴様の母君が現れた。まるで邪気の出現を待っていたかのようなタイミングだったが」

母さんは今どこにいるかわからないしなあ。死んでる…とは思いた

くない。

それにあまり妖怪の事は話したがらなかった感じだし。いつか、その時がくればわかるだろう。

「そうか。それはまた後でゆつくりと考えよう。とりあえず早く目覚めてお前に会いに行きたいんだが…」

「私に惚れてしまったのか？」

「さあな。でもお前の事は気に入ったよ」

それを聞いた龍はにまーっと口角を上げて笑った。

そして何を思ったか、俺に飛びついてきたかと思うと両腕で俺の頭を包み込んで俺の唇に龍のそれを押しつけた。

柔らかいとか、いい匂いとか、そんな物を感じたのは最初の一瞬。唇を通して凄まじい濃度の妖気が俺の中に入ってくる。俺の持つ妖気よりもはるかに巨大な力。受け止めるだけでも足がふらついて、上手く力が入らない。

そしてその妖気はどこか冷たくて、でも温かい。

「いい加減にせよ」

横からえらく不機嫌そうな声が聞こえてきた。龍は唇を離し、声の方を振り向く。

俺もそれに倣うと、そこにはジト目で俺を見上げるレナと、その背中の中のつた木霊の姿があった。

「嫉妬か？ 貴様も中々どうして、主の事を好いているようだな」

「フン、そんな物ではない。大体私と玲二は共に戦う仲間でしかな

い」

「でも最初にキスしてくれたのはお前だったよな」

「ほっ」

「あれは頬だったろう！ 話をややこしくするなっ！」

慌てた様子で弁解を図るレナに、ニヤニヤと笑う俺と龍。木霊はレナをポンポンと叩いて諫めようとしている。

「火影、これを渡しておくぞ。私の妖気を受け入れる覚悟が出来たら、いつでも使うが良い」

突然真顔になった龍に、青い札を渡される。

龍の力が宿った札。まだ文字が刻まれていないのは、封印されていないからか。それでも龍の妖気の中に中てられて青く染まっている。

「…わかった」

先ほどのキスで凄まじいほどの妖気を感じた。

あれはおそらく龍の持つ妖気の、極々微量でしかない。あれだけでもかなりの負担を感じた。ってか、ファーストキスであんな負担を感じるとは思わなかった。

特別こたわりがあるわけではないから、別にいいのだけれど。

「また会おうぞ、玲二」

目を覚ますと、俺は砂浜の上で倒れていた。

すでに日は暮れはじめ、空と海がオレンジ色に染まっている。

周りを見渡し、上の道に停められている旋風と、龍がいない事を確認する。

「龍…」

青い札は俺の手に握られていた。

そこから伝わる龍の妖気。その恐ろしいまでの力の大きさは、俺を少し不安にさせる。

「…やっぱり人間がいいかなあ、ファーストキス」

沈む太陽を見ながら、そんな事をぼんやりと考えていた。

第十五話 雷獣 The First Guardian

龍と出会ってから、一ヶ月が経とうとしている。

あれから何度か海へ足を運んでみたが、龍に会うどころか妖気や邪気を感じ取る事すらできなかった。

それでも札から伝わる妖気は相変わらず、強力な物だ。

もう、自己浄化は終わったのだろうか。

（それにしても、久しぶりの学校か）

「まあね」

久々に制服に袖を通す。昨日、自分の熱でアイロンをかけたからピシッとしている。

こういう時に便利だなとは思いつけど、しょうもない事を考えている自分が何か悲しくなってくる。

「玲二、おはよう」

開きっぱなしのドアから、パジャマ姿の沙夜が顔を覗かせた。

沙夜に正体がバレてからかれこれ四ヶ月になろうとしているわけだが、仲は普通に良好だ。

というより、ツチグモを倒した時から今までよりも一層頼られるようになったというか。

たまに「大丈夫？」と気にかけてくれるのがとてもうれしい。そう言えば沙夜は受験生か。夏休み中にいくつかの高校に見学に行っていた。

「ああ、おはよう。朝食はもう用意してあるよ」

「ありがとう」

「待つてよ、沙夜姉！」

につこり笑って階下へ降りて行く沙夜と、それを追う千恵。小学四年生だが成長は結構早い方らしい。六年の裕太と背丈はあまり変わらない。まあ、裕太が小柄だということもあるが。

「千恵、走ると転ぶよ」

噂をすれば、だ。寝ぼけ眼の裕太が欠伸をしながら現れた。千恵はイーッと舌を突き出して、沙夜を追い掛けて行った。

「喧嘩でもしたのか？」

「あ、玲二おはよう。別に何も無いけど」

まあ、千恵は沙夜にべったりだが、俺や裕太にはつつけんどんな感じだからなあ。

年頃の女の子って事だろうか。千恵は結構成長が早いから、クラス的女子よりませてる方らしい。それでもまだまだ純粋な子だけど。

「とにかくさつさと飯食って…んんっ、遅刻しないようにしろよ」

声がかすれる。昨日は喉を酷使しすぎた。

委員長九条が言っていたカラオケだが、何だかんだで予定が合わずに、結局行われたのは昨日だった。

参加したのは俺の他に廉、九条、中島だ。「皆で」と言っただけに少人数だった。

クウコちゃんほどじゃないが、俺も最近の歌には疎い。沙夜のCD
シヨップ巡りに付き合ったりして色々勉強したつもりだが、あま
り上手く歌えなかった。

三人ともかなり上手だったが、何故か歌おうとせず俺にばかり歌わ
せようとしてきた。お陰で喉の調子がいまいち良くない。

「玲二、楽しそうだね」

「そうか？」

適当にごまかして俺も下に降りる。

裕太の言う通り、昨日も楽しかったし、今日も楽しみだったりする。
友達がいるってこんなに良いものなのか。

八時五分。いつもギリギリの時間に来ていたため、この時間に登校
するのは初めてかもしれない。

「いや、文化祭二日目は泉に会いに早めに登校したつけ。

教室に入ると、クラスにいる人のほとんどが視線を向けた。

少し「うつ」となる。でも廉がいる。中島も九条もいる。大丈夫だ。
怖がる事は無いぞ、俺。自分に言い聞かせながら足を動かす。

「中村君おはよう」

予想に反し、最初に声をかけてきたのは、話した事もないクラスの女子だった。

「え、あ、おはよう」

「おーっす玲二！」

続いて廉がやってきて、肩に腕をまわしてくる。

そのままの状態で俺の席（窓際一番後ろ）まで移動。動きにくいが嫌では無い。

俺の席の前には九条が陣取り、その隣には中島が座っている。廉は俺の隣の席に座った。

ちなみに誰一人として自分の席に座っていない。

「おはよう玲二君」

「おはよう。中島も、おはよう」

「うん、おはよう」

自分が友達と挨拶をしている事にただ感動する。ちょっと涙が出てきそうだ。

「声がちょっと変ね」

「元凶は誰だと思って…」

そう言っただけで睨みつけてやると、九条はクスクスと笑った。

「でも昨日は驚いたなあ。中村君、意外と歌が上手なんだもん」

中島はそう言うが、絶対この三人の方が上手い。
妙な所での謙遜は止めた方がいいぞ。俺がみじめになる。そう思ったが口には出さなかった。

「ちよつと新塚、そこどいてよ」

横から声が割り込んできた。

見ると俺の隣の席に座る女子が立っていた。髪の色は薄いし、制服も着崩しているし、結構苦手なタイプだったりする。
観察していると結構真面目でいい人なんだけど。

「おっはよ」

一瞬誰に向けられているのかわからなかった。
その目が俺を見ているのに気づき、慌てて返す。

「おはよう」

えーと、誰だっけ。他の女子から「百合」って呼ばれているのは聞いていたけど。

「おーっす立花。ちよつと席借りていい？」

なるほど、立花百合っていうのか。

「やだ、どいて。ってか何、カラオケの話？」

「昨日この四人で行ったんだ」

「へえ、中村君も？」

廉を押しつけて自分の席に座った立花と、九条と中島で会話が始まった。何て言うんだっけ、ガールズトーク？ 男が立ち入る隙って本当に無いんだな。

「ねえ、今度あたしも行っていい？ 中村君の歌とか聞いてみたいかも」

そう言つて笑い掛ける立花を、純粹に綺麗だと思った。見た目で判断した俺を呪い殺したい。

それからホームルームまで五人で話し、いつの間にか俺のアドレス帳に一人増えていた。

「中村君はさあ、好きな子とかいないの？」

休み時間の度に立花と話す。隣の席だから話しやすいってのもあるが、前から立花は俺と話してみたかったらしい。

俺が人を避けている雰囲気をガンガン飛ばしていたから、話すのを躊躇われたとのこと。本当に申し訳ない。

「それはそれは…いきなりだな」

ぶっちゃけ今は、友達が出来て嬉しい。それだけだ。

「結構カッコいいんだから、彼女なんてすぐできるよ」

「いや、まだ俺を化け物だと思ってる人なんて沢山いるでしょう」

「カッコいいのは否定しないんだ？」

「ああいや、えーと、そうでもないでしょ。前髪つざいし」

そう言つて自分の前髪をいじる。人と関わらないように生きていたから、前髪は目が隠れるくらいがデフォルトになっている。

「今度ばつさりと切つてきなよ、すつきりするよ」

「二人で何、仲良く話してるんだ？」

二人で話している所へ廉がやってくる。その後ろには中島。

そう言えば九条は先生に呼ばれていたな。委員長つてのは大変だ。

「そついや新塚、あんた中村君と仲良いよね。何か無いの？ こつ、面白エピソードみたいなの」

「いやいや何言つてんだよ」

「面白エピソードか、そうだなあ……」

「お前も答えなくていいし！」

俺は幸せだ。友達がいて、何でも無いバカみたいな話で笑つて、楽しく過ごして。

ふと、ポケットが小刻みに震えているのを感じた。
携帯電話。それもこの振動パターンは、“対策室”関係だ。

「ちよつとごめん」

窓からベランダに出て電話に出る。

『もしもし、今大丈夫かい？』

相手は佐藤さんだった。

対策室の電話からとは珍しい。

「どうしたんですか？」

『それが、たつた今すごい規模の邪気が観測されて』

すごい規模の邪気。

一瞬龍を思い浮かべるが、すぐに首を振った。龍は自分で浄化できると言った。大丈夫なはずだ。

『近くにこれまたすごい大きさの妖気の反応があるんだ』

「それって…」

『ああ、玲二君が前に言っていた龍かもしれない』

「…わかりました、すぐに行きます」

佐藤さんから場所を聞き、通話を切る。

教室に戻ると、何やら廉が不安そうに俺を見ていた。

「悪い、早退する。先生には適当に言つといて」

「早退つてやつぱり…」

廉はわかっているのだろう。だから不安そうな表情をしていたのか。中島だって多分わかっているだろうし、立花も何となく気付いていそつだ。

三人を安心させるために力強く頷き、カバンを持って教室を出た。

「玲二君？」

途中で九条とすれ違った。

走りながら両手を合わせた。

「ごめん、早退する！」

玄関を出ると、再びポケットに振動。

今度は泉からのメールだった。

「『気をつけてね』、か」

携帯電話をしまい、今度は意識を集中させる。

佐藤さんから聞いた場所はここからかなり距離がある。俺の足では常人より速いとはいえ時間がかかる。旋風を使う事にした。

俺が強く念じれば旋風は自走してくるらしい。

人目につくと厄介だからあまり呼びたくはないんだけど、仕方あるまい。

「…来たか」

エンジン音が轟き、あっという間に旋風が走ってきた。
カバンを収納し、ヘルメットをかぶるとすぐに旋風を走らせた。

邪気をたどるまでも無かったのかもしれない。

街に出ると“何か”から懸命に逃げる人々に出くわした。道路は渋滞になっており、車から降りて走り出す人もいる。

車の間を縫うように走り、人々が走ってくる方向を目指す。

（玲二、あれ！）

木霊の声に顔を上げる。

高層ビルに巻きつくように、青い体を取り戻した龍が大きな咆哮を上げている。

龍の視線の先には、ビルの屋上、ヘリポートにたたずむ四足歩行の巨大な妖怪。

一目見た感じでは紫色の虎。背中には黒い雷雲のような物が纏われており、時折雷が発生している。

ゴオオオオオオオオオ！！

妖怪が叫ぶと同時に口から電流が放たれ、龍がそれを受け止める。

「龍！」

旋風を停めて、龍の尻尾の真下まで走る。

声が聞こえているのか不安だったが、龍の顔がこちらを向いた。

「こ奴は雷獣。オロチの守護獣の一体だ」

「守護獣…！？」

龍の口から突風が放たれる。

が、雷獣の周りには電流を纏った結界のような物が張られているように、龍の攻撃はそれに弾かれて四方八方に散らばった。

「大層な肩書きだな…かなりの強敵なんだな」

（そうだ。そこらの邪気妖怪とは比べ物にならないほどの力を持っている）

「でも放っておくわけにはいかないな。変身！」

体中から炎を噴き出し、火影に変身。

旋風に跨ると旋風は馬のように前輪をあげ、嘶いた。

アクセルをひねると、旋風はビルの壁を平地と変わらぬ速度で登り始めた。

旋風のボディが炎を纏う。その炎は馬の姿を象っている。

「火影ノ太刀！」

両手に出現した二本の太刀。二本の持ち手を合わせ、鎖が巻きついて諸刃の大太刀に変化する。

片方の刃には炎が、もう片方には黒いオーラが纏い、いつでも技を

放てる。

「いくぞ、旋風！」

ビルの屋上に飛びだした。旋風が俺の体を跳ねあげ、俺は上空から雷獣を狙う。

大太刀を棍のように振り回し、勢いを付ける。

「はあああああああああ！！！」

刃と結界がぶつかり合う。

雷獣が咆え、電流が俺を襲う。

俺の後ろで龍が咆え、突風が俺を後押しする。

「くそつ、あの結界、レナの力で何とかなんねえか！？」

（妖の力で結界を破るには、あの電流が邪魔だ。それに雷獣の力ならすぐに結界を張りなおせる）

「だったら叩き割るしかねえな」

悪あがきに思い切り結界に太刀を叩きつけ、すぐに距離を取る。

太刀はすぐに消滅してしまうが、俺はすぐに別の札を取り出した。

「精霊鎧装！」

ビルの屋上付近を巨大な森が包み込んだ。木の根がどうやって生えているのかわからないが、とにかく霊の力を活かせるバトルフィールドは完成した。森の木々よ、雷獣の動きを封じてくれ！

「木霊、剣の出せる量の上限はあるか？」

『無いけど、玲二の妖気が切れてしまうよ』

「構うか。結界さえぶち破れれば、龍の攻撃が届く！」

木の枝や根が結界を取り囲むように伸びて行く中、俺は周囲の枝を次々と精霊の剣に変化させていく。

十…三十…五十…九十…百…二百…

無数の剣が雷獣を中心に展開されている結界を取り囲む。この量ならば隙も無い。

「ぐっ…」

『こんなに出すなんて、ありえないよ』

「精霊一体・マキシマムフォレストオ…スラアアツシュ…！」

二百一本目の剣を手に持ち、一気に駆け出す。

無数の剣が雷獣目掛けて放たれた。次々と結界に弾かれていくが、やがて結界に突き刺さる剣が出てきた。

「うおおおおおおおおおおおおおお！！」

緑色に輝く精霊の剣を、結界にたたきつける。
他の剣も同じように輝き、結界にひびが入る。

「龍！」

「ゴオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

龍の口から高温の息吹が放たれる。

それは俺を巻き込んで雷獣に直撃する。

「木霊、離れる！ 幻影・バーニングブレイク！」

龍の息吹を纏い、炎を集中させた右足で雷獣の顎を蹴りあげる。

雷獣の影が不気味に伸びて本体に迫った時、勝利を確信した。が…

ガアアアアアアアアアアアアアアアアア！！

雷が頭上から落ちる。

意識が消える直前、俺の目の前には雷獣の口から放たれた電撃が迫っていた。

第十六話 青龍 Divine beast

八月三十一日、午前一時半

ベッドの脇に置かれたサイドテーブルの上の時計は深夜を示していた。

しばらくボーっとしていたが、やがて記憶が戻っていく。

「っっ…」

それと同時に、体中を走る痛み。

雷獣に止めを刺したつもりになっていたが、最後の最後で電撃にブツ飛ばされた。

そのあと宙を舞った感覚はあるけど、それから全く覚えていない。高所から落ちると気絶するっていうし、やっぱり落ちたのかな。

「あ、玲二君おはよう。気分はどう？」

「あ？」

いまいち目の焦点が合わない。目をこすってぼんやりとした輪郭に顔を近づけて行く。

だんだんとはつきりしていくに従い、目の前の顔はクスクスと笑みを浮かべた。

「おはようのチュウが欲しいのかしら？」

「…ごめん、焦点が合わなかった」

次いでにやにやと笑う泉から顔を離し、もう一度目をこすりながら

欠伸を噛み殺す。

ちよつと低い声で「あ？」って言ってしまった。なんかヤンキーっぽくなったかもしれん。別に因縁つけてるつもりはない。え、ていうか…

「何でここにいるの？ あと、ここはどこだ？」

「本社に備えられた病院みたいなところかな」

ジオセントバードの本社ビルだそうだ。

そう言えば。妖怪絡みで起こった事故などでPW職員の怪我人が出た時は、ここで治療したりするんだっけ。病院に搬送されるよりも確実に金もかからないって、佐藤さんも言っていたな。

「で、何で泉がいるんだ？」

「いちゃ悪いのかしら」

「そうは言って無いけど、時間も時間だし」

ここは個室だし、と言おうとして止めた。またからかわれそうだ。そもそも泉も俺と同じ半妖だったな。それならウチの組織から何らかのコンタクトがあつて当然か。ここにいる事について何ら不思議な事は無い。いや、時間はおかしいけどな。

「…無茶しないでよね」

横からぎゅつと抱きしめられた。

泉は俺の肩に顔をうずめているため、表情はわからない。ただ、声は少し震えていた。

「ごめん」

「あなたがいなくなったら、悲しむ人はたくさんいるのよ？」

「…そう、かな」

「…うん」

肩が濡れていくのを感じた。

じんわりと温かい涙に、思わず泉の体を抱きしめた。

気付けば朝になっていた。

パイプ椅子に座りながら眠る泉を見て、多少なりとも罪悪感がこみ上げてくる。

「…あ」

姿勢が崩れそうになり、泉ははっと目を覚ました。

焦点の定まらない目で俺を見て、しばらくするとにっこり笑った。

「おはよう。気分はいかが？」

「おはよう。調子はかなり良いよ」

一応、これでも脊椎やら肋骨やらなんやらが折れたり傷ついたりしたらしい。

ここに運ばれる時点ではほとんど回復してるっていうんだから、何だかアホらしい。俺の妖気は身体能力の上昇に特化しているらしく、怪我の治癒等もそれに含まれているとか。

ちなみにこういった妖気の特性は今まで積み重ねられた経験によって変化しうる物らしい。大体十五、六歳で妖気の変化は落ち着くというが、そもそも半妖怪と妖怪では妖気の性質も違うし、半妖怪自体が少ないから明確な事は言えないとのこと。

「自分の怪我ならすぐに治せるの？」

「自分の、だけな」

勉強にしろ運動にしろ、辛い事を考えないよう自分のために努力してきたような物だから、妖気も自分本位の力に変質したらしい。

折れた骨も一晩でくつつくし、粉々になったり無くなったりしても三日もあれば再生しそうな感じだ。いや、そんな事態になった事が無いからわからないけど。

「それって結構便利かもね。私の妖気は他の人や物に対して力を行使するタイプだからなあ」

「それはそれで使い勝手がよさそうだけど」

太刀を使っている、刃に妖気を込めるのが難しい。いつも必要以上の妖気を込めてしまつて、なおかつ力任せに振るうクセがあるから、五回戦闘すれば三回は太刀が折れる。

何回か本部と掛け合つて、一応「俺の特性に合わせた武器」に調整

してもらってはいるんだけど、武器に俺が合わせられないっていう本末転倒ぶり。

木霊やレナがサポートしてくれる分、武器を使う戦闘はやっぱり妖とか霊の形態になった方が楽。

「さっさと退院して、対策を練らないとな…」

雷獣はまだ倒せていない。あの龍ですら互角に持ち込むのが精一杯の強敵だ。

まだ札から龍の妖気を感じ取る事が出来るから倒されてはいないよ
うだが…。果たして俺が敵う相手なのか。

「…龍の鎧を纏うっていう選択肢も、あるんじゃない？」

青い龍の札をじっと見つめている俺を見て、泉がポツリと言った。
それも考えていなかったわけじゃない。だがこの力を使いこなせる
かどうか、はつきり言えば自信は全く無い。

「この力、結構ヤバそうだ。泉もわかるでしょ」

「…うん」

俺よりも遥かに敏感に妖気を察知できる泉ならば、この札からあふ
れ出る妖気を感じているだろう。

何度イメージしても、暴走して自滅するビジョンしか浮かんでこ
ない。

「…まあ、最終的にはなるようになるね、だ」

「無茶だけはしないでね」

「わかつてる」

火影の札を握り締め、部屋を出る。

オロチの守護獣、雷獣。今までの中で間違いなく最強の妖怪。

（勝算はあるのか？）

「あつても無くても、勝つしかないだろ」

決意を固め、走りだす。

旋風のモニターが示すポイントを目指し、道路を走る。

途中、通学途中と思われる廉達とすれ違った。声をかけられる前に通り過ぎたが。

（皆が気になる？）

雷獣の騒ぎで昨日の戦闘現場だった高層ビルは大破。

あんなのがまた街中で暴れまわったら、今度はもしかしたら皆に被害が及ぶかもしれない。

人を守りたい。今までもそう思って戦ってきたつもりだが、これほどまでに強く思ったのは今回が初めてだ。

に覆われ、体色も濃い青に変化していく。今までの形態には変化の無かった脚部にも新しい鎧が追加される。

足くびと脛をガードするように鎖が巻かれ、足の甲には爪のような物が伸びる。

同じようにナツクル部分にもそれぞれ五本の爪が出現。手の甲には龍の持つ宝玉をあしらった球体が出現。金色に輝いた。

「うおおおおおおおおおおお！！」

一瞬だけ鎧の隙間から青白い炎が噴き出し、変身が完了する。

凄まじい力。灼熱の炎。気を抜くと一瞬で呑みこまれそうなプレッシャー。

『はは…すごいぞ、玲二！ 私の力をここまで高めるとは…貴様、本物だな！』

楽しそうで何よりだ。

だがこちらはそれどころじゃない。雷獣の脅威なんか比べ物にならないくらい、龍の力が強大すぎる。

身に纏うと改めて実感する。その力の恐ろしさを。

「さすが、“神獣”の名に恥じない力…心強いが同時に怖くもあるよ」

『恐れる必要は無い。貴様の想い、その全てをぶつけてみる！』

「おおおおおおおおお！！」

再び体から炎を放ち、気合を入れる。同時に妖気を発散して戦いやすくしようとしたんだが、どういいうわけか妖気は無尽蔵に湧いて

くる。

俺が言うのも何だが、化け物か。

「火影エエエエエ!!」

雷獣が口から電撃を放った。ってか、あいつ喋れたのか。

『来るぞ!』

「ああ!」

炎を右手に集中し、電撃に向けて突き出す。

小さな爆発が起こり、電撃は俺の拳に弾かれて雲散霧消した。

続いて足に力を込め、一気に飛び上がる。空中を高速で移動し、雷獣との距離を詰める。

雷獣も飛びかかってくるが…

『空で我々を倒せるなどと思うなよ』

地上での戦いに特化された四足歩行の姿では、空中で自由に動く事など不可能。

対してこちらは龍の力によって地上だけでなく空中でも力を存分に発揮できる。

「はあああああああ…!!」

右足、左足、右足…一発一発に炎を込め、何度も雷獣を蹴りつける。苦しそうな呻き声をあげ、雷獣は地面に激突した。

「神獣の槍そう!」

右手から突風が噴き出した。それが止むと、そこにはいつの間にか巨大な長い槍が出現していた。

龍の姿が象られた装飾品が槍に巻きつくように施され、龍の頭部は槍の下。上部には三叉の刃が鋭く輝いている。

グアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！

雷獣の背中の雷雲から、雷がいくつも放たれた。

だが雷は全て槍に吸い込まれていき、妖気に変換されていく。その時初めて、雷獣の表情に恐怖の色が見えた。

「ぜええええええいつ！！」

巨大な槍を振り回し、雷獣目掛けて投擲。

見事雷獣を貫くと、空中に不思議な結界を作り出してそこに閉じ込める。

中では動きが封じられているのか、雷獣はピクリとも動かない。ただ、恐怖の眼差しをこちらに向けて、荒い息を吐いている。

「『神獣一体！』」

俺を中心に竜巻が発生する。

その勢いに乗って俺の体は雷獣を閉じ込めた結界に向かって行く。跳び上がり、右足に炎、左足に風を纏い両足突き出す。

「『テンペストドロップ！！』」

炎と風を纏った両足キックが、雷獣に直撃する。

槍のようにその体を貫き、俺は勢いを落とせず地上に転がった。肉

をねじ切り骨を砕く、気味の悪い感触が足に残っている。
背後で大爆発が起こり、雷獣は跡かたも無く消えてしまった。

「…どうなってやる」

火影は邪気だけを浄化するのではなかったのか。俺はまさか、妖怪を殺してしまったのではないだろうか。

『オロチとその守護者達は邪気そのもの。邪気を浄化すれば後には何も残らない』

「邪気、そのもの…」

『とにかく無事に浄化できたのだ。雷獣も救われただろう』

大気を揺るがすような邪気は無くなった。いつもの心地よい世界だ。だけど、どこか釈然としなかった。雷獣を救えなかったような気がして。

九月六日

無事に雷獣を倒したのだが、それから三日間俺は精密検査を受ける事になった。

一応重傷を負ったわけだ。何か異常が無いか、それと龍の力を使った事による妖気の変化が無いか等、検査は思ったより長くかった。

そして土日をはさんで今日、やっと登校できる。

「おっはよ、中村君」

「ああ、おはよう立花」

席に着くと、一週間前と同じように立花が話しかけてきた。

ああそうだった、これが俺の日常なんだ。少し嬉しくなって、意味も無く笑みがこぼれる。

「ずっと休んでたけど大丈夫？ ていうか何で笑ってるの？」

「いや、何でもないよ。ちょっとした幸せをかみしめているだけ」

「ふふっ… やっぱり中村君面白いねえ」

「おー玲二！ 久しぶりー！」

「玲二君、やっと出てきた」

「中村君、おはよう」

いつもの三人が集まってくる。これから楽しい一日が始まるんだろうな。

手に入れた力の巨大さも気になるが、どうにかなるだろうと、何気ない幸せが俺にそう思わせていた。

幕間巻 Intermission HOKAGE to REIKI

八月三十日午後五時十二分

「変身…」

PW関東支部兼、ジオセントバード本社ビル。

その中のフロアまるまる一つが巨大な体育館のような空間になっていた。

フロアの中心で、一人の人間を中心に猛吹雪が発生する。やがてそれが止むと、中心には人間ではない、異形の姿が立っていた。

白い鎧に青の装飾品。一見すると色の違う火影のようだが、火影の特徴である鎖は、手首や足首など、最低限の場所にしかつけられていない。

「それにしても助かったよ。やっとこれを使う気になってくれて」

部屋の上部にこの空間の室温その他を制御するコントロールルームがあった。

その窓から佐藤が、異形を見て話しかける。佐藤の声はスピーカーを通して異形に届いた。

「仕方ありません。それに、火影だけでは不安ですから」

異形の戦士は続けて手に氷でできた槍を出現させる。

火影の使う神獣の槍とは違い、軽くて取り回しが容易そうだ。

「玲二君をどう思う?」

「彼はすごいですよ。他の妖怪を従え、彼自身の力も日に日に強くなってきた。まるで本物の妖怪に近づこうとしているような…」

「…本当かい？」

「彼もそんな事、思っていないですよ。無意識のうちに妖気が成長しているんじゃない？」

戦士が力を込めると、槍の表面の氷が砕け散り、中からまるで鋼鉄製かと思ふ程の硬い槍が出現した。

どうやらこれで槍の完成らしい。戦士はバトンのようにくるとまわし始める。それと同時に大気中の水分が凍り、それが槍にあたってパチパチと音になる。

「面白いですよ、中村玲二君。妖気自体は自分に向けられた力なのに、その力を他の、自分の周りの人のために使おうとしている」

「…まだ彼の妖気は変化しようとしているのか」

「まだというよりは、これからなのかもしれませんね」

バシッ

槍を振り回すのをやめると同時に、槍が水となって足元に落ちる。水はねを気にする事も無く、戦士はゆっくりと佐藤に向かって歩き出した。

「彼は“特別”ですから」

氷の鎧がはじけ飛ぶ。

光が反射し煌めく氷のつぶての中で、黒い長髪が優雅になびいた。

「玲二君を頼んだよ」

「もちろん。そのための決心ですから」

幻鎖に似た鎖が、その者の手の中でジャラリと音をたてた。

第一部 火影之章 完

第十七話 災厄 G i r l o f f r e n z y (前書き)

第二部 冷姫之章

悪しき力、妖の心を食い荒らし時、

破滅の氷出で来て、世は氷結の彼方へと進む。

第十七話 災厄 Girl of frenzy

「なんで俺、こんな事になってんの」

九月六日月曜日の放課後

久々に登校した俺を待っていたのは友人たちの笑顔だった。
それは良いのだ。感激すらしている。

「今日、皆でウチの喫茶店においでよ」と立花に誘われたのも、問題無い。
だが…

「うーん…やっぱ似合うねえ」

「中村君…」

「それ反則だわ、玲二君」

「……………」

俺の姿を見て満足そうに笑う立花。顔を赤くして手で口を押さえている中島。同じような感じの九条。廉については言葉すら発していない。

俺の姿はというと、何の因果かウエイトレスの格好をさせられている。ウエイターでは無い、ウエイトレスだ。しかもここはメイド喫茶という所。ついでに言うとならスタッフ専用の更衣室だ。

「背の高いメイドはどうかあったって思ってたけど、中タイケるかも」
終始笑顔の立花に「はあ」と抑えられない溜息がこぼれた。

どうしてこうなったかというと、話は一時間ほど前にさかのぼる。授業が終わり、掃除当番でもないので帰り支度をしていると、突然立花が「今日、皆でウチの喫茶店においでよ」と話しかけてきたのだ。

聞けば立花の父親がいくつかの会社を持っていて中々大きな家らしい。で、いくつか持っている喫茶店の一つに、今回お邪魔したというわけだが。

「何で？」

何が何だかわからなくなって、「何で？」としか出てこない。

そんな俺の様子に立花がぷつと吹き出す。ちなみに他のメンツは固まっているままだ。

「中村君って結構顔立ちがいいからさ、似合うと思ってたんだよね」

「よくサイズが合ったな……」

突っ込みどころが違う気がするが、何かもう疲れた。

おい廉止めろ、携帯構えるなシャッターきるな。他の皆も止めてフラッシュ焚かないで。

「痩せてるから問題ないかなあって。でも結構ガツシリしてるんだね。鍛えてる？」

服越しに体をペタペタと触られる。胸板のあたりで指がさわさわと動いてくすぐったい。

「足もしっかりしてるんだ。スカートはやっぱりロングの方がいい

ね」

そりゃ、ミニスカートからがっしりした足が見えているなんて嫌だろっ。

ってかそうじゃなくて、何で俺がこれを着ているんだ。似合うから？ ふざけんな。

「あとはウィッグつけて…うんうんバッチリ。お化粧しなくても大丈夫っぽいね」

「ありえない…あんなに鍛えてあるのに、どうして女の子っぽいシルエットになるの…」

「そりゃ、服が女物だからじゃねえの？」

「男子と女子とじゃ骨格が違うし、骨格が違えばシルエットも変わるでしょ。服を着ていてもそういう違いは出るはずなんだけど」

「なんていうか中村君、女の子の服の着こなしが上手だよね…」

あっちでは廉、九条、中島がよくわからない論議をおっばじめている。

「はあー、やばい！ 中村君凄く綺麗だよ」

「ああ、そう…うん…」

「ちょっと試ってみて！ 『お帰りなさいませ、御主人様』 って！」

「嫌だ！」

「ほっほう、じゃあこの姿を岡山さんに送っちゃおうかなあ…新塚、写メはあるよね？」

「おう、ここに…」

「お帰りなさいませ、御主人様」

泉にバラされるだと…そんなの絶対にごめんこうむる。

またからかわれる。一週間はネタにされる。最近はPWにも顔を出してるから、佐藤さんや香苗さん、果てはクウコちゃんとかにも伝わったりして…。クウコちゃん、悪気無しで女装強要しそうだよなあ、『玲二君の女の子の姿、とても可愛かったですよ！ほら、ウチの衣装も着てみてください！……え…嫌、なんですか？…』涙目になったら断れるか！

「今のどう思う？」

「感情がこもって無いかなあ」

「あの、もうちょっと声のトーンが上だといいと思う」

「もう一回だ玲二！」

順番に九条、中島、廉の感想。おいちよっと待てふざけるな。

「いやおかしいだろ。何で俺が」

「写メ」

くそ…何だこれは…。友達ってこんな事するのか！？
な、何かだまされた気分だ…

（女声でさっきの言葉を言えばいいのだろうか？）

りゅ、龍！？

（私に任せてみる）

突然、龍の意識が俺の体の中に入ってきた。

俺の意識はきちんとある。が、体を動かす事が出来ない。

俺の体は龍の意のままに動き始めた。スカートをただし、体の前で手を組む。

「お帰りなさいませ、御主人様っ！」

あ、龍ってこんな可愛い声が出せたんだあ。っていうか今、龍に乗っ取られてる？

そんな事しか考えられなかった。

自分の口からそんな声が出たなんて、認めたく無かった。

「「「「可愛い…」「」「」

「は、はは…」

おい、龍。後で覚えておけよ。

そう思ったが、龍の意識はどこかに行ってしまった。

「カッコいい、綺麗、可愛い…まさかとは思っていたけど、中村君…やるわ」

「行つてらっしゃいませ、御主人様」と実際のメイドに見送られて店を出る俺達。

四時に来たのだが、店を出る頃には六時を回っていた。夕飯の支度は華さんに頼んでおいたから大丈夫だとは思うのだが…。それにしても疲れた。

「来年の文化祭は、玲二に給仕やつてもらわないとだな」

「男の格好で頼む」

はあと溜息をつく。

「そつだ。玲二君、今週の土曜空いてる？」

「土曜？ …いや、空いてるけど」

「皆でプールにでも行かない？ 夏は予定合わなくていけなかったんだけど…どうかな」

プールか。行ってもいいんだけど…うーん。

ああでもせっかくの誘いだし…別に都合がつかないわけでもないし。…うん。

「いいよ」

「良かった。じゃあ、土曜の十時に現地集合ね。場所は後でメールするから」

「わかった。…あ、俺はここで曲がるから」

話しているうちに曲がり角が見えた。
別れるために皆の方を向く。

「そうなんだ。結構近いの？」

「五分くらいかな」

「へえー、今度行ってもいい？」

「いや、施設だからな。一応一人部屋だけど…何も無いし…」

華さんや皆の迷惑になったりしないだろうか。沙夜や裕太達も遠慮しているのか、あまり友達を連れてこないし。
うーん…でも対人関係について色々心配してくれた徹さんや華さんには、友達の事を見せたいし…帰ったら聞いてみようかな。

「そっか。じゃあまたね、玲二君」

「おう、また明日」

「じゃあな！」

「じゃあね、中村君」

「バイバイ」

三人と別れ、俺は家に戻る道を歩く。
するとすぐに、俺の勘が邪氣の出現を知らせる。顔をバツと上げ、あたりを見渡す。

（何だ…いきなりこれほどの邪氣が…）

（しかも近い。身構えておけよ玲二）

レナと龍も警戒態勢にはいつている。

どこにいたんだ。邪氣をたどろうとしても、まるで邪氣に囲まれているかのようにあらゆる方向からそれを感じる。

次第に息苦しくなってきた。サウナに入っているような感覚。息を吸うと邪氣が入ってくるようで気分が悪い。

そして、そいつらは不意に俺の前に現れた。

「貴様が火影か」

そこにいたのは巨大な四足歩行の獣と、一人の少女。
暗くてよく見えないが、彼らから伝わる邪氣はおぞましいほどに強力だった。

「お前らは…」

俺の質問に、少女が一步前にでる。

その姿を見た瞬間、俺は思わず膝をついてしまった。怖い。怖いのに、目はカッと見開かれて少女から離れようとしないう。いや、離れない。

「私たちはオロチの守護獣。久しぶりねえ、玲二？」

語尾にハートが付きそうなそのセリフに、嘔吐しそうな感覚を覚える。

体中からぶわっと汗が噴き出て、ガクガク震えはじめた。

「なんで……」

（どうした！？ 落ち着け玲二！ 何をそんなに恐怖して…）

（九尾も落ち着け。玲二、あの獣は麒麟。そして女の方は狗神が憑いている）

レナと龍の言葉も耳に入らない。

怖い。ただひたすらに、目の前の少女が怖い。

「案ずるな。我々は戦いに来たわけではない」

「無粋よ麒麟。私と玲二の感動的な再会を邪魔するのかしら？」

「そう思っているのは貴様だけだろう」

少女はニヤリと笑い、ゆっくりとこちらに向かってくる。

思わず後ずさる。が、足に力が入らず尻もちをついてしまう。

「どうしたの玲二。私よ、私。御堂薫だよ。忘れちゃったの？」

その名前を忘れるわけがない。
俺の脳裏に小学生の頃の記憶がよみがえる。

「あ……あ……」

「うん、そうよ。皆に蔑まされて、独り泣いていた玲二を優しく慰めてあげた、薫ちゃんよ」

唯一、俺を避けなかった少女。いつも俺のそばにいて、「気にしないで」と言葉を掛けてくれた。
だが――

玲二は私だけの物。他の人間なんて気にする必要はないの。
ほら、こっちを向いて。――玲二、愛してる。

彼女から感じたのは狂気じみた愛だったのだ。

「会いたかった…玲二。はああ、やっぱり玲二の匂いが一番落ち着くなあ」

気がつけば薫は、俺の体を地面に縫い付け、馬乗りに跨っていた。
そして顔を首筋に押し付けて匂いをかぐと、舌を出して首から頬を舐め上げた。

「っ！　う、あ……」

「えへへ、かぁーわいいっ」

薫の舌は俺の唇をこじ開けると、口内へと侵入した。

歯ぐきをなめられ、舌を絡められる。気がつけば俺の目からは涙があふれている。

「うっ」

薫が顔をしかめた。口の中に鉄の味が広がる。薫は口を離して、舌をぺろっと出した。

「いったーい、舌をかまないでよう」

「げほっ、げほっ」

痛がる薫をよそに、俺は口の中にたまった薫の血を吐きだす。

「でも…えへへ、玲二からの痛みなら全然痛くないよ。むしろ気持ちいいくらい。はあ、玲二とキスしたら何だか濡れてきちゃったかも…」

くねくねと体を動かし、恍惚の表情を浮かべる。

薫は俺の股間に手を当てて、ニヤリと口角をあげる。

「やめろ…やめてくれ…」

「玲二に手を出すな、女あ!!」

無意識に炎を出していたのか、右手に触れていた札が燃え、レナの声が轟いた。

レナは俺に寄り添うように立ち、うなり声をあげている。

薫はそれを一瞥すると、途端に不機嫌な表情になる。

「何あんだ。私は玲二と愛し合ってるんだから、邪魔しないでよ」

「貴様が一方的に迫っているだけではないか。それを愛だとはざくか？ はっ、くだらない」

「ム力つく。麒麟、コイツやっちゃっていいよ」

「今回の目的は戦闘ではないと言っただろう。引き上げるぞ」

「はー、つまんない。まあいいか。玲二、また会おうね」

薫は最後にレナを押しつけ、唇を重ねた。
気がつけば薫と麒麟の姿はどこにもない。

「はあ……はあ……っ……ああ……」

恐怖でどうにかなりそうだった。

そばに寄り添うレナを抱きしめ、暖かい体毛に顔をうずめる。

「玲二……」

心配そうに声を漏らすレナは、尻尾を回して俺の体を包み込んだ。

一方、玲二と別れた廉達はそれぞれの家路についていた。

家まで少し距離のある廉は電車通学のため、駅へ向かっている最中だ。

「そっぴや珍しいよなあ」

「へ？」

隣を歩いているのは美沙。

彼女の家は駅のそばにあるため、廉と一緒に方向になるのは必然だった。

美沙は廉の突然の言葉に変な返事をしてしまう。

「何だかんだで中島が、玲二に話しかけたクラスメイト第一号だからな。あ、俺は除くけどな」

「そっぴなの？」

「そっぴなの、って…あん時の玲二はまだ『こっち来るな』みたいなオーラをバンバン出してたじゃんか。それに中島はそんなにハキハキしてる方じゃないから…あ、ごめん」

「うっぴん、そっぴなの気にしないよ」

「ごめん。でもまあ、ちよっぴと意外だったよ」

少しバツの悪そっぴな顔をする廉だが、美沙は本当に気にしていないようだった。

「私としては特別な事をしたつもりは無いんだけど……それに、あの後悪いことしちゃったのは私だし…」

タオルを落としたことをまだ悔やんでいるのだろうか。
当の玲二は全く気にしていないのだが。

「そんな事、玲二は気にしないと思うけど」

「中村君も、そう言ってくれたけど……う、うう……」

突然美沙が顔を赤くして、照れているような仕草をし始めた。
学習合宿の時にサトリに襲われ崖の下に落ちた際、一晚玲二と過ごした事を思い出しているらしい。

これでもわりと勘の鋭い廉は、ピンと来たようだ。

「…玲二のこと、好きなんだ」

「そ、そういうわけじゃ……えっと……」

「まあカッコいいしなあ。体だつて鍛えているし、頭もいいし、優しいし……何だあいつ、完璧超人じゃん。くっそお、羨ましいなあ」

隣でうなる廉を見ながらほほ笑む美沙。

廉の口から玲二の良い所が出るたびに頬を赤くしている。

「ホント、話せば普通なんだよな。普通に笑うし、普通に怒るし」

「うん」

「そうだ。あいつ、周りの事に対しては鋭いけど、自分の事に関してはかなり鈍いからな。それに自分が好意を向けられるっていう事を『あり得ない』っていうくらいだから、中々手ごわいぜ」

「…頑張る」

（何だかんだで委員長や立花も気がありそうだしなあ…くそっ、玲二なんか爆発しちまえ）

心の中で友人を呪っていると、突然周りの灯りが消える。

停電だろうかと思って見渡してみると、少し離れた街頭はいつも通り輝いている。

「この辺だけ…？」

身を寄せ合う二人の前に、奇妙な人型の何かが現れた。

全身を藁のような物に包まれ、内部が不気味に発光している。体の所々から釘のような物が飛び出している。

「わら人形…？」

「まさか、妖怪！？」

自然に、廉の腕が美沙をかばうように広がった。

美沙はカバンを抱きしめ、二、三步後ずさる。

（玲二はいない…俺だけで中島を守るか…！？）

わら人形の妖怪の手が燃え、中から炎が噴き出した。

それと同時に街頭の灯りが消え、妖怪の光が強くなっていく。

「灯りを吸収している…」

突然、妖怪が廉に向かって炎を放った。

咄嗟の事に動けない廉。目をつぶり、これから襲いかかるであろう熱さと痛みに歯を食いしばった。

だがいくら待っても、炎は廉の体を掠りもしない。恐る恐る目を開ける廉。

「……………」

何も話さず、妖怪と廉達の間割って入る人型がいた。

聞きなれた鎖のこすれる音に顔をあげる廉だが、そこにいたのは廉の知る戦士ではなかった。

白い鎧に青の装飾品。もぎ取ったのだろうか、妖怪の右腕だったらしいわらの束が氷漬けになって、その戦士の右手に握られていた。

戦士が左手を掲げると同時に、この季節には似つかわしくない冷たい風が吹き抜ける。

瞬間、目を閉じる廉。次に目を開けた時、そこには戦士も妖怪もいなかった。

「…今のは……………」

前髪の先端が少し凍りついていた。

それからすぐに生温かい風が二人の体を包み込んだ。

第十八話 火盜 Fire absorber

「れいじくんは、好きなことになっちゅうしちゃうんだね」

「うーん、そうかも」

幼稚園の砂場で山をつくっていると、同じさくら組のいずみちゃんが話しかけてきた。

「そういえばこうやって砂場で山を作るの、かれこれ一週間はやってるっけ。」

「わたしもいつしよにあそんでいい？」

「いいよ。でも、よごれちゃうよ？」

「れいじくんだってもうよごれてるじゃん！ えいつ」

いずみちゃんが軽く押してきた。突然の事に俺は思わず尻もちを付く。

お気に入りの半ズボンが泥まみれ。だけどいずみちゃんの笑顔を見ていたら、そんなことどうでもよくなった。

「わたし、れいじくんのことすき！」

「ぼくもすきだよ！」

あれ、僕？ …そうか、幼稚園の頃はまだ自分の事を僕って言うていたっけ。

これは夢か。そういえばいずみちゃんっていう、仲のいい子が居た

な。

「…んー」

土曜日の朝。目は覚めたが起きるつもりになれず、まどろみの中でぼんやりとしていた。

九月と言えどまだ暑い。薄い毛布一枚で事足りる。

薫に出会ったショックも、日を追うごとにだんだんと和らいでいった。あれから一度も会ってないが、守護獣の狗神とやらが憑依しているのなら、また会う事になるのだろう。思わず三体の妖怪の力が込められた札を握り締める。少し安心できた。

それにしても懐かしい夢を見た。懐かしいと言っても、幼稚園の頃の記憶なんて曖昧で、あれが本当にあった事なのかよく覚えていないけど。

いずみちゃん。いずみ、か。泉じゃ、ないよなあ。いずみちゃんの姓は岡山じゃなかった気がするし。

「まあいいや…ふああ…」

朝食の当番は沙夜だし、今日はゆっくり過ごそう。そう思っていたが、何やら下の方が騒がしい。誰かが訪ねてきたのだろうか。すると今度はドタドタと階段を上がる音がする。沙夜の足音だろう

か。

「玲二！」

ビンゴ。やけに慌てた様子の沙夜が俺の部屋に駆け込んできた。別に俺は気にしないが、ノックはしような。

「どうしたんだ、朝から騒がしいぞ」

「あ、ごめん。…じゃなくて、誰あの綺麗な人！」

「は？」

誰、と言われても俺の目の前にいるのは沙夜しかいない。首をかしげていると沙夜は俺をまくし立てた。

「早く起きて！ 何か、玲二君いますかって女の人が来たの！ 誰？ 彼女！？」

「いや、彼女はいないけど…女の人？」

真っ先に思いついたのは香苗さんだ。でも何か用だろうか。クウコちゃんという線もあるが、俺の家を教えた事はない。まあ、妖気をたどれば簡単にこれそうだが。

「ホントに？ ホントのホントに彼女じゃないの！？」

「本当だって、とりあえず落ち着け…うわバカやめろ」

「おはよう、玲二君」

沙夜に肩をつかまれ揺さぶられているうちにベッドから落ちて背中を床にたたきつけた。

肩をつかんでいた沙夜も引つ張られるように俺の上に倒れる。

そこへ聞き覚えのある声がしたと思えば、そこに立っていたのは泉だった。

…そう言えば失念していたが、コイツも妖気をたどれるんだった。

「あら、お邪魔だったかしら？」

「いや、大丈夫だ。おはよう。沙夜、大丈夫か？」

「う、うん……」

大声を出して少し興奮しているのだろうか。真っ赤に顔を染めた沙夜は俺から飛び退くと、泉にペコリと頭を下げて部屋から出て行った。

「可愛い子ね」

「そうかもな」

「そうかもって、何？」

「まあ、身内鼻肩している分を引いても、可愛いと思うよ」

「身内、ねえ……沙夜ちゃんも大変ね」

「何が？」

「何でもないわよ」

俺と一緒に床に投げ出された毛布をベッドの上に戻し、さあ着替えようとして、はたと思う。

「何でいるの？」

「プールに行くんじゃないの？」

「ああ、そう言えばそうだったな」

時間を確認するが、まだ待ち合わせには時間がある。

「で、何で泉がいるかって話だよ」

「私も行くから」

「なるほど。でもどうして俺の部屋に」

「女の子が起こしに来てくれたら、少しは喜ぶものじゃない？」

「…そうですね、ありがとうございます」

ダメだ、とりあえず従っておこう。

しかしたまに泉の言動がよくわからなくなる時があるんだが…
いや、この際置いておこう。それよりももっと重要な事があるんだ
った。

「どうしたの？ 何か釈然としないような表情をしているけれど…
具合でも悪い？」

「いや、そうではないんだが…プール、プールだよなあ…」

「うん？」

「…………俺さあ、泳がないんだよね」

「……………え？」

「……泳がない！？」「……」

待ち合わせの場所で、廉ら四人は同時に叫んだ。

ところで廉が「完璧じゃなかった…よっしゃあ！」とか言っているんだが、何の事やら。

「まあ、私もそこまで泳ぐつもりはないし、今日はゆっくりすればいいんじゃない」

「泳げないくらい、何て事ないよ。私なんて、運動はからっきしだし…」

「それにしても中村君がねえ。ま、人間は一つくらい弱い所がある方が魅力的だよ」

順番に九条、中島、立花だ。

俺のせいで気を使わせてしまったら申し訳ないんだが、こういう事を言っとそれはそれで怒られそうな気がする。

「とにかく入ろうぜ」

プールに入り、男女に別れて更衣室へ向かう。

じゃあ後でね、と女子グループが手をふって更衣室へ入ると、途端に廉が真剣な表情になる。

それはまさに…

「…これから覗きでもするのか？」

「違いよ！」

少し崩れたが、また真剣な表情に戻る。

これは何かあったな。とりあえず更衣室へ移動しながら話を聞く事にする。

「この前、駅で妖怪に会ったわ」

「え…」

廉が妖怪に襲われたとは初耳だ。しかも俺の知らないところで。

聞けば俺が薰と麒麟に会った時間だ。あの時の状態じゃ確かに廉の方に出た妖怪を探知することは不可能だから、俺がわからなかったのもうなずける。

だが邪気妖怪が出れば佐藤さんなり香苗さんなりが連絡してくるはずなのに…。

「灯りを吸収する妖怪だったんだけど、俺と中島に襲いかかってきたときに、玲二とは違う火影みたいな奴が割って入って、どっちも消えちゃった」

「火影みたいなの…？」

「うん。炎を使ってる感じじゃなかった。多分、氷だと思う」

「氷の戦士…」

PWの新たな戦力か？ 佐藤さん達が連絡をよこさなかったのも、それが理由なのだろうか。

それにしても連絡の一つくらいは入ってもよさそうだが…。まあ単に忘れていただけかもしれないし、そもそも俺は組織の末端だ。知らせる必要が無いと上が判断したのかもしれない。

「玲二も知らないみたいだな…とにかく知らせておこうと思ってさ」

「そうか。いや、二人が無事でよかったよ。後で佐藤さんに聞いてみる」

「おう。じゃあさっさと着替えようぜ」

「そうだな」

廉の言った事が気になりながらも、服を脱いで水着を着る。

どっちかと言えば、これからプールに入る事が俺にとっては大変なことなのだが。

「お待たせー！」

プールサイドで廉と二人で待っていると、後ろから九条の声が聞こえた。

振り向くとそこには水着に着替えた女子四人の姿が。

「どうよ新塚？」

「おおおお！ 委員長も中島も岡山さんも似合っているぜ！ ぐぼあっ！？」

「…中村君。あたしの水着、どう？」

こめかみをピクピクさせた立花が聞いてきた。

後ろで廉が頭を押さえてしゃがみこんでいるのは、この際無視しておこう。

「いいんじゃないか？ 似合っているよ」

「ありがとう」

しかし、いつもは制服に隠されていてわからないが、みんなスタイルがいい。

特に泉なんかは比較的スレンダーだと思っていたのだが、わりと双丘の主張が激しい。うう、ちょっと前に抱きしめたのを思い出して

しまった。顔赤くなつてないよな？

（バカ者め…）

（九尾、妬いてるの？）

（ウブだな。可愛い所もあるじゃないか）

（うるさい！）

人の意識に割り込んで喧嘩なんかするなよ。あと龍はレナをからかわない。

「な、中村君…」

「何だ？」

「泳ぐの苦手なんだよね？ 良かったら私が教えてあげるけど…？」

む、無意識なのだろうか？ 中島が体の前で手を組んで、上目遣いで俺に提案してくるのだが…

その格好は胸の谷間を強調させてるし、今気付いたが中島が一番大きかった。胸囲的な意味で。まさに驚異的な胸囲。うわなんでもないですごめんなさい。

「玲二君、どこ見てるの？」

泉は俺の耳に顔を寄せて呟いた。

「えっち」

「べ、別にそういうわけでは…」

「あうう、中村君、ごめんなさい！」

「ああいや、中島が謝ることじゃ…」

（こちらの中々ウブだな）

（は、はは…）

（バカバカ！ 玲二の大バカ！）

レナ、キャラ変わってるぞ。

「…玲二君」

泉が再び耳元で囁いてきた。

思わず身構える俺だが、表情は先ほどとは打って変わって真剣な顔。睫毛の一本一本まで見える近さに思わず見とれた。

「妖怪が近くにいるわ」

「なっ…」

近くにいる！？ レナや龍が気付いていないのに…

（ヒトリマだな…）

「気付いていたのかよ」

龍がポツリと眩き、俺は呆れたようにつつこんだ。

言わなかったってことは少なくとも被害は無いってことだよな。早めに言ってくれるに越したことは無いんだが…。

（すまない。九尾をからかうのが思いのほか楽しくてな、言いそびれてしまった）

（龍…いい加減に…！）

「わかった。被害が及ぶ前に浄化しよう。龍、場所はわかるな？」

（うむ）

「泉、てきとつに言い繕っておいてくれ」

「じゃあ、後でデートしてね」

「…買い物くらいなら付き合ってもいいよ」

「ふふ、気をつけてね」

カバンから幻鎖と札を取り出してプールサイドを駆け出す。監視員が何か言っているが、走るのは止めない。

龍と意識をリンクさせ、探知能力を上昇させる。

「あそこか…」

敷地内を囲む塀のすぐ向こうにある、大きな木。その枝の一本に、わら人形のような妖怪が立っていた。

わらとわらの間から、かすかな光が見えた。不気味だ。

「変身！」

ジャンプで塀を飛び越えると、火影に変身してヒトリマに殴りかかる。

見事に直撃し、ヒトリマは地面へ。それを追い、右手から炎を噴き出して飛び降りた。

（玲二！）

「なんだ…」

急に声を荒げたレナに何だよと言おうとするが、その前にヒトリマに拳を受け止められる。

それだけではない、ヒトリマは俺の炎を吸収し、不気味な光が一段と強くなった。

なるほど、火取魔ね。

木霊は近くにプールがあるから使えない。レナの鬼火も吸収されてしまう。

龍で行くしかないか。

「神獣鎧装！」

青の札を燃やし、同時に神獣の槍を出現させる。

俺の体が青い炎に包まれていき、それを覆うように龍を模した鎧が出現。

龍の咆哮とともに体から炎が噴き出した。

「この炎なら、吸収される前に勝てるな」

（ああ。だが気をつけろよ玲二。この炎はお前も喰らうのだぞ）

「わかっているさ！」

一撃で決めれば問題ない。

俺は槍を構え、再び炎を噴き出した。槍の先端が炎を纏い、やがて周囲につむじ風が出現する。

ヒトリマは龍の炎を吸収しようとするも、逆にわらが燃えだしている事に気づき、慌て始める。

「神獣一体！ スピニング…」

（玲二！）

「！？」

槍に竜巻を纏わせ、邪気のみを貫く必殺技スピニングトルネード。いざ槍を放とうとすると、龍があせったように声を荒げた。

そして気付く。火影の鎧がひび割れ、青い炎が漏れ出している。炎は鎧を溶かし、俺の体を燃やそうとしている。

「そんな…」

（落ち着け玲二。私も力のコントロールを…）

もしかすると、龍の力は火影の拘束具や幻鎖では抑えきれないのか。ということはつまり、俺は自分の妖気と龍の妖気を、己の力のみでコントロールしなければならぬ。くそっ、レナや泉からコントロールの上達法でも教わっておくべきだったか。

「仕方ねえ！　このまま撃つぞ！」

（やめる玲二！　そんなことをすればお前が…）

「スピニング…ぐっ…がはっ…」

右腕の鎧が弾けた。同時に炎が俺の腕を包み込み、燃やし始める。ヒトリマは好機と見たのか、回れ右をして逃げだした。

「ま、待て…！」

右手を突き出して炎を放つ。

次の瞬間、炎は消えて無くなった。そして周りの木々が一瞬にして凍りつき、地面には氷が張られた。ヒトリマは見事に滑って転ぶ。

「何だ…」

まさか、廉の言っていた氷の戦士か？

あたりを見渡していると、突然ヒトリマの輪郭がおぼろげになった。上空から飛来した一本の長い槍が邪気を貫き、凍らせる。

完全に凍てついた邪気は槍とともに爆破。ヒトリマはばたりと倒れ、中から小さな光の球体が飛び出した。

「…終わった…うつ…」

火影の鎧が剥がれ落ちると同時に意識が遠のく。気を失う直前、誰かに担ぎあげられるように運ばれているのがわかった。

「——誰…なんだ…？」

もう何も考えられない。
熱い——いや、冷たい。
俺は意識を手放した。

第十九話 冷姫 REIKI

とある山奥

数分前までは鳥が鳴き、木々の葉がこすれ合う音が響くのどかな山だったのだが、突然騒がしい音が鳴り始めた。地響きといってもいい。

その正体は、巨大な四足歩行の妖怪だった。

その妖怪の周囲を、木々を渡りながら異形の戦士が飛び回っていた。戦士が着地した木の枝は表面が凍りついてしまっている。

突然、戦士の前に巨大な岩壁が出現した。ごつごつとした表面に、無数のコケが生い茂っていて、年季を感じさせた。

だが戦士はひるむことなく、その岩壁に飛び蹴りを見舞った。その瞬間、岩壁が回転し、四足の妖怪がひっくり返った姿を見せた。妖怪より力べ。特徴は三つ。一つは背中が変異した岩壁のような鎧。そしてもう一つは、後ろ足の三倍もの長さがある前足だった。普段は折りたたんでいる前足を伸ばすことで、前足を支えとしてより力べは岩壁になりすましている。

「冷凍槍」

戦士がつぶやくと、右手から冷気が発せられた。冷気は空気中の水分を凍らせ、三又の槍を作り出した。

より力べは前足を伸ばして器用に起き上がると、その巨体を見せつけるように立ちはだかった。さらに口を開き、そこから腐葉土のよなものを吐き出した。

戦士はそれを槍で薙ぎ払う。腐葉土は一瞬にして凍りつき、地面に落ちた。

そして戦士は槍に冷気を込め、より力べに突き刺した。より力べの体が凍っていき、その体を縛る邪悪な気を抜きだそうと戦士が力を

込める。

が、突然爆発したように破裂し、戦士は後ろへ吹っ飛んだ。ヌリカベの三つ目の特徴は、脱皮することである。抜け殻を弾き飛ばしたヌリカベは、無傷の状態で山奥へと逃げて行った。

「逃げられた、か」

戦士が変身を解くと、黒い髪の毛がなびいた。

彼女は髪の毛についた氷を払うと、ヌリカベが逃げた方とは逆の方
向へ歩いて行く。

ベッドの上に寝転びながら、携帯を耳に当ててスケジュール帳をチエックする。

もうすぐ佐藤さんの迎えが来るはずだ。

「じゃあ、泉は実家に戻ったんだ」

『ああ、昨日そんな事を言ってたし。昨日と言えば、お前は大丈夫なのかよ。泉ちゃんに玲二を運ぶの手伝ってくれて言われた時は何事かと思っただぜ』

「あー、お前と同じだわ。妖怪と戦っていたんだけど、苦戦してさ。氷を使う奴に助けられた」

『アレ、誰だったとかわかった？』

「いや。だけど今日佐藤さんと一緒に本部に行くから、ついでに聞いてみようと思って」

『そつかあ。本部って、あのビルじゃないんだよな？ どこにあるんだ？』

「京都、だったかな」

『確か岡山さんの実家も京都らしいよ』

「へえ」

プールでの騒動から一日。昨日は気付いたらプールサイドで寝ていて、泉の膝の上で目を覚ました。

格好が格好だっただけに、最初に胸が目に飛び込んできたときは正直あせった。泉のからかう調子がいつもより数段嬉しそうだったのは気のせいか。

妖怪と戦っていた事は廉にしか話していないようで、他の三人には熱中症だとかでごまかせたようだ。今思うと、俺が熱中症って無理があるよな。

「そろそろ佐藤さんが来ると思っから、切るぞ」

『あいよ。無理だけはするなよ』

「わかってる。泉にも言われたし」

『そか。じゃあな』

通話を切り、ついでに携帯電話で時刻を確認する。
今日は京都にあるPWの本部で会議があるらしく、是非俺も出席して欲しいと連絡が来たので佐藤さんに迎えに来てもらう事にした。
ちなみに今日、明日と二日間に渡って行われるらしく、日曜の今日はともかく明日は月曜だ。仕方ないので学校にあらかじめ欠席の連絡を入れた。

それにしても、突然泉が実家にいる父親から戻ってくるように言われたとかで、昨日の夜に京都へ発つたらしい。氷の戦士を見なかったか聞いていないし、それにちゃんと御礼を言っていなかったような気がする。電話をしても繋がらないしなあ。

「フッ…」

思わず吹きだしてしまった。携帯電話の泉のアドレス帳と睨めっこしながら唸っているなんて、俺は恋人か何かかったの。

ピリリリリリ…

「うわっ」

佐藤さんからの電話。迎えに来た連絡だろうか。
窓の外を見ると、車が一台停まっている。

「もしもし」

『おはよう玲二君。今到着したけど、出られるかい?』

「はい。すぐに行きます」

電話を切ってポケットへ。用意していたカバンを肩にかけて部屋を出た。

廊下に出ると、インターホンの鳴る音がし、次いで徹さんと佐藤さんの声がする。

「お待たせしました」

階段を下りると、佐藤さんだけではなく香苗さんもいたようだ。二人で徹さんに挨拶をしている。台所から華さんもやってきて、四人で頭を下げ合う。何か傍から見ると変な感じだ。

それにしても佐藤さんも香苗さんもスーツが似合うなあ。俺はあまり着る機会が無いから、新鮮味はあるけど似合うかどうかはわからない。

ちなみに今着ているスーツは香苗さんからもらったものだ。わざわざ店に行って仕立ててくれたらしい。安い買い物じゃないだろうに…。

「それじゃあ玲二君、行こうか」

「はい。行ってきます」

「行つてらっしゃい」

「気をつけてね」

徹さんと華さんに見送られ、佐藤さんが開けたドアから車に乗り込んだ。

後部座席には二人の荷物——多分ほとんどが香苗さんの荷物——が無造作に積まれていた。とりあえず人一人分が座るスペースは確保

されている。

「狭くてごめんね」

「お前の荷物が多いんだよ」

「女の子には色々必要なんですう」

佐藤さんがもう一度徹さん達に頭を下げ、車を発進させる。

「これから駅に行つて新幹線に乗るんですね？ 荷物とか大丈夫ですか」

「ちよつと多いけど…まあ、何とかなるわよ…あはは」

乾いた笑いが助手席から聞こえる。荷物持ちに任命されるのは間違いないな。

佐藤さんの溜息が聞こえた。うん、佐藤さん、一緒に頑張りましよう。

そういえば。ふと思い出した。

ちなみに今は新幹線に乗つて東京から京都へと移動中だ。中学の修学旅行は不参加だったので、何気に少し楽しかったりする。

（どうした？）

俺の言葉、というより思考にレナが反応する。

五月のガシャドクロ退治の時は、クウコちゃんを追って来たけど、今回は置いてきてよかったのか？ まあ、もう戻れない場所にいるけれど。

（心配ないだろう。天狐もあちらに行っているようだしな）

天狐ねえ。これまた妖狐の上位種だな。

（九尾は空狐よりもお前の傍を離れる事の方が嫌なのだろう）

（黙れ、龍）

またこの二人の言い争いか。険悪な雰囲気ではないし、狼狽するレナが少し可愛かったりするので、二人には悪いが聞いていて愉快だ。

（最近是他の女子とも親しくしているらしいな。岡山泉と言ったか？）

（ふ、ふん。玲二が誰と乳繰り合おうと、知った事ではないわ）

（では私が迫ってもよいのか？ ほら、どうする？）

（ぐっ…）

（玲二、失礼するぞ）

（ま、待て！）

何か突飛な事になっている気がするが。変身している姿でも、まだ龍の姿は佐藤さんと香苗さんには見せていない。

それにしてもこいつらの言い争いは面白いな。論争の原因らしい俺が言うのも何だが、思わずにやけてくる。香苗さんがそれに気づいて、何事が聞いてきた。

「いえ、ちょっと、レナと龍が喧嘩しているので」

なんのこつちゃ、と香苗さんは首をかしげる。

（大体、貴様の力は玲二に負担を与えすぎる。もう少し抑えたらどうだ）

（ほう、そこまで話を飛ばすのか。構わんが、そういう貴様も格闘戦は全く出来ぬ。玲二の戦闘スタイルとは噛みあっておらぬな）

（倒れさせるよりはマシだ）

ほらお前ら、いい加減にしろよ。別に倒れたのは龍が悪いんじゃない。俺が未熟だからだし、レナの力だって俺は好きだぜ。レナのお陰でコントロールが上手くなるんだからな。

後で構ってやるから、もう少し静かにしておけよ。

（わかった。すまない）

（申し訳ない、玲二…）

…何だかんだで、俺の言葉にはきちんと従ってくれるんだよな。素直じゃない所もあるけど、それも可愛いもんだ。

（玲二、大丈夫？）

木霊か。俺は大丈夫だぞ。賑やかで楽しいくらいだ。

それに、回復力が高いのが取り得だからな。龍の力は戦いながら慣れるしかない。抑えきれない力なら、それを使う俺がレベルアップするしかないだろ。

（……良い主を持ったよ、僕達）

ありがとう。最高の褒め言葉だよ。

本音を言えば、お前達の力は借りずに戦えばいいんだけどな。

（優しいんだね）

そんなんじゃない。強くなりたいっていう、俺のエゴだよ。

…強くなりたい、か。……人生に目標が出来るとは思わなかったな。

到着したのは大きな日本家屋だった。京都だし、本部はビルじゃないかという陳腐な想像があたりまだった。

「ここが本部ですか？」

目の前にそびえたつ大きな門を見て佐藤さんに聞く。
敷地は石垣に囲まれていて、何か本格的だ。いや、本格もクソも無いんだけど。

「この家の現当主が創設者なんだけど、その人の意向でね」

「仙道玄武って人なんだけど、まあ簡単に言えば堅物親父よ」

「ん、まあ、そうだな」

香苗さんの一言に佐藤さんが苦笑した。

どうやら中々曲者らしい。仙道と彫られた表札を見る。その下にはインターホンがあつて、何だか変な感じだ。

佐藤さんがボタンを押すと、ほどなくして女性の声が聞こえてきた。

『どちらさまでしょうか？』

「関東支部の佐藤と柊と中村です」

『少々お待ち下さい』

これだけ大きいと、やっぱり“お手伝いさん”みたいな人がいるんだろうか。できる人ならば是非とも家事の師事を受けたいと呑気な事を考えていると門が開いた。そこにいたのは予想外の人物だった。

「お待ちしておりました」

「…え!？」

「やあ、泉ちゃん」

「どうも佐藤さん。柊さんと玲二君も」

岡山泉。一年一組の生徒で人間と雪女のハーフ。最近俺にやけに絡んでくる女子生徒の一人。その泉が、ここにいる。

「何で…え？」

「聞いていないのかい？ 彼女は仙道玄武の実の娘だよ」

「…聞いていません」

そう言つて泉を睨んでみるが、笑うだけで全く意味をなしていない。組織創設者の娘か。道理でやけに詳しいはずだよな。苗字が違うのは…何か訳があるのだろう。家族に関する余計な詮索はしない方がいい。

いや、待てよ。仙道という苗字。どこかで聞いた事がある苗字だな。

「会議までまだ時間があるので、部屋で待っていてください」

「わかった」

佐藤さんと香苗さんは門をくぐって中へ入っていく。

俺も続こうとすると、腕を掴まれた。振り向くと、にっこり笑顔の泉が。

「玲二君はこつち。すいませーん、ちょっと玲二君借りますねー！」

泉に引きずられるがままに俺は歩き始めた。

「ちょ、ちよっと、何だっって言っただ？」

「デートに付き合ってくれるんでしょ？ 約束はちゃんと守らないとね」

そう言えば昨日、そんな事を言っただけ。

「別にいいけど、俺が相手に楽しいの？ 自分で言うのもアレだけど、話とか上手くないし、女子の機嫌を取るようなセリフも思いつかないぞ」

「普通でいいのよ」

「そう…なら付き合っけど、ちよっとさ」

「何？」

この独特の嫌な感じ。何回感じても慣れる事が無い。

「邪気、あるよね」

「うん」

泉は平然と言っただけ。

デートというか、邪気妖怪の浄化のために引っぱり出したのでは。まあ、会議中に抜けるのもアレだしな。さっさと片付けるに越したことは無いが。

「街中じゃなくてとりあえずは一安心だけどさ…」

幸いにもこの辺にある建物は仙道家の大きな屋敷くらいだ。ていうか大きな屋敷って言っても当然、関東支部のビルよりは小さいし、本部って意外と少数精鋭なのか。

案外、泉の親父さんだけで動かせるとかそういう線も考えられる。

ゴアアアアアアアアアアアアアア！

っと、どうでもいい事を考えている間にも妖怪の鳴き声が近づいてきたな。

やがて木々が踏みつぶされる音が響き、のそのそと大きな四足歩行の妖怪が姿を現した。

「じゃあさつさと片付けて、デートでも買い物でも付き合ってやるよ」

「ううん、そうじゃなくって」

「え？」

札を右手で掲げて臨戦態勢に入った俺だが、泉に腕を下ろされる。そして、まるで戦うなどとも言うように俺の前に出る。

「私の事、ちゃんと言っておこうと思って」

泉の足元から白い煙が発生し始める。いや、煙ではない。冷氣だ。やがてその冷氣は上へあがっていき、泉のくびれの部分に達すると、腰を覆い、ベルト状の鎖に変化する。

俺の腰に付けられた物とそっくりの鎖。

「幻鎖…！？まさか…」

冷・退魔鎧装呪詛冷姫

泉の持つ札が凍てつき、ぼうつと文字が浮かび上がる。

次の瞬間、氷のつぶてが混じった竜巻に泉の体が包まれていき…

「冷姫、変身！」

そこにいたのは、ヒトリマ戦の時に俺の前に現れた、白銀の鎧に身を包んだ異形の戦士だった。

「っ！変身！」

思わず呆気にとられてしまった。だが女子一人に戦わせるなんてとんでもない。

火影に変身すると泉——いや、冷姫の隣に並び立つ。

「私一人で大丈夫よ。今朝も戦ったし」

「女を前に立たせて下がっているなんて、男のやる事じゃねえよ」

いくらか落ち着き払った泉の声が聞こえた。普段から落ち着いているが——俺の前だといつもからかってばかりいる印象しかないんだが——それ以上に冷静な声といえいいか。

「龍の力は使わないでね」

「…わかった。そっぴや昨日はありがとう。助けてくれたんだろ」

「くるわよ」

又リカベが突っ込んできたのを、両脇に飛び退くことでかわす。冷姫は氷で出来た三叉の槍を作り出すと、それで又リカベの前脚に攻撃し始めた。俺もそれに倣い、太刀を装備して左の前脚に切りかかる。

ゴオオオオオオオオ!

又リカベが口から泥のような物を吐きだした。火刃ノ太刀を振りかぶっていた俺は、腕を動かして泥を太刀で薙いでかわす。泥に触れた箇所がさびている。面倒な攻撃だな。

「幻影・バーニングストライク!」

炎の札から解き放たれた妖気が右の拳に集中。飛び上がって又リカベの頭部に接近し、こめかみのあたりを思い切り殴ってやる。浄化は出来ないまでも、バランスを崩した又リカベは地に倒れ伏した。

「玲二君、下がって!」

槍を左手に持ち替え、右手で札をつかんだ冷姫が俺を下がらせる。次の瞬間には冷姫の右手から猛吹雪が放たれ、又リカベの体表を凍てつかせていく。

又リカベは瞳を動かして冷姫を睨みつけ、低い声で唸り始めた。

「…脱皮されるわ」

「脱皮!?!」

「表面の皮膚を弾き飛ばして、傷を無かった事にできるのよ」

槍を両手で構え、妖気を込める冷姫。

俺もバーニングブレイクを撃とうとするが、俺の技はほとんどが炎属性の技。せっかく動きを封じている氷を溶かしてしまつては意味が無い。

「サポートに回るぞ、木霊！ 精霊鎧装！」

（了解！）

霊に変身し、両手を又リカベに向ける。

又リカベの足元から太い木の根が伸びてきて、その巨体を地面に縫いつけるように体に巻き付いた。

「ナイスサポートよ」

こちらを見て頷き、冷姫は妖気のまとった槍を投げる。槍が接近するにつれ、又リカベの輪郭がぼやけ始める。

凍 - 破邪滅魔呪詛冷姫

又リカベの中心で黒く蠢く邪気を槍が貫いた。邪気は次第に氷に包まれていき、弾けるように爆発した。

「さあ、もう大丈夫よ。氷漬けにされたくなければ、さっさとおうちに帰りなさい」

変身を解いた泉が、朗らかな表情で又リカベに言った。

第二十話 護獣 vs . Guardians

呪詛冷姫式

この夏にPW本部が完成させた、火影に次ぐ戦闘システム。

属性攻撃である炎を用いた戦闘よりも他の妖怪の力を行使する事に特化した火影と比べ、冷姫は自身の属性である氷による攻撃性能に比重をおいている。

また、変身者である女性でも十分に戦えるよう、近距離戦闘よりは中距離からの攻撃・支援を目的とした武装が装備されている。

「はあん、なるほど、ね」

配られたマニュアルに一通り目を通した玲二は、大きく息を吐いた。いきなり会議に呼び出されたからなんだと思えば、PW新戦力の発表とのこと。配属は玲二と同じ関東支部。どうやらここ最近で一番邪気妖怪の出現が多いことが理由らしかった。

「以上が、火影と冷姫の違いとなります」

本部の役員らしき人物が、大きなスクリーンに投影された映像を元に説明をおこなっていた。

玲二としては先ほど共に戦い、その力を体で感じたため、データ上の数値に興味などなかった。

「全体的に格闘能力は火影に劣るが、それらは属性攻撃によって補える、ということか」

周囲がきっちりしたスーツに身を包んでいる中、一人だけ袴を着用した壮年の男性——仙道玄武せんどうげんぶがうなるように言った。

「佐藤が提出した資料を見れば、中村玲二より泉嬢の方が妖氣のコントロールも上手いようだ」

誰かがぼそつと言った一言。玲二は特に何も感じなかったが、泉は違うようだった。

バンと長机を叩いて立ちあがる。

「玲二君のコントロールがお粗末だとしても言いたいのかしら」

「そうは言っていない、泉嬢。私は配られた資料から分かる事を言っただけだ」

「そうだ。岡山泉、言いたい事がそれだけならもう座れ」

「……はい」

父、玄武がそう言うと、渋々といった感じで泉は再び正座をする。娘をフルネームで呼ぶ事に玲二は首をかしげたが、このような場ではわきまえるのだらうと思い、再び資料に目を通す。

「とにかく、冷姫式の完成、つまり八月の三十日ですが、その日を持って岡山泉は正式に関東支部の配属となります。異議はありませんか」

会議に出席している誰もが、静かに頷いた。

「あーもうっ！ 何なの、あの偉そうな態度！」

「落ち着けて、泉。現に俺よりも君の方が、コントロールが上手いのは確かだ」

「そうかもしれないけど、玲二君の方がずっと強いわよ」

泉が加わり、四人に増えた関東支部に割り当てられた部屋で、玲二と泉は畳に寝そべってくつろいでいた。
ちなみに佐藤と香苗は残っている仕事があるとかでここにはいない。

「実戦経験が少し多いくらいだろ」

「少し、なんてものじゃないわ。あなた、この四ヶ月ちょっとで三十体は浄化しているのよ？」

「まあ、そうだな」

「そうよ。玲二君はもっと自分を誇るべき。うん、絶対そう」

力強く玲二に言い聞かせる泉に、思わず苦笑する。それでも褒めてもらえたり、自分の力を認めてもらえるのは嬉しい。玲二は素直に礼を言った。

「ありがとう」

ふふ、と泉は笑顔を浮かべる。

その笑顔がふと、夢の中で見た“いずみちゃん”の笑顔に重なった。気付けば玲二は、ポツリポツリと話し始めていた。

「あのさあ」

「ん？」

「俺と泉って、前にあったことあるっけ？ 高校に入る、ずっと前それを聞くと、泉は意外そうに、というよりは若干不機嫌そうな顔で聞いた。」

「…覚えてないの？」

「ああ、うん。ちょっと記憶があいまいで」

「まあ幼稚園の頃だからねえ。同じ幼稚園だったのよ？ 覚えてない？」

その言葉に玲二はやっぱりかと頷いた。

「じゃあやっぱりあの“せんどういずみちゃん”なんだ」

「…そうね、あの頃はそうだったわ」

少しさびしそうな顔をする泉。

それが少しひっかかるも、玲二は話を続けることにした。

「よく一緒に遊んだよな。今朝、久しぶりにその夢を見てさ」

「うん。私は玲二君がお気に入りだったみたいで、いつも薫ちゃんと玲二君の取り合いっこしてたっけ」

玲二の表情が変わった。泉の言葉に薫の名前が出てきたのだ。嫌でも先日出会った狂気の女を思い出してしまふ。

「…え」

「うん？」

「……薫って言ったか？」

「ええ、御堂薫ちゃん。忘れちゃった？ 確か同じ小学校に行っただけだよ」

「そつだ。…同じ幼稚園だったのか」

「私たち、結構仲良かったわよ？」

泉の口から出た言葉は、その言葉の持つ意味以上に玲二を混乱させた。

確かに昔は薫も普通の女の子だった。泉の言う通り同じ幼稚園だとすれば、仲が良かったという話もおかしくはない。

「なんでだ…何でこんなに覚えていないんだ…いや、今それはいい。薫のことなんだけど…」

玲二は麒麟と狗神、そして御堂薫に出会った事を話した。泉の表情がだんだんと曇っていく。

「そう…狗神に」

「守護獣って事は、あの雷獣と同等かそれ以上の強さってことだよな。…それに、あの薫と戦うなんて……」

「あの？」

玲二の言い方が引つかかったのか、泉が聞き返す。

「…ああ。八年前…ちょうど俺の両親がいなくなってからだけど、あいつがおかしくなり始めたんだ。……何ていうか、狂気の沙汰っていうか」

そう言えば泉は小学校別だったもんな、と付け加える。

「多分、狗神の影響よ。狗神は憑依するけど意識を乗っ取るわけじゃない。でもその人間の性格だったり意識だったりを変えてしまうこともあるって聞くわ」

「正直、あいつを目の前にしたら、助けたいって思うよりも先に怖くて逃げてしまいそうだった。今だって、あいつの舌が口の中を暴れまわるのを思い出すだけで……」

右手で顔の半分を覆い、俯いて溜息をついた。

そんな玲二を見て、泉は不機嫌さを前面に出して言った。

「……キスされたの？」

「…う、うん」

今まで見た事がない泉の雰囲気、思わずどもりながら答える。

「ふーん」

「……………」

「……………」

（何だ、この沈黙は）

お互いに何も話さず、沈黙が続いた。

やがて玲二が耐えきれずに口を開きかけた時、泉が沈黙を破った。

「……………ねえ」

「は、はい？」

「キス、してもいい？」

泉の提案は、玲二の予想をはるかに超えるものだった。
というより、予想の中に入っていないジャンルの答えだった。

「……………はあ？」

思わず間延びした声で聞き返してしまう。

「うつん、したい。させて」

「ど、どうしたんだよ」

泉を落ち着かせようと玲二がなだめるが、泉はそんな玲二に溜息をつくと、口をとがらせて言った。

「…ちよつと妬いてるだけ。言っておくけど、私だってあなたの事が好きなのよ」

「は、はあ」

(……うん?)

つい生返事を返してしまう玲二だが、泉の言葉をよくよく考えると、今自分は何を言われたのか――答えを求めるように泉の顔を見る。

「まあ、あなたの性格上、すんなりオーケーはもらえ無さそうだけどね。しばらくアプローチもするから、その気になったらいつでも言ってよね」

告白って、こんなのだっただけ。

よく漫画やドラマで見えるようなそれと少し違うシチュエーションに、玲二はそう思わざるをえなかった。

何か返事を返した方がいいのだろうか。そう考えるが、泉はそれ以上何も言わない。玲二はとりあえずこの話題は置いておこうと思い、遠くを見るようにボーっとしながら口を開いた。

「その記憶が正しければ、昔は楽しかったんだろうなあ……」

(どこで間違ってしまったんだろうな、俺たちは……)

自分、泉、薫。妖怪に振り回された三人の運命。

この先に何が待ち構えているのか、玲二は不安に思いながらも、何

とかするしかないなと自己完結した。

「風呂でも入ってこようかな」

「一緒に入る？ 大浴場だけど、あくまで家のお風呂だから、男女で別れていないし」

「遠慮しておく」

「…普通は男の子って、混浴って聞いたらテンションあがるものじゃないの？」

「…かもな」

玲二は普通の男子代表である廉を思い浮かべ、少し笑った。

深夜になった。明日は帰るだけだと安心して布団に入った玲二だが、すぐに飛び起きることとなった。

本部はざわつき、時折悲鳴のような声も聞こえる。

玲二は泉とともに、同じく飛び起きた佐藤と香苗について騒ぎの元へと急ぐ。

「ぐっ…」

走りながら、玲二は強烈な吐き気を感じる。

何がそこにいるのか、玲二と彼を見た泉は瞬時に察した。

「あ、玲二っ！ 結構早く気付いたわね。これも私の愛のおかげ？」

麒麟と、その背に跨った薫が庭園の池の上に立っていた。

灯りに照らされる中、薫がにやにやと笑った。

「薫ちゃん…」

薫は玲二の肩を支えて自分を見つめる泉に視線を向け、笑顔を浮かべる。

かと思えば、チツと舌打ちをして心底嫌そうな表情になった。

「何であんたがここにいるのよ」

「正気に戻って…」

「正気？ 私はいつも正気だよ。失礼なこと言わないで。玲二！ この前の続き！ えへへ、私を好きにしていからね！」

「やめろ！ もう何も話すな！」

玲二は影の札を突き出し、憎しみのこもった眼で薫を睨みつける。その視線を受けた薫は両手で自分の肩を抱きしめ、体を振わせる。

「ああん、いい！ 玲二の痛いくらいの視線！ 見つめられるだけで感じちゃう… あんっ…」

薫は嬌声をあげながら自分の胸を揉みしだいた。

扇情的な光景だが、その体から放たれる邪気のおぞましさに、性的興奮を覚える者は誰一人としていなかった。

「変身！」

玲二の体が炎に包まれ、火影へと姿を変える。

麒麟は牙をむいて戦闘態勢に入るが、薫は相変わらず恍惚の表情を浮かべている。左手はそのまま胸を握り締め、右手がスカートの中へ入っていく。

「狗神、いい加減にしろ」

「私は狗神じゃないわ。御堂薫よ」

「どっちでもいい」

情事を邪魔され、薫は不貞腐れたように麒麟から飛び降りる。

麒麟が口を開け咆哮と同時に音波のような攻撃を放つのと、火影の炎を纏った拳が直撃するのは同時だった。

「ぐっううー！」

攻撃をともに受けた火影は後ろへ吹っ飛ぶ。麒麟の方は無傷とはいかないが、ダメージは微々たるものだった。

「守護獣と戦うには龍の力が必要か…」

「待つて玲二君。万が一あなたが暴走したら、ここにいる皆が被害を負うわ。ここは協力しましょう」

泉は冷の札を取り出し、火影の右腕をつかんで立たせる。
凍てついた札が砕け、泉の体が鎖と吹雪の中に消えて行く。

「変身！」

弾けるように吹雪が消え、中から冷姫が姿を現す。

火影は太刀を装備して前に出ると、冷姫は後ろから手を掲げ、いつでも攻撃できる体制に入る。

「玲二の名前を気安く呼ばないでッ！」

薫の噴き出す邪気に、火影の動きが止まった。

邪気の濃度自体は麒麟と大差ない。それなのに火影は動けなかった。
潜在的な恐怖が火影を阻んでいるらしいのだ。

「ラアアアアッ！！！」

麒麟が体をまとっている鎖のような装飾品を振り回し、火影を弾き飛ばす。

邪気のこもった一撃らしく、火影の腕の鎧がはじけ飛んだ。

「玲二…私に拳を振り上げるの？ そんなこと、玲二はしないよね…」

「ぐっ… ああ… 来るな！ 来るなあ！」

フフフと不気味な笑みをこぼす薫。

火刃ノ太刀を両手で握り締める火影だが、その足はゆっくりと後ろに下がっている。そんな火影を見て、冷姫は前に出ると火影の手を握り締めた。

冷たいが温かい。そんな妖気が流れ込んでくる。

「泉…」

「落ち着いて。私はここにいるわ」

火影の震えが収まっていく。

冷姫を見やる火影。泉は仮面の下でにつこりと頷いた。

「一緒に決めるわよ、玲二！」

「…ああ！」

火影は太刀を鞘に納めると、炎の札を取り出す。冷姫は凍の札を取り出し、各々は札を燃やし、凍らせた。

お互いの右足に炎を、冷気を纏い、さらに妖気を集中させていく。

「幻影・バーニングブレイク！」

「氷結・ブリザードブレイク！」

炎と氷の必殺キックが麒麟を直撃する。

巨大な衝撃に呻き声をあげる麒麟だが、すぐに咆哮を上げて二人を吹き飛ばす。

「狗神」

「薫よ。…今回はここまでね。玲二、また会おうね！」

薫が麒麟に跨ると、二体の姿はぼやけて消えてしまった。

同時に邪気の反応も全くなくなる。

「逃げられた、か」

「大丈夫よ。また来たとしても、私たちなら絶対に勝てる」

変身を解除すると同時に、玲二は腰が抜けたのかその場に座り込んでしまった。

泉はしゃがみこむと、玲二と目線を合わせる。

「これからもよろしくね、玲二」

「…ああ、よろしく。泉」

につこりと笑う泉につられて玲二も笑顔を浮かべた。
まだ薫に対する恐怖心はあるものの、彼女とならば乗り越えられるかもしれない。玲二は心の底でそう思うのだった。

第二十一話 雪山 Snowing September

「合宿？」

九月十四日火曜日。放課後、対策室に寄った玲二を待っていたのは、やけに得意気な香苗と、玲二と一緒に校門を出たはずなのに何故かそこにいる泉だった。

「玲二君の負担を考えるときつい物があると思うんだけど、私たちとしても早く龍の力を扱えるようになって欲しいのよねえ。守護獣が姿を見せたってことは、オロチも本格的に動き出すつもりなんでしょう？」

「さあ、わかりませんが……それはともかく、龍の力を使えるようにするっていうのは俺も賛成です」

「じゃあ決まり！ 今週の土曜から連休が始まるし、丁度いいわね。玲二は予定、大丈夫？」

「ん、大丈夫」

今年の九月は祝日が重なったせいで連休になった。俗に言うシルバーウィークという奴だ。予定は無いという玲二の返事に、泉はどこか楽しそうな表情をしている。

「どうしたの？」

「ううん、なんでもない」

そう言う泉に玲二は首をかしげる。それを佐藤と香苗は微笑みながら眺めている。

「よく考えれば、俺達ってオロチの事何も知らないんですよ」

「本部のデータベースにも詳しい資料が無いからなあ。一応、八岐大蛇という妖怪の資料を送ってもらったんだけど」

佐藤の操作するパソコンを、三人が覗き込む。

首と尾がそれぞれ八つに分かれた巨大な妖怪。蛇というよりは龍と言った方がマッチするかもしれない風貌だ。

「近年の目撃事例は全くない。残っているのも大昔の文献だったり、神話だったりする物だけだよ」

あまりにも少ないオロチの情報。まして守護獣との戦闘でも手一杯な今、出方のわからない敵に玲二は正直危機感を覚えていた。

早く龍のコントロールを完璧にしなくては。現在時点で自身の持つ最強の力が秘められた札を強く握り締めた。

妖気のコントロールというのは、玲二が思っている以上に難しいことだった。

普段何も考えずに妖気の放出をしている玲二だが、改めて精密機器

等を使用して計測すると、そのトンデモな結果に玲二自身が一番驚くことになる。

「な、なんすか、これ…」

「何って、あなたが出したことじゃない…」

様々なコードに繋がれた火刃ノ太刀を握り締める玲二。「それじゃあ、軽く妖気を込めてみて」と言われ指示通りに妖気を放つのだが、メーターは一瞬にして震え、針はレッドゾーンを突き抜けようとしている。

香苗曰く、太刀が木端微塵にならないのが奇跡、だそうだ。

「数値上では、今のだけであなたの全ての妖気を一気に込めた計算になるんだけど……なんであなたも太刀も無事なの？」

「さ、さあ、何でしょうね」

改めて数値を前にし、泉すらも驚いて言葉を失っているようだ。ちなみにこの結果が示しているものは、全く減らない玲二の妖気や、許容量を圧倒的に超える妖気を受け止めてなお健在している太刀の頑丈さが凄いということではない。玲二の妖気コントロールが驚くほど下手くそだということだ。

「太刀に妖気を流し込みつつ、太刀自身を無理矢理強化しているみたいですね。もちろんそんな無理な強化に耐えられませんから、一回か二回放てば木端微塵になります」

泉が太刀を観察しながら言う。太刀はブルブルと振動しており、限界を超えて溜め込まれた妖気を発散しようとしているようだ。

放っておくと危ないから。と言う事で、空に向かって太刀を突き上げる。刃から妖気が炎となって放たれ、空高く打ち上げられると雲散した。

途端にメーターの数値は一気に減少する。

「妖気が空っぽになって、太刀自体の耐久力も一気に無くなったわね……これじゃ二度目の注入は無理そう」

太刀からコードを外す。本来ならば本部に存在する専門の鍛冶職人が鍛えなおすところだが、量子変換した札の状態でも修復は可能ということだ。しかもその作業ならば佐藤や香苗にもできる。

「それにしてもこんな場所が所有地にあったんですね」

「一応模擬戦闘訓練用ってことでね、この山を買い取ってあるのよ」

ここは某県にある山である。中腹部分の開けた場所で、テントを張って（主に玲二の）強化合宿が行われている。

龍の力を使う前にまず妖気のコントロールということで計測を始めた香苗だが、あまりの結果にどうしたらよいか、頭を抱えている。

「玲二、一度私に妖気を流し込んでみて」

「え？」

右手を差し出す泉に、思わず玲二は聞き返した。ただでさえ属性の違う妖気は馴染みにくい。コントロールの下手な自分が誤って加減を間違えれば、ただでは済まないことになる。

そんな玲二の不安を感じたのだろうか、しかし泉の表情は笑顔であった。

「大丈夫。あなたの事は、何でも受け止めてあげるから」

泉は玲二の右手を両手で握り締める。真剣な表情の彼女を見た玲二は、一度頷いてから少しずつ妖気を流し始める。

少しずつとは言ってもコントロールは上手くない。凄まじい量が流れ込んできたのだろう、泉の目が大きく見開かれた。

「泉！」

「だめ…っ」

手を話そうとする玲二だが、泉はその手をさらにぎゅっと握りしめる。

その手に誘われるかのように、玲二の妖気は次々に泉の中へ流れ込んでいく。

「……つく、はあっ……」

やがて泉の顔が赤くなり始めた。息も荒くなり、肩が上下し始める。時折聞こえる喘ぐような吐息に妙な色気を感じ、玲二も頬を赤く染めた。

「…はあ…んっ…も、だめ……」

玲二の手を握り締める力が弱くなったと同時に、泉がふにやりと倒れ込んだ。咄嗟に玲二が泉の体を抱きかかえるように支えたおかげで、地面に倒れる事は防げた。

「悪い、大丈夫？」

「何か……変な感じ。私の中に玲二が入ってくるような感じがして、ちよつと興奮した」

肩で息をしながらそう言つてのける泉に、玲二は一言「バカ」と言つた。

「でも、やっぱりコントロールの練習は必要ね。それが上手くできれば、ほんのちよつとの妖気だけで、十分な力が込められるようになるから」

「そうか」

「うー……ダメ、体が火照っちゃつて、変な気分」

泉はそう言つと、両手を自分の頬に押し当てた。だんだんと熱が引いていくのが、目に見えてわかつた。

「すごい真つ赤だつたな。そんなに熱かつた？」

「熱いといえば熱かつたけど……どつちかつて言つと、欲情したつていうか……」

「はあ!？」

「だから、その、玲二の妖気が体の中に入って来て、頭の中がぼーつとして、玲二の事しか考えられなくなつて、うー、あー……何言つてんだろ」

再び顔を真つ赤にして俯く泉。せつかく熱が下がつたと言つのに、

これではまた上がっていきそうだな。
そんな泉に、玲二も顔を赤くする。

（お前の妖気は他人を魅了するからな）

「え？ そうなの？」

（媚薬と言つか何と言つか……そんな感じかなあ）

「木霊まで……」

レナと木霊の意見は突飛な物に思えたが、泉の今の状態からして、おそらくそのような性質があるのだらうと、玲二は諦めるように溜息をついた。

（ツチグモやガシャドクロに寄ってこられたら困るなあ……）

「ていうかあなた達、本当に仲良いわね。いちやいちやするのはいいけど、人前では控えるように」

「なあっ！」

「ごめんなさい」

「え、否定はしないの？」

「玲二は私と仲良くしたくないの？」

「いや、そういうわけじゃないけど」

最近の泉はどこかおかしい。そう思う玲二だが、その原因が先日の告白にある事に気づいていないわけではない。だが玲二はいまだに返事をしていなかった。

人との付き合い方に、いまいち自信を持てないでいたのだ。

（俺は泉の事、どう思っているんだろう……）

三人のちょっとした騒ぎは、佐藤がいい加減訓練を始めるよう言いに来るまで、三十分以上は繰り広げられた。

「それじゃあ、この枝に妖気を流して育ててみようか」

そう言つて泉は玲二に木の枝を一本渡した。玲二の妖気は強化と成長の作用がある。うまく妖気を流せば、この折れた枝でも成長するということだ。

「いい？ 最初はゆっくり少しずつ……いきなり伸ばそうとすると負荷がかかって木端微塵に……きゃっ!？」

ポンツという何かが弾ける音が聞こえ、枝の残骸が泉に降りかかった。玲二は手を握り締めたまま泉に謝る。

「ごめん、もう微塵だわ」

「はあ……先は長いわね。レナちゃんか誰かに手伝ってもらう?」

その方がイメージもつかみやすくなるだろうし、と付け加える泉。

「そうだな。じゃあ木霊」

緑の札が燃え、木霊が実体化する。レナが飛びぬけたコントロールの術を持つのは事実だが、彼女の妖気は吸収の力を持つ。そういうわけで同じ成長の力を持つ木霊を呼んだのだった。ちなみに龍の妖気は破壊であり、泉は色々と扱えるが、主には破壊作用に特化している。

「実際に玲二の体を使って妖気を流してみるから、うまくコツをつかんでね」

「おう」

返事をする玲二は目を閉じた。やがて自分の体の中に誰かが入り込んでくる感覚がやってくる。瞼を開けると、その瞳は緑色に輝いていた。

「こんな感じ、かな」

木霊が宿った玲二が枝をつかむと、ぐんぐん伸びて行き、枝分かれた先に次々と葉がつきはじめる。

おおっ、と意識の中で玲二は歓声をあげた。

「なんとなくイメージはできた」

玲二の目から緑色の光が消えると同時に、木霊の姿が再び現出した。

玲二は木の枝を拾うと、静かに妖気を流し込んでいく。木霊に比べると恐ろしく遅いが、確かに枝は成長している。葉が一枚芽吹き始めたところで、枝は燃えるように消滅した。

「くっそ……」

「結構、呑みこみは早いよね」

「え？ まあ、そうかな。でも失敗だよ」

「一発で出来るようになるとは思わなかったわよ」

「木霊のお陰さ。それじゃもう一回……」

そう言ってもう一本枝を拾い上げる玲二。しかし枝に触れた瞬間、ある異変に気付く。

「冷たい……」

自身の手の熱によって一瞬で溶けてしまったが、葉の表面に霜が降りていたのを玲二は見逃さなかった。

いくら山の天気は崩れやすいとはいえ、対して標高の高くないこの山で、九月中旬のこの時期に霜が降りるだろうか。

「泉、何かやった？」

「私は何も」

二人は空を見上げる。さっきまで青空が広がっていたのが嘘のような一面曇り空。やがてふわりふわりと白い綿のような物が降ってくる

る。手に落ちた冷たいそれは一瞬で水と化した。雪だ。

「妖怪……」

「もつと奥の方から、邪気の気配がするわ」

玲二は木霊に目配せし、札に戻す。二人は佐藤と香苗に連絡を入れたあと、山奥へ足を踏み入れた。背の高い木々に囲まれた獣道を進んでいくと、やがて地面がうつすらと雪におおわれている場所へやってきた。

気温は低く、薄手のワイシャツ姿の玲二は手をこすって熱を出す。さらに奥へ進むと、ついに足首が埋もれるほどの積雪となっていた。

「寒くないの？」

「私は平気よ」

デニム地のショートパンツから伸びる白くて長い泉の足を見ながら、玲二が問う。寒さには強いらしく、体温も低いらしい。かくいう玲二は逆に体温が高く、暑さや熱さには多少の耐性がある。

雪を踏みしめながら少し進むと、突然邪気の気配が強くなった。地響きも聞こえ始め、二人は札を構えて背中合わせになり、敵の出現を警戒する。

オオオン！　オオオン！　オオオオオオオオオ！

不気味な雄叫びが轟いた瞬間、玲二の目の前の地面から巨大な腕が突き出してきた。玲二は泉を抱えて横に転がると、腕との距離をとる。

すぐに二本目の腕が出てきて、両手を地面に付けるとそれは地上へ

と這いあがってきた。

「そんな……」

その妖怪の姿を見て、泉が弱弱しい声を漏らした。普段の調子からは考えられない声色に、玲二は泉を見やる。両目は妖怪を見据えているも、どこか恐怖が混じったような瞳。体は震え、無意識に玲二の裾をぎゅっと握りしめている。

泉を恐怖させている妖怪を、玲二は睨みつけた。

巨大なオランウータンのような妖怪。体毛は白く、目は顔の中心に巨大な物が一つだけ。大きく開いた口には不揃いの歯と、二本の鋭く尖った牙が生えている。そして不気味なことに、足の部分は二つに分かれていない。一本だけの足が地面に突き刺さっている。

（イッポンダタラだな）

龍がささやくように名前を告げると、それを聞いた泉はしゃくり上げるように小さな悲鳴をあげた。

「……お前ら、泉を頼む」

玲二が緑、黄、青の札を燃やすと、木霊、レナ、そして人型に変身した龍が姿を現した。三体に震える泉を預けると、玲二は真っ赤な札を燃やしながら一步前へ出る。周囲の雪を溶かしながら、体を炎で包み込む。

「変身！」

鎖をジャラジャラと鳴らし、火影はイッポンダタラに向かって走り出した。

第二十二話 落涙 T e a r d r o p

「ふうん……岡山泉、戦えないんだ。ははっ」

一際背の高い木の枝の上で、薫が震えている泉を見下ろし、鼻で笑う。

かと思えば、イッポンドタラと交戦中の火影に視線を移してニンマリと笑顔になる。ただ、その笑顔は全てを凍りつかせるような、優しさからは遠く離れた笑顔だった。

——玲二を壊しているのは、私だけ。

ウオオオオオオオオオオオオオオオオ！

イッポンドタラが、樽ほどもある巨大な拳を振り下ろす。

両手を掲げてそれを受け止める火影。だが予想以上の大きな力に、火影は地面に膝をついた。

「くっ……あああああああ！」

火影を中心に、炎が波のように広がった。あたりの雪は一瞬にして溶け、思わず怯んだイッポンドタラは腕にかけていた力を弱めてしまった。

その隙を見逃すはずもない。火影は炎を纏ったパンチで巨大な拳を弾くと、腕を伝ってイッポングダラの体を駆け上っていく。醜い頭部が近づいた。ボロボロの歯をむき出しにし、火影に威嚇をするイッポングダラ。

「ぜえりやあああああ！」

火影のニーキックが巨大な頭部のただ一点、眉間を見事に貫いた。至近距離からの強烈な一撃に、イッポングダラは後ろへ倒れた。地面に突き刺さったままの足はぐにやりと曲がっている。どうやら一般的な動物の脚部とは異なる骨格のようだ。例えるなら蛇や龍のようにくねくねと動く、第二の胴体と言った方が的を射ているだろう。

「幻影・バーニングブレイク！」

火影が札を燃やすと同時に、足元から火柱が立ち上った。

怯み、動けない状態のイッポングダラに向かって駆けて行く火影。その瞬間、上から何者かが飛び降りてきた。

「くうっ……っだあああああ！」

火影はその人物——薫を見て一瞬怯むも、ためらう事なく左足で地面を蹴った。そのまま炎をまとった右足を振り、薫もろともイッポングダラへ最後の一撃を放とうとする。

「無様な姿を見せないで。玲二は私が壊すから、あんたはそこで縮こまっている女でも翺ってやりなさい」

薫は後ろで伸びているイッポングダラを一瞥すると、向かってくる火影にむかってやおら右手をかざした。

漆黒のオーラが放たれたのが見えた瞬間、火影の体は後ろへ吹っ飛び、木の幹へ体を打ちつけられた。

「がはあっ！」

「えへへ、玲二。今日は二人で遊ぼうね。手足を壊して動けなくなつた玲二を、一杯一杯、いーっぱい、可愛がつてあげるからね」

薫は舌舐めずりすると、不気味な足取りで火影に近づいていく。

一方、ようやく動けるようになったイッポンダタラは、地面から下半身を伸ばし、這うようにして泉に近づいていく。泉は近づいてくる物に恐怖の視線を向けながら、ゆっくり後ろへ下がる。腰が抜けしているのか、座った状態で手と足を動かして、何とか動いている。木霊はそんな泉の肩を支え、レナと龍は前に出てイッポンダタラを威嚇している。

「いやっ……来ないで……」

「泉！」

泉の声を聞いた瞬間、倒れていた火影が飛びあがり、炎を出してイッポンダタラの進路をふさぐ。それを見て薫はつまらなそうに舌打ちをした。

「私だけを見てよ……そんな女、ほつといて！ 玲二は私を見ていれればいいの！」

気がついた時には、薫は火影の目の前に立っていた。薫の体から溢れる邪気が爆発したように広がり、火影は思わず仮面の口の部分に手を当てた。動きの止まった一瞬を、薫は見逃さない。

「うぐううっ！」

跳び上がったかと思うと、右足で火影の頭を蹴り飛ばした。邪氣のこもった一撃は、女子高生の物とは思えないほど恐ろしく重い一撃で、火影はなすすべもなく地面に沈んだ。

「あはっ、パンツ見えた？　大丈夫、今日は勝負下着付けてきたから」

ピクリとも動かない火影の頭を、薫は思い切り踏みつけた。

「玲二ってMだっけ？　なんか意外とMっぽいよね。こうされるの嬉しいんですよ？　興奮しちゃう？　私、玲二だったらどんな性癖でも受け止めてあげるから」

「玲二……」

火影の手がぴくつと動いた。またもや泉の言葉に反応したのが面白くないのか、薫は泉をキッと睨みつけた。

火影は薫の足をつかむと、頭についたゴミでも投げ捨てるかのように、乱暴に振り払った。

「泉……お前のそんな声を聞いてたら、俺だって調子出ねえよ……」

「玲……二……？」

「レナ、来い！」

「承知した！」

イッポングダラと睨みあっていたレナが黄色の光球に変化すると、火影の持つ黄色の札へ吸い込まれていく。火影はその札を燃やし、装甲の色を変化させた。杖は構成せず、そのまま右手をかざす。

「鬼火！」

火影の足元から陰陽の模様が浮かび上がり、そこから九つの紫色の火の玉、鬼火が放たれた。鬼火は薫とイッポングダラにそれぞれ近づき、体の周りを高速で回り始める。

「動けない！？」

二体の動きを止めた火影は、フラフラしながらも泉に駆け寄ると、いまだ震えている泉の体を抱き起した。

「ま、待ちなさい！」

「悪いな、ちよつとタイムだ。木霊！」

火影は木霊に合図を送ると、泉を抱きかかえながら走り出した。木霊はそれに頷くと、地面に手を当てて妖気を放出した。

薫とイッポングダラの足元から無数の木の枝が伸び、二体を覆うように囲った。イッポングダラが口から冷凍波を放つも、木の枝の向こうに火影の姿はすでに無かった。

「大丈夫か、泉」

「うん……ごめんね」

二体の邪気が十分に遠くなったのを確認し、変身を解除した玲二は、自分の腕の中で小さくなっている泉を見下ろした。

普段、玲二をからかつては笑っているような泉とは全く違う、恐怖に駆られ目に涙を浮かべている泉。初めてみる弱った泉を、思わずぎゅっと抱きしめた。

「ありがとう……」

泉は玲二の袖を握り締めながらも、精一杯の笑顔を向けた。

「何かあったのか？」

イッポンダタラの姿を目にした泉の様子は明らかに普通では無かった。尋常ではないほどの恐怖を、一体どこに感じたのか。

泉は玲二をしばらく見つめていたが、ふうと一息ついた後、ポツポツと話し始めた。

「私のお母さん、イッポンダタラに殺されたの」

「……うん」

「三年前のことなんだけど、やっぱり今日みたいに突然雪が降ってきて……ちょうどお盆で親戚の家に行っていた時なんだけど、私が偶然出くわしちゃって、お母さんが私をかばって戦ってね」

「……うん」

「……お母さんが戦うのはその時初めて見たのだけど、負けるとは思ってなかった。凄く強いし、凄く綺麗だったから。……でも、イツポンダタラはただの妖怪じゃなかった。邪気妖怪だった。……お母さんは私を逃がすと、そのままイツポンダタラに殺されちゃった」

「……………」

「イツポンダタラはそれで満足したみたいで、姿を消した。私は急いでお父さんに助けを求めたけど、お父さんはお母さんが死んだとわかると、すぐに『仕事があるから』って帰っていつちゃった。……仕事って何だったかわかる？ ……このことよ」

そう言っただけで、泉が取り出したのは、冷姫の札だった。泉はそれを握り締める。

「この札にはお母さんの力が宿っている。強力な火影の札に対抗するために、作ったのね。そしてある時、これが私の所に届いたの。これで邪気妖怪と戦え。……どうせ、私もお母さんも、あの男に利用されているだけ。……悔しいの。お母さんの力を、戦いなんかに使わされて……でも使わなきゃ、あの人はこの札を破棄してしまう。この力を使えるのは、私だけだから、使えない力は持っていてても仕方がないって……。仮にも、自分が愛した人じゃないの？ ……ねえ、玲二……家族って、何なのかな……」

泉が話し終わってしばらくして、玲二の歩みが止まった。

目を赤く腫らしながらも、どうしたのかと玲二を見上げる泉。玲二はそんな彼女をゆっくりと降ろす。

「あまり覚えていないけど、俺は両親を尊敬しているよ。だから、泉みたいな事はわからない」

でも、と玲二はつづけた。

「家族つてのは、自分の帰る場所だよ。俺の親は父さんと母さんだけど、家族はかがやきの家の皆かな。嬉しくても辛くても、自然とそこに足が動く。楽しくて、愛しくて、ほっとできる、自分の居場所。泉にもそういう場所、あるんじゃないの」

「……………でも」

「泉が望むなら、俺は泉の家族になる。泉が辛い時、悲しい時、いつでも支えてやりたいと思う。泉が帰る場所として俺を望むのなら、喜んで迎える。お前の居場所を作る」

玲二は泉の手を握った。温かい手。泉は体中が熱くなるのを感じた。触れ合っている手だけではなく、腕も、顔も、胸の奥も。

「玄武さんの事は、これから一緒に、ゆっくり考えよう。いつか歩み寄れる時が来るよ」

「そう、なの？」

「だって、世界で唯一の親子じゃないか」

そう言つて、泉のサラサラの黒髪をくしゃくしゃと撫でる。しばらく呆けていた泉だが、くすつと笑うと、玲二に飛びついた。そのまま腕を背中にまわし、きつく抱きしめる。

「……さっきの言葉、プロポーズみたいね」

「……ああ、えっと、そういう意味じゃなくてだな」

「くすつ、わかっているわよ」

泉は顔を上げると、玲二の顔を見つめた。

チュツと小さなリップ音。何が起こったかわからない玲二に、泉はイタズラが成功した子どものような笑顔。玲二は泉の唇が触れた頬に手を当てた。

「唇にチュウは、返事をもらえるまで待つてあげる」

何か言いたげな玲二だったが、泉のにつこり笑顔には何も言えず、まあいいかと思えてしまうのだった。

「……フツ、もう大丈夫か？」

「……うん」

小さく、しかし力強い返事。

玲二は「よしっ」と気合を入れると、再び札を取り出した。

「さっき殴り合った感想だが、奴の皮膚はやたらと分厚い。多分普通の火影だと長期戦になるだろうし、そうなると体力の消耗も激しい。龍で一気にケリを着けようと思う」

「うん。大丈夫なのね？」

「ああ、やってみせる。だから、悪いけど泉には……」

「わかってる。奴に隙を作ればいいのね」

泉はいつもの表情に戻ると、握りしめていた札を指の間にはさんだ。玲二は頷くと、前を見た。地面がグラグラ揺れ始め、二人の前の地面からIPPONDATARAの腕が伸びてきた。

薫の姿は見えないが、むしろ好都合だ。二人は札をそれぞれ燃やし、凍らせる。

「「変身！」」

まず飛び出していったのは冷姫だ。IPPONDATARAの長い腕が届かないぎりぎりの距離で吹雪を放ち、敵を挑発する。

相手も同じ属性な以上、冷姫の攻撃は有効打にはなり得ない。それを承知で冷姫は囀役を買って出たのだ。

全ては玲二のため。自分の居場所を与えてくれると言った、玲二のため。

恐怖は無かった。後ろには愛すべき人がいる。胸に手を当てれば、優しい母親の声が聞こえてくるようだ。

——頑張つて、泉。お母さんもついているわ。きっと大丈夫よ。

「うん！」

IPPONDATARAが姿を現した。地面から出てきた直後、IPPONDATARAは体勢を整えるために動きが緩慢になる。その一瞬を突き、冷姫は冷凍槍を作り出す。

「はあああああああああ！」

地面と繋がっている下半身に、思い切り槍を突き立てた。濁った血液やら体液やらが噴き出し、イッポンダタラは痛みに呻いて地面に倒れた。

「玲二！」

「ナイスアシスト、泉！」

火影はすでに青の札を構え、精神を集中させていた。やがて炎に包まれた札は光の粒子へと分解され、火影の鎧をまといていく。

「神獣鎧装！」

青い鎧に金色の眼光。自身をも喰い破らんばかりの妖気が、火影・龍の体からあふれ出た。

（あの下半身は他とは違い柔らかいようだが、浄化するには核のある上半身を狙う必要がある。一点集中の攻撃で一気に貫くぞ）

「おう！」

火影は神獣の槍を出現させると、両手を使って頭上で回転させる。火影を中心に小さな竜巻が発生し、それと同時に大気中のチリがこすれた摩擦によって電撃が発生する。

火影の炎は相変わらず凄まじい出力だが、今回は鎧が砕けるような事は無い。火影は右脚で力強く踏み込むと、竜巻を纏った槍を持ち、駆けだした。

「神獣一体！ スピニングトルネード！」

まさに一瞬の出来事だった。倒れて動けないIPPONDATARAを青い閃光が貫いたかと思うと、火影の姿はすでにIPPONDATARAの背後で、全てが終わったかのように槍を地面に突き立てた。数秒遅れて、IPPONDATARAの体にぽっかりと開いた穴から邪気の塊が飛び出て、空中で大爆発を遂げた。

IPPONDATARAの体は若干縮んだが、それでも十分大きい妖怪のようだ。力を失ったIPPONDATARAは地中へすごすごと戻っていく。

「やった……玲二！」

変身を解いた泉が、同じく変身を解いた玲二に抱きついた。

困ったような表情を浮かべる玲二だが、すぐに笑顔になると手を泉の背中にまわして抱きしめる。

（何もこんな時まで抱きつかなくてもいいのではないか……）

（無粋だぞ九尾。そんなに不機嫌な顔をするでない）

二人を気に入らなそうに見ているレナと、彼女をからかう龍の間で一悶着があったのだが、それはまた別の機会に。

第二十三話 不穩 Prologue of nightmare

最初はほんの些細な出来事からだった。

「おつはよ、中村君」

聞きなれた声が聞こえて玲二が顔を上げると、いつものように百合が手を振っていた。今日から衣替えということで、冬服であるブレザー姿である。百合は肩にかけていたカバンを机の横に提げ、椅子を引いて座る。おはよう、と挨拶を返した玲二だが、百合の頬にテープで固定されているガーゼに気付いた。

「それ、どうしたの？」

「ああ、これ？ ……んー、大したことないよ。ちょっと怪我しただけ」

よく見ると、ガーゼから青い痣がはみ出して見える。百合の笑顔も、若干ひきつっているような感じた。切り傷では無く、何かにぶつけた痕だ。

「ちゃんと冷やした？」

「心配しないで。大丈夫だから」

再び笑顔を向けるも、痛みに顔をしかめる百合。

何かがおかしい。具体的にどこが、と言われれば答えられないが、玲二は何かが引っかかってしょうがなかった。

いつもの百合なら何と言うだろうか。「心配してくれるの？ あり

がとう」と笑ってくれるだろうか。それともちよつとふざけながら「唾つけとけば治るって。だから中村君、舐めて」とでも言ってくれるだろうか。と、そこまで思考が到達したところで、何を考えているのかと玲二は自分を殴りたくなった。

（いや、まあ、確かにいつもの立花なら言ってもおかしくはないけど……って、そうではなくて）

「立花、こっち向いて」

「何？」

「怪我を治すおまじない」

そういうと玲二は大きく広げた右手で、ガーゼを覆うように百合の左頬に触れた。指先だけでガーゼ越しに患部に触れるのもいいかと考えたが、怪我をした部分は敏感になっているだろうし、恐怖心を和らげるためにも包み込むように手を当てたのだ。

「……ふっ」

しばらく呆けたような顔をしていた百合だが、嘔き出すように笑った。すぐに手で口を抑えてはいたが、笑いを抑えられないようだ。

「な、中村君ってば、真剣な顔で何をするのかと思えば……ふふっ、それって、いわゆる“痛い痛い飛んでいけ”ってやつ？」

「もうちよつと実用的かな」

「あれ、本当に怪我とか治せる力でもあるの？」

「そういうのは無いけど……強いて言えば、元気をちょっと分けたみたいなものかな」

人間に影響の無い範囲で、自身の妖気を百合に流す玲二。

妖気のコントロールは、合宿での泉との特訓で大分上手くなった。それでも泉には負けるが、それは泉の力が妖怪すらも驚くほどのコントロール能力だからだ。

ガーゼの下の痣は残るも、表面の傷は無くなった。力を自分に行使するのと他人に行使するのでは全く違うのか、玲二は緊張を解くと少し長い息を吐く。

（泉の方が適任だよなあ……色んな意味で）

「……あつたかいね」

「大丈夫？ どこか痛くない？」

「大丈夫だよ、ありがとう」

百合はにっこり笑うと、「おはよう」を言いながら近づいてきた綾や美沙に「おはよー」と屈託のない笑顔で返した。

そんな百合を見ながら、玲二はやはりどこか気になるようで、落着かないように髪の毛をガシガシとかきむしった。

「で、何があつたのかは話してくれなかったの？」

「ああ。立花のことだから、あまり心配はしていないんだけど……何か引つかかるんだよなあ」

「立花、百合ちゃんよね。……何もなければいいんだけど」

昼休みに購買にある自販機の前でぱったりはち合わせた玲二と泉は、そのまま空き教室に移動し、二人で昼食を共にしている。ちなみに普段泉は購買で総菜パンなどを買ったりしているのだが、玲二の強化合宿が明けてからは玲二が泉の弁当を作って持ってくるが多くなった。

「わ、今日も美味しそう」

玲二の弁当箱の半分の大きさしかない弁当箱に詰められた、白いご飯と色とりどりのおかず。高校生の、ましてや男子が作ったとは思えないほどの出来栄えだ。

「それで本当に足りるの？」

女子ということとは考慮してあるものの、泉は玲二と同じく半妖怪で、これまた玲二と同じく邪気妖怪との戦いでは常に前線に立って奮迅しなければならぬ。自分の半分ほどの量で足りてしまうという泉に、玲二は女子高生のエネルギー摂取の効率について真剣に考えた。

「私は玲二ほど動かないし、妖気のコントロールで重要なのは集中力。甘い物を食べれば十分戦えるわよ」

「まあ、大丈夫ならいいんだけどさ」

「それよりもありがとうね、お弁当」

「いいいいいよ。最初は驚いたけどな。何でも出来そうな泉が、よもや料理が下手とは誰も思っまい」

合宿明けの初日に購買で泉とばったり出くわした玲二は、総菜パンを片手に持っている泉に、何気なく「弁当は作らないのか」と聞いてみた。聞けば料理はあまりしたことがないという。

「へ、下手じゃないもん。調理実習くらいだったら余裕よ」

「調理実習ねえ……」

何がおかしいのかニヤニヤ笑う玲二に、泉は頬を膨らませてぷいっとそっぽを向く。それを見た玲二が今度は声を出して笑い始め、これには泉も顔を真っ赤にして「もうっ」と玲二の胸をぽかぽか叩いた。

ちなみに一緒に昼食をとるようになってからこのような痴話喧嘩じみた行為は何度もあり、その内何回かをこっそり見た生徒によつて「中村玲二と岡山泉は付き合っている」なんて噂が水面下で流れていたりするのだが、二人は全く知らない。

「良ければ今度ウチに来いよ。夕飯出すし、時間があれば料理を教えてやるから」

「う……ほ、ホント？」

料理を教えるというワードに泉が反応した。玲二はやっぱり出来な

いクチか、と思いながらも口に出すのは止めた。

「じゃあ、お願いします」

「お願いされました」

楽しそうに笑いながら卵焼きを口に運ぶ玲二を見て、泉はポツリと呟いた。

「それが玲二の素なの？」

「へ？ ……何、突然」

箸を止めた玲二はこちらを向く泉を見つめる。

「火影に変身すると、何だかちょっと性格が変わるなあって思ってたけど、これが玲二の素なんだよね？」

言われてはたと気づく。確かに最近泉と話す時は、下手に気負いせずに話せる。戦っている時の好戦的な熱血漢が素だとは玲二は思っていないが。

「……自分でも素とかよくわからないけど、お前と話す時は気楽でいいかな」

玲二は何の気も無しに言ったが、泉は「お前」という二人称に顔をうつすら赤く染めた。普段玲二は基本的に他人を「君」と呼ぶ。廉など仲の良い男子は別だが、女子に対して「お前」と呼んだことは無いはずだ。

そう思うと泉は気恥ずかしくなり、顔を俯かせて弁当を口に運ぶ。

玲二は首をかしげるが、彼女も妖怪の戦士である前に、一人の乙女なのだ。

「……ん？」

ふと、窓の外を見た玲二は、一人の女子生徒に気がつく。中庭のベンチに座って一人弁当をつっている彼女の頬にガーゼが見える。

「立花？」

いつもなら綾や美沙と一緒にだったり、たまに廉と二人で食べたいたりする百合だが、今日は一人である。

「百合ちゃん？」

「一人っていうのは……変だな」

二人で百合を見てみると、昼休み終了を告げるチャイムが鳴った。百合は弁当箱を巾着に入れると、ベンチから立って教室に向かい始める。

立つ寸前に小さく溜息をついたのを、玲二は見逃さなかった。

放課後、一人で帰ろうとする百合を玲二は呼びとめた。

百合は玲二の後ろを見て廉達の姿を探しているようだが、玲二一人

だとわかると改めて驚いた表情を見せる。

「珍しいね。中村君だけ？」

「うん。よければ一緒に帰らない？」

百合は一瞬呆けたような顔をするが、すぐに笑顔になって頷いた。百合の家は決して遠くは無いが、近いわけでもない。玲二にとっては少し遠回りになるが、気にしてはいない。遅くなるようなら、違反ではあるが、旋風の後ろに乗せて送ってあげればいいと考えた。

「やっぱり、気になる？」

「え？」

今度は玲二が驚いた。百合は笑いながら自分の頬を指差す。

「気になるよねえ。中村君は結構鋭いし、『何もない』で隠せるはずがないんだけど……」

「迷惑じゃなければ、聞かせてくれないかな」

「……………」

チラリと百合を見ると、前だけを見て真剣な表情をしている。しばらく沈黙が続いた。が、それを破ったのは百合の「いいよ」という了承の合図だった。

「妖怪……のことなんだけど……」

びくつと玲二の肩が震えた。まさか、自分の正体がバレたのだろうか。特にPWも正体の秘匿は義務づけていないし、そこまで困る事も無いのでバレてもいいのだが、やはり普通の生活をするには少々周りの目が気になるので、玲二は隠す事になっている。

「私のお母さん、妖怪に殺されたんだ」

玲二の足が止まった。百合もそれに合わせて立ち止まる。

(……立花も……?)

玲二の脳裏に、先日過去を打ち明けてくれた泉の姿がよぎる。

「結構前のことなんだけどね。でも妖怪なんて言っただって、警察は信じてくれない。三ヶ月もすれば、私も諦めた。妖怪も自然現象だって。お母さんは不慮の事故で死んじゃったんだって」

百合が俯いた。玲二は彼女に向き直り、再び話し始めるのを待った。二人の脇を、何事かと振り返りながら生徒が帰路についていく。

「でも……優しくったお父さんが、変わってしまった。仕事が終わっても家に帰ってこない。たまに帰ってきたと思えば……」

百合は頬に手を当てた。その上を一筋の涙が伝う。玲二は百合の手の上に、自分の手のひらを重ねた。

「やっぱり、許せない。妖怪はお母さんを殺して、お父さんを変えた。どんなに考えたく無くても、妖怪が憎いって気持ちを抑えきれない……」

妖怪が憎い——その言葉に玲二の手が震えたのを、百合は感じた。玲二の手を両手で包むと、泣きながらではあるが、百合はにっこり笑った。

「中村君は大丈夫。見た目だって人間と同じだし、妖怪って言うても、半分だけでしょ？」

「立花……」

「私、どんどん変になっちゃってる。いつも通り過ごすのが辛い。笑うのが辛い。何かを考えているだけでも辛い。……生きてることが……辛い」

気がつけば玲二は百合を抱きしめていた。百合は両手を玲二の背中にまわして抱きつく。制服が涙でじわりと濡れていくのを感じたが、玲二は百合を離さなかった。

「お前は頑張ったよ」

「え……」

「何かあったら何でも話せよ。俺じゃなくても、委員長でも中島でもいい。廉でもな。俺たちは絶対に、お前の力になるから」

自分の知っている玲二ではない。でも、安心できる。百合は玲二の胸に顔をうずめながら、声を抑えて泣いた。

「辛い時は気にせずに泣けよ。……声出してさ」

「……うん……うあ……あああああああああああああ

あああ！」

わんわん泣く百合を、子どもをあやすようにポンポンと背中を撫でる玲二。その優しさに百合の目からさらに涙があふれた。感謝したいのに、出てくるのは嗚咽だけ。

「あのね……ぐずっ……中村君……えぐっ……」

「話さなくてもいいよ。わかってるから。こっちこそありがとう。いつも朝一番に挨拶してくれるよな。あれ、すごく嬉しいよ」

抱きしめたまま背中をさする内に、やがて百合も落ち着いてきた。真っ赤な目をしながらも「ありがとう」と笑顔で言う百合に、玲二も笑顔になった。

帰ろうか、と玲二が言いだそうとすると、突然木霊達の声が頭に響いた。

（玲二！）

（邪気だ、近いぞ！）

「なっ……」

そのタイミングで携帯電話も鳴った。サブディスプレイに表示された名前は岡山泉。

「泉！？」

『玲二！ ごめん、妖怪逃がしちゃった！ 今百合ちゃんと帰っているんだよね？ もしかしたらそっちの方に行ったかもしれないか

ら……』

「わかってる。立花は絶対に守る。……絶対にな」

通話を切ると、百合を下がらせ腕を構える。すでに邪気妖怪はそこにいた。一体は幾度となく戦い、苦戦しながらも退けてきた守護獣、麒麟。そしてもう一体は、巨大な白い妖怪。エイのような体だが、尻尾は木綿布のように薄く、しなやか——イッタンモメンだ。

「あ、あの妖怪……」

玲二の後ろから百合が小さな声で呟いた。その目はしっかりと麒麟を見据えていた。

「まさか……」

「あいつが……お母さんを……」

「くそっ、下がってる立花！」

札を取り出して戦闘態勢に入る玲二。麒麟だけでなく、玲二の正体を知らないイッタンモメンも、玲二から放たれる妖気に何かを感じ、威嚇するように鳴いた。

そんな戦慄の走るこの場に、もう一体の妖怪が空から舞い降りてきた。漆黒の体。巨大な翼に、三本の足。かつてヤマトタケルノミコトを導いたとされる霊獣、八咫鳥^{やたがらす}。

「兄ちゃんが火影だなア？」

見た目とは裏腹に陽気な調子の八咫鳥は、玲二の頭上で宙に止まっ

た。羽ばたいてもいないのに空中で静止できるのは、強力な妖気のなせる技か。

「そうだが、八咫鳥か？」

「ご名答オ！ 俺様は気分がいいから、特別に力を貸してやらア！ 札、出しなア！」

玲二の腰に下げられた札の一枚、まっさらな封印の札が黒く染まった。そこに白い文字が浮かび上がる。怪・霊獣鎧装呪詛火影

「八咫鳥ごときが、邪魔をするな。我々は火影の力を見定める必要があるのだ」

「黙りなチビ公！ 言っておくが俺様は、テメエに負けるほどアマちゃんじゃねえ！ 火影、いっちょ燃え上がろうぜえ！」

「変身！」

炎と鎖に体を包まれ、火影に変身した玲二。

後ろにいた百合が、その姿を見て一歩後ずさろうとするが、麒麟を見た時以上の衝撃が彼女の足をもつれさせる。百合は尻もちをついた。

「そこまで言うなら、力を借りるぞ。八咫鳥！」

「おうよオ！ 霊獣鎧装といくぜえ！」

八咫鳥が黒い球体に変化し、火影の鎧に吸い込まれていった。鳥の羽根が舞い散る中、火影の鎧が黒く染まっていく。背中から黒い翼

が出現したかと思うとすぐに消えた。どうやら翼は自在に出せるが、普段は無いらしい。

火影・怪。直接的な戦闘力は他の形態に劣るものの、大空を自在に飛び回ることができ、敵への奇襲で翻弄する形態。

「……………?」

新たな形態に変身できた。だが玲二は右手を閉じては開き、閉じては開き、を繰り返す。やがて八咫鳥も何かに気付いたようだった。

（おい兄ちゃん、どういうこったア？）

「わからない……コントロールは出来るようになったはずなのに……」

「何をばさつとしている、火影！」

動かない火影に痺れを切らしたのか、麒麟が口から炎を吐きだした。慌てて地面を蹴って飛び上がる火影。背中から黒い翼が広がり、火影は空中で静止した。

「くっ……………炎が……………っ！」

翼の付け根から炎が噴き出した。それだけでなく、右手や左手からも炎が止まらない。

（兄ちゃん、落ち着けエ！　まずは集中して……）

「くっ……………あああああ！」

火影は抑えきれない炎を無理矢理麒麟に向かって放った。しかし直線的な攻撃のため、やすやすと避けられてしまう。炎を飛び退いてかわした麒麟は、着地した時に火影の異変に気付いた。背中にある大きな翼が、火影自身の炎に焼かれてボロボロと崩れているではないか。

（木霊、九尾、龍！ お前らも手伝えエ！ 兄ちゃん、何か変だ！）

(玲！)

火影の体の中から九つの鬼火が現れ、火影の体を取り囲む。しかし火影は鬼火を炎でかき消すと、全身から炎を噴き出させた。

「あああああああああああああああ！！」

黒い鎧がはじけ飛び、通常の火影に戻る。追い出された八咫鳥は体のあちこちを焦がしながら地面に激突した。

「ぐうううう！ 一体どうなつてんだア……ツ！？」

叫び声をあげる火影から、二つの炎が放たれた。一つはイッタンモメンを貫き、イッタンモメンは邪氣もろとも木端微塵に爆発。そしてもう一つは八咫烏の胴体を貫いた。

「どうして……中村君……」

百合は暴走する火影を見て、涙を流した。真剣な表情で百合の話に耳を傾ける玲二の顔が、百合の背中を撫でる優しい玲二の顔が、重くなって――砕けた。

キュオオオオオオオオオオオオオオオオオ！

火影の炎に貫かれたイッタンモメンが、悲痛な叫び声を上げながら爆発四散した。骨も肉片すらも残らず、それを見た麒麟は一步退く。

（バカな……この火影は“殺さず”の戦いをするはず……これは一体……）

麒麟の視線の先には、自らの炎に包まれている火影。そして横で倒れているのはイッタンモメンと同じく炎に貫かれた八咫鳥。核を捕えていなかったのか、木端微塵に爆発したわけでは無いものの、八咫鳥は息をするだけで精一杯のようだ。

「お前ら……兄ちゃんを……支えてやってくれエ……」

八咫鳥の声に反応し、火影の幻鎖から下がっている札の中から、木霊、レナ、そして人型の龍が飛び出してきた。それと同時に八咫鳥の目はゆっくりと閉じた。

「やたがら……！？」

龍が八咫鳥に近づき、漆黒に羽毛に触れようとすると、突然八咫鳥の亡骸が雲散霧消した。かすかに残る妖気をたどれば、何と火影が左手を伸ばし、八咫鳥の妖気を吸収している。

「うおおおおおおおおおお……！！」

火影は右手から炎を放つ。次の標的となった麒麟はそれを難なくかわすが、炎から放たれる禍々しい狂気を感じ、身震いした。

「チッ……」

舌打ちをすると、麒麟はその場で姿をくらました。

見えない麒麟を追おうとするかのように、火影が走り出した。

「玲二、やめろ！」

レナが火影にとびかかり、左腕に噛みついた。しかし火影はいとも簡単にレナを振りほどくと、体内の妖気を全て放出するかのように炎を噴き出させた。背中から飛び出た炎の翼が広がり、怪の姿にならずとも大空に舞い上がる。

「八咫鳥の力を吸収した！？」

「玲二はそんなことしないよ……」

「わかつている。火影の力が暴走しているんだ。今の玲二は玲二じゃない！」

珍しく焦りを見せる龍は、普段の龍型へと姿を変えた。そのまま青の光球になり、火影の中へ入っていく。火影の鎧が強制的に龍の鎧へと変化していく。

「今の玲二では、龍の姿はコントロールできない！ 木霊、私たちも行くぞ！」

「うん！」

レナと木霊はそれぞれ黄色と緑色の光球になり、同じく火影の中へ入っていった。火影の胴体はそのままに、右腕が霊、左腕が妖の鎧に変化。頭部と下半身は通常の火影。三体の妖怪の鎧を身にまとった姿——火影・四炎^{しえん}

「狐炎縛！」

火影の左腕から九尾の姿をした炎が放たれ、火影の体に巻き付いた。

「木霊！ 鎖の抑制力をあげてくれ！」

「オッケー！」

体中に巻き付いた鎖が、緑色に変色した。木霊の妖気が通った鎖は、今まで以上に火影の妖気を抑え込む。

「玲ニイイイイイイイイイイ！」

火影の赤い目が、青く変わる。龍の叫びは、玲二の精神深層部へと響いた。

かがやきの家、玲二の部屋。
ベッドに寝かされた玲二の傍に泉が座っていた。時折苦しそうにう

めく玲二の手を両手でしっかりと握っていた泉。徹らはそんな彼女を見て微笑ましく思ったものの、数時間前にぐったりとしている玲二を引きずりながら戸を叩いた泉を思い出し、複雑な表情を浮かべるのだった。

「りゅ……う……」

四炎に変身してからずっと、龍は玲二の意識の中へもぐり込んで呼び覚まそうとしている。

あれから邪気の反応をたどっていた泉だが、急に反応が消えたのに気付いて現場に急いだ。そこで見た物は、ぐったりと倒れている玲二と、彼に寄り添い目を閉じている人型の龍。そして力を使い果たし息も絶え絶えな木霊とレナの姿だった。

「ん……」

部屋の隅で寝ていた木霊とレナが目を開けた。泉は二体に気付くと、ほっとしたように息を吐いた。

「二人とも大丈夫？」

「ああ。お前こそ、ずっと付きつきりで、大丈夫か？」

「私なら大丈夫よ。ねえ、何があったの？」

木霊とレナは、泉に先ほどの戦闘の状況をかいつまんで話した。麒麟とイッタンモメンが襲いかかってきた事。そこへ八咫鳥が現れて、玲二へ協力を申し出た事。火影・怪に変身した途端、暴走状態になっってしまった事。八咫鳥とイッタンモメンを殺してしまった事。

「八咫鳥の力は、龍に比べればずっと扱いやすい量だったはず。なのに暴走するなんて……おかしいよね？」

「いや、違うな。暴走のトリガーは八咫鳥では無い。私だ」

木霊の疑問に答えたのは、泉の反対側で玲二の手を握りながら意識を彼と同調させていた龍だった。

「どういうこと？　玲二は龍の力をコントロールできるようになったんでしょ？」

「確かに。だが急激な力の変化を感知した火影は、その性質を変化させようとした。より強力な妖気に耐えられるように、より強力な炎が撃てるように。だが玲二は火影の変化に追いついていけなかった。結果、火影の力に吞まれ……暴走した」

龍は静かに立ちあがる。怒りで握られた拳が震えている。だがその怒りは、自分自身に向けられた物のようだった。

「私が！……私が玲二にあんなことを……力を使えなどと言わなければっ！　玲二は苦しまずに済んだ！……邪気に吞まれたまま、玲二に倒されていれば……」

「やめろ……龍……」

「ひゃんっ！？」

手首をつかまれ、ぐいっとベッドに引き寄せられる。龍の手首を握った玲二は、怒りの眼差しを龍に向ける。

「お前は……大事な仲間だ……次にそんなことを言ったら……ブツ飛ばすからな……」

「玲二……玲二いつ！　うわあああああああ！」

玲二はにつこり笑うと、龍の頭を撫でた。龍は涙をぼろぼろ流しながら玲二に抱きつく。

「心配掛けたな。お前らも……」

「大丈夫なの？」

泉は体を起こそうとする玲二をおさえ、ベッドに戻す。玲二は不満そうに眉を寄せるが、泉は「寝てなさい」の一点張りだ。

「そういえば……立花は！？」

「百合ちゃんは大丈夫よ。玲二を虚ろな目で見ていて、かなり衝撃的だったと思うんだけど、ちゃんと家に帰れるって言っていたから」

それを聞いて一安心する玲二だが、すぐに直前の百合との会話を思い出した。

妖怪に母親を殺され、父親との関係も壊された百合。彼女は妖怪への憎しみと、生きる事の辛さをぶつけてきた。

そんな彼女に、火影としての自分を見せてしまっただ大丈夫だろうか。しかも、普段通りではなく、暴走して妖怪を二体も殺してしまった自分の姿を。

「……そうだ……俺は、殺したんだ……」

妖怪を二体、この手で。

学校に百合の姿は無かった。

ホームルームになっても空席のままの隣の机を見つめ、玲二は溜息をついた。力になると言った傍から、彼女の氣力を削いでしまったのなら……

「立花……」

廉や綾、美沙も心配する中、ついに昼休みになった。百合はまだ学校に来ていない。

玲二は百合の事を打ち明けるべく、泉の姿を探した。だが購買にも空き教室にもいない。一組の生徒に聞いてみると、四限が終わってすぐに早退したという。

「泉もいないのか……誰に話せばいいんだよ……」

誰もいない空き教室で、一人玲二は頭を抱えた。

（玲二、自分を責めちゃダメだよ）

「そうは言ってもよお……ああ！」

髪の毛を掻きむしり、床に大の字になって寝転んだ。

目を閉じると百合の泣き顔が浮かんだ。すぐに首を振って泣き顔を消しさる。

「火影の調子もおかしいし……どうなっちまうんだ、俺」

「あ、玲二！」

ドアが開く音がし、玲二が顔を上げると、息を切らした廉が立っていた。走ってきたのだろうか、額には汗が浮かんでいる。

「よかった、見つかって。昼休みもそろそろ終わっちまうし、次は移動教室だしな」

「そうか、もうそんな時間なのか……」

玲二は重い腰をあげ、ゆっくりと立ち上がった。

いつもと様子の違う玲二を見て不安そうな表情を浮かべる廉だが、すぐにいつもの元気そうな顔に戻した。

「なあ玲二、放課後に立花の家に行こうぜって、皆で話してたんだけど」

「……そうか」

「お前も来るよな？」

「……あ、ああ」

玲二の返事を聞くと、廉は嬉しそうに笑って早く行こうぜ、と玲二をせかした。

正直、玲二は百合の家に行きたくなかった。何かを言わなければならぬ事はわかっていたが、どういう顔をして会えばいいのか、全くわからなかったのだ。

何も知らず楽しそうに笑う廉を見て、玲二は言い様のない罪悪を感じた。

対策室には佐藤と香苗の他に、呼び出された泉の姿があった。

誰もが信じられないといった顔で、特に泉は涙を流しながらモニターに向かって叫んでいる。

「でも、そんなのおかしいじゃない！　なんで……」

「決定事項だ。お前達は言われたとおりに動け」

モニターには「SOUND ONLY」の文字が表示されており、聞こえてくるのは泉の実父、仙道玄武の物々しい声だ。

「嫌よ！　ねえ、考え直してお父さん！　あなたは組織の……」

「岡山泉！」

突然、雷にも似た玄武の声が轟いた。思わず泉はびくつと震え、背筋を伸ばす。

「……はい」

「もう一度言う。決定事項だ。我々は火影を封印する。場合によっては抹殺も考える。いいな、佐藤、柊」

「はい……」

通話がきれて画面は真っ暗になった。

泉は膝をつき、泣き叫んだ。

綾、美沙、廉と、その後ろに玲二。四人は予定通り、百合の家に向かっていった。

三人よりも後ろを歩いていた玲二は、そのおかげで複雑な表情を廉達に見られずにすんでいた。頭の中で必死に言葉を紡ぎだしてみても、どれもがうわべだけの言葉にしか聞こえない。あんな事をしてかした自分が何を言っても、彼女には伝わらないのではないか。玲二は額に手をあて、溜息をついた。

「玲二……」

廉に肩をつつかれる。自分が暗い顔をしているのがバレたのかと思つた玲二は顔をあげて一言謝ろうとした。だがそこには異様な光景が広がっていた。

「ああ、すまん……え？」

十人ほどの男が四人を取り囲んでいる。全員黒のスーツを着用し、黒のサングラスをかけているため表情はよく見えない。

綾と美沙は怯え、廉も声が出せない。玲二は前に出て、目についた男に話しかけた。

「何か用ですか？」

その言葉がトリガーだったのか、何だったのか、男たちは一斉に拳銃を取り出し、四人に銃口を向けた。玲二は咄嗟に手を広げて三人をかばいながら、後ろで「ひっ」と美沙が悲鳴をあげるのを聞いた。

「……何か用か？」

消え失せる。その意味を込めて玲二はもう一度男に問うた。しかし男達は拳銃を下ろそうとせず、あるうことかコッキングして発射準備をした。

「この三人はただの人間だ。狙うなら俺一人にしろ……いいな！」

玲二は取り囲む男達を睨みつけながら叫んだ。その声に一人の男がビクツと震え、その衝撃で引き金にかけた指が動いた。

「きゃっ……っ！」

発砲の音を聞いて玲二が振り返ると、綾の肩を掠めた銃弾が、玲二の右頬を切った。綾のブレザーを染めていく赤色を見て、玲二の右手から炎が噴き出した。

「貴様ら……ふざけるなあっ！」

一瞬で発砲した男に近づくと、炎をまとった手で拳銃を握った。拳銃は熱によって熔け、ぐにやりと曲がった。

「ひいひいひいっ」

情けない声をあげる男の顔を、玲二は左手で思い切り殴った。男は別の男にぶつかってそのまま気絶、ぶつかられた男はそのまま発砲し、玲二を狙った。銃弾が右手に直撃、穴をあける。だが次の瞬間、右手の傷はあつという間にふさがった。

「化け物……」

玲二はそのまま右手で男を殴る。男のスーツから手帳のような物が落ちた。それは玲二も良く知る、PWが支給している身分証明書を兼ねた手帳だった。

「組織の連中が何の用だ!？」

激昂する玲二に、一人の男が前に出た。

「本部から火影封印の指令が出ている。場合によっては、抹殺しろと」

（チッ、仙道玄武の差し金か……木霊！）

（オッケー！）

玲二は腰から下げた緑色の札に触れる。男達は警戒して一斉に銃口を向けなおすが、突然地面を突き破って伸びてきた木の枝に足を取られ、あらぬ方向へ発砲してしまう。

「逃げるぞ！ 大丈夫か、委員長！」

咄嗟に目配せをすると、廉は頷いて美沙を支えた。玲二は委員長を抱きかかえ、男達の制止の声を無視して走り出した。

「ぐああああああああ！」

背後から苦しそうな呻き声と、ボキボキという何かが碎けるような音がした。

（玲二、落ち着いて！ 君の怒りが枝を動かしてる！）

「あいつらなんか……！」

死んでも関係ない。そう言おうとした玲二だが、左手で玲二のそでを握り締める綾を見て、言葉が出なくなった。

三人は玲二が人殺しになることを決して望んではない。彼らだけでなく、泉も百合も。玲二は理性を総動員させ、木の枝の動きを止めた。

「どうして……」

目の前に広がる赤、オレンジ。顔を撫でる熱風。腕の中にいる綾が玲二に抱きつき、頭を撫でる。玲二の目からは涙があふれていた。

「チクシヨウ……」

廉も目の前の光景に、地面に転がる石を蹴飛ばした。美沙は目を見開き、信じられないと言ったような表情で「あ、あ……」と声にならない声を漏らす。

「徹さん……華さん……裕太……千恵……沙夜！」

八年前の光景がフラッシュバックする。炎に包まれる我が家。遺体すらも見つからなかった父親、行方不明になった母親。

「なんで……なんでなんだよおおおおおおお！！！」

かがやきの家が燃えていた。

第二十五話 孤立 I c a n ' t d i e .

かがやきの家が燃えている。綾を地面に降ろし、燃えている家にゆつくりと近づいていく。

火の勢いや炎に包まれている面積から見ても、燃え始めてからかなりの時間が立っていることは明白だった。

今の時間は十八時過ぎ。中学生の沙夜はわからないが、小学生の裕太と千恵、そして徹さんと華さんは中にいる。燃えているのに外にいないということは……

「……くそっ！」

炎の中へ飛び込もうとした玲二だが、スラックスの裾をつかまれて止まった。綾が怪我をしていない方の手で玲二の裾をぎゅっと握っている。

「落ち着いて、玲二君。新塚君は119番」

「わかった」

廉が急いで携帯を取り出し、ダイヤルをプッシュしていく。

こんな状況にも関わらず冷静に指示を出す綾に、玲二は腹が立った。気がつけば彼女の襟首をつかんで引き寄せていた。

「何故止めるんだ！ あの中には俺の家族がいるかもしれないぞ！」

普段とは違う玲二の剣幕に驚く綾だが、玲二の目から視線を離さず勤めて冷静に答えた。

「いくらあなたが炎に強いからって、この中に飛び込んでいくのは無謀でしょう？ あなたまで巻き込まれたら……」

「そんなもん、知ったことじゃねえ！」

「きゃっ！」

玲二は綾を振り払い、炎の中へ飛び込んでいった。綾は急いで手を伸ばすが、その手は空をつかむばかり。

「何で……」

手をおろし、玲二が飛び込んでいった先を見つめる綾。そんな彼女に、連絡を終えた廉が近づいた。そして美沙の方も見て、口を開く。

「二人に教えて無かったことがあるんだ。さっき玲二が囲まれていた事にも多分、関係してくる」

建物の中は予想していた物よりも悲惨な状況だった。ただ火事が起きただけでなく、家具は倒れ、壁には穴が開き、床は剥がれ——そして邪気独特の息苦しさ。酸素が薄くなっているだけではない、どうやら邪気を持った何者かの襲撃があったらしい。

「邪氣がこんなに残っているってことは、もしかしたら燃えてからそんなに経ってないかもしれねえ……」

邪気妖怪の炎ならば、三十分から一時間もすれば家屋を全焼させてしまふ。その脅威は玲二が一番よく知っている。

燃え始めてすぐならば、もしまだ中にいるとしても間に合うかもしれない。玲二は急いでリビングへと繋がるドアを蹴破った。

（狙いは玲二か？ だったら何故直接狙わないのだ……）

「そんなもんでもいい！ 早く皆を……徹さん！」

徹はリビングで倒れていた。大きな食器棚の下敷きになっている。

割れたガラスや陶磁器の破片が飛び散っているが、それによる怪我は無さそうだ。しかし意識は無く、息もしていない。

玲二は首を動かし、キッチンにも同様に倒れている華を見つけた。

華は意識はあるが足を火傷しているようで、動かすたびに小さなうめき声をあげていた。

「華さん！」

「玲二君……早くあの人を……」

焦点の定まらない目で玲二を見て頬笑み、徹を指差す華。玲二は彼女を抱えると、徹の元へ引っ張っていく。

「しゃべらないで！ 沙夜と裕太と千恵は！？」

「裕太君と千恵ちゃんは二階の部屋に……沙夜ちゃんは帰って来てシャワーを浴びるって……」

「龍、二人を頼めるか!？」

玲二の声に、札から現れた龍は頷き、徹と華を軽々と担ぎあげた。華奢な少女の姿をしているが、力は玲二よりもはるかにある。華は驚いていたが、助かると思って安心したのか、気を失ってしまった。

「木霊、レナ、二階の二人を頼む!」

「「わかった」」

レナは木霊を背中に乗せ、階段を駆け上った。襲いかかる火の手はレナの鬼火が打ち消している。

玲二はそれを見送りながら脱衣所へ走った。燃えているドアを無理矢理開くと、そこにはバスタオルを巻いた沙夜がへたり込んでいた。

「無事か!？」

「玲二!」

脱衣所はリビングよりも火の回りが遅い。やはり燃え出してから時間はそこまで立っていないようだった。

「早く逃げるぞ! 服は?」

「えと、下着はつけてるけど……」

着替えは燃えてしまったようだ。玲二はなるほど、と呟くとやおらブレザーを脱いだ。続けてネクタイを緩めてワイシャツのボタンをはずす。「え、えっ?」と顔を赤くしながら慌てふためく沙夜を無

視してワイシャツを脱ぐと、沙夜に渡した。

余談だがワイシャツの下には薄手のシャツを着ている。

「これ着て、早く！」

「う、うん」

沙夜は玲二に急かされながらワイシャツを着てボタンを止める。玲二は沙夜にブレザーをかぶせると、脱衣所の窓ガラスを蹴破った。

（玲二、裕太君と千恵ちゃんの外に出したよ！ 二人とも意識は無いけど大丈夫！）

札から木霊の声が聞こえてきた。それを聞いて一安心した玲二は、沙夜を抱えて窓から外へ脱出した。

「全員無事か……」

「っ！？ 誰だ！」

外に出た二人の頭上から、男の声が聞こえた。

玲二が上を見ると、燃えている屋根の上に立つ、異形の姿があった。その姿から強烈な邪気を感じ、玲二の顔が怒りに歪んだ。

「貴様が……貴様が皆を！」

沙夜を下ろし、火影の札を構える玲二。だが異形は戦う素振りを見せず、そのままどこかへと消え去った。邪気の反応はどこにも無い。

「くそおっ……畜生おおおおおおおお！！」

夕闇の空に、玲二の叫び声が木霊した。

警察の事情聴取の後、玲二と沙夜は泉の家にいた。徹はまだ気を失っているが命に別条は無く、華の足も痕は残るが治ること。裕太と千恵は大丈夫そうだが検査入院としてしばらく病院にいらしい。

彼らの治りが早いのも、木霊らが妖気を使って治癒力を高めていたからだ。

「悪いな、急に押しかけて」

「ううん。そっちこそ、大変だったわね」

泉は風呂からあがった沙夜の髪の毛をドライヤーで乾かしている。それをぼーっと見つめながら、玲二は先ほど廉から来たメールについて考えていた。

『悪い、委員長と中島に火影のこと話しちまった』

別に彼女達に知られるくらい、と思っていた玲二だが、百合の反応を見てからは自分の正体が知られてしまうことを恐怖に感じていた。しかしすでに木霊やレナ、龍のことを見せてしまったのだ。言い逃れはできない。

「これからどうするの？ 住む所とか……」

「あー…… 適当に部屋を借りるとか、かな」

火影に変身して邪気妖怪と戦ったびに、組織からそれなりの報酬が出ていた。命の危険を伴う物なので、一度の案件につき数百万は下らない。

装備や旋風の整備、札の開発等で削られてはいるが、それでも沙夜達と一緒に住める程度の部屋を借りるくらいの資金はあった。

「私の部屋、使ってもいいよ？」

「……うん、まあ、ありがたいんだけど」

泉の申し出に玲二はガシガシと頭をかいた。

「組織とはもう関われない」

「……………」

泉の沈黙。それだけで、玲二はすでに泉に火影抹殺の件が伝わっているのだと気付いた。

「悪いけど、俺はコイツを手放すつもりはない。これだけじゃない、木霊もレナも龍も、手放す気はさらさらない」

玲二がそう言った所で、再び彼の携帯がメールを受信する。送り主は廉で、内容は『テレビ見てみるよ、ヤバいぞ！』の一文だけだった。

試しにテレビをつけてみると、丁度夜のニュースの時間だったらしい。画面には暴走状態となった火影がイッタンモメンと八咫鳥を消滅される場面が流れていた。

——「実在した妖怪!」「謎の組織PWとは!」のテロップが先ほどから入れ替わりで表示されている。

「……このままじゃ……玲二が死んじゃうよ……」

いつの間にか泉の手が止まっていた。沙夜は「玲二が死ぬ」というワードにハッと顔をあげて、二人を見た。

「死ぬつもりも無い。俺はまだ知らない。母さんの行方も、家を襲った犯人も。それがわかるまで、絶対に死なない」

『今出ている映像が、“火影”ということでしょうか?』

『そのようですね。詳しい情報はわかりませんが、そのPWという組織によれば——』

テレビから流れていたアナウンサーの声が消える。テレビを消した泉は、腹立たしげに何も映っていない画面を睨みつける。

玲二は立ち上がると、風呂を借りると言って部屋を出た。途端に、泉の目から涙があふれ出す。突然の事態に沙夜はおろおろした。

「あの、泉さん?」

「私のせいだ……私が玲二に、妖気のコントロールなんか急がせるから……」

「泉さん……」

嗚咽を漏らす泉。沙夜は彼女が落ち着くまでずっと背中を撫でていた。

翌日、玲二はいつものように学校に来ていた。とは行っても自分や沙耶たちの学校に連絡したり、替えのワイシャツを買ったりしたりですでに昼休みだ。教室のドアを開けた玲二は自分の席の隣を確認し、カバンがかかかっていない事を見つけて溜息をついた。

廉は教室に入ってきた玲二の姿を見つけると一目散に駆け寄った。

「玲二、来て大丈夫なのかよ」

「……廉。ああ、俺なら大丈夫だ。沙夜は一応休んでるけど、何ともない。今は皆のお見舞いに行ってる」

廉の呼びかけに反応が送れた玲二だが、一通り受け答えをすると再びぼーっとし始めた。玲二の視線を追うと、そこには席に着いて授業の準備をしている綾がいた。

「珍しいな。最近は大体俺達と一緒に話してるのに」

「……ああ」

昨日の一件以来、どこか気まずい雰囲気があって、中々話しかけら

れずにいた。綾もそうなのだろう、登校してきた玲二の方をちらりと見ない。

「トイレ行ってくる。カバンおいといてくれるか？」

「いいぜ」

玲二は廉にカバンを預けると、教室からは少し距離のあるトイレに向かつて歩き出した。だが別に彼はトイレに行きたいわけでは無かった。あても無く歩き続け、気付けば階段の目の前で足を止めた。

ここを上げれば、屋上に出る。

（五限まで……あと十分か）

何も用は無い。しかし玲二は階段を上り、屋上へと繋がるドアを開けた。

強く吹き付ける風に目を瞑る。ドアを閉めて目を開けると、そこには何人か生徒の姿があった。昼休みという事もあり、別段おかしいことではない。だが少し様子がおかしかった。

「早まるなって！ さあ、早く戻るんだ！」

何やら騒がしい。数人の生徒がフェンスに群がっていた。

何事かと玲二は近づいてみると、そこには――

「……………立……………花……………？」

玲二の声を聞き、生徒がさっと道を開けた。彼らの目は玲二に「どうか彼女を止めてくれ」と訴えかけている。

そしてフェンスの向こう側には、立花百合が立っていた。フェンスの向こう側、十センチも無い足場に立っている。

「おっはよ、中村君……今日は遅かったね」

普段と変わらない、百合らしい挨拶。しかし玲二を前にした途端、その目からは涙があふれ出ていた。

「最期に中村君の事、見たいなって……何となく来ちゃった」

最期――

「最期……最期って何だよ!？」

フェンスに駆け寄る玲二を、百合は手で制した。

「私ね、もう疲れたんだ。中村君の言葉、すごーい嬉しかった。だけど……あんなの見たらもう……何もかも嫌になるよ……」

百合の目はあの時の目だった。暴走し狂ったように叫び続ける火影の姿を見た、恐怖と絶望に駆られた目。

「俺のせい……なのか……」

「中村君……」

「俺のせいで……お前は苦しんで……」

「中村君」

「立花……」

「中村君！」

百合が叫んだ。うつむいていた玲二は顔を上げる。

明るく染まった髪の毛に、整った顔立ち。若干赤くなっている目からは涙が細い筋となって流れていた。よく見れば頬には青い痣がある。

「それ、また……」

「新塚にさ、伝えて欲しい事があるんだ」

「え？」

「ずっと好きだったよ……って」

百合の手がフェンスから離れる。

「バイバイ、中村君」

百合の体が傾いていく。

玲二は叫ぶ。言葉になっっているかわからなかったが、とにかく叫んだ。

彼女の体が視界から消えて行くのが、嫌にゆっくり見えた。

「立花アアアアアアアアアア！！」

玲二はフェンスをつかむ。金網は一瞬でドロドロに溶け、その勢いのまま玲二は屋上から飛び降りた。

滞空時間はそれほど長くは無かった。すぐに体が地面にたたきつけられる。背中に激痛が走る。が、死んではない。

「立花っ、立花っ！」

玲二はすぐに跳び上がり、校庭に倒れている百合に駆け寄った。百合はうつ伏せで倒れており、頭から血を流していた。

「違う……違うんだ……俺は邪気妖怪とは違う……」

百合の体を仰向けにし、肩を掴んで揺らす。百合の体はくたりと玲二の肩にもたれかかった。

だらりと垂れ下がった腕。赤く染まった髪の毛。吐息すらも発さない、物言わぬ口。

「立花？ ……告白くらい自分で言えよ……おい……おい！ ……」

……うわああああああああああああああああああ！！！」

玲二の叫び声とともに、体の内に秘めた巨大な妖気が爆発するように膨れ上がった。

それに反応したのか、校庭のあちこちがひび割れ、中から何体もの妖怪が飛び出してきた。そして空からもう一体、四足の妖怪が飛び降りてきた。

「素晴らしい妖気だ……火影」

麒麟は後ろに多勢の邪気妖怪を従え、玲二にゆっくりと近づいていく。玲二は百合をゆっくり地面に寝かせ、立ちあがった。

その目を見た麒麟が一瞬立ちすくむ。が、すぐに調子を取り戻し、言葉を紡いだ。

「やはり素質があるな。その妖気、全て邪気に変えてくれる」

「……れ……し……ない」

「ん？」

玲二の瞳が赤く変化した。強く噛みしめた歯の一部が砕ける。札を握り締めた右手からは炎とは別に玲二自身の血が流れていた。

「どうせ、俺は……死ねない……」

生徒や教師の目など、今の玲二にとってはどうでもいいことだった。玲二の体は見る見るうちに火影の物へと変化していく。

「死ねないんだ……」

突然、麒麟の後ろにいた妖怪達の足元から巨大な火柱が立ち上った。断末魔を上げることすら叶わず、邪気妖怪は次々と消滅していった。邪気も肉片も、何も残さずに。

「そうだ、その闇だ、火影！ 人間の器など捨て、貴様の闇を解放しろ！」

「俺は……妖怪だ!!」

空中に文字が浮かび上がる。札に書いてあるような書体の文字が、空中に魔法陣を作り出していた。火影がゆっくり腕を挙げると、麒麟の体が浮かび上がり、魔法陣の前で止まった。魔法陣から何本もの鎖が伸び、麒麟の四肢と腹部、そして首を絞めつけていく。

「なっ……ぐうつ!？」

「消え去れ……何もかもだ!」

火影の体が炎に包まれ、矢のごとく飛び上がった。そのまま動けない麒麟目掛け、必殺技を叩き込む。
バーニングフレイク

「ぐう……ああああああああああ!!」

火影もろとも、麒麟の体は大爆発を起こした。麒麟の邪気は大気中へと飛び散っていく。

「ついに、本来の力に近づいてきたか……」

ビルの屋上で、異形の姿が右手を掲げる。無数に飛び散った麒麟の邪気が一つに集まり、異形の右手に吸収されていく。

「単調な勧善懲悪ストーリーなどつまらない……この物語も転換期を迎える」

邪氣が吸収され、異形の体がぼうつと怪しく輝いた。

第二十六話 過去 Roots

「見つけたぞ、こつちだ！」

「十分に警戒しろよ。相手はあの火影だ」

バブル時代の負の遺産。建設中だったのだが、バブル崩壊によりそのまま放置された廃墟同然のホテルの立体駐車場。

そこでは特攻服に身を包んだ大勢の人間が、銃を手に走り回っていた。

彼らの標的は火影ただ一人。その火影はすでに満身創痍。変身状態を維持するだけで精一杯のようだ。

「くっ……困まれた」

麒麟を倒し学校から逃げ出した彼は、途中でPWの戦闘員と交戦するはめになった。人間を殺すわけにはいかないと力を抑えながら戦っていたのが仇になったのか、だんだんと押され始めた。妖気と体力を消耗していく火影。片や戦闘不能になったかと思えば別の部隊が応援に駆け付け、戦力が全く減らないPW。

夜の帳が降り、いつしか東の空が白み始めた頃、もはや火影の鎧に妖気は通っていないかった。あちこちが銃弾によって傷つき、鎧の間からは血が流れている。

「いくら火影といえども、もはや変身していられまい。撃て！」

指揮官らしき人間の合図のすぐあとに、何発もの銃弾が火影に向かって放たれた。火影は腕をクロスさせ、体に残った妖気を絞り出す。防御用の炎が、火影の鎧を突き破って放たれた。それが決め手だっ

たのだろうか、苦しそうな呻き声とともに炎が消え、銃弾は全弾命中。

鎧が剥がれ落ち玲二の姿に戻った彼は、ふらつきながら後ずさりし、転がっている鉄パイプに足を取られ、廃材の中へ突っ込んだ。

「やったか？」

誰かがそう呟いた。念のためと、指揮官は近くにいた二人を顎でしやる。命令を受けた二人は銃を構え、玲二が埋もれているであろう廃材の山へ近づいていく。

その瞬間、玲二の右腕が鉄パイプを弾き飛ばした。廃材の中から這い出た玲二の両腕には太刀が装備されている。

「奴め、まだ妖気が残っているというのか！？」

「はあ……はあ……」

右手で火刃ノ太刀を引き抜く。だがその刃は炎を纏っていない。それどころか、今にも崩れそうなほどひび割れている。

「チツ……」

玲二は太刀を投げ捨てた。地面にあたると刃は粉々に砕けてしまった。

残された手段はもう無い。木霊もレナも龍もすでに力を使い果たし、札の中で眠っている。玲二の妖気は尽きた。体力も、歩くだけで精一杯だ。

特攻服を纏った男達の間から、一人の男が現れた。スーツに身を包んだその男は、懐から一枚の札を取り出す。男が札を振ると、一瞬で鎖に変化する。

「佐藤……さん……」

「すまない、玲二君」

「佐藤……」

最後に男の名を呟き、玲二は倒れた。男達がほっとして銃を下ろしたのもつかの間、そこへ突風が吹き荒れ、玲二をかばうように何者が姿を現した。

「お前は!？」

「悪いな、今ここで火影を失うわけにはいかぬのだ」

何者か——テングはニヤリと笑うと、見に纏った蓑を玲二にかぶせ、片腕で難なく担ぎあげた。慌てて銃を構えなおす男達を尻目に、再び突風が吹いたと思えばテングと玲二は消え去った。

廉が登校すると、下駄箱で待ち構えていた綾と美沙に引っ張られ、空き教室まで連れて行かれた。

そこには泉もいて、そういえば玲二と泉がよく弁当を食べていた部屋だと廉は気付いた。

「どうしたんだよ」

とは言ってみたが、実際問題廉には彼女達が何を言いたいのかわかっていた。

「……まあ、何となくわかるけど。玲二の事だろ」

三人とも頷いた。廉は溜息をつく、手近な椅子を引き寄せて座った。

「あんなニュースのせいで火影の印象が最悪だったのに、よりよって変身しちまうんだもんな」

前日の昼に玲二が火影に変身した事は、瞬く間に学校中の人間が知ることとなった。実際に見た物は十数人程度だが、噂には尾ひれがついて広まった。火影が化け物であるかのように報道されたのだから仕方が無い事なのだが。

「今日、玲二は……来てないか」

「うん。あと……百合ちゃんのお通夜が今日で、告別式が明日だつて」

「立花の……」

美沙の言葉に、廉が俯いた。
その時、部屋の中に風が吹いた。

「妖気……」

泉がハツとなつて顔を上げると、彼らの前にはテングが立っていた。慌てて三人の前に出る泉。

「お前は！」

廉は見覚えのある妖怪を見て声を上げた。

「安心しろ。危害を与えにきたわけではない。中村玲二からの言伝だ」

そういつとテングは蓑から一枚の紙を取り出すと、廉に渡した。

「『俺はしばらくテング達と共に行動する。探すな』と。以上だ」

「待つて！」

泉はテングに向かって手を伸ばすが、テングは風と共に姿をくらましてしまった。

後ろから鼻をすする音が聞こえ、振り向くと廉がテングから渡された紙を破かんばかりに握りしめ、目から溢れる涙を抑えようと震えている。

“廉、立花から伝えてくれって言われてた事があるんだ。

「ずっと好きだったよ」

それから皆、ごめん。”

手紙は廉の手から落ちると、燃えて消えた。

廉はその場で膝をつくと、声をからして泣き叫んだ。

「うあああああああああああああ！」

草木が鬱蒼と生い茂げ、日光が届かないほど森の奥深く。暗く、しかしどこか暖かで神秘的な雰囲気を漂わせているその場所は、妖怪の森といわれ恐れられてきた。

しばらく死んだように眠り続けていた玲二だが、戻ってきたテングの立てる小さな足音に気付き、目を開けた。

「あれだけ眠っていれば起きないと思っていたが」

玲二はそれに答えず、すぐに脇に置いてあった三枚の札に、回復したばかりの妖気をゆっくりと流し込む。

木霊らが実体化することはなかったが、札はそれぞれの色にぼんやりと輝いた。

「おい、お前だってまだ本調子じゃないだろう。無駄に妖気を使うな」

「俺なんかより、こいつらの方がよっぽど疲れてるよ。それより、渡してきたか」

あらかた妖気を流し終わると、札はそのままに玲二はもそもそと起き上る。

テングは溜息をつきながらも、玲二の問いに答え始めた。

「岡山泉、新塚廉、中島美沙、九条綾、山田徹、山田華、江角沙夜、大沼裕太、碓氷千恵……で、よかったか。山田徹と山田華はまだ意識が無いようだったが、他の人間には伝えた」

「ありがとう」

テングの後ろから、サトリが水の入った器を持ってやってきた。ありがとうと言ってそれを受け取ると、サトリは小さく頷き、すぐに姿を消した。

玲二は器に口を付けると、水を一気に飲み干した。

「オチミス変若水”だ。多少なら妖気の回復もできる。——都の血を継ぐお前ならば、飲んでも影響はないだろう」

「……都、だと？」

かつて龍から聞いた、玲二の母親迦具夜とオロチに関係があるらしい、都という単語が出て、玲二はテングに目をむける。

「やはり知らぬか、月の都を。御神楽迦具夜の故郷であり、お前の力の祖でもある場所だ」

「一体何の……うぐっ!？」

突然、玲二の頭が割れるように痛みだした。

それに反応するかのように、右手から炎が噴き出し始める。玲二の体のあちこちにあった傷は、見る見るうちに消えて無くなっていった。

そして玲二の脳裏に、一人の女性のビジョンが浮かび上がる。

「母さん……」

「変若水は都に存在する霊薬だ。この世界の者が飲んでも毒になるだけだが……お前なら失われた力を取り戻すきっかけになるかもしれないな」

「失われた……力？」

「お前の内に眠る、火影の本来の力。世界の理をも焼き尽くす烈火の炎。今までに一度たりとも発現しなかった、伝承のみの力——」

かつてスサノオは、八岐大蛇を葬った。

しかし八岐大蛇の強い憎悪は邪気となり、国中へと散らばった。

邪気は妖怪に乗り移り、木を破壊し、人を殺め、悪行の限りを尽くした。

スサノオは自らの体内から火を出し、邪気を少しずつ消していった。

火は炎となり、炎は業火を生む。

業火は勢いを増し烈火となり、この世の理はだんだんと崩れていった。

そこに残ったのは、無。

スサノオが烈火を周りに放つと、火の玉が膨れ上がり、世界は再び広がっていった。

妖怪から邪気が消えると、炎は一枚の札の中へ吸い込まれていった。

しかし、その炎は決して消える事はない。

この世界がある限り、邪気はある。それほどまでに八岐大蛇の憎しみは強かったのだ。

だが、邪気がある限り、炎はいつまでも機を待ち、燻り続ける。邪気という理を断つ、その時がくるまで。

「神代の時から、この力はあったというのか？」

「今のような形に収まったのは千年ほど前、三代目火影となった陰陽師、安倍清明が呪詛火影式を作り出してからだ、その炎は最初からあった」

テングの視線は「影」の札に注がれていた。

「この伝承は都に伝わっている伝説だ。都の者達はオロチが再び現れる事もわかっていたから、ずっと待ち続けた。炎が再び燃える時——火影が姿を現す時を」

天正十年六月二日早朝

多くの兵力を派遣していた織田軍の戦力は百程度と手薄であるのに対し、明智軍は一万三千と、織田軍の百三十倍を誇っている。

「ここはすでに敵勢に包囲されています。柘榴の紋です！」

馬の嘶きに目を覚ました信長は、蘭丸に様子を見にいかせたが、息をきらし戻ってきた蘭丸の顔は真っ青にそまっていた。

「柘榴の紋……光秀か」

「ここは我々が仕ります。信長様は早くお逃げになってください」

「是非には及ばん」

「ですが！」

信長は蘭丸を制すると、弓を持ち、外へ飛び出した。

圧倒的なまでの兵力の差。だが信長はひるまず、敵騎馬隊の馬目掛け矢を放ち続けた。矢が無くなれば、槍を持って果敢にも敵陣の中へ突っ込み、敵を突き伏せる。しかし敵の数は一向に減る様子が無い。信長と少数の家臣だけでは到底勝てるわけがなかった。

「信長覚悟オー！」

気付いた時にはもう遅かった。殺到する兵に左肩を槍で貫かれた。慌てて蘭丸が間に割って入り、信長を刺した兵を刀で切り伏せた。

「信長様！」

「ぐう、これ以上の防戦は無理のようだ。坊丸、力丸、女衆を逃がせ！早く！」

蘭丸の弟である二人の男は、信長の決死の命令に返事をし、境内に残っている女達を逃がすべく走り出した。

信長は蘭丸と共に本能寺の奥の部屋へと走った。

「志半ばで倒れるとは……なあ、光秀よ」

「信長様……」

「貴様！」

そこにいた光秀と視線を交わす信長。蘭丸は刀を抜き放ち、目の前の謀反者を切り捨てようとするが、信長がそれを抑える。

「ここはどうやら儂の負けのようだ。だが儂は、ただで死んでやるほど気前のいい人間では無いのでな」

信長は懷から一枚の札、そして一本の鎖を取り出した。鎖は一人に浮かび上がり、帯の上から信長の腰に巻きついて、不気味に輝いた。

「いけません信長様！ その力は……！」

「この力がどれほどのものか！ 光秀！ 刮目し、見定めよ！ そして天下泰平のため、使うがよい！ 蘭丸ッ！」

「……ハッ！」

蘭丸はたいまつを手にとると、信長の持つ札に火を移した。

火はあっという間に札を燃やし尽くし、次の瞬間信長の体をも覆った。

「ぬうううううう……ぐおおおおお……おおおおおおおおお
おおおお……」

火は信長の体を燃やし続ける。

やがてその体が真紅の甲冑でも纏っているかのように変化をし始め

信長の苦痛の叫びは止む事がなかった。

炎は勢いを増し、信長もろとも本能寺全体を包み込む。

「ふっ……ははは……ふははははははははははははははは！」

炎の中で、信長の体は鎧と共に消え去っていった。

「こうして四代目火影が死んだ時に、都は気付いた。火影の力は妖気を持つ者でなければ扱ふ事が出来ない。織田信長は妖気を持ったぬ身。火影の力を受け止めるにはあまりにも脆い体だった」

「おいおい、それが信長自害の真相かよ」

テングの説明と同時に、火影の札から玲二の脳に直接映像が流れ込んできた。四代目火影の初変身と、非業の死を遂げた瞬間の映像が。

「その後、呪詛火影式は羽柴秀吉に回収され、その危険性の高さから嚴重に封印されることとなった。都はこの事態に動かざるをえなかった。火影に成る者が現れなければ、この世界は永久に太平の時を刻む事ができないからだ。最終的に火影式は明治維新の混乱に乗じて、月の都の民によつて回収された。だがそれまでの二百数十年の間、邪気は野放しとなつてしまった。数々の飢饉が起きたのも、そのせいだ」

「なるほど。火影にそんな深い歴史があつたとは思つてもみなかつたが……一つ良いか？」

「何だ？」

「どうしてお前がそんな事を知っているんだ？ テングは都と深い繋がりでもあるのか？」

比較的博識な龍ですら、火影と都については詳しく知らないということだった。

一介の妖怪であるテングが、何故そのような詳細を知っているのか。玲二の問いに黙っていたテングだが、しばらくしてその口が開かれる。

と、その瞬間、聞きなれた声がテングの声を遮った。

「それは、私が教えたからよ」

今にも凍りつきそうな冬の海に、突然突き落とされたような感覚が玲二を襲った。振り返ると、そこには薫が立っていた。

「かおっ……薫！」

「安心なさい」

「！？」

思わず身構える玲二だが、次に薫の口から出てきた言葉には、先ほどの恐怖感や強いプレッシャーが全く感じられなかった。同じ薫の声だが、何かが違う。

「……狗神か？」

「」名答。こうして私と話すのは初めてね」

「どういうことだ？ お前とは何度かあつて、その度に言葉を交わしてきたが」

一方的な愛だがな、と玲二は付けくわえた。

狗神はおかしそうにクスクス笑う。いつも玲二に向けられていた、ニタニタした笑いとは全く違う、見惚れそうになるほどの可憐な笑顔だった。

「そうね。確かに私はこの子にとり憑いているけれど、少し前まで私の意識は無いようなものだったわ。狗神は他の憑依する妖怪とは違って、憑依能力はやたら高いけれど、憑依者を操るような力は一切持っていないの」

「なっ……じゃあ守護獣を名乗っていたのも、薫の意思だっていうのか！？」

「そうよ」

信じられない、といった表情を浮かべる玲二。

狗神は再び口を開き続きを説明しようとするが、次の瞬間には焦ったような表情になり、まくし立てるようにしゃべった。

「時間が無いわ。今、薫は不安定になってきている。私が時々こうして出てこられるくらいにね。でもそろそろ、戻るわ。お願い火影、この子を止めて」

狗神の意識が消えた。玲二は狗神の妖気の代わりに、背筋が凍りつくような邪気を感じる。

「玲二、やっと会えた。さあ、いっぱいいっぱいーぱい、愛し合いましょ?」

「相変わらず、お前の言葉は恐ろしいな。怖くて逃げだしたいくらいだ」

玲二の体が炎に包まれた。

「やんつ、そんなに見つめてるのに、逃げたいなんて嘘ついちゃダメ!」

「でも、助けてやるからな。何があつたか知らないが、お前の呪縛くさり、解き放つてやる」

炎がはじけ、中から火影が姿を現す。

それを見て薫はにやりと笑い、自分の唇を舌でなぞった。

第二十七話 依代 DAIDARABOCHI

「玲二、気にしちゃダメだよ。玲二がお父さんとお母さんを傷つけたりしないって、知ってるもん」

「うん……ありがとう、薫」

薫だけなんだ。俺の味方は薫だけ。
それでも俺は良い。一人にならないから。

「あんな奴ら、玲二の方から無視しちゃえばいいんだから！」

「うん……」

「あんな奴ら、いなくなっちゃえばいいんだ。玲二を傷つけるなら、どっかに消えちゃえ」

「……………」

違う。薫はそんな事言わない。
消えてしまえなんて、そんな悲しい事を言う女の子じゃない。

「だからね。玲二は私だけのもの。他の人間なんて気にする必要は無いの。ほら、こっちを向いてよ。玲二、愛してる」

薫の目が赤く染まっている。

「かお……………る……………?」

怖い。目の前の女の子が、怖い。
あんなに優しかったのに、どうして。

「玲二！」

「薫！」

薫が右手に邪気を込め、殴りかかってきた。咄嗟に妖の姿に変身して、杖を構えて結界を張り、薫の拳を受け止める。
いくら強力な邪気を持っているとはいえ、相手は人間の体。カウンターなどを狙えば薫の体は木端微塵になってしまう。

「浄化！」

結界に触れた薫の手から邪気が消える。

舌打ちをして後ろへ下がろうとする薫だが、結界から光の帯のようなものが無数に伸びて行き、薫の体を拘束する。

「えへ、縛られるならロープか鎖がいいなあ」

「悪いな、そんな趣味は無い」

薫を縛った状態で、俺はゆっくり近づく。歩きながら、左手で右の肘から指先までをさっとなぞると、右腕の肘から先の輪郭がおぼろ

げに揺らいだ。

そして薫の前に立ち、おもむろに右手を薫の胸に突き刺した。

「う……あんっ」

体を貫いたわけではない。だが腕は確かに体内に侵入している。

俺はそのまま薫の体内で腕をまさぐり、何かを感じ取ると、それを感じ切り掴んだ。

「ひゃあっ！ あ、あああ……あああああああ！」

音も無く右腕を引き抜く。薫から離れた右腕は実体を取り戻し、その手には黒い塊がしっかりと握られていた。

今まで浄化してきた邪気とは比べ物にならないくらい、歪で禍々しい形をしている。

「はあ……はあ……ん、れい……じ……」

「変な声をあげるな、薫」

息も絶え絶えな薫は、俺に寄り掛かると気を失った。

薫を地面に横たわらせ、そっと髪の毛を撫でる。

——うつつうつつうつつうつつうつつ

突然、しっかりとつかんでいたはずの手から邪気が飛び出した。邪気の塊は不気味に動いて形を作り、やがて人型に見えなくもない直立した姿に変化した。

邪気妖怪ではない、邪気そのもの。

——ううううううううあうあああああ

邪気は声にならない声をあげ、手を伸ばして近づいてくる。

「妖狐一体・アストラルブレイク」

邪気の周りを囲むように結界が張られ、その中の時間が止まったかのように邪気は動きを停止させた。次の瞬間、光に包まれた右足が邪気を貫き、中心に大きな穴のあいた邪気の背後に俺は立っていた。邪気は声を上げる事も無く、静かに消滅していった。

「さて、話してもらうぞ。 狗神」

変身を解いてどこにいるかわからない狗神に言うと、その声に反応したのか、倒れた薫の中から先ほどの邪気とは違う邪気が漏れ出て、四本足の獣の姿を形作った。赤い目に赤い爪。邪気妖怪とはとても思えない純白の毛並み。狗神だ。

「そうね。 何から話そう」

「色々聞きたい事はあるが、とりあえずお前の事だ。 お前はオロチの守護獣なのか？ 薫はどうしてあんなことになった？ 何故母さんの事を知っている？」

「ちょっと落ち着いて。 がつつきすぎ」

一気にまくしたてる俺に対し、狗神は声の調子を全く変えない。こちらを手玉に取っているような、自分のペースに持ち込んでいるような——どことなく泉を連想させ、首を振った。

「まずは私が守護獣かどうかってことね。きつと、うん、私は守護獣。わかると思うけど、私の妖気はほとんど邪気に変わっている。でも勘違いしないで。私は薫を巻き込みたくて彼女に憑依したわけではないわ」

「どういうことだ？」

「オロチを止めるため。いくら守護獣といえども、オロチと同等の力を持っているわけじゃない。まして私は戦闘力がほとんど無い、異質な妖怪。人から人へ憑依して回ること生き永らえる、とても弱い存在。それでも私は恐れられてきた。何故だかわかる？」

首を横に振る。

「狗神にとり憑かれた者は、狂気の沙汰を起こす。間違いじゃない。私が憑依すると、その人間の感情を増幅させてしまうから。」

私は守護獣だけど、邪気に心を惑わされるような事は無かった。だから私はオロチを止める側に立とうと思った。オロチに対抗できるのは火影だけだから、あなたに協力を求めようとしたのだけど、私は間違っただけあなたに憑依してしまった。

薫の心はとても荒れていた。あなたへの愛と、あなたをこんな目にあわせた妖怪への憎しみでいっぱいだった。私のせいでそれがマイナスに作用してしまったみたい……本当にごめんなさい」

なるほど。八年前に薫は狗神に憑依されたわけか。

でも、正直その時狗神が俺に憑依したとしても、やはり俺のマイナス感情が増幅してとんでも無いことになっていたのではなからうか。

「……そう、かもしれない。ごめんなさい」

「いや、過ぎた事はいいんだ。それより、何故お前は母さんの事を知っているんだ？」

俺が一番聞きたかった事を聞く。

もし狗神が母さんと何かしら繋がりがあるなら、母さんに会えるかもしれない。

「御神楽迦具夜とは古い付き合い。千年ばかり前からの」

「千年も？」

「あの子が一度都を追放されてこの世界に転生してから」

「追放？ どうして」

「あの子には罪があったから。邪気の“もと”を生み出した罪が。私にもどついうことかわからない。あの子も話そうとしなかった」

それっきり、狗神は何を聞いても話さなかった。

その罪とやらがとても気になるが、知らないというなら仕方がない。頭をガシガシかいてその場に座り込んだ。

今になって狗神の話し方に違和感があることに気付いた。何となく区切り区切りになっていうというか、流れるような話し方ではない。薫の影響を受けなくなったと、そういうことだろうか。

「それよりもあなたの方が大変」

「俺？」

狗神は一度頷いてから続けた。

「あなたの力が変質しているのはわかっていてでしょう。その力が善しとなるか悪しとなるかは、全部あなた次第」

自分の右手を見つめ、開いては閉じて開いては閉じてを繰り返す。力が暴走するようになってから、炎を出す時に痛みを感じるようになった。腕の中を一直線に針のような物が走る痛みが。

「この先に待っているのは力が、破滅か。そういうことか」

「……大きな力が動きだしている。気をつけてね」

狗神がそう言ったのと、大きな地響きを感じたのはほぼ同時だった。

立花、と書かれた表札の下で、廉は夜空を眺めながらしゃがみこんでいた。

他のクラスメートも何人かそこにいた。廉と同じようにぼんやりと夜空を眺めている者、百合との別れを悲しみ涙を流す者、ただただ無表情で口を固く結んだ者、様々だ。

「新塚君……」

「何も言っな」

美沙が近づき声をかけるも、廉は首を振って俯いてしまった。そんな彼をじっと見つける美沙に、綾が寄り添い、肩をぎゅっと抱きしめる。二人の頬には涙の跡が残っていた。

「玲二君、どうしてるのかな」

綾がポツンと呟いた言葉に、周囲のクラスメートが反応する。あからさまに眉をひそめる者もいたが、綾は無視した。

「ねえ、にい……」

再び綾が口を開いた瞬間、遠くの方で地面を揺らすような「ドオオオオ……」という音が聞こえてきた。同時に、かすかに揺れる地面。

「何？ 今の」

「おい、あれ……見ろよ」

一人の男子が指差したのは、遙か上空。そこには真つ暗闇でもわかるほど不気味に輝く、紫色の巨大な何かの頭部だった。頭部があるなら、当然胴体もある。巨大な腕や脚もある。

「妖……怪……」

廉の目検討でも、優に百メートルは超えている。そんな巨人が、街中を歩いている。そしてどうやらこちらの方へ向かって来ているらしい。

だんだんと近づくにつれ大きくなる巨人の姿に、やがて一人二人と、

悲鳴を上げ始めた。

「逃げる！」

廉の声を聞くまでも無く散り散りに逃げまどうクラスメート達。だが一台のバイクが走ってくる音が聞こえ、全員の視線がバイクの方へ向いた。

バイクにまたがる男が何かを呟くと同時に男はバイクごと炎に包まれ、鎧と鎖をまとった姿に変化する。

「玲二！」

炎を噴き出しながら火影は巨人の方へ向かって行った。

「今の……中村？」

「本当なのかよ……アレ、火影じゃ……」

信じられないといった表情を浮かべながらも、彼らの足は火影が走って行った方へと向かっていた。

「神獣鎧装！」

赤い炎に続いて青白い炎が噴き出し、俺の体が火影・龍の鎧に包ま

れていく。

初めて変身した時は恐怖するほどだった龍の力も、最近は何となく慣れてきたような気がした。少なくとも、以前感じたプレッシャーは全く感じない。

「神獣一体・スピニングトルネード！」

両脚でがっちりと旋風を固定し、両手を突き出して神獣の槍を構える。旋風ごと俺の体は竜巻に包まれ、一つの矢となると、目の前に立ちはだかる巨人の胸部に向かって飛び上がった。

槍の先端がダイダラボッチに直撃すると同時に、俺の体に巨大な衝撃が降りかかった。

「ぐうううっ！」

巨大な体躯を纏う強大な邪気は、そこに在るだけで全ての者を寄せ付けないバリアになっているようだった。

邪気に弾かれた俺と旋風は空中に投げ出された。旋風に合図を送ると、旋風は一声嘶き、ダイダラボッチの腕が振り回せる範囲から飛び退いた。

「こいつは骨が折れる妖怪だな」

（本来ダイダラボッチは姿を見せる事すら珍しい。それに神の依代と呼ばれるほどの存在だ。まさか邪気に支配されるとは誰も思わない）

「とにかく今は浄化するしかねえ」

「「神獣一体・テンペストドロップ！」」

空中で一度体勢を立て直し、龍と呼吸を合わせて両脚に妖気を込め、再びダイダラボッチへ向かって行く。

竜巻を纏った左足で邪気の鎧を剥がし、炎を纏った右足で邪気の核を貫く。だがやはり力が足りないのか、邪気の核へ攻撃が届く事は無かった。

「邪気を払っても、あのデカブツの表面に傷をつけるだけで精一杯だな」

（玲二、龍、槍を沢山出すのはどうかな？ 僕の妖気を合わせれば、できるかも）

（なるほど。木霊の妖気でならば神獣の槍を複製できるやもしれん。玲二、いけるか？）

あれか、前に雷獣の結界をぶち破るために放った「マキシマムフォレストスラッシュ」の応用だな。

「多分な。やってみなくちゃわかんねえよ」

「玲二！」

木霊と龍の札を構えていざ、と言う時に地面から薫の声が聞こえてきた。見下ろすと、レナに跨った薫が俺を見上げていた。絶対に届くはずのない距離でも届いたのは、レナの妖気を介したのだろう。

「っし、レナも来い！ 四炎同調！」

さらに札を増やし、火影の札、木霊の札、九尾の札、龍の札の四枚

を燃やす。顔と両脚を赤い炎、右腕を緑の炎、左腕を金色の炎、胴体を青い炎が包み込む。

四体の火影の鎧を纏った、火影・四炎。変身の最後に背中から炎の翼を出現させる。俺が弱かったせいで倒れていった、八咫鳥へのせめてもの償い。彼の力をもって、ダイダラボッチを解放させてみせる。

「精霊の剣、妖狐の杖、神獣の槍」

俺をすっぽりと覆うように巨大な円の陣が出現し、それに合わせて増殖した剣、杖、槍がずらりと並んでいく。精霊の剣の外側にはそれよりも多い妖狐の杖が、その外側にはさらにそれよりも多い神獣の槍が。

「はあっ！」

それら全てがダイダラボッチへと向かい放たれ、その巨体に次々と突き刺さっていく。突き刺さった全てにそれぞれを中心に魔法陣が展開され、ダイダラボッチの動きを封じていく。

やばい。この形態、思ったよりも妖気と体力の消耗が激しい。さっさと決めないとな。

「行くぞ、お前ら」

左足に木霊とレナの妖気が、右足に龍と俺の妖気が集中する。

四色の炎に包まれた両脚を突き出し、ダイダラボッチの邪気の核を貫く。

「『四炎一体・クアトロバーニングブレイク！』」

巨大な炎の槍が、ダイダラボッチの胸部に穴を開けた。

空中で一度ブレーキをかけて方向転換し、ダイダラボッチの背中を見やる。ぽつかりと大きく開いた穴の中心には禍々しい巨大な邪気の塊があつた。邪気はクモの糸のように、ダイダラボッチの体内に巣食っているようだった。

「最後は俺が決める」

「任せたぞ、玲」

四炎を解除し、火影に戻ると「炎」の札を燃やす。今度は右脚に炎を纏い、邪気の塊向かって思い切り右足をスイングする。

「幻影・バーニングブレイク！」

ヒットした、と確信した瞬間、邪氣と共にダイダラボッチが大爆発をとげた。

その爆心地にいた俺も当然、爆発に呑みこまれ、全身の鎧を焼かれる。その程度ならば全くの無問題。しかし浄化したはずの邪気が大きく広がり、膜のように俺の体を包み込み――呑みこまれた。

[illegible]

体中を邪氣が駆け巡り、脳細胞の一つ一つが燃えるような錯覚を受ける。苦しい。気持ち悪い。いつそ死んだ方がマシかもしれない。ふらっと体勢を崩し、地面へとまっさかさまに落ちていく。その中で俺の意識もだんだんと薄れていった。

幕間式 I n t e r m i s s i o n R E I K I t o R E K K A

金色に輝く体毛をなびかせ、熊ほどもある大きさの狐が咆えた。その声はまるで歌を歌っているかのような清らかな声で、対峙していた男達も思わず構えていた銃を下ろすほどだった。

「クウコちゃん、出るわよ！」

「はい！」

巨大な狐の後ろに、香苗が息を切らしながら走ってきた。手にはアタッシュケースのどつてがしっかりと握られている。

狐は香苗を見て頷き、再び咆えた。「オォーン！」というどこか悲しみを帯びた声は炎に変化し、立ちふさがる男達を一気に蹴散らしていく。

香苗は狐の背にまたがると、狐と共に姿をくらました。

「何があつた!？」

香苗と狐が姿をくらましてすぐに、倒れている男達の元へ佐藤が駆け付けた。満身創痍の彼らを見て、佐藤は慌てて近くで倒れている男を揺り起こした。

「佐藤さん……柊さんが……」

「香苗が……?」

「あのじゃじゃ馬めが」

佐藤の後ろからゆっくりと階段を上ってきた仙道玄武は、溜息をつきながら苦々しげに呟いた。

「盗られた物は？」

「火影に関する札を全てと、封印用の空札を数枚です」

「使い捨ての札を全て持って行かれたか。早く火影の現在地を特定する作業に戻れ」

「はっ！」

急いで部屋の中へと戻っていく男達。玄武は鼻を鳴らして踵を返した。

佐藤はそんな玄武を見ていたが、やがてハッと気づいたように部屋へと入っていった。

「本当にいいの、クウコちゃん。PWにバレちゃったら、もう『ウィル・オ・ザ・ウィスプ』には戻れないわよ」

「そんなことよりも、玲二君の方が心配ですよ」

木々によって太陽の光が遮られ、昼間の今でも薄暗い森の中。香苗を乗せた狐はようやくここで止まり、香苗を降ろす。

いたわるように香苗が首筋をなでると、狐は気持ちよさそうに目を閉じた後、一瞬で人型の姿に変化した。

「最近、玲二君の妖氣が不安定なんです。一週間前にダイダラボツチが消えたあたりからは特に」

「多分、ダイダラボツチの邪氣を吸収しちゃってるんじゃないかと」

そう言うときウコは目を閉じて、祈るように手を合わせた。

目には見えない神秘的な何かがウコに集まってくる気配を、香苗は肌で感じた。香苗自身、多少霊感があるだけで妖氣を感じ取る力はない。そんな彼女ですら感じ取ることができるほど、ウコの力は強い。

「玲二君は炎を媒体にした妖氣だから、見えるんだけど、純粋な妖氣を感じたのは初めてね」

「ふふふ、言ったでしょう？ 私は結構強いんですよ」

茶目つけたつぷりに笑う彼女からは到底考えられないような力を、ウコは持っている。おそらくは玲二と共に行動しているレナという名の九尾よりもはるかに強力なのだろう。香苗はウコの存在を心強く感じた。

「これから玲二君に会いに行くわけだしね。ウコちゃんがいてくれて助かるわ」

廉達の話によれば、玲二は精神的にかなり参っているらしい。そんな状態で大量の邪氣を浴びたのだ。どうかなっていない方がおかしい。

佐藤もPWもどうしようもない。香苗が唯一頼れるのはウコだけだった。

「いました。やっぱりこの森の奥にいます」

クウコが見上げる先に、香苗も視線をやった。
巨大な火柱が立ち上る。邪気が霧散していく気配をクウコは感じ、
唇をかみしめ表情を固くした。

——玲二君、きっと助けます。

「玲二、とんでもねえ妖怪と人間の気配がするぜえ」

「妖怪と人間？」

「この感じ……俺も詳しかねえが、多分妖狐系だ。お前んとこの九尾に聞きゃあわかるんじゃないか？」

「レナは木霊と一緒に出ているが……いや、レナがいなくてもわかる。人間と一緒に俺を尋ねてくる妖狐を俺は一人しか知らないからな」

「へっ、そうかいそうかい」

「それよりも今は目の前の事態に集中しろ」

「あんたの炎のお陰で八割は吹っ飛んだな。ま、最後まで俺様が手柄を持っていくつても気分がいい」

「「風怪鎧装！」」

刹那、森の中を疾風が駆け抜けた。

第二部 冷姫之章 完

第二十八話 悪魔 Evil rider

元かがやきの家があった場所は、すでに再建のための工事が順調に進んでいた。何者かによつて全焼させられた建物は壁も柱も何もかもが灰になっていた。その事実には最初は首をかしげていた工事関係者も、妖怪の存在が世に広まると納得せざるをえなくなったようだ。工事現場の前に沙夜はいた。「かがやきの家再建地」と書かれた看板をじーつと見ている。

「沙夜ちゃん、また来たのかい？」

「こんにちは」

セメントを一輪車に乗せてきた男性が沙夜に気付き、声をかけた。しばしば工事を見に来る沙夜の姿はここで働く人にとっても見慣れた光景になっていた。

「華さんが、皆さんには是非って。どうぞ」

そう言つて沙夜は持っていた大きめの重箱を差し出した。中には華の作ったたくさんサンドウィッチが入っている。

「悪いね、ありがとう。おい、皆！ そろそろ休憩しよう！」

男の声に作業員達が手を休め、集まってくる。沙夜を見つけると皆手を振ったり声をかけたりして挨拶をした。皆がサンドイッチに群がる中、最初に沙夜に話しかけた男はペットボトルのお茶を飲みながら沙夜の隣に立った。

「玲二君だっけ？　まだ見つからないの？」

「はい。やっぱりここには……」

「背の高い男の子だね。来ていないなあ」

初めて沙夜がここに来た時は、玲二を探すという理由だった。それから何度も足を運んでいると、自然と作業員達と顔見知りになっていたのだ。

浮かない顔をする沙夜を見て元気づけたいと思う男だが、何と声をかければよいのかわからず、溜息について再びお茶を飲んだ。

（玲二……会いたいよ……）

玲二が姿を消してから三ヶ月、か。学校はもちろん、新塚君達や順調に回復したかがやきの家の皆の所にも姿を現さない。当然、私の前にも。

妖気の探知には自信がある方だったけど、どうやら玲二のいる場所が彼の妖気を隠しているみたい。唯一玲二の居所がわかりそうなクウコちゃんも、今はお手上げ状態みたい。

「ごめんなさい。会えたのはあの時だけ。あれからどれだけ集中しても玲二君の妖気がわからないんです」

クウコちゃんは本当に申し訳なさそうにしている。別段クウコちゃんを責めるつもりはないし、誰が悪いわけではない。ただ、私のどうしようもない怒りはPWに――仙道玄武に向けられていた。

「はぁ……」

ダメダメ。こんな事をしていても、玲二が帰ってくるわけじゃないのに。

「ばーか」

無駄な事とわかっていても、ついついこの場にはいない彼に向かって呟いてしまう。

ちゃんと返事聞けてないし、クリスマスも年越しも一緒にお祝いできなかった。まだ教えてなかったけど私の誕生日は十二月二十六日。「おめでとう」って言ってほしかったなあ。

「本当に好きなんですわね」

クウコちゃんの一言で、自分がニヤニヤしているのに気付く。慌てて表情を取り繕うとするけれど、筋肉がゆるんじやったみたいに言う事を聞かない。

うう、玲二のバカバカ。こんな時なのにあなたの事を考えるだけで嬉しくなるなんて……なんだか間抜けみたいじゃない。

ふふふ、とおしとやかにほほ笑むクウコちゃんが淹れてくれたコーヒーを飲んでほっと一息。とりあえずは落ち着こう。うん、とてもいい匂い。

「泉さん、電話みたいですよ」

クウコちゃんに言われるまでもなく、私はバッグの中から携帯電話を取り出すと、開いて相手を確認する。

「もしもし」

『ああ、岡山。今どこにいるんだ？』

電話の相手は新塚君だった。彼は美沙ちゃん、綾ちゃんと一緒に玲二を探し続けてくれている数少ない仲間。あれだけ世間を賑わせていた火影の話題もひと月もすれば落ち着き、学校では玲二がいない日常にも慣れたようだった。

「クウコちゃんの所の喫茶店」

『そうか。いや、実はな、さつき香苗さんに会って、どうやら妖怪と戦う“戦士”の目撃情報があったみたいなんだ』

「詳しく聞かせて！ どこに行けばいい？」

妖怪と戦う戦士なんて言えば、私以外には火影つまり玲二しかない。

玲二と会えるかもしれない。私は興奮して席から立ちあがった。何人かいたお客さんが一斉に私の方を見るけれど、気にならない。

『ちょうど俺達も「ウィル・オ・ザ・ウィスプ」に着いたところだから、出てきてくれ』

「わかった！ クウコちゃん、御馳走様！」

私は電話を切るとお代を置いてすぐに店を飛び出した。そこへ丁度

店の前に立っていた新塚君とぶつかりそうになり、あわてて足を止める。

顔をあげるとそこには新塚君の他に綾ちゃんと美沙ちゃんがいた。

「おいおい、少し落ち着けよ」

「うん、ごめん。で、どこなの!？」

「だから落ち着けって」

苦笑いしながら両手を広げて「どうどう」と落ち着かせようとしてくる新塚君だけど、正直この感情の高ぶりは、ちよつとやそつとじや収まりそうにならない。

「本当に泉さんって中村君の事、好きなんですね」

美沙ちゃんはそう言うけれど、実際彼女も玲二の事が好きはず。

それは聞くまでも無く、見てるだけでわかった。

でも玲二がいなくなつた時、彼女は自分の気持ちをぐつとこらえて、私を励ましてくれた。

「中村君が笑っているのを、もう一度見たいから」そういつて彼女は私を応援してくれた。本当に強い子だなあ。私なんか到底及ばないくらい。

「で、香苗さん曰く、目撃情報があつたのはこの山の中らしいんだが」

新塚君が見せてきたのは、香苗さんの走り書きだと思われる字の書かれた紙片。

ここからさほど遠くない山の名前と、より詳しい住所と目印になる

ガソリンスタンド等が書いてあった。遠くないと言っても、電車で四十分ほどかかりそうだけど。

「その山、最近は妖怪が出るなんて噂だ」

んん、怪しいわね。どの道その山に行くしか、今のところ手がかりは無さそう。

だったら行く。思い立ったが吉日って言っしね。

「ありがとう。私はここに行ってみる」

新塚君からメモを受け取って駅まで行こうとしたけど、新塚君はメモを離そうとしない。

「何でも一人でやろうとしないで。私たちも行くから」

綾ちゃんは私の手をとった。綾ちゃんは玲二が火影だって事を知って一番ショックを受けたみたい。玲二がいなくなるまで玲二の事を少し避けていた事でかなり思いつめていたようで、一週間くらい熱を出して寝込んでしまっていた。

そんな事があったから、玲二を探す事については人一倍力を入れてる。彼女が諦めなかったから、私は今も玲二を信じて笑っている。

「そついうことだ。行こうぜ」

玲二の親友、新塚君。玲二の誤解が解ける前から庇ってくれたりフオーしてくれたりしてくれた。玲二の知らない所で因縁つけられて殴られたりしたこともあったみたいだけど、それでも彼は嫌な顔一つせずに玲二のそばにいた。

ねえ玲二、あなたにはこんなに素晴らしい仲間がいるのよ。あなたがどんな存在だからって、ここにいる全員、誰もあなたを拒絶したりなんかしない。

「いざとなれば、泉ちゃんが守ってくれるんでしょ？」

そう言っただけで笑う綾ちゃんに、ついクスツと笑ってしまう。

ほら、私だって受け入れてもらったのよ。大丈夫。あなたを独りになんか、絶対させない。

「氷結・アイススパイラル！」

氷で足と地面を縫い付け、身動きのとれない相手を槍で突き刺す。槍は見事に邪気だけを貫き、小さなバケネコの子どもを正気に戻した。

「フギヤアアアアア！」

「きゃっ」

突然、背中に衝撃。最後の一匹となったバケネコの子が飛びかかってきたみたい。

小さいとはいえ立派な妖怪。当然、邪気に侵されていれば脅威となる。それでも慌てず、私は体から冷気を放った。バケネコは驚いて

飛び退く。

——それを待っていたのよ。

「氷結・ブリザードブレイク！」

瞬時に振り向き、回し蹴りの要領で右足をバケネコにかすめる。邪気が凍てつき砕け、この子も邪気から解放された。

一回りサイズダウンしたバケネコの子たちはにやんにゃんじゃれあいながら森の奥へと帰っていく。

「ふう……」

変身を解いてほつと溜息。八匹のバケネコが襲ってきた時は慌てたけど、まだ子どもだったから何とかなった。すばしっこい動きと鋭い爪を使った攻撃は強力だけど、成体に比べればまだまだ発展途上。こうしてじゃれついている様子を見ると、本当にただの猫みたい。

「お疲れ。どうでもいいけど、技の名前って玲二がつけたの？」

「そうよ」

私自身、技の名前を叫ぶタイプじゃないのだけど……玲二を近くに感じたくて、いつの間にか叫ぶようになってた。それにしても玲二って、ああ見えて子どもっぽいところあるわね。私の技の名前も、結構真剣に考えていたっけ。

「にゃああああ！」

「ふぎゃあああ！」

と、玲二のことを考えてばーっとしていたら、さっきのバケネコ達
が必死になって逃げてきた。

「あら、どうしたの？」

私の足にしがみついて震えているこの子達を落ち着かせようと、し
やがみこんで体を撫でてあげる。でもバケネコ達の騒ぎは収まらな
い。……もしかして。

「フギヤアアアアアアアアアアアッ！！」

予想通り。バケネコの成体が茂みを踏み荒らしながら現れた。体長
は馬ほどもある。成長きったバケネコ——というよりは、この子
たちの親なのかな。バケネコの子ども達は目の前に現れた成体に怯
えながら「にゃーにゃー」と不安そうな声を出している。

「三人とも下がって。あと、この子達もおねがい」

新塚君達にバケネコの子を預けて、後ろに下がらせる。
もう一度変身しようとしたその時、風をきる音がした。

「え……？」

「ギヤアアアアアアアアアアア！！」

次の瞬間、バケネコの腹部に真つ黒な装飾剣が突き刺さった。バケ
ネコは叫び声を上げながらボタンと仰向けに転がった。
このままじゃ邪気を浄化する前に死んでしまう。

「手出しは無用」

バケネコに近づこうとしたけど、どうしてか足が動かない。同時に恐ろしいまでの邪気を感じて背筋が凍った。

気付けば目の前に男がいた。男は苦しそうにうめいているバケネコを一瞥すると手から黒い邪気の塊を放った。邪気はバケネコの喉に直撃した。

後ろでバケネコの子ども達が「にゃーにゃー」と悲痛そうな鳴き声をあげている。

「あなた……誰？」

「宮野恵太」

目の前の男は一言そう呟いた。

この男の名前だと思っけど、その声から紡ぎだされた名前はどこか希薄でぼんやりとしていて……恐ろしい響きだった。この男、ただの人間じゃない。

「宮野恵太ね。……あなたの目的は何？」

「全ての妖怪を殺す。それだけだ」

そう言う男は再びバケネコに向き直ると、腹部に突き刺さっている剣をグリグリとねじり始めた。

喉を潰されているバケネコは声を上げる事もできず、やがて息絶えた。

途方も無い怒りが、憎しみが、私の妖気を爆発させた。冷気が宮野恵太を包み込むように広がる。けれどもあいつは手から邪気の膜のようなものを作り出し、それを防いだ。

「岡山泉……いや冷姫。お前は少々手間取りそうだな」

殺せるものなら……やってみなさい！

「変身！」

私を中心にして小規模な吹雪が発生し、私の体を冷姫のものへと変えて行く。

何となく玲二の気持ちが変わったような気がした。玲二は妖気のコントロールが下手だと言っていたけれど、それだけじゃない。妖怪を変えてしまう邪気に、本当に怒りを持って戦っていたんだ。怒りがこんなに妖気に作用するなんて思ってもみなかった。

「火影を殺す前のウォーミングアップには丁度いいか」

「このっ！……玲二は殺させない！ 私も死なない！」

右手に冷凍槍が構築され、それを振り回す。

私の怒りのためか、それはいつもよりも歪で禍々しい形をしていた。

「やれやれ。名前に似合わず血気盛んな女だ。すぐにお前の血で赤く染めてやるっ」

そういうと宮野恵太は鎖を取り出した。形は私や玲二が使う幻鎖とそっくり。だけど色はそれこそ血で染まったかのように赤い。

「変身」

赤い鎖が腰に巻きつく。同時に宮野恵太の体が白と黒の鎧に包まれた戦士の姿へと変化していく。

黒い体を、装甲とも言つべき大きな白い鎧が覆っている姿。目も黒く、唯一色がついているのは赤い鎖だけ。

「これが……」

目撃された、妖怪を殺す謎の戦士。大きな白い鎧を取っ払えば、確かに火影に似ているかもしれない。

けれど彼の優しくて力強い妖気は全く感じられない。私の体を切り裂くように撫でるのは狂気と憎悪に染まった邪気だけ。

「フオーダ。良い名前だろう？ フオールタウン 墮落した都の力。俺が名付けた」

怖い。けど、それは戦う時にいつも思っている。恐怖を乗り越えて、私は戦ってきた。

こいつも倒せばいい。玲二に会うまで、絶対に死ぬものが。

「ハアッ！」

槍を地面に突き刺し、冷気を流し込む。地面はスケートリンクのように氷に覆われていく。

しかしフオーダは微動だにしない。というよりも、全く気にして無さそう。

「小細工などどうでもいい。貴様の肉を貫き、骨を砕き、血の雨を流す。それだけだ」

次の瞬間、地面の氷が全て、一瞬にして砕かれた。

氷の破片が空中に舞う。それに茫然としている私の目の前に、フオーダは立っていた。

「遅い」

奴の拳が来る。振るうだけで風を切る音がする。咄嗟に身をよじってかわすけれど、邪気のこもった右の拳は私の右肩をえぐった。鎧が粉々に碎け、血がにじむ。

「くっ……」

「フンッ！」

体勢を崩したところに追撃がくる。鳩尾に膝が直撃した。

「あ……がっ……」

苦しい。息が出来ない。口の中に血の味が広がった。まずい、内蔵やられたかも。

視界がぼやける。体と言う事を聞かない。でも、動かなきゃ。あいつが飛び上がった。左足を突き出してる。キックが来る。玲二のバ―ニングブレイクレベルのキックが、来る。

「がっ……あああああああああああああ！！」

声が出たと思った瞬間、奴のキックが、咄嗟に防御した腕をとらえた。とてつもない衝撃が襲いかかる。腕の骨が折れる音を聞いた。気付いた時には私の変身は解けていて、綾ちゃんが悲痛そうな顔で美沙ちゃんが大泣きしながら私にすがり、新塚君が私をかばうように立っていた。

「逃げ……て……」

彼らを死なせちゃダメ。口から血があふれて上手くしゃべれないけど、何とか言った。

でも新塚君は動こうとしないし、綾ちゃんと美沙ちゃんもキツとフオーダを睨みつけた。

「……興奮めだ。殺すのは次の機会にしておく」

あいつの変身が解けて、どこかに立ち去っていくのが見えた。三人が私に何か言ってくるけど、何を言っているのかよくわからない。私の目から何かが流れた。これは血？ 涙？ ……どっちでもいいか。

——会いたいよ、玲二。

「……泉」

……玲二の声が、聞こえた気がした。

第二十九話 憎悪 R e - s t a r t

泉は目を覚ますと同時に薬品の匂いを感じた。それでここが病院であることに気付く。P Wと袂を分かっている今、自分が運ばれるとしたら一般的な病院だろう。

「うつ……」

上体を起こした瞬間、強烈な嘔吐感を感じて咄嗟に手で口をふさぐ。しばらく静かにしているうちに収まったものの、倦怠感と気分の悪さは変わらない。自分の体を見渡して上体を確認すると、特に衝撃を受けた右腕はまだ動かせないが、左腕の骨折はほぼ治っていることがわかった。

玲二ほどではないにしろ、やはり回復速度は常人をはるかに凌駕している。

（時間はお昼前……日付は……いつなんだろう）

病室にカレンダーはあるが、今日の日付がわからない。フォードと戦い惨敗したのは一月二十九日だ。カレンダーはまだ一月であることから、まだそんなに日が経っていないと考える。念のため西暦を確認してみたが、二〇一一年だ。まる一年眠っていた、なんてことは無かったようだ。

久々に覚えた、死ぬという感覚。しかし不思議とフォードに対して恐怖を感じる事は無かった。かつてイッポングダラに恐怖し、玲二に迷惑をかけたことを泉は忘れていなかった。あれから玲二に迷惑をかけないようになると決意し、くじけそうな時はその時玲二が言った言葉を思い出して自分を奮い立たせていた。

——泉が望むなら、俺は泉の家族になる。泉が辛い時、悲しい時、いつでも支えてやりたいと思う。泉が帰る場所として俺を望むのなら、喜んで迎える。お前の居場所を作る。

（玲二の嘘つき）

会いたい。この三ヶ月間何度も思った事だ。もう一度玲二に会いたい。思い切り抱きついて、彼の困った顔を見てからかいたい。手を繋いで、彼の暖かさを感じたい。キスをしたい。いつの間にか泉の意識は薄れ、再び眠りの世界へと身をゆだねていた。

「れいじくんは、好きな事に熱中しちゃうんだね」

幼稚園の砂場に小さな男の子と女の子が一组。男の子は体のあちこちを泥で汚しながら、大きな山を作るのに夢中になっていた。

「うーん、そうかも」

男の子は砂場で山を作る遊びをかれこれ一週間は続けていた。

「わたしも一緒に遊んでもいい？」

「いいけど、汚れちゃうよ」

他の子ども達はブランコや滑り台など、他の遊具で遊んでいる。砂場にいるのはこの二人だけのようだ。

男の子は女の子の服が汚れてしまうのを気にしているようだ、女の子は気にせずに男の子に腕を伸ばす。

「れいじくんだって、もう汚れてるじゃん！ えいつ」

すとな、と男の子が尻もちをつく。二人は思わず笑ってしまった。

「おすなばあそび、好きなの？」

「うん」

「じゃあ、わたしのことは、好き？」

女の子の質問に男の子は振り向いた。しばらく女の子の顔を見つめていたかと思うと、満面の笑みで返した。

「いずみちゃんも好きだよ」

「も、なの？ おすなばあそびとわたしは、同じくらいなの？」

幼稚園児と言ってもさすがは女の子。可愛い嫉妬を見て思わずこちらも笑ってしまう。

「じゃ、じゃあ、いずみちゃんのほうが、ずっとずーっと好き」

女の子はその返事に満足したのか、自分も泥で汚れるのを構わず、男の子に抱きついた。男の子は女の子を受け止めるが、勢いに負け

てまた尻もちをついてしまっ。

「わたしもれいじくんが大好き。……でもね、わたし引っ越しちゃうんだ」

「引っ越し？ 遠くに行っちゃうの？」

「うん。だかられいじくんにも会えなくなっちゃう」

「寂しいね」

「うん……」

落ち込んでいる女の子を見て、男の子は何か思いついたようだった。女の子を倒さないように起き上がると、手をつないだ。

「じゃあ、寂しくならないおまじない、してあげるね」

ちゅっと、小さなリップ音。

正面衝突しただけのような、唇と唇がくっつくだけの小さなキス。すぐに離れると男の子は頬を真っ赤にしまった。

しばらく呆けたような表情をしていた女の子も、やがて頬を赤く染める。でも嬉しそうに笑顔になった。

「わたし、れいじくんのこと好き！」

「ぼくも好きだよ！」

ああ……

これって、私たちなんだ。

私の小さなファーストキスの記憶。相手が誰だったか忘れてたけど、玲二だったなんて。

玲二は覚えてくれているのかな。でも、どうだろう。玲二って意外と鈍いからなあ。少し前まで「せんどういずみちゃん」と私が同じ人物だって事にも気づいていなかったしなあ。

こんな夢を見るなんて。夢に玲二が出てきたのは初めてかも。ねえ、もうすぐ会えるの？ そう考えちゃっても、いいよね。

邪気を感じた。邪気妖怪が暴れている。でも、それよりもかなり強い邪気を感じる。

きつと、あいつだ。バケネコの親を無慈悲にも殺した、あの男。新塚君達に止められたけど、あいつを許すわけにはいかなかった。例え敵わないとしても、妖怪が殺されるのを見て見ぬふりをするなんて、私にはできない。

「で、お前はわざわざ殺されにのこのこやってきたと、そういうわけだ」

バカにしたように笑う宮野恵太。その足元には、胴体を貫かれて絶命したゴズという妖怪。その後ろにはゴズと共に行動することが多いメズが、やはり胴体を貫かれて死んでいた。

みんな、目の前の男がやったこと。無表情で、それがさも当たり前のことであるかのようにやったこと。

「あなたが妖怪達を殺し続けるなら、私は絶対にあなたを止める」

「よく言う。俺に手も足も出なかったことを忘れたか」

宮野の腰に赤い鎖が巻かれた。

「変身」

「変身！」

憎い。この男が、憎い。

私の怒りに同調したかのように、変身した後の吹雪も心なしか、いつもより強い。

「っ！」

殺気の混じった邪気を感じ、咄嗟に飛び退く。今まで私がいたところに、フォードの拳がめり込んでいた。

接近戦を挑むのは無謀。私だって無茶はするけれど、自分の限界だつてわかつている。

そして距離を取っても油断大敵。あの距離の詰める速さはとんでもない。何があってもかわせる距離から攻撃を放つしかない。

「はああああああ！！」

大気中の水分を凍らせ、氷のつぶてにするとフォードに向かって飛ばす。この程度でダメージが通るとは思っていないけど、隙を作る

事はできるはず。

すぐに冷凍槍を作り出すと、つぶてを飛ばしながら走り出す。

「甘いな」

フォードは無数のつぶてに目もくれず、私に向かって邪気を放った。咄嗟に防御するけど間に合わない。

「ぐううつ……」

痛い。骨が軋む。やっぱりこの体じゃ満足に戦えない。

フォードがゆっくり近づいてくる。右の握りこぶしに邪気が集まっていくながわかる。

嫌だ、死にたくない。まだ玲二に会ってない。嫌だ。絶対――

「死ぬもんかあっ!」

「ッ!?!」

残る力を振り絞って、フォードに妖気のこもった冷気を浴びせた。その瞬間、フォードは何かに気を取られて明後日の方向を向いた。冷気はそのままフォードを呑みこんだけれど、大したダメージは与えられなかった。

でも、そんなことよりも

「……妖気?」

私も感じた。

フォードが仮面の下で苛立たそうに歯軋りしている。

この妖気を、私は知っている。

「あんたが最近口なことしねって噂の男か？　大層な鎧、持ってんじゃねえか」

犬に近い、獣のような体。特徴的な大きな爪を持っているこの妖怪は……カマイタチ？

カマイタチは光に包まれて人型の姿に変化した。ぼさとした長い髪の毛をかきあげて、私の方を見る。

「冷姫の嬢ちゃん、助太刀に来たぜ」

シニカルに笑うと、手の甲に生えた長い爪で空を指した。釣られて上を見ると、蓑を広げたテングがカマイタチの隣に降り立った。

地面が震えたかと思うと、アスファルトを突き破って大きなツチグモが姿を現す。

「どうして……こんなに妖怪が……」

「みんな、玲二に助けられた妖怪だよ」

「薰ちゃん!？」

ツチグモの背には何と薰ちゃんが座っていた。髪の毛や服についた土を払いながらツチグモに文句を言っている。

「泉、色々とごめん。私はもう、大丈夫だから」

よく見れば薰ちゃんの肩にはおぼろげだけど狗神の姿が見える。邪気は感じるけれども、名前とは全然違う、優しくて心地いい気だ。いつの間にか、カマイタチやテング、ツチグモの他にも、沢山の妖

怪が勢ぞろいしていた。

「やっと見つけたぞ」

妖怪の大群がばつと二つに割れた。

その中心には、ずっと会いたかった人が立っていた。

「玲二……」

玲二はフォードを睨みつけている。落ち着いている様子とは裏腹に、玲二の妖気は爆発しそうなくらい怒りに燃えていた。

会えて嬉しいはずなのに、どうしてか、怖い。玲二の事が怖い。

「よくも俺の家を……家族を……」

「ただ殺すだけではつまらないだろう。英雄^{ヒーロー}を絶望させて、絶望させて、絶望させきって、殺す。そっちの方が面白い」

「黙れ」

玲二の声が一段と低くなった。と思った瞬間、フォードの体が炎に包まれていた。慌てて炎を払うフォード。

え、何？ 今、何が起こったの？

「玲二、落ち着けよ。奴は感情に任せて勝てるほど甘くは無い」

「わかってる」

木霊、レナ、龍が玲二の周りに集まる。玲二は三体に目配せすると、札を掲げた。

「変身！」

火柱が立ち上った。フォードだけじゃなく、妖怪達も恐ろしいほどの妖気に震え、一步後ずさった。

木霊たちが札に戻り、玲二の幻鎖のホルダーに取り付けられていく。

「ようやくお前を殺せるのか、火影」

「それはこっちのセリフだ」

炎を突き破って火影が姿を現した。

体中の鎖が黒ずみ、右手からは憎悪の心がこもった炎が噴き出している。

「違う……違うよ」

玲二、その炎はあなたじゃない。

もっと優しい炎を出して、玲二。

玲二が壊れてしまいそうな、そんな気がして、私は涙を流した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8618/>

仮面ライダー 火影

2011年10月5日01時48分発行